

Annual Report

2011

—個人別教育研究報告—

[2012. 6. 18 暫定版]



お茶の水女子大学
Ochanomizu University

は じ め に

高等教育研究機関にとって 2011 年は大きな転換の年となった。3 月の東日本大地震と原子力発電所の事故による甚大な被害が、改めて自然の脅威を見せつけ、自然に対して人間はいかに対峙すべきか、という問いをわれわれに突きつけたからである。

近代以降、人類は科学によって自然を解明し、制御し利用しうる対象とみなしてきた。この姿勢が自然科学を急速に進歩させ、高度な技術開発を可能にし、生活の利便性と経済的繁栄を齎してきたことは確かな事実である。しかし今回の災害は、これまでの自然探究や技術開発に別の観点が必要であったことをわれわれに強く意識させた。つまり、豊かさとは何を意味し、自然は人間にとっていかなる存在であるのか、を問うことが常にわれわれには課せられている。そしてこの問題意識は、次世代を担う学生を教育する立場にあるわれわれにとってことのほか重要なはずである。

2011 年度、本学では、東日本大震災の被災地支援に加え、防災や被災支援を対象とする研究プロジェクトを開始するとともに、最終年度を迎えたグローバル COE プログラムと若手研究者の自立的な研究環境整備促進の事業を学内において継続実施するための体制を整えた。

また、継続実施しているプログラムの遂行に加えて、特別経費による新たな研究プログラム「生活者の視点からのシミュレーション科学研究の拠点形成」に着手した。

教育体制については、学生の自律的主体性を重視した学士課程教育プログラム「複数プログラム選択履修制度」を新規開設し、2008 年度から実施している「21 世紀型文理融合リベラルアーツ教育」とともに、新たな時代の教養教育システムを完成させたことを特筆しておきたい。

本学の教員はこれら多くの事業に携わり、かつ、大学としての教育体制を整備し実行しながら、それぞれに高度な研究を遂行している。この『アニュアルレポート 2011』は個々の教員の教育研究活動を纏めたものであるが、これらの研究実績に裏付けられて本学の教育水準は高度に保たれている。

新たな大学改革の年と位置づけられた 2011 年度は、国立の女子大学としての存在意義が改めて問われた年でもあった。ここに記した多様な事業に加えて、グローバルに活躍する能力を備えた女性の育成を本学の重要な使命として、諸外国のリーダーシッププログラムとの連携を強化拡大したことも 2011 年度の特色である。女性の社会的活躍促進は国家的課題でもあり、この点においても、国立女子大学として提言し、実践することは本学の最重要課題であると考えている。

お茶の水女子大学は今後も日本の国際的地位の向上と人類の真の発展に寄与すべく高等教育研究機関としての役割を担ってまいりますので、引き続きご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

2012 年 6 月

国立大学法人 お茶の水女子大学長

羽入佐和子

23 年度実施 教育・研究等プログラム

☆特別教育研究経費による事業

- ・「女性リーダーを創出する国際拠点の形成」
⇒ <http://www.cf.ocha.ac.jp/leader/index.html>
- ・「多様な食育の場に対応可能な高度専門化の育成」
⇒ <http://www.cf.ocha.ac.jp/ochashoku/>
- ・「附属学校園を活用した新たな学校教育制度設計に係る調査研究」
⇒ <http://www.cf.ocha.ac.jp/sesd/>
- ・「統合型学生支援システムの構築による女子高等教育機会の保証」
⇒ <http://www.ocha.ac.jp/gss/index.html>
- ・「学生主体の新しい学士課程の創成」 ⇒ <http://www.ocha.ac.jp/nsep/>
- ・「乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築」
⇒ <http://www.cf.ocha.ac.jp/nyuyoji/index.html>
- ・「生活者の視点からのシミュレーション科学研究の拠点形成」
⇒

☆グローバル COE

- ・グローバル COE プログラム「格差センシティブな人間発達科学の創成」
⇒ <http://ocha-gaps-gcoe.com/>

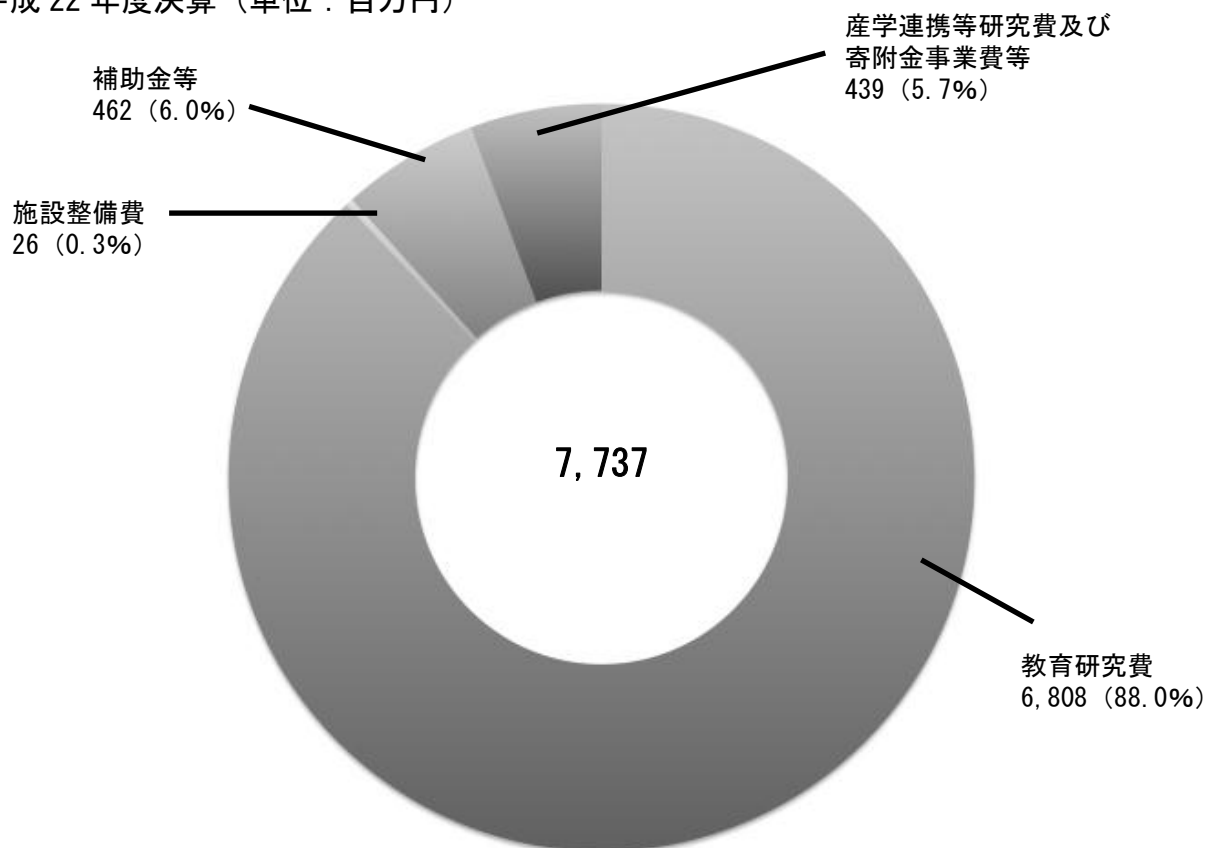
☆研究プログラム

- ・科学技術人材育成補助金「テニユアトラック普及・定着事業」
- ・科学技術人材育成補助金「ポストドクター・キャリア開発事業」
- ・近未来の課題解決を目指した実証的科学研究推進事業
「ジェンダー・格差センシティブな働き方と生活の調和」
⇒ <http://devgen.igs.ocha.ac.jp/workfam/index.html>
- ・ターゲットタンパク研究プログラム「ターゲットタンパク研究情報プラットフォームの構築運用」
⇒ <http://www.tanpaku.org/index.php>
- ・学際生命科学東京コンソーシアムによる全人的大学院人材育成拠点の確立
⇒ <http://cib.cf.ocha.ac.jp/CONS/>
- ・若手研究者戦略的海外派遣事業費補助金 頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム
「栄養学的アプローチから動脈硬化予防を目指すグローバル研究者の育成」
- ・戦略的創造研究推進事業（先端的低炭素化技術開発）
「CO₂濃縮強化によるスーパー光合成の実現と物質生産」

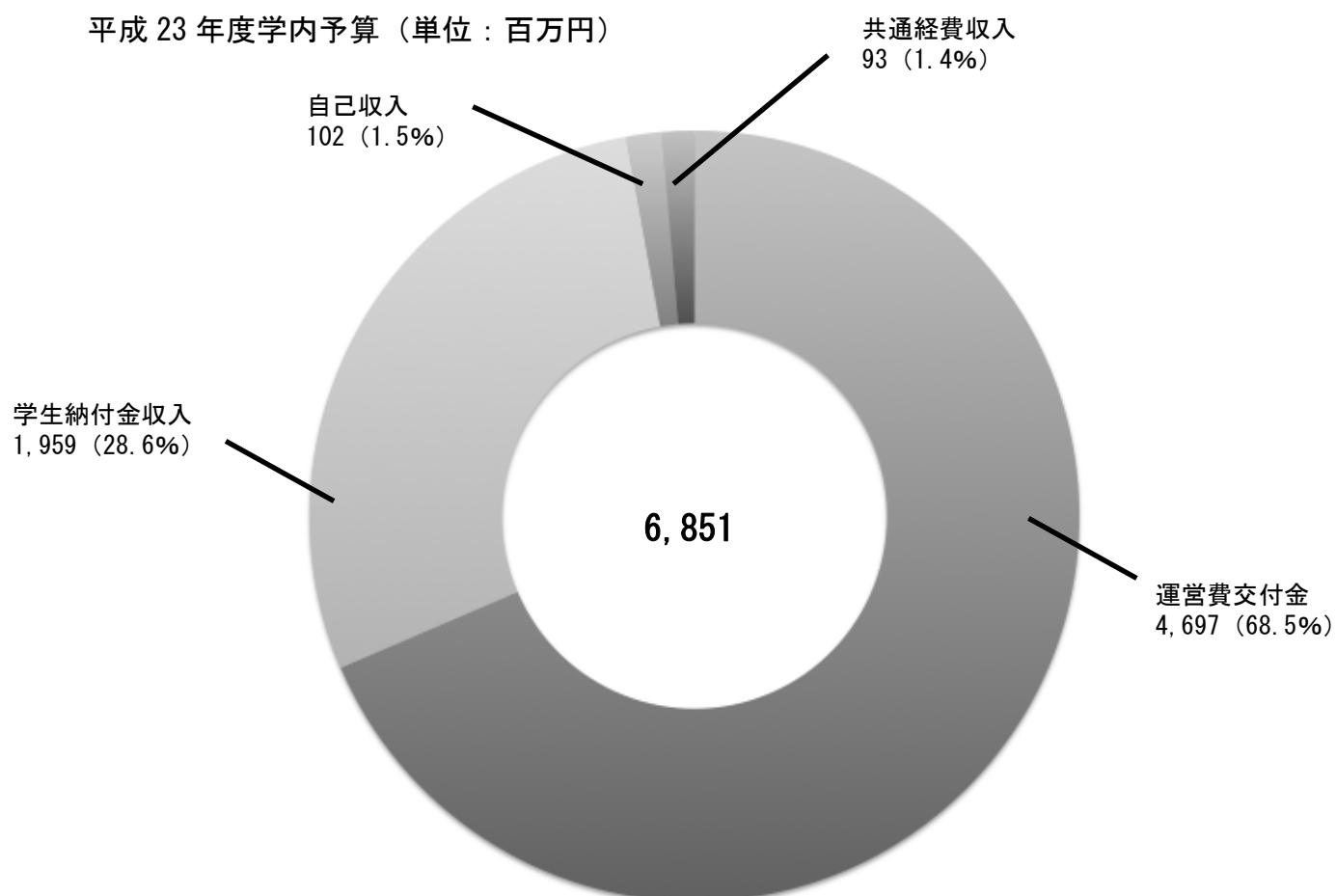
☆教育プログラム

- ・理数学生応援プロジェクト「理系女性の意欲と個性に根ざした複線的教育」
⇒ <http://www.sci.ocha.ac.jp/risuouen/>
- ・若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム
「校風をつなぐ女性科学者の育成～第二のマリー・キュリーをめざせ～」
⇒ <http://www.dc.ocha.ac.jp/itp/>
- ・理数系教員（コア・サイエンス・ティーチャー）養成拠点構築事業
「『理学する心』を持つ小・中学校教員の指導者養成」
⇒ <http://www.cf.ocha.ac.jp/sec/projects/cst/>
- ・組織的な若手研究者等海外派遣プログラム
「国際水準の女性科学者の育成ーお茶大型ホップ・ステップ・ジャンプモデル」
⇒ <http://www.ocha.ac.jp/intl/soshikihaken/>
- ・社会教育主事講習「社会教育主事講習」
- ・「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成
ー女性の役割を見据えた知の国際連携ー」

平成 22 年度決算（単位：百万円）



平成 23 年度学内予算（単位：百万円）



■大学院人間文化創成科学研究科

博士前期課程

専攻	入学定員	現員		計
		1年次	2年次	
比較社会文化学専攻	60	84	70	154
人間発達科学専攻	27	33	37	70
ジェンダー社会科学専攻	18	19	29	48
ライフサイエンス専攻	47	64	52	116
理学専攻	51	77	81	158
計	203	277	269	546

■博士後期課程

博士後期課程

専攻	入学定員	現員			計
		1年次	2年次	3年次	
比較社会文化学専攻	27	41	22	87	150
人間発達科学専攻	14	18	23	41	82
ジェンダー学際研究専攻	4	6	6	21	33
ライフサイエンス専攻	15	20	19	37	76
理学専攻	13	19	13	12	44
計	73	104	83	198	385

■大学院人間文化研究科

博士後期課程

専攻	入学定員	現員			計
		1年次	2年次	3年次	
比較社会文化学専攻	-	-	-	27	27
国際日本学専攻	-	-	-	34	34
人間発達科学専攻	-	-	-	31	31
ジェンダー学際研究専攻	-	-	-	10	10
人間環境科学専攻	-	-	-	4	4
複合領域科学専攻	-	-	-	5	5
計	-	-	-	111	111

■文教育学部

学科	入学定員	現員				計
		1年次	2年次	3年次	4年次	
人文科学科	55	61	61	61	76	259
言語文化学科	80	83	87	95	117	382
人間社会科学科	40	43	42	48	63	196
芸術・表現行動学科	27	29	27	27	33	116
計	202	216	217	231	289	953

■理学部

学科	入学定員	現員				計
		1年次	2年次	3年次	4年次	
数学科	20	20	23	25	25	93
物理学科	20	22	21	26	30	99
化学科	20	21	22	22	23	88
生物学科	25	27	24	27	31	109
情報科学科	40	43	38	44	45	170
計	125	133	128	144	154	559

■生活科学部

学科	入学定員	現員				計
		1年次	2年次	3年次	4年次	
食物栄養学科	36	39	39	39	40	157
人間・環境科学科	24	26	26	29	26	107
人間生活学科	65	70	70	76	99	315
計	125	135	135	144	165	579

■学部計

	入学定員	現員				計
		1年次	2年次	3年次	4年次	
計	452	484	480	519	608	2,091

寄附事業等による奨学金

■大学院生修学奨学金

募金団体：国立大学法人お茶の水女子大学

募金目的：大学院生の修学支援

(奨学金として大学院生[博士前期課程(修士)・博士後期課程]一人に対して100万円を贈呈)

募金額：大学院生一人に対して、一口100万円以上

募金目標額：年間5百万円以上

募金期間：平成24年4月～平成28年3月(第Ⅱ期)

(※平成23年度募金受入額 約100万円)

■大学院生(博士後期課程)奨学金

募金団体：国立大学法人お茶の水女子大学

募金目的：大学院生(博士後期課程)の修学支援

募金目標額：年間3千万円

募金期間：平成22年4月～平成28年3月(第Ⅰ期)

※平成23年度募金受入額 約6万円

■育児支援奨学金

趣 旨：お茶の水女子大学後援会の助成により、いずみナーサリーを利用する本学学生に、育児支援奨学金として当該保育料の原則半額を贈呈する。

奨学金：2,272,282円(平成23年度)

授与者数：11名

■被災学生支援金 (新設)

趣 旨：平成23年3月の東北関東地方太平洋沖地震により、被災した本学学生の修学支援

※平成23年度受入額 約976万円

■お茶の水女子大学120周年記念桜蔭会国際交流奨励賞

趣 旨：1. 海外支援事業

本学大学院博士後期課程修了者または在学中で成績優秀かつ将来が嘱望される学生のうち海外研究を希望する学生に贈られる。

2. アジア女性研究者支援事業

本学学生として留学後、アジアの各地域において研究者または各界の指導者として活躍し来日し研究を希望する学生に贈られる。

奨学金：金2,000,000円

授与者数：平成23年度海外支援事業1名、平成23年度アジア女性研究者支援事業1名

■桜蔭会研究奨励賞

趣 旨：平成18年度から社団法人桜蔭会の助成により発足した制度で、本学の学部から大学院人間文化創成科学研究科博士前期課程に進学した学生の中から特に優秀でかつ将来が嘱望されると認められる学生に贈られる。

奨学金：賞状及び各200,000円

授与者数：5名(大学院人間文化創成科学研究科博士前期課程)

■桜蔭会奨学金

対 象：各学部より推薦された学部3年生

奨学金：100,000円

授与者数：4名

上記のほか、本学独自の奨学金はこちらをご覧ください。

→ <http://www.ocha.ac.jp/campuslife/scholarship/list.html>

平成 23 年度競争的資金等の受入状況（一覧）

（単位：千円）

区 分	平成 23 年度受入額
特別経費(旧特別教育研究経費) 7 件	451,369
科学技術振興調整費 3 件	270,348
G-COE 1 件	115,400
GP 3 件	40,610
科学研究費補助金 141 件	285,578
科学研究費補助金(厚生労働省) 3 件	14,275
その他補助金 6 件	60,686
受託研究 35 件	200,252
共同研究 28 件	26,573
奨学寄附金 50 件	50,299
大学運営基金 3 件	40,765
大学院生修学奨学基金 1 件	1,000
大学院生(博士後期課程)奨学基金 1 件	60
奨学基金 6 件	10,500
被災学生支援基金 130 件	9,765
合 計	1,577,480

※金額は、間接経費を含む。（千円未満四捨五入）

※平成 23 年度特別経費には一般経費組替分は含まれていません。

※平成 23 年 3 月に「被災学生支援基金」を創設。

目 次

あ行			
相川 京子	10	菅野 健	96
青木 紀久代	12	岸本 美緒	98
秋山 央子	14	北岡 タマ子	100
浅井 健一	16	北島 佐知子	102
天野 知香	18	刑部 育子	104
新井 由紀夫	20	清本 正人	106
荒木 美奈子	22	工藤 和恵	108
安藤 壽子	24	熊谷 圭知	110
飯田 薫子	26	栗田 和正	112
池田 全之	28	桑名 杏奈	114
猪崎 弥生	30	郡 宏	116
石井 昌子	32	小風 秀雅	118
石口 彰	34	小坂 圭太	120
石田 千晃	36	小谷 眞男	122
市古 夏生	38	小玉 亮子	124
伊藤 亜矢子	40	小林 一郎	126
伊藤 さとみ	42	小林 功佳	128
伊藤 貴之	44	小林 哲幸	130
伊藤 美重子	46	小林 康明	132
井原 成男	48	小山 聡美	134
岩壁 茂	50	近藤 和雄	136
内田 正子	52	近藤 譲	138
梅原 利宏	54	近藤 敏啓	140
太田 裕治	56	近藤 恵	142
大瀧 雅寛	58		
大塚 常樹	60	さ行	
大塚 譲	62	坂元 章	144
大槻 明	64	坂本 佳鶴恵	146
大森 美香	66	作田 正明	148
岡崎 眸	68	佐々木 泰子	150
小川 温子	70	笹倉 理子	152
荻原 千鶴	72	椎尾 一郎	154
小口 正人	74	SCHAEFR EDWARD JAY	156
奥村 剛	76	柴坂 寿子	158
織田 友恵	78	柴 眞理子	160
		寫田 智	162
		菅本 晶夫	164
		菅原 ますみ	166
		杉田 孝夫	168
		杉野 勇	170
		杉山 進	172
		鈴木 恵美子	174
		鈴木 禎宏	176
		鈴木 寿子	178
		須藤 紀子	180
		曾根 保子	182
か行			
加賀美 常美代	80		
垣内 康孝	82		
香西 みどり	84		
加藤 敬子	86		
加藤 美砂子	88		
加藤 美帆	90		
河田 敦子	92		
河村 哲也	94		

た行		
高崎 みどり	184	
高島 元洋	186	
鷹野 景子	188	
鷹野 光行	190	
高濱 裕子	192	
田中 琢三	194	
棚谷 綾	196	
棚橋 訓	198	
垂見 裕子	200	
千葉 和義	202	
塚田 和美	204	
出口 哲生	206	
時田 みどり	208	
徳井 淑子	210	
外館 良衛	212	
戸谷 陽子	214	

な行		
内藤 章江	216	
内藤 俊史	218	
中居 功	220	
仲西 正	222	
永原 恵三	224	
中村 俊直	226	
中村 美奈子	228	
難波 知子	230	
新名 謙二	232	
西川 朋美	234	
野口 徹	236	

は行		
萩田 真理子	238	
長谷川 直子	240	
服田 昌之	242	
浜口 順子	244	
浜野 隆	246	
浜谷 望	248	
番 雅司	250	
半田 智久	252	
平岡 公一	254	
藤崎 宏子	256	
富士原 紀絵	258	
藤原 葉子	260	
古川 はづき	262	
古瀬 奈津子	264	

古田 悦子	266
古谷 希世子	268
戸次 大介	270
Diane Hawley Nagatomo	272

ま行		
真島 秀行	274	
増田 優	276	
益田 祐一	278	
松浦 悦子	280	
松浦 秀治	282	
松浦 素子	284	
松崎 毅	286	
松本 聡子	288	
三浦 徹	290	
水野 勲	292	
水村 真由美	294	
耳塚 寛明	296	
宮内 貴久	298	
宮尾 正樹	300	
三宅 亮介	302	
宮澤 仁	304	
宮本 泰則	306	
三輪 建二	308	
村田 容常	310	
最上 善広	312	
元岡 展久	314	
森田 寛	316	
森光 康次郎	318	
森山 新	320	

や行		
矢島 知子	322	
安田 次郎	324	
安成 英樹	326	
山田 眞二	328	
山野 春子	330	
横川 光司	332	
吉田 恵子	334	
米田 俊彦	336	
頼住 光子	338	

わ行		
和田 英信	340	
渡部 亜矢子	342	

氏名	相川 京子
	KOJIMA-AIKAWA Kyoko
所属	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系
職名	准教授
学位	博士(薬学)(1994 東京大学)
専門分野	生物化学
URL	
E-mail	aikawa.kyoko@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

レクチン

糖鎖科学

生化学

腫瘍生物学

細胞生物学

lectin

glycoscience

biochemistry

cancer biology

cell biology

主要業績

Kanagawa M, Satoh T, Ikeda A, Nakano Y, Yagi H, Koichi Kato, Kojima-Aikawa K, and Yamaguchi Y. Crystal structures of human secretory proteins ZG16p and ZG16b reveal a Jacalin-related β -prism fold. *Biochem Biophys Res Commun* 404 (2011) 201-205.

ZG16p, an animal homologue of β -prism fold plant lectins, interacts with heparan sulfate proteoglycans in pancreatic zymogen granules. Kumazawa-Inoue K, Mimura T, Hosokawa-Tamiya S, Nakano Y, Dohmae N, Kinoshita-Toyoda A, Toyoda H, and Kyoko Kojima-Aikawa. *Glycobiology*, 22(2012)258-266.

Caenorhabditis elegans proteins captured by immobilized Gal β 1-4Fuc disaccharide units: assignment of 3 annexins. *Takeuchi T, Nishiyama K, Yamada A, Tamura M, Takahashi H, Natsugari H, Aikawa J, Kojima-Aikawa K, Arata Y, Kasai K. *Carbohydr Res* 346(2011) 1837-1841.

Nakashima Y, Abe H, Abe N, Aikawa K and Ito Y. Branched RNA nanostructures for RNA interference. *Chem Commun* 47(2011)8367-8369.

Identification of mono- and di-sulfated N-acetyl-lactosaminyl oligosaccharide structures as epitopes specifically recognized by humanized monoclonal antibody HMOCC-1 raised against ovarian cancer. Shibata TK, Matsumura F, Wang P, Yu, S, Khoo K-H, Kitayama K, Akama TO, Sugihara K, Kyoko Kojima-Aikawa, Seeberger PE, Fukuda M, Suzuki A, Aoki D, and Fukuda MN. *J Biol Chem* 287(2012)6592-6602.

研究内容 / Research Pursuits

(1) β -プリズムフォールドタンパク質の構造と機能に関する研究 β -プリズムフォールド構造は植物レクチンや細菌毒素、鳥類の抗菌性を有すると考えられているタンパク質に見出されていた構造で、最近我々のグループはヒト由来のタンパク質としては新規にZG16p、ZG16Bが β -プリズムフォールド構造を持つことを明らかにした(主要業績1)。また、ZG16pは膵臓の外分泌細胞や消化管上皮細胞で多く産生されていること、膵臓チモーゲン顆粒内でのリガンドとしてヘパラン硫酸鎖を同定し、顆粒形成時にZG16pがヘパラン硫酸プロテオグリカンと相互作用し、ゴルジ体膜の特殊化を促進する可能性を示唆した(主要業績2)。

(2) アネキシンA1の腫瘍血管内皮細胞表面への表出機構 アネキシンA1は可溶性の34kDaのタンパク質で、正常細胞では細胞質に局在するが、腫瘍血管では特異的に細胞表面に表出することが明らかにされている(*Nature* 429(2004)629-635)。我々はアネキシンA1の細胞表面への表出機構を明らかにし、腫瘍組織への薬剤送達や微小腫瘍の生体イメージング技術への応用を目的に研究を進めている。本年度はCHO-K1細胞を使って、アネキシンA1の細胞表面への移行に関する基礎的な知見を得るために解析を行った。細胞表面に表出したアネキシンA1はアミノ末端部およびカルボキシ末端部の両方を細胞外に表出していることが明らかになり、アネキシンA1分子の凹部面を細胞外に向けた配向で局在することが示唆された。また、アネキシンA1は細胞表面に一様に表出するのではなく、特定の領域に局在することが明らかになった。

■ 教育内容 / Educational Pursuits

学部の講義科目に関しては、教科書だけでなく作成した資料を使って、理解の深化に役立てるようにした。学生実験では、TAと協力して確実な実技習得、原理の理解の徹底を心がけた。また、関連知識に関する自主的な学習を勧めることも意識した。

■ 研究計画

将来の研究計画と展望: β -プリズムフォールドタンパク質の生体内での役割に関し、免疫系などの生体防御からの観点で研究を進めて行く予定である。また、 β -プリズムフォールド構造の特徴をふまえて、構造改変による分子プローブ、新規活性物質の創出も検討して行く。

■ メッセージ

氏名	青木 紀久代 AOKI Kikuyo
所属	人間文化創成科学研究科人間科学系
職名	准教授
学位	心理学(博士)
専門分野	臨床心理学、発達心理学、精神分析学
URL	http://www.develop.ocha.ac.jp/top%20page.html
E-mail	aoki.kikuyo@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

子育て支援
学校メンタルヘルス
コミュニティアプローチ

child-care support
school mental health
community based approach

主要業績

青木紀久代 2011 間主観性と乳幼児期の心理臨床 FOUR WINDS乳幼児精神保健学会誌, 4, 13-17.

青木紀久代・平野直己(編) 2012 乳幼児期・児童期の臨床心理学 培風館

Aoki, K. 2011 Evaluating the school based mental health promoting programs in Japan. The American psychological Association Division 27: The Society for Community Research and Action 13th Biennial Conference, 134-135.

青木紀久代 2012 特別支援学級在籍児童と放課後児童クラブ—小学校との協働の現状と課題— こども未来財団平成23年度児童関連サービス調査研究等事業報告書

青木紀久代 2011 乳児院における子どもの社会情緒的発達を促進する生活臨床プログラムの模索 子どもの虹情報研修センター

研究内容 / Research Pursuits

臨床心理学の蓄積を一個人心理療法からコミュニティへのメンタルヘルス支援・心理教育へと発展的に活用するためのシステムを構築することを目指した実践研究を行っている。例えば、対象となるコミュニティ独自の問題を把握するためのアセスメントツールの開発・アセスメントに基づく処方箋の適用・一定の実践及び事後評価を一貫して展開する。研究は、保育園協会、学校、教育委員会、あるいは就学援助を行うNGOなど、問題解決のニーズのある団体との協働となる。このようなスタイルで、2011年度に行った主な研究プロジェクトは、次の5つである。(1)学校力と社会的資源に着目した心の健康と発達支援(2)フィリピン・セブシティスラム地区の就学前児童におけるECCD(幼児の早期ケア発達支援)縦断研究、(3)子育て支援者の専門研修プログラム開発、(4)乳児院における子どもの社会情緒的発達促進的支援(5)インターネットによるひきこもり支援に関するアクションリサーチ

I am preceding practical studies with the aim of constructing systems in which we can progressively apply the accumulated findings in the field of clinical psychology and individual psychotherapy to mental-health support or psycho-education in community. For example, I continuously conduct a study to develop an assessment tool for grasping the problems uniquely exist in the targeted community, to apply the remedies based on the assessment and to evaluate the specific practices. Studies are collaborated with groups, such as nursery school association, schools, school board or NGOs, where problem solution is needed. In this way, four main research projects preceded in 2011 are as follows:
1. Promoting children's mental health by focusing on the school power and social capital. 2. A longitudinal study on early childhood care and development (ECCD) in a slum area in Cebu, Philippines, 3. Development of professional training programs for parenting supporters, 4. Childcare in the promotion of social-emotional development of young children in the infant-home setting., 5. Action research on psychological care and social support of Hikikomori by internet.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

生涯発達上に起こるさまざまな心理的不適応の問題の理解と対応を、実践知と実証知の双方から学ぶことをテーマにしている。学部では、発達臨床心理学、心理臨床学、臨床心理学基礎実習、等の授業を担当した。大学院では、カウンセリング特論・発達臨床心理学特論などを担当し、心理療法の個人指導及び実践研究を主とした修士論文指導を行った。博士後期課程では、在籍学生の全てが臨床心理士資格を有し、児童相談所、子育て支援センター、学校、クリニックなどでの専門職としての臨床経験を活かしながら、臨床研究に取り組んでいる。全ての学生が、学会発表と論文の執筆を行った。また一名が、博士号を取得した。

The main theme to study is to understand and correspond to various psychological maladjustments in life span from clinical practices and empirical knowledge. For under-graduate programs, I was in charge of Developmental and Clinical Psychology, Clinical Psychology, Fundamental trainings of clinical psychology and so on. For graduate programs, I was in charge of Counseling theories, Developmental and Clinical Psychology and so on, and supervised individual counseling cases and master's theses. In the doctoral programs, students all acquired the certified clinical psychologist, and are working on their studies while making use of their specialized work experiences at clinical settings, such as child counseling centers, parenting support centers, schools, and mental clinics. All students presented their researches at conferences or submitted papers. And one of the students got Ph.D.

■ 研究計画

現在5つのプロジェクトは、それぞれの成果をふまえ、発展している。例えば、学校メンタルヘルス関連のプロジェクトは、短大生、学童保育、海外の日本人学校などの支援へと発展している。子育て支援プロジェクトは、子ども虐待への対応を含んだ臨床研究として、研究助成を受け、乳児院での乳児院の専門職研修プログラムの開発へと発展し、全国乳児院協会の乳児院将来構想ビジョンなどに成果の還元が予定されている。

■ メッセージ

臨床心理学の中でも発達臨床心理学の発想は、治療的アプローチよりも、発達促進的で、育ち合う関係作りを重視します。カウンセリングルームに自ら訪れ、自分の悩みをじっくりと語ることができ、心の内面を癒し、自己成長できる人というのは、ある意味では、恵まれた支援環境にある人だとも言えます。世の中には、援助の必要な人は沢山いますが、全ての人を救うことはできないし、また支援者自身も、実は、沢山の援助を必要とします。ありもしない「万能な支援者」という錯覚に陥ることなく、学部時代は、「心の援助」の基本を、広く学び、また他者に助けられながら育っている私たち自身を自覚しつつ、卒業後も、様々な生活シーンに役立つものをつかんで下さい。大学院に入って、臨床心理士を目指す人達、あるいは、すでに専門家の人達には、在学中に、是非自分たちの心理臨床活動のイメージの幅を広げ、創造的な援助スタイルを見いだして頂きたいと思います。

氏名	秋山 央子 AKIYAMA Hisako
所属 職名	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系 リサーチフェロー
学位	理学博士／Doctor of science
専門分野	脂質生化学／Biochemistry of lipids
URL	
E-mail	akiyama.hisako@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

脂質メディエーター
熱ストレス応答
コレステロール
グルコシルセラミド
コレステリルグルコシド

lipid mediator
heat stress response
cholesterol
glucosylceramide
cholesteryl glucoside

主要業績

Akiyama H, Sasaki N, Kobayashi S, Hirabayashi Y and Murakami-Murofushi K. Novel sterol glucosyltransferase in the animal tissue and cultured cells: Evidence that glucosylceramide as glucose donor *Biochimica et Biophysica Acta – Molecular and Cell Biology of Lipids*, 2011, 1811: 314–322.

Akiyama H, Tsutomu H, Nagatsuka Y, Kobayashi S, Hirabayashi Y and Murakami-Murofushi K. A possible mechanism of cholesteryl glucoside formation involved in heat shock response in the animal cell membrane *Cytologia*, 2011, 76: 19–25.

Akiyama H, Sasaki N, Kobayashi S and Murakami-Murofushi K. Novel sterol glucosyltransferase in the animal tissue and cultured cells: Evidence that glucosylceramide as glucose donor. *CHEMISTRY AND PHYSICS OF LIPIDS*, 2010, 163 Supplement: PO43.

研究内容 / Research Pursuits

動物細胞の熱ストレス応答の初期感知機構を明らかにするために、私たちの研究グループが世界に先駆けて発見した熱ストレス応答を制御する細胞膜糖脂質コレステリルグルコシド (CG) に着目して研究を進めている。CGは、コレステロールにグルコースがβ-グリコシド結合した糖脂質であり、動物細胞が熱ストレスを受けると速やかに細胞膜上で合成される。これまでに私たちは、CGがストレス防御機構の中心として働く熱ストレスタンパク質HSP(Heat shock protein)の合成誘導を制御することを明らかにしてきた。このことから、CGは熱ストレス応答の初期感知機構に深く関与する分子であると考えられている。動物細胞において、CG合成を担うグルコース転移酵素は未だ同定されておらず、CGがどのようにして熱ストレス依存的に細胞膜上で合成されるのか、また、CGによるHSF1活性化機構については未だ明らかになっていない。本研究では、これらの課題に取り組み、動物細胞の熱ストレス応答の初期感知機構の解明を目指す。

To clarify the initial perception mechanism of heat stress response in animal cell, I am focusing on a membrane glycolipid "cholesteryl glucoside (CG)". CG is a glycolipid in which the glucose residue is linked by a β-glycosidic bond to cholesterol, and was first discovered by our research group as a key molecule of heat stress response. CG is rapidly induced by heat shock in animal cell membrane before the occurrence of heat shock transcription factor 1 (HSF1) activation and heat shock protein (HSP) production, and the addition of CG induces HSF1 activation and HSP production to the culture of human fibroblasts and rat gastric mucosa. It is highly conceivable that CG functions as a crucial lipid mediator in the stress responses in the animal. The glucosyltransferase that takes charge of CG-synthesis reaction has not yet been identified in animals, therefore, it has not been clarified how CG is synthesized in heat stress dependent manner. Moreover, HSF1 activation mechanism mediated by CG is not clarified yet. In the present study, I address these challenges, and am aiming at the clarification of the initial perception mechanism of heat stress response in animal cell.

☐ 教育内容 / Educational Pursuits

☐ 研究計画

☐ メッセージ

氏名	浅井 健一 ASAI Kenichi
所属	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系
職名	准教授
学位	博士(理学) (1997 東京大学)
専門分野	計算機科学(特にプログラミング言語)
URL	http://pllab.is.ocha.ac.jp/~asai
E-mail	asai.kenichi@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

部分継続
部分評価
自己反映言語

delimited continuation
partial evaluation
reflective language

主要業績

K. Asai "Reflection in Direct Style," Proceedings of the Tenth Conference on Generative Programming and Component Engineering (GPCE '11), pp. 97-106 (October 2011).

Masuko, M., and K. Asai "Caml Light + shift/reset = Caml Shift," Theory and Practice of Delimited Continuations (TPDC 2011), pp. 33-46 (May 2011).

対馬かなえ、浅井健一「コンパイラの型推論を利用した型デバッグ手法の提案」第14回プログラミングおよびプログラミング言語ワークショップ論文集 (PPL 2012)、(March 2012).

中野祥、浅井健一「js_of_ocamlによるMiki β の実装に向けて」第14回プログラミングおよびプログラミング言語ワークショップ論文集 (PPL 2012)、(March 2012).

岩井亜里紗、浅井健一「メタラムダ計算の定式化」第14回プログラミングおよびプログラミング言語ワークショップ論文集 (PPL 2012)、(March 2012).

研究内容 / Research Pursuits

プログラミング言語に置ける部分継続の基礎理論の確立とその応用の開拓を行うと同時に、型の入った効率的な処理系の作成を目指す。具体的には、基礎理論として (1) 型システムの基本的な性質の確立、および (2) 継続計算の処理系作成のための基礎技術の確立を目指す。また、継続計算用型システムの応用として (3) 例外解析の定式化を行う。さらに (4) これらの知見をあわせ処理系の実装を行う。

The current research is focused on the foundation of delimited continuations in functional programming languages. As its application, an efficient compiler for a typed language with delimited continuation constructs will be implemented. To be more specific, the research aims at (1) establishing basic properties on the type system for delimited continuations, (2) establishing the basic techniques for implementing efficient compiler for delimited continuations, and (3) formalizing exception analyses as the application of delimited continuations.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

「データ構造とアルゴリズム」でデータ構造の初歩を、「関数型言語」でプログラムの基本的な考え方を、「言語理論とオートマトン」で言語処理系の基礎を、「コンパイラ構成論」でコンパイラの中身について学ぶ。

"Data structures and algorithms" for data structures, "Functional Language" for the fundamental concepts in programming, "Formal language and automaton" for the basics of language processors, and "Compiler construction" for the internals of compilers.

■ 研究計画

継続理論の確立を通して、これまで正面から取り扱われて来なかった例外処理の定式化と、その効率的な実装を目指す。

■ メッセージ

情報科学の基礎理論の分野で確かな一歩を一緒に踏み出しましょう。

氏名	天野 知香
	AMANO Chika
所属	人間文化創成科学研究科文化科学系
職名	教授
学位	博士(文学)
専門分野	西洋近代美術史
URL	
E-mail	amano.chika@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

アンリ・マチス
装飾芸術
フランス近代美術
他者表象
美術史

Henri Matisse
Decorative Arts
Modern Arts in France
Representation of Others
Art history

主要業績

天野知香「「他者」をめぐる交錯するまなざし」—里見宗次と『オリエント・コルズ』、『美術フォーラム』、醍醐書房、2011年、5月、Vol.23、pp.128-132.

天野知香「午後のコメント」「ディスカッション」(明治学院大学文学部芸術学科・言語文化研究所主催シンポジウム西洋美術とジェンダー)、『言語文化』第29号、2012年3月、pp.264-296

天野知香「美術をめぐる神話や主流の物語を静かに突き放す(アルベルト・マンゲル著『奇想の美術館』書評)」、『図書新聞』、3009号、2011年4月9日、4面。

研究内容 / Research Pursuits

両大戦間フランスを中心とした装飾芸術および美術における「他者」表象や他者性をめぐる作品・資料調査を昨年に引き続き行い、19世紀後半以降の装飾と「他者」をめぐる概念や言説の展開を考察した。「他者」表象のケース・スタディとして、フランスで活躍したグラフィック・デザイナー里見宗次による日本政府の注文によるポスターを取り上げ、両大戦間フランスの「他者」表象のあり方がグローバルな植民地主義を背景に日本における自己表象と融合しながら展開された例を検討し、論文として発表した。また西洋美術におけるジェンダー研究の近年の動向を跡付け、シンポジウムのコメントを通じて今日の新しい研究成果を位置づけた。

■ 教育内容 / Educational Pursuits

美術史学特殊講義、西洋美術史特論においては、具体的なケース・スタディとして20世紀フランスの画家アンリ・マティスを中心に19世紀末から20世紀前半の美術における諸問題とそれを捉える美術史における多様な視点を論じた。美術史学演習ではT.J.Clarkによるオランピア論(“Oranpia’s Choice” in The Painting of Modern Life)を読むことを通じて、モダニズムに対する芸術の社会史の方法論的実践の例を学び、19世紀後半における絵画をめぐる諸問題やとりわけ女性表象についての問題を検討した。LA科目であるアートとジェンダーにおいては、視覚表象や美術の歴史や制度等におけるジェンダーの諸問題とそれに対する女性芸術家を中心とした対抗的な試みの実例を検討した。また学部および大学院の学生の研究および論文執筆の指導や方向性を検討した。

■ 研究計画

両大戦間フランスを中心とする装飾芸術および美術における「他者」表象や他者性をめぐる研究を継続する。この問題は西欧文化における概念配置の構造と密接に関わる問題であり、これを批判的に再検討する理論化を推し進め、作例の研究を展開する。この問題はさらに広範は広がりを持つことが実感されているため他領域の専門分野にわたる共同研究の有効性が期待される。上記のテーマとも関連しながら、アンリ・マティス研究を継続し、美術史における方法論の再検討を進める。

■ メッセージ

美術史という学問は、一般に重要とされる芸術作品を無条件に礼賛したり、芸術家の人生をたどってその個人を探求するだけのものではありません。学問の世界に足を踏み込むことで、メディアや一般的な通念にあふれている「美術」や「傑作」についての固定的な見方から自由になって、あなた自身の批判的な知と想像力を磨き、それを駆使して多様な視覚的な表象に向き合って見てください。それはこれまでの「私」を揺るがし、今あなたが生きている時代や社会と新たな関わりを見いだす可能性を開くことになるはずです。

氏名	新井 由紀夫
	ARAI Yukio
所属 職名	人間文化創成科学研究科文化科学系 教授
学位	文学修士(1985 東京大学)
専門分野	西洋史学、イギリス中世後期史
URL	http://www.li.ocha.ac.jp/hum/arai.htm
E-mail	arai.yukio@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

中世イギリス史
史料論
ジェントリ
社会的結びつき
家系文書史料群

medieval history of England
sources and documents
gentry
social relationships
archive of gentry family

主要業績

新井由紀夫「15世紀イングランドにおけるジェントリの家政会計記録(ハウスホールド・アカウント)について～ラングレイ家の家政会計記録(1473年～)」、岡崎敦編『西欧中世文書の史料論的研究 (研究課題番号:20320117) 平成23年度研究成果年次報告書』(2012年3月)、69–81頁。

研究内容 / Research Pursuits

ラングレイ家の家令会計記録(The National Archives, Public Record Office, E101/516/9) 全18葉からなる記録(イギリス国立文書館所蔵)を、トランスクリプト(転写)し、全文を翻訳した。そこから何が読めるのかを引き続き検討している。ジェントリ女性の家政会計記録を、経済史的観点だけでなく、社会史や宗教史、政治史との関連でも読めることが明らかとなった。この史料のトランスクリプトを他の同時代史料と比較し、読んでいく予定である。

■ 教育内容 / Educational Pursuits

2011年度学部ゼミで読んだ論文(英語)のタイトルを示すと、「近世ヴェネツィアのうわさにみる、地域共同体のミリュー」「死者のための家-1843～1889年ロンドンにおける遺体安置所の供給と住民の対応」「自由主義革命の失敗:1848年ウィーン革命」「死の文化:中世ヨーロッパと日本における戦士の自害」「中世における入浴と食事療法の関係」「ブリストルのブリスリントン・ハウスにみるピクチャレスク:19世紀初期の精神病院における治療法に風景が担った役割」「イングランドへのスコットランド移民の盛衰:マージーサイド、リヴァプールにおけるスコットランド移民社交団体」「小笠原諸島父島における観光と保護:持続可能な観光の可能性」「ヘンリ8世の宮廷における女性のファッション」であった。

■ 研究計画

キャサリン・ラングレイというロンドン豪商出身でジェントリに嫁ぎ未亡人になった女性とラングレイ家に関する史料を集めて、ぼちぼち読み始めています。彼女の遺言書や彼女のもらった贖宥状、それにラングレイ家の会計記録などを読んでいきます。これらをもとに、キャサリンの生涯と社会との関係を再構築してみることを計画しています。また、ジェントリの家系文書史料群(データは全部で2000件程度)を整理分析することを試んでいます。共同研究は、1. 中世ヨーロッパの史資料に関する研究(科研) 2. 身分感覚の比較史的研究(科研)

■ メッセージ

なにごとにも好奇心を持ち、どんなことでもどん欲に楽しむという姿勢は、歴史学をやる上であんがい欠かせない要素だと思います。遊びや楽しみのなかから学問のヒントを得ることもあります。学生さん達との学科旅行での宴席で、比較社会史という授業のテーマ「ホモセクシュアルの比較社会史」が決まったのですが、やってみると奥が深く、史学の先生達との共同研究テーマにまで発展してしまったほどです。歴史学で扱えないようなテーマはない、何でもありだと最近よく思います。歴史学をやる上でこうしなければだめだということもありません。われこそは、という皆さん、是非、お茶大比較歴史学コースにいらして下さい。

氏名	荒木 美奈子
	ARAKI Minako
所属	人間文化創成科学研究科人間科学系
職名	准教授
学位	Ph.D.(開発研究)
専門分野	開発研究
URL	
E-mail	araki.minako@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

開発研究
アフリカ地域研究
内発的発展
住民組織
コモンズ論

Development Studies
African Area Studies
endogenous development
groups/organizations
commons

主要業績

荒木美奈子(2011)「開発実践における「プロセスの記述」—ザンビアとタンザニアのフィールドからの学び」、佐藤寛・藤掛洋子編『開発援助と人類学—冷戦・蜜月・パートナーシップ—』明石書店、pp.202-227.

荒木美奈子(2011)「コーヒーからみえてくるグローバル化とは—タンザニアのコーヒー生産農民の営み」、小林誠・熊谷圭知・三浦徹編『グローバル文化学—文化を越えた協働—』、法律文化社、pp.86-103.

荒木美奈子「地域開発実践におけるキャパシティの蓄積・内在化と発現形態—タンザニアを事例として—」日本アフリカ学会第48回学術大会、弘前大学、2011年5月21日

研究内容 / Research Pursuits

1. 科研費(基盤研究(B))「アフリカの開発実践における住民組織と開発プロセスの創出に関する研究」(研究代表者)タンザニアにおける開発実践の試みを対象とし、主に1)内発性やキャパシティの発現過程と形態、2)コモンズ論としての資源利用と管理、3)住民組織の役割とインフォーマルな組織との関係、4)外部要因との関係に着目し、研究を行っている。平成23年度は、2011年8月10日から9月18日までタンザニアにてフィールド調査を実施した。2. 科研費(基盤研究(S))「アフリカの潜在力を活用した紛争解決と共生の実現に関する総合的地域研究」(研究分担者)アフリカの諸地域では紛争によって解体・疲弊した社会秩序をいかにして再生させるかという課題に直面している。大きな紛争からローカルな「小さな紛争」まで、アフリカが自ら創造・運用してきた知識や制度(=潜在力)に着目しながら研究を進めている。

I have paid my attention to endogenous development and nature of capacity building, by continuously monitoring the dynamics and qualitative process of development practices. In addition, I focus on the roles of farmers' groups and their relations to indigenous associations, change of norms and systems of groups in connection with resource use and management, and their resolution mechanism. In 2011, I conducted the field research in Tanzania from 10th August to 18th September. I also joined the research project JSPS Grant-in-Aid for Scientific Research(S) Conflict Resolution and Coexistence through Reassessment and Utilization of "African Potentials".

■ 教育内容 / Educational Pursuits

学部:前期に「国際協力学」、「国際協力方法論II」、「グローバル文化学方法論(共同担当)」等を担当、後期に、「国際協力方法論I」、「国際協力実習I」、「グローバル文化学特論(共同担当)」、リベラルアーツ科目「生命と環境10:開発と共生」/「生活世界の安全保障5:人間の安全保障」を担当するとともに、グローバル文化学環の卒業研究指導を行った。また、3月に「国際協力実習II(タイでの実習)」を実施した。大学院:前期に「開発実践研究論」、後期に「開発実践研究論演習」の授業を担当した。

In the academic year of 2011, the lectures and seminars I provided are as followings: For Undergraduates: International Cooperation, Advanced International Cooperation I & II, Methods of Global Cultural Studies, and Human Securities/Development and Environment (Liberal Arts). Practicum of International Cooperation I & II For Graduates: Development Studies and Practices I & II

■ 研究計画

1. 科研「アフリカの開発実践における住民組織と開発プロセスの創出に関する研究」については、2012年8月～9月にかけて1月程タンザニアでのフィールド調査を実施する予定である。2. 科研「アフリカの潜在力を活用した紛争解決と共生の実現に関する総合的地域研究」については、「全体会議」とテーマ別(「経済・開発」と「生業◆E環境」)研究会と地域別(東アフリカ・クラスター)研究会を通して、研究を進める予定である。3. 今年度から始まった科研(基盤A)「地球温暖化による熱帯高山の氷河縮小が生態系や地域住民に及ぼす影響の解明」に関しては、地球温暖化のタンザニア・キリマンジャロ山や麓住民への社会・経済的影響を中心に研究を進める予定である。

■ メッセージ

「開発」実践と研究の双方からアフリカ(特にザンビア、タンザニア)に関わってきました。実践と研究をつなぐ視点やアフリカが抱えている課題と可能性の双方を、伝えていきたいと考えています。「国際協力」=「先進国/専門家が貧しい人々を支援する」というイメージが先行しますが、グローバル化が進む世界のなかで、私たちの生活がいかに他の地域と繋がり、相互に依存しているかを理解し、関係性のなかで「国際協力」を考えていく視点も大切です。モノや出来事の向こうにある人びとの暮らしに思いを馳せる「想像力」と、ローカル場でそれぞれに生きる人びとが、相互に学びあい、新たな社会を築いていく「創造力」の双方を身につけてほしいと願います。大学院生に関しては、長期のフィールドワークに基づく研究を志す方が増えることを期待しています。

氏名	安藤 壽子
	ANDO Hisako
所属	学校教育研究部
職名	教授
学位	博士(教育学)／ Ph D
専門分野	学校教育・特別支援教育・発達障害
URL	
E-mail	ando.hisako@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

LD (学習障害)
リテラシー (読み書き)
学習支援
リテラシー・スクリーニング検査
学習支援プログラム

LD (Learning Disabilities)
Literacy (Reading & Writing)
Learning Support
Literacy Screening Test
Learning Support Programs

主要業績

原恵子・加藤醇子・安藤壽子・平松純子 (2011) : 学校で使える音韻・音読検査 (試案) (第2報) - 通常学級でのディスレクシアのスクリーニング検査の試み -. 日本LD学会第20回大会発表論文集, pp.668-669.

Hara,K.,Kato,J. & Ando,H.(2011):Dyslexia Screendvding Test for Students in Grades 2 and 3 in Japanese Elementary Schools. The International Dyslexia Association 62nd Annual Conference.

研究内容 / Research Pursuits

研究内容は、①低学年児童を対象とする、通常の学級の担任や通級指導教室の教員が簡便に活用できる、リテラシー・アセスメントの開発、②その結果に基づき、読み書きの特異的困難の背景にある認知的要因に対応する、効果的な学習支援プログラムの開発、である。低学年における組織的なリテラシー・チェックによって、読み書きの困難による全般的な学力の低下を予防し、低学力層全体の学力向上に寄与したい。

I had been engaged in a research of a dyslexia screening test for students in the regular class settings with my colleagues these 5years. And we had developed The Dyslexia Screening Test named ELC(Easy Literacy Check) . It is able to apply to nomal students from the first grade to 2 or 3 grades and also to upper grade sudents with dyslexia. Tasks included in the ELC are passage reading, word/nonward decoding and phonological awareness. And the tasks are presented to the student individually through personal computer. It will take only 10 minuts. The results of the ELC is evaluated by the time and error scores.

Almost teachers in the regular classroom never recognize about students with dyslexia and they have no way to help the dyslexic students. ELC will be usuful to such teachers and be helpful to students with dyslexia.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

” 大学院副専攻科目「探究力・活用力養成論」は、講義や文献研究を通して学校教育で育成すべき子どもの探究力や活用力についての理論を学ぶとともに、子どもの探究力や活用力の実践的な研究方法論及びその能力の定着を評価する方法論について、総合的に学ぶことを目的としている。模擬授業等を通し、これらの学びを生かした実践力の基礎を身につける。

「探究力・活用力養成法研究(基礎)」 「探究力・活用力養成法研究(発展)」は、附属校園において非常勤講師として雇用され、TTとして授業を担当しながら、子どもの探究力や活用力についての理論や実践的な研究方法論及びその能力の定着を評価する方法論を具体的に実践し検証することを通して、教師としての高度な専門性を身につけることを目指している。

The purpose of the lecture is to learn the theory of the educational methods, the educational research and evaluation. It is the most important thing that children investigate their own subjects with curiosity and solve the problems independently and also feel a sense of achievement.

Working as a assistant teacher in the attached schools, the graduate students will be able to learn how to teach the children efficiently. And they will get the ability to understand children and bring up them as a competent teacher.

■ 研究計画

近年のディスレクシアに関する研究から、読み書きに特異的な困難をもつ児童が通常の学級に一定数存在することが報告され、早期発見・早期介入の必要性が指摘されている。本研究は、低学年児童を対象とするリテラシー・アセスメントの開発と、効果的な学習支援プログラムの開発、を目的とする。

本研究の成果は、低学年における組織的なリテラシー・チェックによって、読み書きの困難による全般的な学力の低下を予防し、低学力層全体の学力向上に寄与するものと考ええる。

■ メッセージ

近年の厳しい社会・教育的状況から、学校現場では修士レベルの高い専門性を備えた教師が求められています。附属校園が同一キャンパスに設置されているという他大学には無い魅力を生かし、未来型の教師を目指す大学院(副専攻)院生が自らの課題を持ち寄って主体的に学び合い、研究と実践のダイナミックな循環が生まれています。教師を目指し教育を語る意欲ある院生の、研鑽の場としたいと思います。

氏名	飯田 薫子 IIDA Kaoruko
所属 職名	大学院人間文化創成科学研究科自然・応用科学系 准教授
学位	博士(医学)(2001筑波大学)
専門分野	応用栄養学、生活習慣病学、スポーツ医学
URL	
E-mail	iida.kaoruko@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

生活習慣病
エネルギー代謝
メタボリック症候群
分子生物学
応用栄養学

Lifestyle medicine
energy metabolism
metabolic syndrome
molecular biology
applied nutrition

主要業績

【原著論文】Kodama S, Saito K, Tanaka S, Horikawa C, Fujiwara K, Hirasawa R, Yachi Y, Iida KT, Shimano H, Ohashi Y, Yamada N, Sone H.: Effect of web-based lifestyle modification on weight control. : Int J Obes 2011 (in press)

【原著論文】Horie M, Kawashima Y, Naka A, Matsumoto K, Kodera Y, Maeda T, Iida K.: Proteomic profiling of k-11706 responsive proteins. Int J Sports Med 32(7):559-64, 2011

【原著論文】進藤弥生、皆川健太、飯田薫子:新しいガイドラインを用いた外来での運動指導の効果の検討〜脂質異常症患者を対象として〜体力科学60(4):433-441, 2011

【学会発表】飯田 薫子, 中 彩乃, 中川 嘉, 島野 仁 骨格筋における転写因子TFE3の糖・蛋白代謝に対する効果 第65回 日本栄養・食糧学会大会(東京)2011.5

【著書】飯田薫子:代謝内分泌系疾患. 栄養科学イラストレイテッド 臨床栄養学(本田佳子 他 編). 羊土社. 29-45頁、2012.2

研究内容 / Research Pursuits

肥満、糖尿病、高脂血症、メタボリックシンドロームなどは典型的な生活習慣病であり、その発病と進行には食生活・身体活動などの因子が密接に関与する。そこで本研究室では、分子生物学的手法や臨床疫学的手法を駆使して、生活習慣病の予防・治療法開発をテーマとし、食生活・身体活動などの観点から広く研究に取り組んでいる。さらに身体活動と関連して、運動やスポーツに注目し、運動時の様々な生体内での変化についても併せて研究を行っている。

Various factors in nutrition and physical activity are involved in the onset and development of lifestyle diseases such as diabetes, dyslipidemia, obesity and metabolic syndrome. Work in our laboratory focuses on those factors to clarify how developing of lifestyle diseases and to develop the therapeutic strategy for these diseases. Together, our lab studies biological processes of energy metabolism in exercise. Our studies involve a wide variety of molecular, in vivo physiologic, and clinical-based techniques.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

2011年度担当授業;解剖生理学I、解剖生理学II、解剖生理学実験、食物栄養学輪講、食物学概論 など 主に医学、医療系の授業を担当している。「解剖生理学」では、人体の構造や生理機能を判りやすく説明し、疾患に関する理解を深めることができるように配慮した。「解剖生理学実験」では、マウスの解剖や、実際に病院で使用される医療機器を活用した医療検査などを体験させ、解剖や生理学の理解を深められるように工夫した。学部共通科目の「食物学概論」では、食や食品、栄養などの「食」と「健康」の関連性について、一般の学生むけにわかりやすく講義を行った。

■ 研究計画

生活習慣病研究を志す院生志望者が非常に増加しており、現在研究室体制を整備・拡大し、複数のプロジェクトを推進している。具体的には、糖や脂質代謝に関わる転写因子の研究、生活習慣病の発症や進展予防につながる食品成分の研究、運動時の骨格筋エネルギー代謝に関する研究、などを行っており、その研究手法として、実験室における分子生物学的研究と、情報データベースを活用した解析研究の両面からのアプローチを行っている。食事・運動を含む、生活習慣病(糖尿病、メタボリックシンドローム、動脈硬化など)の予防・治療に関わる研究に関して、大学・企業を問わず、共同研究、専門医の見地からのアドバイス、講演が可能である。

■ メッセージ

近年社会問題となっている様々な生活習慣病には、栄養や運動といった生活因子が深く関与しています。その関連性を深く理解し、広い知識を身につけ、これらの疾病に立ち向かえるような研究を勧めて行くことが我々の目指すところです。興味がある方は、いつでもご連絡下さい。

氏名	池田 全之 IKEDA Takeyuki
所属 職名	人間文化創成科学研究科人間科学系 教授
学位	博士(教育学)/Doctor (pedagogy)
専門分野	教育哲学/Educational Philosophy
URL	
E-mail	ikedatakeyuki@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

教育哲学
ドイツ観念論
フィヒテ、シェリング、シュレーゲル
フランクフルト学派
ベンヤミン、アドルノ

Philosophy of Education
German idealism
Fichte, Schelling, Schlegel
Frankfurt School
Benjamin, Adorno

主要業績

(書評) Yasuhiro Kumamoto, Philosophische Paedagogik bei Kant und Fichte Erziehung im Dienst der Freiheit, 日本フィヒテ協会編『フィヒテ研究』第19号, 99-105頁, 2011年11月

(発表原稿)『根拠の不在と無限への追慕——人間形成論として見たフィヒテ、ノヴァーリス、シェリングの哲学』, 日本ヘーゲル学会第13回大会(平成23年6月19日 於:お茶の水女子大学)にて報告

(発表原稿)『「過去の克服」の尺度はなにか——1950年代西ドイツにおける「過去の克服」の典型としての後期ハイデガーの存在思想』, フォーラムドイツの教育(平成23年8月27日 於:明治大学)にて報告

研究内容 / Research Pursuits

2011年度は、ドイツ初期ロマン主義者の自我観と自我形成観を検討した。具体的には、まず、ノヴァーリスの『フィヒテ研究』を中心に、脱中心的な自我観について明らかにした。それに続いて、フリードリヒ・シュレーゲルの中期思想から、生成する世界についての彼の基本思想を検討した。

In 2011, I investigated the theory of formation of I in the texts written by German Early Romantists around 1800. Concretely speaking, at first, I considered about Novalis' excentric thought of I in his text Fichte-Studies. And next, I made clear the fundamental structure of Friedrich Schlegel's understanding of the world, which, according to him, building up by itself, in his middle works.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

2011年度は、学部段階の授業においては、フーコーの権力論、アドルノの非同一性の哲学、シェリングの道徳思想、ベンヤミンとハイデガーの時間観を、現代の教育問題と絡めながら概説した。大学院段階では、ヴァルター・ベンヤミンの初期思想、とりわけ言語論、文芸批評の方法論を中心に、彼のアレゴリー的解釈術を論じた。演習においては、レヴィナスの『全体性と無限』を取り上げた。

(For undergraduate course) I treated outline of Adorno's theory of dialectic of enlightenment, Schelling's ethic, and the understanding of Time of Heidegger and Benjamin, relating these theory to our educational problems. (For graduate course) I focussed on the allegorical hermeneutics of Walter Benjamin (especially, his thought of language and his way of literary criticism). In seminar, reading Emmanuel Levinas's Totality and Infinity, I explained his original ethic of Face.

■ 研究計画

■ メッセージ

教育思想研究というと、難しいとか現実から遊離していると一般には考えられています。たしかに教育思想の研究の場合には、二次文献を参照しながら、地道に昔のテキストを読み進めることが基本になります。けれども、そうした読解も、現代についての先鋭な問題意識がなければうまくいくものではありません。古典的なテキストを使いながら「今」を考えることが大切なのです。ですから、自分の狭い関心にだけ囚われるのではなく、視野を広く持つようにしてください。

氏名	猪崎 弥生
	IZAKI YAYOI
所属	人間文化創成科学研究科文化科学系
職名	教授
学位	文学修士／M.A.
専門分野	舞踊学・舞踊芸術学
URL	
E-mail	izaki.yayoi@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

舞踊	dance
動き	movement
身体	body
表現	expression
評価	evaluation

主要業績

猪崎弥生著『開かれた身体を求めて―舞踊学へのプレリュード―』一二三書房

猪崎弥生・永田麻里子・酒向治子, 大学生はダンスにおける「男らしさ」「女らしさ」をどのように捉えているか, スポーツとジェンダー研究, vol.10,印刷中

研究内容 / Research Pursuits

舞踊運動の持つダイナミックで有機的な表現性に着目し、その表現性の評価について研究を継続している。平成16年度から3年の交付期間での科研費を採択された研究「表現運動(舞踊)の指導力を向上させるために有効な指導言語と評価との関係について」において、舞踊運動の評価とは、現れ出てくる表現性を含めた舞踊運動そのものの特性をつかみとることと捉え、舞踊指導における評価と指導言語との関係を明らかにしようとした。そこでは、舞踊運動の評価が舞踊経験に基づく身体性(身体言語)に関与することが示唆された。平成19年度から2年の交付期間で科研費を採択された萌芽研究「身体表現から考えるジェンダー―舞踊動作に見られる女らしさと男らしさ―」においては、日本舞踊における舞踊動作の印象評価研究を通して、女性日本舞踊熟練者と女形(男性日本舞踊熟練者)における女らしさを比較検討した。平成22年度から4年の交付期間での科研基盤B「多様な身体を目指すジェンダーフリーなダンス教育法の開発と構築」に採択され、調査・実践研究を行っている。

I investigate Dance Study from the viewpoint of dynamic expressiveness through dance movement. The relationship between an effective guidance language and the evaluation in the dance class, is connected to the dance teacher's dance experience. I continue to study the aesthetic expression of feminine in traditional Japanese dance by aesthetic evaluation(Izaki,2006). The feminine in traditional Japanese dance is a very sophisticated, ordered, and highly disciplined mode of expression in the traditional style.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

学部教育:「舞踊芸術学」では舞踊の文化的概観、舞踊の領域、運動と表現、形式と内容、形式と構造という観点から「舞踊とは何か」を考える授業を展開している。「舞踊芸術学実験演習」では学生各自が舞踊学の論文のレジメを作成し、発表を行い、論文の内容に関して議論する。モダンダンステクニック初級では「身体を知る」ためにフロアエクササイズ、ステップを含む移動、フレーズを踊ることを行っている、舞踊創作法では作品を上演できるまでの創作のプロセスを理解し構成・演出を考えることをねらいとしている。大学院教育:「舞踊芸術学特論」では美学的見地からの理論、舞踊の作品分析を中心に講義した。

Undergraduate course: Dance and the Arts(dance history, dance education, form, and content) Modern Dance Technique(floor exercise, locomotion, and phrase) Dance Creation(improvisation, choreograph, and composition) Graduate course: Dance Theory(dance phenomenology, dance aesthetics, dance analysis, and Laban method) Dissertation

■ 研究計画

現在行っている研究とそれに関連する発展的研究は以下になる。・身体表現から考えるジェンダー舞踊動作にみられる女らしさと男らしさ・男女共修授業「身体を通したジェンダーフリーなダンス」の理論化と検証(科研基盤B)・もうひとつのダンスを探るーコミュニティダンスを基点とする舞踊実践研究ー・「キンダーブック」の付録「ツバメノオウチ」の遊戯(身体表現)における動きの特性

■ メッセージ

舞踊教育学コースを志望する受験生の皆さんは、誰よりも踊ることが大好きであると思います。踊るという身体を通した舞踊の経験から得られるさまざまな感覚、湧き起こる内なる感情の働きを十分に感じて下さい。舞踊の「こころ」と「からだ」がつながり合う有機的でダイナミックな全体性は、踊る体験を豊かな営みにすると思います。

氏名	石井 昌子 Ishii-Kuntz Masako
所属 職名	人間文化創成科学研究科人間科学系 教授
学位	社会学学士
専門分野	家族社会学、ジェンダー社会学、統計学、社会調査法、社会心理学、高齢社会学
URL	http://www.soc.ocha.ac.jp/Site/Teacher_Ishii.html
E-mail	ishii.kuntz.masako@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

父親と母親
家庭内役割分業
育児と子育て
情報社会の家族関係
ワーク・ライフ・バランス

Fatherhood and Motherhood
Division of Housework
Child Care and Child Rearing
Family Relations in Information Society
Work and Life Balance

主要業績

「米国の家族と社会学研究:変容、現状、多様性」家族社会学研究 23(2): 186-195

「社会政策と家族」セッションに参加して」Intimate and Private, 17: 5

「諸外国との比較から見る日本の父親の子育て事情」灯台(613) 32-34

「経済不況と少子高齢社会の中の家族戦略」家族社会学研究 4: 16-18

Father's Child Care in Information Society, National Council on Family Relations

研究内容 / Research Pursuits

社会学の視点から家庭内のジェンダーダイナミクスに焦点をあてて研究している。特に、家庭内性別役割分担、男性の育児・家事参加に関してその規定要因を量的データにより実証したり、質的データにより詳述してきた。またワーク・ライフ・バランスの実現に向けての政策提言につながる研究も続けている。2009年度はIT社会における育児の実態や親の育児満足度についての研究報告書を作成し、2010年度からは科研費の助成を受けてこの課題に関する大規模調査を実施する予定である。

From sociological perspectives, my research focuses on gendered dynamics within families. In particular, I examine gendered division of housework, fathers' participation in child care and household labor using quantitative data. I also study the contexts of paternal involvement using qualitative data. I continue to conduct policy-oriented research to promote work-life-balance in Japanese families. I have completed a report on my recent work examining how child rearing and parenting satisfaction are influenced by the use of IT technology. From 2010, with the funding of the Japan Science Foundation, I continue to pursue this research interest, and plan to collect large scale data sets in Japan and the U.S.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

社会学視点から家族関係や役割を理解することを目的で学部では「家族社会学総論」「家族社会学演習」、修士レベルでは「家族関係論」、博士レベルでは「家族論」を担当している。これらのクラスでは日米の家族社会学研究文献を読み、ディスカッションなどを行っている。

Viewing family relationships and roles from sociological perspectives, I teach "Family Sociology" and "Family Sociology Seminar" at undergraduate level, "Family Relations" at Master's level, and "Family Theory and Methods" at the Doctoral level. In these courses, students read family sociology literature in Japan and the U.S. for in-class discussions.

■ 研究計画

IT社会における育児期の親のネットワークと子育て満足度についての研究を平成19年～20年に行なった。インターネットや携帯メールを頻繁に活用する若い親たちがそれらの媒体を通じての育児サポートからどのような影響を受けているのか、またこのインフォーマルサポートが育児期の父親・母親の夫婦・親子関係にどのような影響を与えているのかを大規模データを収集して分析した。これらの分析結果は平成21年度に報告書としてまとめた。平成22年度からは再度科研費の助成を受けて、日米における育児期の親のIT利用と家族関係についての比較研究を行っている。

■ メッセージ

大学は「考えること」の多様性を学ぶ場だと思います。例えば家族に関しても様々な研究領域がありますが、多くの文献を読み、家族についての考え方の多様性を学んでほしいです。丸暗記の勉強法ではなく、学んだこと、読んだことなどを常にCriticalに分析する力を養うのが大学だと思います。自分の興味のある研究について積極的にアプローチしていくモチベーションの高い学部生、院生を歓迎します。

氏名	石口 彰 ISHIGUCHI Akira
所属 職名	人間文化創成科学研究科人間科学系 教授
学位	文学博士(1989 東京大学)
専門分野	認知科学、実験心理学
URL	http://www.hss.ocha.ac.jp/akira1
E-mail	ishiguchi.akira@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

認知
熟達化
ベイズ推論
学習
感性

Cognition
Expertise
Bayesian Inference
Learning
Kansei

主要業績

Tokita, M. & Ishiguchi, A. (2011) Temporal information affects the performance of numerosity discrimination: Behavioral evidence for a shared system for numerosity and temporal processing. *Psychonomic Bulletin & Review*, 18, Pp.550-556

Tokita, M. & Ishiguchi, A. (2012) Behavioral evidence for format-dependent process in approximate numerosity representation. *Psychonomic Bulletin & Review*, 19, Pp.285-293

石口 彰(2012) 認知行動とベイズ推論 (石口彰監修 認知心理学演習: 日常生活と認知行動 5章) オーム社

研究内容 / Research Pursuits

1. 視覚パターン認知の統計的特性の検討 視覚パターン認知の基本特性は、不適切逆問題の解決である。この解決にあたり、視覚系は、既知の知識構造から成る制約条件と様々なサンプリングデータを元に、一種のベイズ解を導いている。私の研究室では、この一連の過程における統計的特性を、実験を通して解明している。2. 異種感覚情報の統合問題 視覚、聴覚、体性感覚間の相互作用を通じて、連合機能の特性を検討する。3. リスク情報の処理メカニズム 身のまわりにあるリスク信号(リスクイベントに対する先行信号)の処理メカニズムに関して、実験的に検討する。基礎的な研究だけでなく、こどものリスク回避行動への応用研究へと発展させる。4. 数量判断の認知過程と熟達化 人間の持つ数量判断(絶対量、相対量)に関して、基礎的な脳内メカニズムばかりでなく、発達の側面、比較行動学的側面、比較文化的側面も含めて、実験的に検討する。さらに、知覚的バイアス等の影響を受けない熟達化の過程を解明する。

1. Statistical properties of visual pattern cognition Statistical properties of visual pattern cognition are solutions of the ill-posed problem in which the visual system recovers the 3D space from 2D retinal images. The visual system induces the Bayesian solutions with use of some restraints and sampling data. Our lab has clarified these solution processes on the base of experimental data. 2. Integration problem of many kinds of information from perceptual systems We have studied the cross modal perceptual systems. In particular, we have focused on the problem about the effects of the visual output on auditory or tactile perception. 3. Human cognitive processing of risk information. We investigate the properties of human risk processings of everyday issues from the viewpoints of cognitive experiments and modeling. 4. Cognitive process of mathematical judgment and expertise. We have investigated the cognitive representations in the brain about human mathematical judgment of relative and absolute volume and numbers. We also have studied this problem from viewpoints of human development, comparative behavior and cross culture. In our study, a term "expertise" is the key word.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

学部：1 認知心理学概論 人間の認知情報処理過程（パターン認知、学習・記憶、知識表現、推論と問題解決等）に関して、神経生理学、計算理論、行動科学的側面からの解説を通して、認知心理学の概要を理解する。学部：2 認知心理学演習（基礎） 人間の認知機能、特にパターン認知、推論機能について、日本語・英語テキストを批判的に講読し、認知心理学の基礎を習得する。学部：3 認知心理学演習（理論） 人間の視覚に関する理論的文献を講読し、内容について、プレゼン形式で発表する。さらに、視覚機能に関する簡単なデモンストレーションを参加者自ら工夫することで、理論と実際との関係を体験する。学部：4 認知心理学研究法 認知心理学の研究方法を修得し、自ら研究する能力を身につける。大学院：認知システム論 人間の認知機能や運動機能、その障害に関して、システム論の観点から、基礎を修得する。学生は、基本的な英文テキストの内容をコンピュータ・プレゼン形式で紹介する。毎回、小テストを実施する。

Under-Graduate Course Introduction to Cognitive Psychology: I survey fundamental properties of the human cognitive processes in pattern cognition, internal representation, learning, memory, reasoning and problem solving. Graduate Course: Cognitive Systems We survey and discuss the principles of the cognitive systems and Bayes inferences. Registered students are required to show the contents with computer presentation, and to clarify some problems related to the systems.

■ 研究計画

現在、システムの異常や制御不能イベントの認知に関するプロジェクトを立ち上げている。今後このプロジェクトを発展させ、リスク情報処理心理学の構築を目指している。

■ メッセージ

認知心理学研究室では、人間の認知に関する幅広い領域を扱っているため、学生の関心領域に沿った教育・研究指導が可能である。

氏名	石田 千晃
所属	ISHIDA Chiaki
職名	教育開発センター
学位	特任リサーチフェロー
専門分野	
URL	
E-mail	ishida.chiaki@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

学びの資源とネットワーク
ICTとオルタナティブな学び

Resources and networks of learning
ICT and alternative learning activity

主要業績

研究内容 / Research Pursuits

教育社会学、社会情報学、教育工学。ICTと人間形成、社会空間生成の関わり。ICT(Information Communication Technology)技術の進展と普及の中で、人間が、何を生きるための情報資源としていけばよいのか、特に今現在、困難な状況におかれていたり、その困難に立ち向かっていたりする人々にとって、いかなる情報資源と情報ネットワークが困難な事態の改善に効くのかという問題意識の下、研究活動を行っている。近代に中立・正統なものとしての地位を確立させ、中心と周縁を作り出してきた<知>の体系では解決しにくい現代的諸問題に対して、人々が、他者との関係を築き上げながら課題に向き合い、状況を改善していく活動とそのオンラインネットワークに着目している。

■ 教育内容 / Educational Pursuits

2011年度より、キャリア支援科目「情報コミュニケーション技術と創発性」を担当している。本授業の目的は、現代社会における様々な課題に対して、具体的な解決策を模索し、表現していくことにある。メインの活動は、様々な課題に対する企画書作りである。企画書作りの過程で、①ICTを利用した情報収集と共有の方法、②ディスカッションによる動的な情報の生成(創発性)について学んでいく。様々な活動を通じてオフラインとオンラインの知の活動が有機的に繋がるような技法を体得してもらうことを目標としている。

■ 研究計画

■ メッセージ

氏名	市古 夏生 ICHIKO Natsuo
所属 職名	教授
学位	博士(文学)(早稲田大学 1998)
専門分野	日本近世文学 出版文化学 書誌学
URL	
E-mail	ichiko.natsuo@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

日本近世文学
仮名草子
浮世草子
出版文化
原稿料

主要業績

研究内容 / Research Pursuits

日本近世文学の中で17世紀を中心に研究を行っているが、ここ2,3年江戸時代初期の小説・随筆類の中で、写本で流通している書物を精査し、版本との相違や独自性、特色などを考察しつつある。また近世文学は出版文化の開花した時代であり、文学環境の1つとして出版に関する究明が必要である。元禄時代に刊行されている「書籍目録」の諸本調査と収載書籍の基準などについて研究を進めており、『増益書籍目録大全』諸本調査に関して完成させた。また17世紀の出版文化を研究する上での基礎資料となる出版年表の作成に参加した。出版文化が開花してから起る現象として、作者・著者の権利、すなわち著作権の問題がある。著者への報酬(原稿料・印税)がどのように推移し、どの程度の収入があるのか、文学者の経済的な基盤が確立する時期などに関する究明を行うため、科研費でプロジェクトを組んでいたが、その研究成果の一端を2010年度に公表した。

■ 教育内容 / Educational Pursuits

文教育学部では、「日本古典文学史論」で近世小説の展開を作品を紹介しつつ、講義をしている。「日本古典文学論演習」では、語句や背景となる風俗を調査させて、近世小説の読み方を習得させた。22年度は前期に西鶴の浮世草子『本朝桜陰比事』、後期に上田秋成の浮世草子『諸道聴耳世間猿』を対象とした。大学院では「日本近世出版文化演習」では版本書誌学を講義し「日本近世文学演習」では仮名草子の『名女情比』に関して、古典文学に登場する女性を受講生に割り当て、他の作品を参照しつつ、その特色を考察した。

■ 研究計画

18年度より3年間科学研究費補助金で「出版機構の進化と原稿料についての総合的研究」を6名の研究者とともに推進しており、近世から現代に至る作家の経済的自立に関する推移をまとめたが、さらに報酬と著作権のデータの採集を有志で継続し、書物にして広く研究者が利用できるようにする。

近世前期の出版物の目録である「書籍目録」の諸本調査と、出版者別に出版書をリストにし、文学関係出版者の特色、文学書の位置づけなどを考察する。

それに合わせて共同研究として行われてきた近世前期の出版書年表の作成を試みる。写本と版本の混在する仮名草子に関して、メディアの視点から分析を進める。

仮名草子から浮世草子にかけて、女性に対する表現を分析する。

■ メッセージ

現代から一番近い時代の古典文学、これが近世文学です。文体、語句なども近代以降に繋がるものなので、読み慣れると理解することが容易であると思います。井原西鶴、曲亭馬琴などの書いた小説、松尾芭蕉の俳諧・奥の細道などはよく知られていますが、それ以外にも面白い怪異小説、遊里文学、滑稽小説などがたくさん残されています。また文学作品を出版し始めたのが江戸時代です。出版されるようになって作品はどのように変質したのか、出版に関わる規制の実態、作者と出版者との関係など興味は尽きません。近世文学の世界をぜひとも知っていただきたいと思います。

氏名	伊藤 亜矢子
	ITO Ayako
所属	人間文化創成科学研究科人間科学系
職名	准教授
学位	博士(教育学)
専門分野	学校臨床心理学、コミュニティ心理学
URL	http://www.develop.ocha.ac.jp/itao.html
E-mail	ito.ayako@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

コミュニティ・アプローチ
学級風土
スクールカウンセリング
実践研究
コンサルテーション

Community Approach
Classroom Climate
School Counseling
Collaborative Action Research
Consultation

主要業績

Ito,A.(印刷中)Enhancing school connectedness in Japan: The role of home room teachers in establishing a positive classroom climate. Asian Journal of Counselling,18

Smith, D. C.,Ito, A., Gruenewald, J., Yeh,H.(2010)Promoting School Engagement: Attitudes Toward School Among American and Japanese Youth. Journal of School Violence,9(4), 392-406.

伊藤亜矢子 編著 (2011)エピソードでつかむ児童心理学 ミネルヴァ書房

伊藤亜矢子(2010)第6章 学校環境のアセスメント 松本真理子・金子一史編著 子どもの臨床心理アセスメント:子ども・家族・学校支援のために 金剛出版, 126-131.

伊藤亜矢子(2010)全校型支援を行うスクールカウンセリングの理論的検討②ースクールカウンセラーの役割を中心にー, 日本心理臨床学会第27回大会発表論文集

研究内容 / Research Pursuits

国際比較に基づくスクールカウンセラーによる教師支援方法の開発。ASCA(米国スクールカウンセラー協会)のCarol Dahir氏を7月に招聘し、現職スクールカウンセラーのFocusグループを毎月行うなどして、コミュニティ・アプローチを行うスクールカウンセリングについて新しいテキストの執筆を進めた。また、南オレゴン大学のDouglas Smith氏を、平成22年度に学術振興会短期招聘で2ヶ月間受け入れたことから、23年度も12月のお茶の水女子大学での来日講義や3月の来日などの際に、研究交流を行い、いじめ等について共同研究を継続した。学級風土質問紙(Classroom Climate Inventory)の開発とそれを応用した学校支援。(1)教師個人レベルでは、CCI結果を媒体とした教師コンサルテーション、(2)学級レベルでは、CCI活用シートを利用した学級と個人の双方に焦点をあてたコンサルテーション、学級ニーズをふまえたスクールカウンセラーと教師の協働による心理教育、(3)学区・学校レベルでは、CCIを用いた教師教育、等の実践研究を行っている。特に2011年には、コンサルテーションと共に、小学校版および中学校版学級風土質問紙の解析ソフトの開発・改良を完成させた。スクールカウンセラーの学校全体への支援を促進するパッケージツールの作成。2011年度には、学級風土アセスメントを基にした、オーダーメイドの心理教育プログラム開発と実践を継続し、改訂作成した小冊子の出版と、それを用いた教員研修を試みた。

Development of teacher and student mentalhealth support programs from international comparison.In 2010-2011, the project of translation and adaption of new school counseling text book was continued with Dr.Carol Dahir from New York Institute of Technology and American School Counseling Association which was supported by Fulbright Specialist Program.Development and application of Classroom Climate Inventory (CCI)for whole school approach by school counselors. 1) At individual (teacher) level; consultation with CCI for homeroom teacher. 2) At classroom level; consultation with sheet type CCI results and psycho-education with school counselor to intervene in a student's and whole class problem. 3)At school and district level; teacher in-service training with CCI.A packaged tool is developing for school counselors' whole school approach. From 2008, we develop a psycho-social education program for junior high school students which could be customized based on classroom climate assessment. In 2011, the brochure for teachers which describe the whole school approach was published and inservice teacher training session using it was done.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

伊藤研究室では、子ども・学校・地域・コミュニティをキーワードに、各人のテーマに応じて、実践研究を行っています。臨床心理学・コミュニティ心理学・教育心理学・学校心理学の知見を元に、学校内外での、子ども支援を促進する方法の開発やシステムづくりをめざした実践研究です。例えば、小学校・中学校・高等学校で、一教室あるいは、TT枠などを提供してもらい、相談室を創設し相談システムづくりを実践的に検討するなどを、大学院生と学部学生が協力して行っています。

大学院生の多くは、心理臨床センターに所属し、相談事例について、伊藤のスーパーバイズを受けます。伊藤が母親面接、大学院生が子ども面接を担当する場合も多くなっています。そのほか、大学院生は興味に応じて外部実習に行っています。

In our laboratory, students do the action researches cooperated with each other focusing on their own topics in schools & communities. Their key words are prevention, mental health, children, youth, school, community. Research methods are based on community psychology, clinical psychology, school psychology & educational psychology. Many of graduate students also belong to the clinical psychology center in our university, do some clinical practices (counseling with children, parent, teacher) with supervisions by Dr.Ito.

■ 研究計画

現在行っている実践研究を継続し、学校内外の子ども支援システムづくりについて、実践的な知見を提供する。特に、スクールカウンセラーによる日本型の全校支援方法や、教師による子ども支援や学級づくりの方法を臨床心理学の知見から探求する。06年度には学級風土質問紙(CCI)のマークシート化ができ、09-10年度には、小学校版の公開と小学校版を含む質問紙の分析システムの改良整備を行った。また、全校支援に関する教員向けパンフレットの作成や、カウンセラー向けテキストの執筆(継続中)を行うと共に、米国・スコットランド・香港・台湾などの全校支援について検討を行ってきた。今後も、学校全体の支援に向けたパッケージツールの作成(H20～22年科学研究費基盤(C)20530623)から引き続いて、国際比較に基づく、日本型スクールカウンセラーの全校支援モデルの構築とツールの作成整備(H23～25年科学研究費基盤(C)23530891)が課題である。

■ メッセージ

自分なりのテーマ関心を持ち、実践の場で創造的な実践研究ができる人材を求めています。それぞれが自分の意見・センスを生かしながら、お互いに協働することで、学校という場や地域で、その場所の専門家である現職教員の先生方等と協働し、子ども支援を展開することは、やりがいのある実践研究活動です。スクールカウンセラーに重要なのはwork with すなわち他業種も含めた協働。それに環境要因や発達の要因も含めた適切な問題理解の力ではないでしょうか。助け合い切磋琢磨しながら、創造的な臨床心理士・実践的研究者として成長していける研究室をめざしています。

氏名	伊藤 さとみ
	ITO Satomi
所属	人間文化創成科学研究科文化科学系
職名	准教授
学位	博士(人間・環境学)
専門分野	中国語学／Chinese Linguistics
URL	
E-mail	ito.satomi@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

言語学
中国語学
形式意味論
選言
副詞

Linguistics
Chinese Linguistics
Formal Semantics
Disjunction
Adverbs

主要業績

“被字句的状語指向”、中国天津の南開大学で開催されたInternational Association of Chinese Linguistics 19にて発表。

「受動文における副詞の指向性」京都大学人間・環境学研究科 東郷研究室ホームカミングデーにて発表。

「心理副詞の修飾構造」、景山太郎、沈力編『日中理論言語学の新展望』pp59-83。

研究内容 / Research Pursuits

一つの自然言語は、すべての言語に共通する部分と、個別言語によって決定される部分とからなっている。共通する部分は統語構造を作る規則であり、意味を生成するための方法である。一方、実際の構文の構造や個々の語彙の意味は、言語によって異なっている。本研究では、言語の普遍性と個別性を明らかにしようとしている。2010年度には次の項目について研究を行った。・中国語における描写性副詞の修飾構造についての考察:この研究の中で、中国語では、受け身文において修飾対象の違いによって副詞の位置を変えることが明らかにされ、英語などのほかの言語では、表層上見えにくかった、受け身を表す形態素と副詞の位置関係について可視的な根拠になることを示した。・選言と連言の作用域の研究:中国語の選言接続詞には二種類あり、一つは疑問文を、もう一つは陳述文を結び付ける。それぞれの意味論を明らかに、譲歩文において両者が交換可能である理由について説明した。

■ 教育内容 / Educational Pursuits

授業としては、中国語学概論、中国語文法論、日中対照言語学、中国語文法演習を通して、中国語を形式言語学の枠組みおよび生成文法の立場で分析する方法について講義した。また、中国文化論および中国語購読の授業では、中国語語法についての著作を読み、分析の仕方について解説した。大学院では、中国言語表現論演習および現代中国語学演習をととして、言語学の基本を教えた。

■ 研究計画

2012年度には、以下の研究を行う。・受動文における副詞の修飾のあり方の研究から得られた知見をもとに、受動形態素“被”の意味を明らかにする。・選言表現と連言表現が交替しても、意味に変化をもたらさない場合があることに着目し、その場合の言語環境の特定と、交替を可能にする要素について明らかにする。

■ メッセージ

言語は、人間が作り出したものである点では、文化の一部です。しかし、意図的／目的的に作り出したものではない点で、人間の脳や体と同じように自然の一部です。文化と自然の融合体なので、どのような観点からも分析でき、また、いろいろな観点からの分析が必要な分野です。一つの事柄に対して、多様な観点を楽しみたいという方、また、一面的でなく多面的な思考を鍛えたいという方、どうぞ言語学を勉強してください。

氏名	伊藤 貴之 ITO Takayuki
所属	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系
職名	教授
学位	博士(工学)
専門分野	コンピュータ・グラフィックス ビジュアライゼーション
URL	http://www.is.ocha.ac.jp/~itot/ http://ito.is.ocha.ac.jp/
E-mail	itot@is.ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

可視化
マルチメディア
シミュレーション

Visualization
Multimedia
Simulation

主要業績

F. Yamashita, C. Feng, S. Yoshida, T. Itoh, M. Hashida, Automated Information Extraction and Structure-Activity Relationship Analysis of Cytochrome P450 Substrates, Journal of Chemical Information and Modeling, Vol. 51, No. 2, pp. 378-385, 2011.

A. Gomi, T. Itoh, MINI - A 3D Mobile Image Browser With Multidimensional Datasets, ACM Symposium on Applied Computing, Multimedia Visualization Track, 2012.

研究内容 / Research Pursuits

身の回りの情報をコンピュータ上で可視化する「情報可視化」という研究に最も力を注いでいます。2009年度は金融関係のITソフトウェア企業からの委託研究で、クレジットカードの不正利用履歴の可視化に取り組みました。また製薬企業からの委託研究で、蛋白質の表面形状と薬物反応可能性の関係に関する研究に取り組みました。また化粧品企業との共同研究で、肌の微細特徴のコンピュータ画面上での再現に関する研究に取り組みました。また、音楽や画像に関する各種の研究を進めています。具体的には、大量画像の一覧表示、音楽情報の可視化などに関する研究を進めています。

■ 教育内容 / Educational Pursuits

講義ではマルチメディア、画像処理、コンピュータグラフィックスなどの科目を担当しています。単に講義をするだけでなく、コンピュータ上でのプログラミングの自由課題を与えることを主な方針としています。具体的には、ホームページ制作、デジカメ撮影画像の加工、3次元コンピュータグラフィックス制作、などの自由作品を提出させることで、単に「与えられた問題を解く」だけでなく、自由な発想で技術を使いこなせる学生の育成を目指しています。研究室では合計19人の学生を指導しました。特に学会発表指導に力を注いでおり、2011年度は学生が筆頭の発表で学外表彰を5件いただきました。

■ 研究計画

コンピュータに蓄積された各種の情報を画面に一覧非表示する「情報可視化」という研究分野にて、既に多くの共同研究を実現しています。具体的には、原子力研究所、製薬会社、金融系IT企業、ネットワークセキュリティ関係団体、などが所有する大規模なデータを表示する目的での共同研究を実現しています。今後も引き続き、さまざまな業界に蓄積される大量の情報を理解するための手段として、「情報可視化」の研究に取り組み、多くの共同研究を実現したいと願っています。

■ メッセージ

皆さんの生活をよりよくするために、情報を目に見える形で伝える「可視化」という技術を研究しています。また、皆さんの日常生活に欠かせない画像や音楽を、もっと使いやすく、もっと面白く、またもっと世の中の役に立つように、といった観点から新しい技術を研究しています。受験生の皆様と一緒に勉強ができる日を楽しみにしています。

氏名	伊藤 美重子
	ITO Mieko
所属	人間文化創成科学研究科文化科学系
職名	教授
学位	博士(人文科学)
専門分野	中国古典文学・中国古典語学
URL	
E-mail	ito.mieko@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

中国文学
敦煌
写本
語り物

Chinese Literature
Dun-huang
Manuscript
Narrative

主要業績

「敦煌の学郎題記にみる学校と学生」(『唐代史研究』第14号、2011年8月)

研究内容 / Research Pursuits

前年度に引き続き、敦煌写本を資料として、唐末五代の敦煌の生活文化の研究を継続している。本年度では、主に「学校」をキーワードにした研究を行った。また、敦煌文献中に残る「変文」という通俗文学の形式について、「伍子胥変文」を資料として、その形式・内容・特質に関する調査に着手し現在、継続中であり、これらの通俗文学と「学校」の関連について考察することを課題としている。

■ 教育内容 / Educational Pursuits

学部においては、コア科目「基礎中国語」の「文法」および「応用」を担当。専門科目では、「中国古典文学史(先秦～唐代)」の講義を行い、中国古典文学のおおまかな流れを概観した。「中国古典語学講義演習」「中国語学文献講読」を担当し、漢字および漢字字書に関する基礎知識の習得を図り、その知識をもとに、段玉裁『説文解字注』の講読演習を行った。大学院の授業では、敦煌文学作品の講読をおこなった。このほか、卒業論文、修士論文、博士論文の指導をおこなった。

■ 研究計画

現在、課題としている学校と通俗文学の関連に関しての考察を継続する。敦煌文献中の通俗文学作品は、寺院の学校の「学士郎」「学郎」などと称される人々によって書写されていることが多く、この現象をどのように考えるかということが一つの課題となり、学郎の文化活動における役割についての考察を進めたい。唐代における通俗文学の資料としては、敦煌文献がその重要な位置をしめて、敦煌の通俗文学作品についての考察は、唐代の通俗文学を考える手がかりとなるものである。

■ メッセージ

中国は文字の国である。甲骨文から現在、中国で用いられている簡体字にいたるまで、脈々と文字文化を伝えてきた国である。漢字文化は中国のみならず、周辺各国にも影響を与え、日本もその例にもれない。漢字や漢字によって書かれた文章を読むことは、同じ漢字文化圏に属するものとしてみずからを発見するよい機会となる。中国文化を学ぶことで、いろいろな発見をしてほしい

氏名	井原 成男
	IHARA Nario
所属	人間文化創成科学研究科人間科学系
職名	教授
学位	文学修士
専門分野	発達臨床心理学
URL	http://www.develop.ocha.ac.jp/ihara.html
E-mail	ihara.nario@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

臨床心理学
発達心理学
移行対象
アタッチメント
摂食障害

clinical psychology
developmental psychology
transitional object
attachment
eating disorder

主要業績

知能検査 WISC 臨床精神医学, 39, 433-440, 2010

子どもにとって大切な働きをすることやもの 古橋知子編章に看護ベストプラクティス 小児のプリパレーション 中山書店 27-34, 2012

色に関する感情心理学的研究 色から見たライフサイエンス研究報告書(特別研究 女性が進出できる新しい研究分野の開拓)、お茶の水女子大学、79-84, 2010

研究内容 / Research Pursuits

発達臨床心理学コースの中で、特に病院臨床(小児科心理臨床)的な研究をしている。医師でないものが患者に関わるメリットを生かすために、臨床心理学を、発達心理学的に基礎付け、将来的には一部で行われているような、発達心理学の独自性に不明なまやかしものでない、真の発達臨床心理学の専門分野を確立することを目指している。具体的には摂食障害の、長いものでは10年以上に及ぶ治療的関わりや、フォローアップをもとにして、発達心理学をどのように理解、治療していったらよいかに関して、一部にみられる症例に基づかない空理空論に走らぬ研究を心がけている。またその研究件成果を臨床現場や、本コースで学ぶ臨床心理士志望の陰性にどのように還元するかという実践的な研究を行っている。さらに、子どもの母子関係という観点から、愛着に関する現代的なトピックについて、アタッチメントからの離脱という観点も含めた、移行対象の研究に取り組んでいる。

■ 教育内容 / Educational Pursuits

■ 研究計画

■ メッセージ

学部生 単に学問的開発を目指すのみでなく、自らの周りで起こっていることを、単に心理学的な興味のみでなく、社会的・政治的視点をも含めて、総合的に見ていける、しなやかで自由な視点を持っている人を求めます。つまり視点の広い人と言うことです。こうしたことを求めるのは、視点の狭さのために主観的でカルト的な心理療法家になってしまう人がいるからです。大学院生 対象化した病理(つまり他者の病理)をみるのみでなく、オノレ自身を振り返る能力と、そうした人格形成をいとわない人を求めます(これをフロイトは投影の引き戻しといいます)。自分ではなく他人の向き合いを求める虐待、共有という名の強要、支援という名の(ソフトな)支配ではなく、真に自分自身と対峙することのできる、しなやかでgenuineな感性の持ち主を求めます。

氏名	岩壁 茂 IWAKABE Shigeru
所属 職名	人間文化創成科学研究科人間科学系 准教授
学位	Ph. D
専門分野	臨床心理学(特に心理療法研究)
URL	http://www.develop.ocha.ac.jp/iwakabe.html
E-mail	iwakabe@cc.ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords



主要業績

平木典子・岩壁茂・福島哲夫(共編著). 新世紀うつ病治療・支援論 ― うつに対する統合アプローチ. 金剛出版.

岩壁茂. (監訳) (2011) ダイニングテーブルのミイラ セラピストが語る奇妙な臨床事例 ― セラピストはクライアントから何を学ぶのか. ジェフリー・コトラー ジョン・カールソン (編著). 門脇陽子・森田由美(訳). 福村出版.

Greenberg, L. S., & Iwakabe, S. (2011). Emotion-focused therapy and shame. In R. L. Dearing & J. P. Tangney (Eds.), Shame in the therapeutic hour (pp.69-90). Washington, DC: American Psychological Association.

Iwakabe, S. (2011). Commentary: Extending systematic case study method: Generating and testing hypotheses about therapeutic factors through comparisons of successful and unsuccessful cases. Pragmatic Case Studies in Psychotherapy, 7, 339-350.

岩壁茂(2011). 情動と言葉 ― 感情焦点化療法の立場から. 現代のエスプリ, 530, 93-106.

研究内容 / Research Pursuits

■ 教育内容 / Educational Pursuits

学部での授業は、5科目を担当した。「カウンセリング論」では理論的な知識が実際の臨床場面においてどのように使われているのかということを受講生がよりはっきりとつかめるように、カウンセリングのビデオ視聴を取り入れた。大学院では、「臨床心理学特論(実践)」「臨床心理学基礎実習(前期)」「発達臨床心理学研究法」を担当した。継続的なロールプレイとビデオを使ったグループスーパービジョンを取り入れることによって介入プロセスに関する細かな指導を行うように心がけた。

I taught 5 undergraduate courses and 3 graduate courses in this school year. In undergraduate course of "Theories and practice of counseling and psychotherapy," I have used videotaped counselling sessions to illustrate how clinical concepts are used and applied in actual clinical situations. In the counseling practicum, the interpersonal process recall was incorporated in in-and out-of class exercises in order to enhance affective sensitivity of the students.

■ 研究計画

感情調整への介入モデルの具体化とそれに基づいた臨床訓練を進めること。肯定に関する研究成果を応用した面接プロセスの分析。

■ メッセージ

私の研究は、人が変わるプロセスについてです。特に興味をもっているのは、心理療法・カウンセリングにおいてクライアントがどのように変わっていくのか、そのプロセスを理解することです。カウンセリングを録音してその内容を細かく分析していきます。特に様々な感情を表し、体験し、受け入れるプロセスを中心に扱っています。また人が自分の変容をどのように体験するのかということも研究しています。成功体験だけでなく、様々な挫折の体験からどのように人は変わっていくのかということだけでなく、その変化をどのように感じているのかということに関心があります。人の体験へと近づくために、その人から話をじっくり聴くインタビュー法と質的研究法に関心をもっています。

氏名	内田 正子 UCHIDA Masako
所属 職名	人間文化創成科学研究科文化科学系 教授
学位	英文学修士(1973 東京大学)
専門分野	英文学、特に小説を中心とする散文研究と18－19世紀イギリス研究
URL	
E-mail	uchida.masako@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

イギリス文学
19世紀
小説

English Literature
the Nineteenth Century
the Novel

主要業績

研究内容 / Research Pursuits

カーライルの『フランス革命』は、革命の全貌をとらえようとした力作であり、19世紀を語るために不可欠な書物であるが、大部で難解なため、これまで取り上げることができなかった。今年は、学生の積極的な参加により、その主要部を読破し、概略をつかむことができた。カーライルはフランス革命の中に、19世紀のイギリスと同じ、階級対立から来る暴力的な政治運動を見ているのだが、中心的人物への限定的関心、社会的無意識の感覚的な把握、制度的側面の軽視などから、革命を体感した印象は与えるものの、その構造的な理解にはいたっていない。

Carlyle's French Revolution, though an essential reading for a student of Victorian Literature, is a voluminous tour de force with idiosyncratic style, forbidding any easy approaches. This year, thanks to student participation and cooperation, I could for the first time read through most of its pages. In the Revolution, Carlyle saw violent social movement arising from class struggle, that is very similar to the condition of the 19th-century Britain. But his method---exclusive interest in central personages, sensuous grasp of the social Unconscious and neglect of its institutional aspects---was inadequate for a structural understanding of the Revolution.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

博士課程前期の演習では、Thomas Carlyle, The French Revolutionの主要部分を選択して講読した。竹村教授の病気があり、4年の特別演習に加えて、3年の特別演習(英文学研究方法論)ⅠⅡを追加で担当した。LA演習では、Deborah Tannen, You're Wearing That?を用いて母娘の関係にかかわる言語の働きを考察。英米文学演習初級では、Bram Stoker, Draculaを講読、英語圏テキスト講読では、人間心理やジェンダーにかかわる文献を読み、学生には好評だった。そのほかコア英語2科目を担当。

In the Master's Seminar, read Carlyle's French Revolution, finding the book not so inaccessible as generally thought. Undertook the Junior's Special Seminar for Prof. Takemura who was absent due to a serious illness. Using Shelley's Last Man as a text, this seminar grounded the students in feminist and deconstructive way of thinking. The LA seminar and 2 English Literature Seminars are also rewarding. And 2 classes of Core English as usual.

■ 研究計画

■ メッセージ

氏名	梅原 利宏
	UMEHARA Toshihiro
所属	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系
職名	助教
学位	博士(理学)(1992 東海大学)
専門分野	物性実験(特に生体および生体高分子のまわりの水に関して)
URL	http://www.sci.ocha.ac.jp/
E-mail	umehara.toshihiro@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

誘電緩和
NMR
分子運動
水の構造
生体高分子

Dielectric Relaxation
NMR
Molecular Dynamics
Water Structure
Biopolymer

主要業績

研究内容 / Research Pursuits

生体を構成する生体組織や生体高分子は、生体内では水和した状態で存在することから、その構造や機能の発現において、生体高分子のまわりの水和水の役割は、非常に重要であると考えられる。この水和水の構造や役割を解明するため、ほかの二糖類に比べて乾燥・凍結耐性の向上作用の高いトレハロースに注目し、誘電緩和(TDR), NMRを用いた測定を行っている。これらの糖水溶液の実験では、トレハロースとその他の二糖類では、・トレハロース水溶液の誘電緩和強度が、他の糖に比べて大きい・トレハロースのOHプロトンの交換速度が他の糖にくらべて遅いことなどが示されている。現在、トレハロースを含む糖類の水和特性を明らかにするため、誘電測定システムおよび解析システムの開発を行っている。また、これまでに得られた糖水溶液の研究結果の投稿準備を行っている。

■ 教育内容 / Educational Pursuits

@物理学実験 担当テーマ:「プランク定数」「誘電体」@一般物理学実験 担当テーマ:「オシロスコープ」「回折格子と水の屈折率」@基礎物理学実験 担当テーマ:「剛体球の力学」「ボルダの振り子」「減衰振動」「回折格子と水の屈折率」「熱電対」

■ 研究計画

生体において水和水は非常に重要で、その役割としては、生体高分子の三次元構造を決定する要因の一つであり、それにとまなう生体高分子の機能の発現、凍結・乾燥などの外的な刺激からの保護などがあげられる。生体高分子の機能の発現メカニズムを知るためには、生体高分子レベルでの三次元構造、それらの複合体の分子認識など、水和水と生体高分子や組織との相互作用を考えていくことが、生命現象を考える上で重要であると考えられる。また、水は状態(氷、溶液、単分子)によりその振る舞いを大きく変えるが、現在までのところ、そのすべてが明らかになっているわけではない。水の水和特性を調べることは、食品や組織などを長期間、安定して保存することを考えたとき、非常に重要であり、これらのことをふまえ、現在までのところ、共同研究として、・イースト菌の水和に対するトレハロースの影響 (水和水に対するトレハロース濃度、乾燥、凍結 の影響) ・NMRによる糖水溶液の測定 を、行っている。

■ メッセージ

氏名	太田 裕治 OHTA Yuji
所属 職名	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系 教授
学位	博士(工学)(1992年, 東京大学工学系研究科)
専門分野	人間工学, 医用工学, 福祉工学/Biomedical engineering
URL	http://www.eng.ocha.ac.jp/biomedeng/index.html
E-mail	ohta.yuji@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

無侵襲生体計測
生体磁気刺激
立位・歩行バランス計測
リハビリテーション工学
ヘルスケア技術

脳機能計測
手術用RFID
組織工学

主要業績

Horiuchi T, Masamune K, Iwase Y, Ymashita H, Tsukihara H, Motomura N, Ohta Y, Dohi T. Endoscope system with plasma flushing and coaxial round jet nozzle for off-pump cardiac surgery. Surg Endosc. 2011 Jul;25(7):2296-301.

Saito M, Nakajima K, Takano C, Ohta Y, Sugimoto C, Ezoe R, Sasaki K, Hosaka H, Ifukube T, Ino S, Yamashita K. An in-shoe device to measure plantar pressure during daily human activity. Med Eng Phys. 2011 Jun;33(5):638-45.

手術器械の個体管理に利用可能なセラミック型RFIDの基礎的検証 山下和彦, 楠田佳緒, 岩上優美, 田中慎一, 倉岡圭子, 本田宏, 小美野勝, 島田茂伸, 大林俊彦, 齋藤祐平, 太田裕治, 伊福部達, 大久保憲. ライフサポート, 23(4), 145-151, 2011.

研究内容 / Research Pursuits

高齢社会に入ったわが国においては, 医療経済の観点から, また, Quality of Lifeの向上をはかりつつ, ユーザに優しい低侵襲機器システムやデバイスが求められる。本年度はおもに以下の研究を実施した。(1)高齢者支援の為の工学技術 高齢者が健康で自立した家庭生活を営むことができるよう, 社会参加・自立生活のための支援機器開発を行っている。動画像を利用した遠隔健康管理システム, 転倒予防のための足圧計測デバイス開発などを行っている。とくに平成23年度は実験住宅(Ocha house)において, 歩行モニタリングの検討を行った。(2)非接触電気刺激としての生体磁気刺激 コイル(変動磁界)により生じる誘導電流を利用した生体電気刺激に関して研究を行った。本法により神経を有効に刺激するためには, 変動磁界による渦電流の生体内での分布を十分考慮する必要があり, 生理食塩水中の誘導電流の分布を実測した。

Current research themes are listed below. (1)It is well recognized that muscle stretching and repetitive passive joint movement is effective for the reduction of the spasticity and joint contracture which is commonly appears following stroke and spinal cord injury. We developed a device which enable not only to make a passive ankle joint motion but also to quantitatively measure the ankle joint torque and stretch reflex responses. (2)We developed a novel device, integrated into a shoe, to monitor plantar pressure under real life conditions by reducing the spatial and temporal resolution. The device consists of a shoe insole with seven pressure-sensitive conductive rubber sensors and a wireless data transmission unit incorporated into a smaller measurement unit. (3)Heart rate measurement based on a time-lapse image. Using the time-lapse image acquired from a CCD camera, we have developed a non-contact and non-invasive device which could measure both the respiratory and pulse rate simultaneously. (4)We proposed a new non-invasive gait monitoring technique as a healthcare application and installed it in the experimental house (Ocha house). Several accelerometers were fixed on the floor of the house, and the floor vibration was measured when the subject walked along the accelerometers.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

数学物理学演習1,2,3,4,物理化学英語 I, 人体解剖学, 人間工学, 環境物理学(お茶の水女子大学) 電子工学(池見東京医療専門学校) 医用精密工学(中央大学理工学部精密機械工学科) 生体力学論(千葉大学工学部) 医用電子工学1(東京理科大学) 福祉工学(放送大学)

Exercise in math and physics 1-4, Physical chemistry, Human anatomy, Biomedical engineering, Environmental physics (Ochanomizu University) Electrical Engineering (Ikemi Gakuen) Medical Engineering (Chuo University) An Introduction to Biomechanics (Chiba University) Medical Electronics 1 (Tokyo University of Science) Assistive technology (The open university of Japan)

■ 研究計画

少子高齢社会を支援する工学技術の研究開発が強く求められている。科学技術の社会還元の見点からも、今後も積極的に下記技術開発を進める。(1) 高齢者支援のための工学技術として、歩行中の足圧計測デバイスの開発を行うとともに、転倒リスク解析に関する実践的研究を進める。歩行計測以外にも、静止立位状態でのバランス評価も実施する。(2) 下肢の運動機能の向上を目指した在宅リハビリテーションデバイス(受動運動装置)の開発を行う。(3) 実験住宅において、加速度センサネットワークを利用した歩行モニタリングを実現するとともに、ヘルスケアアプリケーションの開発に関する検討を行う。(4) 低侵襲電気刺激方法である生体磁気刺激に関して、具体的なデバイス開発を目標に研究を進める。

■ メッセージ

当研究室の専門分野は、人間工学・福祉工学(Biomedical Engineering)という新しい工学分野であり、具体的には、医療や福祉の現場で役に立つ機器やシステムの開発を行っています。日本は高齢社会のピークを迎えつつありますが、Quality of Lifeの向上をはかりつつ、人に優しい(低侵襲な)機器システムが求められています。そのような機器を開発するには、医学・生物学と工学(物理化学)の基本的知識が必須となるだけではなく、試作したシステムを現場・臨床に持ち込んで、医師、患者、ユーザ、パラメディカルスタッフらと評価する必要があります。高齢社会、医療技術の高度化に伴って、さまざまな大学で医療や福祉分野の研究を手がける研究室が増えつつあります。当研究室は医療・福祉分野への工学的な応用研究を専門とする数少ない研究室です。若い皆さんの頭脳や感性をこの分野に是非生かしてください。

氏名	大瀧 雅寛 OTAKI Masahiro
所属 職名	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系 教授
学位	工学博士(1995 東京大学)
専門分野	環境工学(特に水環境工学および水処理工学)
URL	http://envir.eng.ocha.ac.jp/member/otaki/index-j.html
E-mail	otaki.masahiro@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

紫外線消毒
塩素処理
都市用水需要
コンポスト型トイレ
蛍光分析

UV disinfection
Chlorination
urban water demand
compositing toilet
fluorescence for water quality analysis

主要業績

Yurina Otaki, Masahiro Otaki, Haruka Sugihara, Lada Mathurasa, Petch Pengchai, and Toshiya Aramaki, Comparison of residential indoor water consumption patterns in Chiang Mai and Khon Kaen, Thailand, Journal of AWWA, Vol. 103, No.5, pp.104-110, 2011

Kazama S., Tameike N., Nakagawa N. and Otaki M., A fate model of pathogenic viruses in a composting toilet based on coliphage inactivation, Journal of Environmental Sciences, Vol. 23, No.6, pp.1194-1198, 2011

Kazama S. and Otaki M., The mechanisms of bacteria and viruses inactivation in sawdust used in composting toilet, Journal of Water and Environment Technology, Vol.9, No.1, pp.53-66, 2011

研究内容 / Research Pursuits

2011年度の研究内容は主に以下の5つに分けられる。1. おが屑を用いたコンポスト型トイレにおける病原細菌の不活化機構を分子生物学的手法により検討し、リスク評価的手法を適用した。2. 微生物の消毒効率についてUV照射波長光の依存性を正確に調べることができた。3. 微量溶存物質の検出が可能な蛍光分析法を適用し、原水水質の変動を迅速に把握する手法を提案した。4. 複数培地法および分子生物学的手法による細菌への損傷レベル評価およびT-RFLP法を配水管中増殖細菌および病原菌に適用し、その違いを把握することができた。5. 収集した海外工業用水経時変化データを用いて、既存の水需要予測モデルのパラメータ決定法の提案を行った。

The researches conducted in 2011 were categorized in 5 parts as follows. 1. The fate of pathogenic microbes in composting toilet was investigated using molecular biological approach. And the influence of various type of virus was evaluated based on risk assessment. 2. The dependence of wavelength on UV inactivation of coliphages was investigated with high accuracy. And the influence of absorbance spectrum of water on UV disinfection could be estimated by polychromatic UV irradiation. 3. Rapid water quality analysis was suggested by applying fluorescent analysis focusing on humic substance characterization. 4. Multiple colony counting methods and molecular biological approach for evaluating the damage level of bacteria was applied to bacteria having potential of regrowth in distribution pipe. 5. Verification of existing prediction model of industrial water demand using the data collected beforehand. The determination methods of parameters used in the model was suggested.

教育内容 / Educational Pursuits

学部教育では、基礎教育4科目を担当した。物理数学関連科目を3科目、および移動現象論によって物理現象の数学的解明方法を講義した。環境化学では諸現象の基本メカニズムを化学物質変化の視点から講義した。また専門教育5科目の講義・演習を担当した。環境衛生学では、環境因子がどのように人体に影響を与えるのかについて、その評価方法も含めて講義した。環境物理学では、水の流れ等の諸現象を数式にて表す方法を講義した。水環境工学および人間・環境科学実験実習では、水環境の評価方法及び改善技術の講義および実験演習を行った。卒業論文指導は5名であった。大学院教育では、前期、後期において専門科目2科目、1科目をそれぞれ担当した。衛生工学特論では、水環境に関する最新トピックに関して講義し、環境生活工学演習では、論文作成方法の指導を行った。博士後期課程は0名、博士前期課程は7名の指導を行った。

In undergraduate education, I had 4 classes in fundamental science field and 4 classes in applied science field. In 3 classes of “mathematical physics” and “transfer phenomenon”, the mathematical methods describing physical phenomenon was lectured. In “Environmental chemistry”, the basic mechanisms of global phenomenon were lectured from the viewpoints of chemicals. In “Environmental sanitation”, the qualitative and quantitative assessment of toxic substances and phenomenon were lectured. In “Environmental physics”, the mathematical methods simulating several phenomenon was lectured. In “Water environmental engineering” and its “Laboratory”, the assessment and improving technology of water environment was lectured and practiced. In “Graduation Thesis”, 4 students conducted their researches. In graduate education, I had 1 class in Doctoral program and 2 classes in Master program. In “Special lecture of sanitary engineering”, recent topics relating water environment was lectured. In “Practice of human environmental engineering”, methodology of making manuscript was practiced. Seven students in master program were implemented to do their researches.

研究計画

コンポスト型トイレに関しては、病原ウイルスの不活化メカニズムを探る方法論を確立するとともに、最適な病原指標に関する提案を行っていく。UV照射に関しては、生物線量計に代わる消毒装置の評価方法について新しい手法を提案する。これにより評価方法の省力化、迅速化に貢献できると考える。UV装置メーカーとの共同研究が考えられる。UV消毒に関しては、生物の波長依存性について詳細な検討を行うことが可能となったことから、他種類の細菌、ウイルスに対して適用していく予定である。これにより広波長UV照射の適用範囲の拡大に貢献できると考える。蛍光分析に関しては、操作が煩雑な水質指標との関連性を探り、代替指標としての可能性を調べることで、水質管理の迅速化に貢献出来ると考えている。工業用水予測モデルに関しては、日本のデータを基にして業種毎に予測モデルのパラメータを検討し、グローバルに適用出来る方法論の確立へ繋げ、より確実な工業用水需要の未来予測に役立てる。

メッセージ

本研究室は環境問題の中で水をキーワードに扱っています。水は人が生活を営む上で必須因子です。従って水を通じて環境問題を考えれば、より具体的な問題認識、その解決法の提案にたどり着きやすいでしょう。本研究室は環境工学という名称ですが、この工学の意味とは、主に「定性かつ定量的に扱いながら、解決方法を具体的に提案していく」ということです。定量的に扱うことは非常に重要です。塩分の摂取過多は高血圧を招きますが、かといって「食塩を有害物質だ(定性的結論)」と言うのは短絡的です。「食塩は一日〇〇g以上摂取すると、高血圧が原因で死亡する確率は〇〇%になる(定量的結論)」といった考えが欠如しているからです。

本研究室は、以上のような観点を持ち、環境に対して定量的に評価し、具体的な解決法の提案を行っていきます。現在は主に病原微生物を如何に制御するか、水質管理を如何に迅速に行えるかについての実験的研究や、水使用量の将来的動向の予測といった調査研究を行っています。このような研究に興味がある方を歓迎します。

氏名	大塚 常樹
	OTSUKA Tsuneki
所属	人間文化創成科学研究科文化科学系
職名	教授
学位	
専門分野	日本近現代詩歌、20世紀前半の文学、文学理論
URL	
E-mail	otsuka.tsuneki@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

文学理論
文化記号学
日本現代文学
宮沢賢治
日本近現代詩

主要業績

日本語 文章・文体・表現事典(宮沢賢治・八木重吉・高村光太郎を執筆)・朝倉書店

書評「信時哲朗『宮沢賢治「文語詩稿五十篇」評釈』」(「昭和文学研究」第63集88-90p 2011/9)

研究内容 / Research Pursuits

■ 教育内容 / Educational Pursuits

日本近代文学史・日本近代文学演習・文化の記号学 日本近代文学
特殊研究・日本文学研究指導(卒論) 大学院日本現代文学特論 大学
院日本言語文化総論

■ 研究計画

文化記号学の視点から、文学テキストを解体するのではなく、逆に特異性を抽出できればと思います。

■ メッセージ

日本の近代文学を幅広く担当しています。最近は文化記号学も担当し、広告やアニメ、各種図像、貨幣などを用いて、企業や国家のイメージ戦略、メディア戦略を扱っています。日本文学の授業では、感性ではなく、文学理論に基づいた各種文学テキストの分析を心がけています。内容面では、哲学宗教、科学、政治経済、メディア、音楽や美術、外国文学など、様々な分野との関連を追究しています。大学院前期では文学理論の習得を目標にしています。大学院後期は批評理論の習得と論文作成技術の向上を目標にしています。

氏名	大塚 譲 OTSUKA Yuzuru
所属	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系
職名	教授
学位	農学博士(1977 東京大学)
専門分野	栄養生化学
URL	http://pea.ieshl.ocha.ac.jp/otsuka/default.htm
E-mail	otsuka.yuzuru@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

分子栄養学
食品機能
抗酸化

nutrigenomics
food function
antioxidant

主要業績

Antioxidant/anti-inflammatory activities and total phenolic content of extracts obtained from plants grown in Vietnam Yasuko Sone Joon-Kwan Moon Truong Tuyet Mai, Nghiem Nguyet Thu, Eri Asano, Keiko Yamaguchi, Yuzuru Otsuka and Takayuki Shibamoto, J Sci Food Agric 91 (12), pp. 2259-2264 (2011);

The level of orally ingested vitamin C affected the expression of vitamin C transporters and vitamin C accumulation in the livers of ODS rats. Biosci Biotechnol Biochem., 75,2394-7

Dose of 3-methylcholanthrene enhances vitamin C accumulation and mRNA expression of its transporter in the liver of ODS rats and in HepG2 cells. J Biochem Mol Toxicol., 25,369-76(2011)

"Determination of furosine and fluorescence as markers of the Maillard reaction for the evaluation of meat products during the actual cooking condition." J Food Tech., in press

研究内容 / Research Pursuits

植物由来の抗酸化物質を精製しその構造を決定している。特にベトナムの食品用植物に強い抗酸化物質があることを発見し、ガロイルタンニンの一種である新規物質であることを決めた。現在論文として投稿中である。

Antioxidants from plants in vietnam that are used for food, were purified. And found one of which is group of galloyl tannin.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

細胞生化学の授業を食物栄養学科では行っている。大学院ではニュートリゲノミクスの授業と学生の指導を行っている。

Teaching cell biochemistry to undergraduate students. Also teaaching nutrigenomics to the graduate students, and is a scientific adviser for graudate students.

■ 研究計画

細胞における新しい抗酸化システムを発見したのでその証明を行うと同時に新たに見つけた新規抗酸化物質の機能を解明する。

■ メッセージ

氏名	大槻 明
	OTSUKI Akira
所属	リーダーシップ養成教育研究センター
職名	講師
学位	博士(工学) / Ph D
専門分野	データ工学
URL	
E-mail	otsuki.akira@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

データマイニング
クラスタリング
ビッグデータ可視化
発想支援システム

Data Mining
Clustering
Big data visualization
Creativity Support System

主要業績

Akira Otsuki, Ayumi Kawakami, Academic Landscape based on network analysis considering analysis of variation in the years of lucubration publishing, New Research on Knowledge Management Models and Methods, InTec Open Science, Chapter 17, pp.371-378, 2012.

大槻明, 岡田謙一, 知識の構造化俯瞰表現に関する研究, 情報知識学会論文誌, Vol21, No3, pp.350-361, 2011.

大槻明, 岡田謙一, オントロジー工学の手法を参考に構築した目的語ツリーの構造化俯瞰図への応用に関する研究, 情報処理学会論文誌データベース, 第49, Vol.4, No1, pp.14-25, 2011.

研究内容 / Research Pursuits

ビッグデータを対象とした学術俯瞰システム(データマイニング)について研究しています。

本システムは, 学術論文や特許、さらにはSNS等の膨大なデータを対象として, 全体の俯瞰を得て、その俯瞰を基に分析等が行なえるシステムです。このシステムを使用することによって, 各領域(クラスター)独自の意味や専門性等の把握支援が行えると共に、各クラスターの時間発展を追うことによって, 研究のトレンドを知ることができます。これらの分析結果から, ビッグデータの概観の効率的な把握や、新たな研究テーマの探索に係る重要な情報を得ることが期待されます。

We are researching on the Academic Highangle System (Data Mining) intended for big data.

Academic Highangle System is meant to overview the vast amounts of data pertaining to academic articles, patents, SNS, etc. and, based on which, to carry out various analyses. The system can assist us to comprehend the unique meaning as well as the expertise in respective areas (hereinafter called “clusters”) and enable us to analyze the transition of the hot topics thereof.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

■ 研究計画

今後は、筆者独自のアルゴリズムにより各クラスタの主要ノード(例:論文)を抽出したうえで、主要ノードの役割分析手法について研究していきたいと思います。本手法により、例えば、ある技術(クラスタ)が他の技術(クラスタ)と融合して新しい技術が生まれる、といったような将来予測支援が行えるようになることが期待されます。

■ メッセージ

氏名	大森 美香
	OMORI Mika
所属	人間文化創成科学研究科人間科学系
職名	教授
学位	Ph.D. Indiana University 2001年8月
専門分野	臨床心理学, 健康心理学
URL	
E-mail	omori.mika@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

食行動異常
ストレス
感情制御
健康行動
ヘルスリスク

pathological eating behaviors
stress
emotional regulation
health behaviors
health risk

主要業績

Yamawaki, N., Nelson, J. & Omori, M. (2011). Self-esteem and life satisfaction as mediators between parental bonding and psychological well-being in Japanese young adults. *Journal of International Psychology and Counseling*, 3, 1-8.

Yamazaki, Y., & Omori, M. (2011). Gender differences in thin-ideal internalization and drive for thinness among adolescents: Mothers' roles in children's thin-ideal internalization. *Ochanomizu University Global COE Program Proceedings*, 13, 79-89.

研究内容 / Research Pursuits

(1) 科学研究費補助金基盤研究(C)の研究プロジェクトとして、感情調節能力およびストレスの関連を明らかにする調査研究を行った。
(2) 本学グローバル COE プログラム・国際格差領域のプロジェクトとして、青年期ヘルスリスク行動に関する研究を実施している。地域研究として、スリランカに焦点をあて、現地調査を行った。

(1) I've been conducting a research project entitled as "Does EI moderate relationships between stressors and stress reactions?" on a grant-in-aid from JSPS since 2009.
(2) As a program member of the Global COE program at Ochanomizu University, I initiated a comparative study on adolescent health risk behaviors. In 2011, I analyzed data from a survey on psychosocial correlates of health-risk behaviors among Sri Lanka adolescents, wrote up a book chapter and manuscripts.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

臨床心理学および健康心理学に関する授業・研究指導を行った。大学院においては「健康心理学特論」「健康心理学特論演習」を担当し、成人期の心理的問題の実践や科学的研究の動向について授業をすすめてきた。学部においては、「臨床心理学研究法」などの授業を担当した。研究指導は、卒業論文3件、博士論文審査(副査)を1件つとめた。

I taught classes related to clinical psychology. Graduate courses that I taught were Health Psychology and Seminar in Health Psychology. Particular emphases were placed on empirical research in these classes. Undergraduate courses involved Research Methods in Clinical Psychology. Theses that I chaired during 2011 involved three senior theses. I also served as a dissertation committee for one doctoral dissertation.

■ 研究計画

ストレス過程における感情とセルフコントロールの役割を明らかにし、予防に有効な介入方法の検討を行うため、人材開発を主たる業務とする企業と共同研究を進めている。24年度に向けて、1)筆記表現法の有用性に関する研究、2)青年期女性の食行動異常に関する研究をすすめている。

■ メッセージ

臨床心理学は、心理的な問題の成り立ちや治療の方法に関わる領域ですが、広範な心理学の基礎知識のうえに成り立っています。臨床の場所では、個人の問題を理解し、どの方法がよいのか仮説をたて、治療法が効果的なものかどうか検証できることが求められます。こうしたことは、科学的な心理学研究法を学ばずには獲得できることではありません。基礎的な心理学の知識と科学的な心理学の研究法をしっかり勉強していただきたいと思います

氏名	岡崎 眸
	OKAZAKI Hitomi
所属	人間文化創成科学研究科文化科学系
職名	教授
学位	Ph. D (1986年 ミシガン大学)
専門分野	日本語教育学
URL	
E-mail	okazaki.hiromi@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

共生日本語教育
年少者日本語教育
年少者日本語教育

Education for symbiotic Japanese
Education for language minority children
Education for language minority children

主要業績

「実習生の内省の対象―「どのように」から「なぜ、何を」商店へ―」『2011年度多言語多文化共生日本語教育実習実践報告』pp.59-63 岡崎研究室

笹川日中友好基金支援事業「中国大学日本語教材シリーズ」に関する外部評価報告書

研究内容 / Research Pursuits

主に二つの研究課題で研究を行った。(1) 多言語・多文化共生社会を切り開くビジネス日本語教育と教員養成のあり方を探ることを研究課題として、01年から継続してきた基盤B(2)(研究代表者)の最終年度に当たる10年度には、それまでの研究成果を総括する研究に展開し、成果報告書を作成した。具体的には、第一に、日本語母語話者と非母語話者が参加し、互いが共生するための言語的手段の獲得を目標とするビジネス共生日本語教育の特徴を提示したこと、第二に、共生日本語教育実習を受講した実習生の学びを質的・量的に明らかにしたこと、第三に、内省モデルに基づく実習プログラムの特徴を提示したことが挙げられる。(2) 言語少数派年少者の教科学習支援のあり方を探る研究として、横浜市鶴見中学の協力を得て、母語を活用し、母語の育成と統合した教科学習支援を二人の生徒を対象として行い、その特徴を観察した。結果、教育課程の中で母語を活用した授業の可能性が示唆され、次年度の取り組みに向けた基盤がつけられた。

(1) establishing methodologies for Japanese language education and teacher-development which aimed at facilitating to develop multilingual/multicultural society; (2) developing a system which was designed to support school subjects learning of linguistic minority children. The agenda(1) was conducted as the final step of a five year research project B(2) funded by JSPS, and the final research report was published.. The agenda(2) was processed as the first step of a three year pioneer research project, also funded by JSPS. The project was done going the full scale cooperation of Tsurumi junior high school in Yokohama city.

教育内容 / Educational Pursuits

(1) 日本語教育コースで開講している「日本語教育実習」では、共生日本語教育を研究テーマとする後期課程所属の院生や修士も参加して研究チームを作り、研究を進める態勢を作った。実習生間の話し合い、実習生の内省レポート、教壇実習における実習生の教授行動、参加者の談話などを収集し分析し、研究会で口頭発表を行い、論文にまとめる作業を行った。この態勢により、①自分たちの実践を対象とすることで、実践と研究の相互交流を体験できること、②グループによる研究とすることで、研究手法が先輩から後輩に伝授され、共有されること、③修士1年次にも小さい論文を1本仕上げられること、などの点で、日本語教育研究者を養成することを目標とする本コースにとって教育的意義があると考えられる。この研究への参加を通して、修士論文、博士論文へと研究課題を育てていく院生もいる。(2) 鶴見中学における教科学習支援に院生を参加させることで、学校現場を知り、現場に直接影響力を与えることのできる研究のあり方について考える場を与えた。

The educational pursuit should be characterized as the following: (1) education program for Japanese language teacher practicum was put through by being carefully designed to be integrated to a research project funded by JSPS.; (2) establishing a system in which graduate students participate in the school subjects learning support system for linguistic minority children in Tsurumi junior high school designed for the graduate students participants to shape the field where they had the opportunity to identify what would be the appropriate research manner that could be responsive to and therefore influential to educational practice. Each of the attendants above had chances of the following experiences: 1. interactions between their teaching practice and research conducts; 2. research methodologies and fine techniques.

研究計画

言語生態学に支えられた「持続可能性日本語教育」の可能性を探ることを目的とする教室づくりを昨年から開始した。来年度に向けてもそれを継続し、受講生と参加者双方の生態環境の実態を観察し、コースデザインに生かすというサイクルで、アクションリサーチを行いたい。

メッセージ

グローバル化に伴う社会の多言語化・多文化化の動きの中で、特にその社会で言語少数派に属する人々の言語権(母語を使う、母語を保持・育成する権利とその社会の共通言語を学び使う権利)は軽視され蹂躪されるという問題が深刻化しています。そこで、国内の言語少数派の人々(例えば就労目的で来日する日系人や日本人との結婚により来日するアジアからの花嫁など)を対象として、この社会の共通言語である日本語教育を支援する第二言語としての日本語教育のあり方が問われることになります。現状では、日本語の習得だけが強調されることによって、日本への同化要請の道具として機能するという傾向が見られます。彼らの母語・母文化の尊重の実現と統合される形の日本語教育のあり方が追求されなければならないと考えます。日本語教育コースで開講している「共生日本語教育実習」を中心にして、言語話者としての人々の全人格・生活全般を見渡す日本語教育のあり方学生みなさんと一緒に追求していきたいと考えています。

氏名	小川 温子 OGAWA haruko
所属	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系
職名	教授
学位	理学博士
専門分野	生物化学/Biochemistry
URL	http://www.sci.ocha.ac.jp/chemHP/index.html
E-mail	ogawa.haruko@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

生物化学
 糖質科学
 生体分子認識
 細胞間マトリックス
 新人工複合糖質, シュードプロテオグリカン

Biochemistry
 Glycoscience
 Biomolecular recognition
 Extracellular matrix
 New enoglycoconjugates, pseudoproteoglycan

主要業績

1. Asanuma-Date, K., Ihara I Y., Le N., Kotone S., Oikawa-Matsushita, H., Nakayama, K-i., Umemura, M., Ishikawa, K., Kawasaki, N., Hashii, N., Harazono, T., Sakagami, H., Ogawa, H.: Functional Regulation of Sugar Assimilation by N-Glycan-specific Interaction of Pancreatic Alpha-Amylase with Glycoproteins of Duodenal Brush Border Membrane. J. Biol. Chem., 287, 23104-18, (2012).
2. Nakamura, K., Ohtsuki, T., Mori, H., Hoshino, H., Hoque, A., Oue, A., Kano, F., Sakagami, H., Tanamoto, K., Ushijima, H., Kawasaki, N., Akiyama, H., Ogawa, H.: Novel anti-HIV-1 activity produced by conjugating unsulfated dextran with polyL-lysine. Antiviral Res., 94, 89-97, (2012).
3. Ogawa H., Sano, K., Sobukawa, N., Asanuma-Date, K.: Matrix Restructuring During Liver Regeneration is Regulated by Glycosylation of the Matrix Glycoprotein Vitronectin. Liver regeneration, Baptista, P. ed., pp. 79-98, InTech Publishers, ISBN: 978-953-51-0622-7, (2012) Open Access.
4. Le, N., Kato, M., Ogawa H.: Usefulness of specific antibodies to immobilize pyridylaminated N-glycans for solid-phase interaction analyses. Nat Sci. Rept. Ochanomizu Univ. Tokyo, 61(2), 31-45 (2011)
5. 佐野琴音、小川温子. 糖鎖によるがん克服への挑戦. 化学 66(5) 68 (2011)

研究内容 / Research Pursuits

糖鎖の果たす役割に中心を置きながら、生命にとって重要な細胞の接着と移動、分泌と吸収、感染と免疫などの現象に、さまざまな生体分子がどう関わるかを、分子間相互作用の視点から研究しています。生化学、シミュレーション、分子工学などの手法を使って分子の特異的認識を制御することにより、組織再生、代謝調節、感染のしくみの解明と向上をめざします。

Our research theme includes diverse aspects of glycan functions which have been unknown to scientists and we discovered for the first time; 1, Molecular mechanisms to control nutrient digestion and absorption achieved by the interaction between pancreatic enzymes and intestinal BBM glycoconjugates; 2, Control of tissue remodeling through glycan changes of ECM glycoproteins including vitronectin and fibronectin liver regeneration; 3, Elucidation of novel anti-HIV-1 mechanism of pseudoproteoglycans, PLL-Dexs, 4. Elucidation of the unknown functions of the carbohydrate-binding activity of immunoglobulins and anticoagulant proteins, 5. Allergenicity of glycoprotein glycans and their utility for clinical and therapeutic use.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

学部では生物化学の基礎を学ぶための講義および実験を担当しています。核酸・糖質・タンパク質などをとり上げ、生体物質の構造と機能の基礎を解説しています。卒業研究では、未解明の生命現象から新しいテーマを取り上げ、生化学、分子生物学、構造生物学などの種々の実験技術や生命情報学等の解析技術を用いて、分子機構を解明します。博士課程では、さらに進んだ研究を展開し、研究計画を立て、文献を読みこなし、論文を書いてまとめ、国際学会や専門誌に公表するまでの教育を行っています。

For undergraduates, I taught the 2nd and 3rd-year students who has chemistry basis to understand the structures and functions of biological molecules. "Basic biochemistry" course included carbohydrates and nucleic acids. The "Bioenergetics" course included principal metabolic reactions and theories. "Biochemical laboratory" course included purification of lectins and trehalose, chemical analyses, activity measurements, analyses of enzyme reaction, and basic recombinant DNA techniques. We guided the students carefully to obtain the basic experimental techniques and a way of thinking to treat biological molecules (shared by three instructors). For graduates, I delivered lectures and book-readings in the class on the current research issues in chemistry and biology of carbohydrates and their research methods including related glycotechnology and glycomedicine. In "General bioscience", databases in the glycoscience were introduced.

■ 研究計画

現在、関心に取り組んでいる研究テーマ

- 1 膵消化酵素に見出した糖鎖結合性により達成される酵素の活性調節、消化と吸収調節、その医療および産業的利用。
 - 2 細胞外マトリックス分子の機能は糖鎖調節される。その分子機構と生物学的意義の解析とその再生医療への活用。
 - 3 われわれが創製したシュードプロテオグリカン糖鎖プローブによる生命現象の解明と生物機能調節への利用、特にPLL-Dex の抗HIV-1活性の解明と薬剤への応用。
 - 4 抗体分子や凝固因子に見出した糖鎖結合性の生物学的意義の解明、
 - 5 アレルゲン糖鎖の構造と抗原性、その発症機構への関与の解明と利用性。
- 全ての研究テーマにおいて、学術的な研究はもちろん、技術開発・産業利用的な方向での共同研究が可能。

■ メッセージ

生命科学の研究には、化学や生物の知識が必要です。5年先、10年先の自分をイメージしつつ、目標をもった前向きな姿勢との努力が、自信になり、結果につながります。自分の実力を信じ、ぎりぎりまであきらめないこと、他人の基準で自分を見ないことが大事です。

氏名	荻原 千鶴
	OGIHARA Chiduru
所属	人間文化創成科学研究科文化科学系
職名	教授
学位	博士(人文科学)(1996 お茶の水女子大学)
専門分野	日本文学、特に日本上代文学
URL	
E-mail	iwasaki.ogihara.chizuru@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

古事記
風土記
万葉集

Kojiki
Fudoki
Man'yōshū

主要業績

論文(単著)『『出雲国風土記』研究の現在』『国文学解釈と鑑賞』(ぎょうせい)第76巻第5号 175～183頁 2011年5月

論文(単著)「『君を思ひ出 妹を思ひ出』——宇遅能和紀郎子(菟道稚郎子)の造形」『文学』(岩波書店)隔月刊第13巻第1号 144～156頁 2012年1月

論文(単著)「書評 祈りのことばのうつくしさ 上村武男著『ふかい森の奥の池の静謐』」『図書新聞』3010号 2011年4月

研究内容 / Research Pursuits

『出雲国風土記』の近年の研究動向について分析し、今後の研究方向について考察した。近年、諸本・注釈・現地調査研究・成立論・説話研究の諸分野において、従来の研究の呪縛や束縛をいかに脱しつつあるかを指摘し、今後の研究方向や研究方法・研究分野について論じた。古事記『日本書紀』にみえるウヂノキイラツコ関係記事をめぐる研究を行い、その造形に漢籍の季札像が大きく関わっていることを指摘した。あわせて従来定見をみない歌謡について、「思ひ出」の語をキーワードとして析出し、それがウヂノキイラツコ像の造形と関わることに、散文作品としての『古事記』『日本書紀』に歌謡が存在する意義があることを指摘した。祝詞をめぐる考察を行っている書の書評を行い、当該書の意図を明確に読み解き、一般読者にはわかりにくい叙述に光を当てて、当該書のねらいや、神職の立ち位置の意味について論じた。

Study① Present-day Studies on Izumonokunifudoki I made analysis of the tendencies in recent studies of Izumonokunifudoki, and gave thoughts on where the future studies should be directed. Study② “Kimi wo omohide, Imo wo omohide” —— Formation of Udinowakiiratsuko in Kojiki and Nihonshoki I gave thoughts on the tales of Udinowakiiratsuko appearing in Kojiki and Nihonshoki. About the songs, which have no generally-accepted opinions, I made clear the significance of the songs existing in the prose of Kojiki and Nihonshoki, by focusing on the word “omohide” as the keyword. Book review① Bookreview: Beauty of the Words for Prayers; “Peace and Calm of a Pond in a Deep Forest” by Takeo Uemura

■ 教育内容 / Educational Pursuits

学部では、日本古典文学史論(上代)・日本古典文学論特殊研究(上代)・日本上代文学特殊講義Ⅰ・日本古典文学論基礎演習Ⅰ・日本古典文学論演習(上代)ⅠⅡ・日本文学研究指導の授業を担当した。このうち文学史は、記紀・風土記を中心に文学の史的展開について講じた。特殊講義では日本古代における歴史的事件と関わる歌について、その歴史的背景と歌表現の相関について考察した。基礎演習では日本文学を研究するにあたっての基礎的トレーニングを、演習では日本上代文学を研究するにあたってのトレーニングを指導した。日本文学研究指導では、学生の卒業論文作成のための指導を行った。大学院博士前期課程では、日本上代文学表現史論・日本上代文学特論の授業を担当した。前者では『古事記』『日本書紀』のヤマトタケル造形について「英雄」造形の視点から講じた。後者では、『古事記』の倭建命をめぐる諸問題について講じた。

Under graduate courses: Basic seminars. History of ancient Japanese literature. Advanced seminar of ancient Japanese literature. Advanced Seminar: Ancient Japanese Literature. Advanced lectures in ancient Japanese literature. Seminar of introduction to Japanese literature. Seminar on Man'yōshū and Kojiki. Direction of research on ancient Japanese literature. Graduate courses: Advanced lecture on history of ancient Japanese writings. Advanced lecture on ancient Japanese literature. Analysis of Yamatotakeru-no-mikoto, in Kojiki and Nihonshoki.

■ 研究計画

『出雲国風土記』の説話叙述の特性についての研究を深める。北海道風土記と『古事記』『日本書紀』との関連性についての研究の糸口を探る。

■ メッセージ

『古事記』『風土記』『万葉集』など日本上代の文学は、1300年も前に書かれたものです。古代の人々の、現代とは大きく異なるものの考え方・感じ方がうかがえますが、それだけにかえて、現代の私たちの中に埋没してしまっているものを、はっと気づかせてくれたりするのです。古代の人々が自然に対して抱いた畏怖の念は、大きな災害を体験した今日の私たちに対して、訴えかけるものをもっているように思います。古典を学び研究することは、現代を考えることにつながると、私は思います。高校の授業ではあまりなじみがないかもしれませんが、上代の作品にも、ぜひ目を向けてみてください。新鮮な驚きと意外な共感をおぼえる新しい「自分」に、出会えると思いますよ。

氏名	小口 正人 OGUCHI Masato
所属	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系
職名	教授
学位	博士(工学)/ Dr. Eng.
専門分野	ネットワークコンピューティング・ミドルウェア
URL	http://www.is.ocha.ac.jp/~oguchi/
E-mail	oguchi.masato@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

クラウドコンピューティング
無線ネットワーク
モバイルコンピューティング
通信プロトコル
サイバーフィジカルシステム

Cloud Computing
Wireless Network
Mobile Computing
Communication Protocol
Cyber Physical System

主要業績

Etsuko Miyazaki and Masato Oguchi: "Evaluation of Middleware for Bandwidth Aggregation using Multiple Interface in Wireless Communication," International Journal on Advances in Networks and Services, Vol.4, No.3&4, pp.343-352, 2011.

豊島 詩織, 山口 実靖, 小口 正人: 「データインテンシブアプリケーション実行時のクラウドリソースとローカルクラスタ間における負荷分散ミドルウェア」日本データベース学会論文誌, Vol.10, No.1, pp.31-36, 2011年6月

Remi Ando, Tutomu Murase, and Masato Oguchi: "Characteristics of QoS-Guaranteed TCP on Real Mobile Terminal in Wireless LAN" In Proc. IEEE 2011 International Communications Quality and Reliability Workshop (CQR2011), CQR035, Naples, Florida, USA, May 2011.

Saeko Iwaki, Tutomu Murase, and Masato Oguchi: "Throughput Analysis and Measurement on Real Terminal in Multi-rate Wireless LAN" In Proc. The 6th ACM International Conference on Ubiquitous Information Management and Communication(ICUIMC 2012), P3-12, Kuala Lumpur, Malaysia, Feb 2012.

山下 暁香, 岩木 紗恵子, 小口 正人: 「データ処理手法の相違に基づくライフログ解析アプリケーションと入力データ品質の相関関係評価」Webとデータベースに関するフォーラム(WebDB Forum 2011), 1G-2-1, 工学院大学新宿キャンパス, 2011年11月.

研究内容 / Research Pursuits

インターネットを中心とする大規模ネットワークにより, 種々のコンピュータや情報機器類が接続され, 互いに連携しながら高度なネットワークコンピューティングが行われるようになってきました. 私の研究室では, このような新しいネットワーク環境において, コンピュータやその他の資源を効率良く快適に利用する, さらにはセキュリティに配慮し暗号化や認証を導入して安全に利用する, といった手法を研究しています. 具体的な研究テーマとしては, 高性能なPCクラスタシステムにIPベースのSANを統合したIP-SAN統合型PCクラスタ, 仮想プライベートネットワークVPN上における高性能・高信頼性SAN環境の構築, モバイル環境における認証や暗号化の実現手法, TCPパラメータの動的な解析や制御などが挙げられます. 環境と目的に応じてそれぞれに適したネットワークプロトコルや概念モデルを提案し, ミドルウェアを構築することによりそれを実現しています.

Recently, advanced network computing systems have been realized as various sorts of computers and resources are connected with each other, owing to prosperity of large-scale networks represented by Internet. In our laboratory, several innovative methods are proposed for such an environment in order to make the best use of computer resources comfortably and securely. They include IP-SAN Consolidated PC Cluster, High Performance Dependable SAN over Virtual Private Network (VPN), Authentication and Cryptography on Wireless LAN, and TCP Parameter Analysis and Control. Network protocols and concept models suitable for each environment are proposed.

教育内容 / Educational Pursuits

情報科学: 情報科学とは何であるか、自然科学分野における位置付けおよびその技術的な応用について学ぶ。近年急速な発展が見られる情報技術を基礎として支えているのが情報科学であるが、その内容は幅広く奥も深い学問である。本講義は、情報科学やその関連分野に携わる者が知っておくべき基礎知識について述べ、主要トピックを取り上げて議論し、受講者にこの分野の概要を理解してもらうことを目標とする。コンピュータ基礎演習: UNIXおよびプログラミング言語Cの基礎を習得する。情報科学分野の学習・研究を進めるためには、コンピュータを用いて数値計算やデータ処理などを行う能力を身に付けることが重要である。本演習ではUNIXベースのコンピュータの使い方を覚え、基本的なプログラムを作成する技術を習得することが目標である。コンピュータネットワークI: インターネットに代表されるコンピュータネットワークは、情報関係の様々な分野の基盤となる技術であり、この知識を身に付けることは実用的にも有効である。本講義ではTCP/IPを中心としたネットワークプロトコルの基礎並びに応用技術に関して理解することを目標とする。コンピュータネットワークII: コンピュータネットワークは大学、企業、家庭等あらゆる場面において今や不可欠な存在となり、その知識や技術の習得を求める社会的要求も高い。本講義では、インターネットを中心としたコンピュータネットワークを実際に構築し運用するために必要な知識を総括する。分散処理特論: ネットワーク技術の進歩により、コンピュータを単に接続し通信を行うだけでなく、この上で分散処理を行うことが可能となった。本講義では分散システムがどのような構成を持つべきであるか解説し、分散処理を行う際に考慮しなければならない同期、一貫性、セキュリティなどの主要課題を議論する。

Information Sciences Exercises in Basic Programming
Computer Networks I Computer Networks II
Distributed Computing

研究計画

本研究室ではネットワークコンピューティング・ミドルウェアをテーマとして掲げ、これに含まれるいくつかの種類の研究を手掛けている。この分野は大学のみで研究が行われている訳ではなく、企業も積極的に手を伸ばしている領域であり厳しい競争が行われている。そのような状況の中で、大学の研究室の機動性を活かして、クラウドコンピューティングやIP-SAN、モバイルネットワークなど常に最も先端的なシステムを取り上げ、解析や実装を行い、実際に動かしてみせることにより説得力のある研究を行ってきており、今後もその形で成果を出して行きたい。

メッセージ

現在、世の中の非常に多くの人が、携帯電話やパソコンその他を通して、コンピュータネットワークのお世話になっていると思います。それではコンピュータやネットワークは、一体どんな仕組みで動いているかご存知でしょうか。情報科学科で私が教えている講義は、その疑問に答えるものです。またコンピュータネットワークは、将来どのように発展していくでしょうか。私の研究室においては、これを探る研究を行っています。コンピュータやネットワークは、進歩のペースが物凄く速いものです。ただ利用しているだけだと中がどうなっているのか見えませんが、この中身を勉強し、研究で未来を切り開いていく作業は、大変刺激的で面白いものです。

氏名	奥村 剛 OKUMURA Ko
所属 職名	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系 教授
学位	理学博士(1995 慶応義塾大学)
専門分野	理論物理学(特に化学物理、ソフトマター、場の理論、統計力学周辺)
URL	http://www.phys.ocha.ac.jp/okumuralab/
E-mail	okumura.ko@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

ソフトマター物理学

主要業績

Maria YOKOTA and Ko OKUMURA, Dimensional crossover in the coalescence dynamics of viscous drops confined in between two plates, Proc. Nat. Acad. Sci. (USA), 108 (2011) 6395-6398

Ayako ERI and Ko OKUMURA, Viscous drag friction acting on a fluid drop confined in between two plates, Soft Matter, 7, 5648 (2011)

Noriko OBARA and Ko OKUMURA, Imbibition of surfaces decorated with pillars of submillimeter scales, J. Phys. Soc. Jpn. Suppl. (in press, 2012).

研究内容 / Research Pursuits

本年度は、下記の研究を行った(指導学生の研究テーマ等)。テクスチャー表面での接触角履歴 真珠層構造・クモの巣モデル等シミュレーション 2次元バブルの動力学 微小重力下での濡れ(航空機マイクロG実験) D3: テクスチャー表面での濡れ(浸透現象) D2A: 2次元液滴の融合の動力学 D2B: 真珠層の破壊に関する解析解 D1: 粉粒体中の引きずり抵抗 M2: 非線形・弾塑性体シートの破壊シミュレーション M1A: 粉粒体の動力学 M1B: テクスチャー表面での濡れ B4A: ポリマーシートの破壊 B4C+D: フォーム中での抵抗

■ 教育内容 / Educational Pursuits

2011年度授業担当: (学部) 物理数学I(2単位)必修 物理数学II(2単位)必修 数理物理学(2単位)必修 連続体物理学(2単位)選択 物理学特別講義I(2単位)選択 特別研究(12単位)必修(修士) 液体の物理学演習(2単位) 特別研究(14単位)(後期博士) ソフトマテリアルの物理(2単位) ソフトマテリアルの物理演習(2単位) 理学論文指導(2単位) 研究報告(基礎)(1単位) 研究報告(発展)(1単位)

■ 研究計画

濡れ、表面張力、破壊、複合材料、粉粒体、ゲル、液晶、高分子などのテーマをソフトマター物理学の立場から研究していく。理論・実験・シミュレーションを同時に進めながら研究を行っていく。

■ メッセージ

ソフトマター物理学は、物理学の手法を、液晶ディスプレイ、ペットボトル、洗剤、化粧品、真珠などの身の回りの工業製品・現象等、また、高分子、コロイド、石鹸、DNA、たんぱく質など高校の科目でいえば化学や生物などで扱われている対象に適用し、注目を集めています。私の研究部ループは、あたかもフランス印象派画家たちのように自然を理解しようとする「印象派物理学の手法」に注目しています。そしてこのスタイルによって、身近でありながら科学技術応用にも直結した自然法則を明確な形で次々に発見しています。皆さんも私と一緒に、印象派画家になったつもりで、自然の本質をえぐりだしてみませんか？

氏名	織田 友恵
所属	ODA Tomoe
職名	教育開発センター
学位	講師
専門分野	博士(理学)
URL	数値流体力学
E-mail	oda.tomoe@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

数値流体力学

Computational Fluid Dynamics

主要業績

研究内容 / Research Pursuits

■ 教育内容 / Educational Pursuits

学部生向けのパソコン活用講習会の実施。コンピュータ利用についての質問や相談の受付。

■ 研究計画

■ メッセージ

氏名	加賀美 常美代 KAGAMI Tomiyo
所属 職名	人間文化創成科学研究科文化科学系 教授
学位	文学博士(東北大学)
専門分野	異文化間心理学、異文化間教育、多文化間カウンセリング
URL	http://jsl.li.ocha.ac.jp/kagami.htm
E-mail	kagami.tomiyo@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

異文化間コンフリクト
教育価値観
コミュニティアプローチ

intercultural conflict
educational value
community approach

主要業績

・2011「台湾における学生の日本イメージ形成:日本への関心と知識との関連から」、『台湾日本語文学報』30号 pp345-368

・2012『2011年度 増補版 韓国と台湾における小学生・中学生・高校生・大学生の日本イメージの形成過程と規定要因報告書』

2011「9章 留学生交流は何をもたらすのか」単著分担執筆『グローバル文化学:文化を超えた協働』小林誠・熊谷圭知・三浦徹編 法律文化社 pp161-178

2012「コミュニティ心理学と私」第15巻1号 2012.3 pp17-22

「巻頭言『倫理綱領の改正への経緯と倫理委員会の歩み』第14巻1号 2011.6 14巻-1 pp1-3

研究内容 / Research Pursuits

1. 台湾の日本イメージ形成の関連要因 CSDの異文化間コミュニケーション・プロジェクトにおいて、台湾の調査の小学生から大学生までの日本イメージ形成と関連要因について質問紙調査と統計的分析を行い、論文化した。2. アジア諸国の日本イメージの形成過程と規定要因 韓国と台湾の小学生から大学生までの日本イメージ形成の質的調査、量的調査の分析を行い論文化した。増補版として2006年から2011年までの一連の共同研究結果をもとに報告書を作成した。3. 大学の留学生交流の意義 グローバル化に伴い、大学の留学生交流について、マクロレベルとミクロレベルの意義について言及した。留学生と日本人学生との協働を通して個人のステレオタイプを崩す試みの重要性を訴えた。

1. Process of Forming Images on Japan in Taiwan I wrote a paper on Quantitative Research on Taiwanese Young People and Children, based on the results of the investigation regarding how Taiwanese young people and children formed their images of Japan, 2. Process of Forming Images on Japan in Asian Countries I wrote a paper on Qualitative and Quantitative Research on Drawings of Korean and Taiwanese Young People and Children, based on the results of the investigation regarding how they formed their images of Japan which I conducted in the Project of Cross Cultural Communication of CSD in the previous year. I drew up an expanded report about the results of a series of joint researches on conducted from the year 2006 through 2011. 3. Importance of Foreign Student Exchanges I referred to the purpose of college student exchanges in our globalizing society both from macro and micro perspective. I also appealed for the importance of the attempt to wreck the stereotypes that each individual might have through the cooperation system between foreign students and Japanese students.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

学部の「多文化間交流論」は、参加型授業、協働的グループ活動を行った。留学生と日本人学生の交流、コミュニケーション・スキルの向上を目指した。「多文化共生論」は、4名のゲストスピーカーを招き多文化共生社会の理解とグループ討論を行なった。「文化と人間関係Ⅰ」では、文化行動と心理学的理論をゼミナール形式で行った。「文化と人間関係Ⅱ」では、異文化接触をテーマとする学生を対象に卒業論文指導を行った。大学院の「多文化間カウンセリング特論」では、震災関係の論文購読した後、文化と心理学の理論と研究方法について文献講読を通して講義を進めた。「多文化間カウンセリング演習」では、多文化間カウンセリング、積極的傾聴、予防的支援活動の方法のスキル向上を目指した。

I delivered lectures of “Multicultural Communications and Exchanges” and “Coexistence in Multicultural Society” for undergraduates. In these lectures, by adopting the methods of cooperative group works, I aimed at improving of foreign and Japanese students’ communication skill in the former, and in the latter, I invited guest speakers in order for them to improve multicultural understanding and diversity. In “Culture and Human relationship I” for undergraduates, I delivered lectures on cultural behavior and social psychology. In “Culture and Human Relationship II” for undergraduates, I supervised students who did undergraduate thesis on intercultural psychology.

■ 研究計画

・多文化間の教育に関わる人々、多様な国籍の人々を対象に、葛藤解決方略と教育価値観、一般的価値観の関連を比較検討するとともに、教育価値観尺度の有効性について検討していきたい。・教育価値観の国際比較、年代観比較の包括的検討をしていきたい。・アジア諸国の対日イメージ形成過程とコンフリクト解決プログラムの開発を検討していきたい。・東日本大震災後のアジア諸国の日本イメージの変化とメンタルヘルス

■ メッセージ

・多様な文化的背景をもつ人々は、日常生活で遭遇する異文化体験から様々な葛藤やストレスを抱えています。そのような時、周囲にいる人々はどのように理解し、関わっていったらよいのでしょうか。コミュニティにおける多様性の意味や隣人として共に生きることはどのようなことか、一緒に考えていきたいと思います。

氏名	垣内 康孝
	KAKIUCHI Yasutaka
所属	サイエンス&エデュケーションセンター
職名	特任准教授
学位	博士(学術)/ Ph.D
専門分野	細胞生物学、理科教育/Cell Biology, Science Education
URL	
E-mail	kakiuchi.yasutaka@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

理科教育／科学教育
理科自由研究
三次元細胞培養

Science Education
Science Independent Research
Three Dimension Cell Culture

主要業績

研究内容 / Research Pursuits

1) 小学校理科教育の手法開発・教員研修の教材開発およびシステム開発・理科自由研究の指導方法／実践方法開発 2) 三次元環境下の細胞培養・三次元環境下の細胞の特性解析・三次元ペプチドゲルの特性解析および開発

[Science Education for Elementary School] * development of teacher training methods for elementary school science * development of teaching methods for science independent research [Cell Culture within three-dimension environment] * cell properties and behavior within three-dimension culture * properties of culture substratum peptide hydrogel

■ 教育内容 / Educational Pursuits

コア・サイエンス・ティーチャー (CST) 副専攻を担当し、本学大学院生ならびに現職小学校教員に向けて、小学校理科指導や教員研修に関する講義演習を行なっている。担当科目: CST理科教育法Ⅰ / CST理科教育法Ⅱ / 自由研究指導法 / 教員研修実践論 / 教職インターンシップ

In charge of 'Core Science Teacher (CST)' minor subjects to teach basic science, science teaching methods and teacher training methods, for graduate students and elementary school teachers. Subjects in charge: CST Science Education I / CST Science Education II / Teaching Method for Science Project / Methodology for Teacher Training / Teaching Internship

■ 研究計画

【将来の研究計画・研究展望】《理科教育に関して》初等理科教育、特に小学校理科の底上げが我が国の喫緊の課題です。理科教材の開発、理科指導法の開発、教員研修法の開発を進め、初等理科教育の向上を目指しています。また、科学の最前線に立つ研究者が理科教育に関わるためのより良い方法も探っていきたいと考えています。《基礎自然科学に関して》三次元環境における細胞の特性はまだまだ分かっておりません。また、細胞の特性を引き出すための三次元培養基質も開発されておりません。これらの解明・開発を進めることが将来の目標です。【共同研究の可能性】《理科教育に関して》理科教員研修法の開発 理科自由研究の指導法開発 その他、理科教育《基礎自然科学に関して》細胞培養 ペプチドハイドロゲル

■ メッセージ

《学生へのメッセージ》学生の間は、物事をじっくりと深く、納得いくまで考えることのできる特別な時間です。次の3つの事を大切に、実り豊かな時間を送ってください。相談があれば応じます。1) 基礎・原理原則から考える 2) 与えられた情報を鵜呑みにせず、自ら観察／体験したことを大切にする 3) 遠くの目標 (実現したい夢) と近くの目標 (リアルな前進手段) のふたつを常に意識する

氏名	香西 みどり
	KASAI Midori
所属	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系
職名	教授
学位	博士(学術) (1995 お茶の水女子大学)
専門分野	調理科学 (特に調理過程における食品の品質変化の制御)
URL	http://www.food.ocha.ac.jp/chori/cook.htm
E-mail	kasai.midori@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

調理
野菜
米
予測

cooking
vegetables
rice
orediction

主要業績

シュウの空洞膨化に及ぼす諸条件の影響とその機構、小口悦子、山越美歩、香西みどり、日本家政学会誌、62、691-700 (2011)

A Study of Cooking Terms and Expression for the Water Heating Process-English, Japanese and Chinese-, Nami Fukutome, Keiko Goto, Sonoko Ayabe, Mei-Hui Chen, Chen-Chen Chang, Midori Kasai, J. Asian Regional Association for Home Economics, 18, 100-110 (2011)

研究内容 / Research Pursuits

食品の調理過程における様々な変化に対して現象の把握とメカニズムの解明に関する研究を行った。小麦粉調理では膨化の成否が仕上がりに大きくかわるものがあり、シュウは1つの空洞化をなすことからその代表的な1つである。小麦粉、水、バター、卵からなるシュウ生地は通常は第一加熱および第二加熱を経て空洞化が起こるが、第一加熱を行わないでも一定の型にいれることで空洞化が起こることを見出し、その原因究明を行った。また調理操作の用語で最も重要なもののひとつである沸騰に関する用語を収集し、日本、中国、アメリカの調理初心である学生を対象にアンケート調査を行った。あわせて沸騰過程を温度と対応させたサンプルビデオを作詞し、沸騰表現用語の三カ国比較を行い、調理における沸騰の体系的研究を行った。他に野菜の硬さの制御および最適加熱時間の予測に関する研究、米飯の食味と内在性酵素の関係解明に関する研究、ハッシュウマメの調理特性に関する研究を行った。

■ 教育内容 / Educational Pursuits

学部の授業ではリベラルアーツの色・味・香に関して「おいしさのサイエンス」を行った。食物栄養学科以外の学生に行う文理融合型の授業であり、調理実習室を使用して講義と実習、演習を行った。学生は様々な食品の嗜好特性および調理特性について講義を受けた後グループごとに実習内容を計画して調理実験の実習を行い、発表、討論によって理解を深め、調理を科学的に考えることができた。食物栄養学科の専門科目として調理科学、食嗜好評価学、基礎調理学実習など調理学に関する授業を行った。大学院の授業では調理科学特論、食嗜好設計学を行った。また学部の学生に対する卒論指導、修士の学生に対する修論指導、博士課程の学生に対する研究・論文指導を行った。学部、大学院学生ともに、生活における諸現象の中に食および調理学の視点からも問題意識を持ち、問題解決をはかるための基礎的力が付くように講義、実験、実習を関連つけた授業内容を組み立てることを目指した。

■ 研究計画

様々な食品の調理過程における物理化学的特性の変化を追求し、現象の把握とメカニズムの解明を引き続き行っていく。またこれまで調理過程の数量的把握と最適調理条件の予測に関する研究を体系的に行っており、さらなるデータの蓄積をはかる。

■ メッセージ

食品をおいしい食物にすることが調理であり、その過程を成分や物性、組織などから調べるといろいろな発見があります。一つ一つの変化を定性的、定量的に把握することは変化の過程を予測したり、最適な調理条件を見つけるということにつながります。経験的に決められた調理条件の理論的根拠を明らかにし、新たな条件設定を可能にするということは、未知の扉を開く探検人のようでおもしろいものです。日常の生活の中で調理の問題を発見し、解決の糸口を自分でつかむことで、より食べ物に興味深くなるという良循環ができ、生活が楽しくなると思います。

氏名	加藤 敬子
	KATO KEIKO
所属	教育開発センター
職名	講師
学位	教育学修士
専門分野	教育学
URL	
E-mail	kato.keiko@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

入試制度
社会教育
高等教育
生涯教育
メディア

entrance examination
social education
higher education
lifelong education
media

主要業績

『占領期のキーワード100』青弓社「六・三制」「男女共学」「社会科の授業」「学校給食」等

研究内容 / Research Pursuits

“これからの社会は高度情報化、グローバル化、少子高齢化がさらに進展するといわれていますが、そのなかで社会の様々な分野でリーダーとなる人材育成が重要であると考えられます。また、近年の社会変化に伴い入学方法も変化してきています。このようなことから大学における入学制度の問題に取り組んでいます。本学に新しく導入されたAO入試を中心として、一般入試や推薦入試、帰国子女入試など入試形態別追跡調査を行っています。

また、高大連携の流れに沿って、高校から大学へのスムーズな連携のための教育システムについても調査研究を進めています。大学進学における大学選びのための情報提供の在り方、入学までの準備教育などにも取り組んでいます。

これからの社会は高度情報化、グローバル化、少子高齢化がさらに進展するといわれていますが、そのなかで社会の様々な分野でリーダーとなる人材育成が重要であると考えられます。また、近年の社会変化に伴い入学方法も変化してきています。このようなことから大学における入学制度の問題に取り組んでいます。本学に新しく導入されたAO入試を中心として、一般入試や推薦入試、帰国子女入試など入試形態別追跡調査を行っています。

また、高大連携の流れに沿って、高校から大学へのスムーズな連携のための教育システムについても調査研究を進めています。大学進学における大学選びのための情報提供の在り方、入学までの準備教育などにも取り組んでいます。

Future society is likely to find itself more advanced in high level use of information technology, globalization and population shift to aged cohort, where skills development for leadership plays a vital role to produce capable leaders in various fields. Besides, admission method is, in fact, changing along with recent societal changes. In these circumstances I have been engaged in university admission system, focusing AO selection which is recently introduced to this university and covering the other admission methods such as general admission, admission by school recommendation and admission for students completing high school overseas in student achievement tracking analysis. Education system to collaborate with the affiliated high school is also my concern. For applicants I am providing information to select courses and for qualified applicants I am helping them prepare for enrollment. These are also other important roles of mine.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

現代社会における人間形成は、年齢にかかわらず生涯にわたって様々な方法で行われていますが、人々の多様な欲求に基づいた社会教育の在り方を追求しています。また、近年メディアが著しく発展していますが、メディアと教育、コミュニケーションと教育についても調査研究しています。特に、女性のライフコースにおけるメディアの影響は大きく、女性の人間形成に対するメディアの役割を考察し、女性とメディアの関わりを追求しています。

In present society human development is done over ages in various methods through lifetime. My second study area is lifetime education based on various demands of all ages. A third study area of my interest is media and education, or communications and education, coping with rapidly developing media. Especially media's impact on women's life course is very significant, so I have been studying media's role for human development of women and interactions between women and media intensively.

■ 研究計画

入試形態別追跡調査では成績だけでなく、卒業後の進路や学外活動や満足度なども調査し、総合的に分析していく予定です。また、高大連携の基礎となる大学広報についても力を入れていきたいと思っています。在学生や卒業生の参加、高校教師や保護者の参加も促進した広報の在り方を模索していきたいと思っています。

■ メッセージ

基礎的な学力を基盤として文系・理系にかかわらず広く学んでほしいと思います。その上で専門分野を深く追求されることを希望します。キャンパスには様々な地域から個性豊かな学生たちが集まっていますので互いに切磋琢磨し自己の才能を伸ばしてほしいと思います。

氏名	加藤 美砂子 KATO Misako
所属 職名	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系 教授
学位	理学博士(1988 東京大学)
専門分野	植物生理学
URL	
E-mail	kato.misako@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

植物	plant
二次代謝	secondary metabolism
カフェイン	caffeine
プリンアルカロイド	ourine alkaloid
微細藻類	microalgae

主要業績

Niitsu, R., Kanazashi, M., Matsuwaki, I., Ikegami, Y., Tanoi, T., Kawachi, M., Watanabe, M.M. and Kato, M. Changes in the hydrocarbon-synthesizing activity during growth of *Botryococcus braunii* B70. *Bioresource Technol.* (2012)109:297-299.

Abe, J., Hori, S., Tsuchikane, Y., Kitao, N., Kato, M. and Sekimoto, H. Stable nuclear transformation of *Closterium peracerosum-strigosum-littorale* Complex. *Plant Cell Physiol.* (2011) 52:1676-1685.

植物の代謝と生合成 30講 芦原 坦、加藤 美砂子 著 朝倉書店 2011年

研究内容 / Research Pursuits

■ 教育内容 / Educational Pursuits

2年生の必修科目である代謝生物学IIを担当した。植物の代謝調節の基礎的な事項を解説した。3年生対象の選択科目である植物生理学ではさらに進んで植物生理学の最新の知見と共に実用化をめざした応用研究の現状を解説している。3年生の選択科目である代謝生物学実習を担当し、植物を材料とした代謝生物学実験の指導を行なった。

生物学科以外の学生を対象とした基礎生物学Aの1単位分を担当した。受講者の多くは、理科の教員免許の取得をめざす学生である。植物の代謝および植物ホルモンの作用について解説した。

The aim of the undergraduate program in metabolic biology II is to understand the basic mechanism of plants. I lecture on the hot results and the application in the field of plant bioscience in plant physiological engineering. In addition, I hold the lecture of basic biology A for undergraduate students.

■ 研究計画

■ メッセージ

地球のすべての生命は、生産者である植物に依存しています。植物の秘密を解き明かすことは、地球の未来を考えることにもつながっていきます。

氏名	加藤 美帆
	KATO Miho
所属	学校教育研究部
職名	講師
学位	教育学修士
専門分野	教育社会学、教育学
URL	
E-mail	kato.miho@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

教育社会学
 学校臨床社会学
 学校と社会変動
 就学前教育

主要業績

加藤美帆・河野志穂「第4章 人種、階級、ジェンダー—教育機会の平等を達成するための試み」『教育社会学—現代教育のシステム分析』牧野暢男・天童睦子監訳、東洋館出版、159-222頁(“Chapter4 Race, Class, and Gender: attempts to achieve equality of educational opportunity”, Ballantine, J. H., F. M. Hammack, 2009, The Sociology of Education: A Systematic Analysis, 6th edition, Pearson Prentice Hall., pp.109-154.)

加藤美帆「第13章 教育改革と教育運動」『教育社会学—現代教育のシステム分析』牧野暢男・天童睦子監訳、東洋館出版、585-625頁(“Chapter13 Educational Movements and Reform”, Ballantine, J. H., F. M. Hammack, 2009, The Sociology of Education: A Systematic Analysis, 6th edition, Pearson Prentice Hall., pp.420-449.)

加藤美帆「イギリスの幼児教育」『保育問題研究』第249号、88-92頁

加藤美帆「家族での子どもをめぐる関係を考える」『幼児の教育』第110巻 第7号、17-20頁

研究内容 / Research Pursuits

☐ 教育内容 / Educational Pursuits

☐ 研究計画

☐ メッセージ

氏名	河田 敦子 KAWATA Atsuko
所属 職名	人間発達教育研究センター 特任アソシエイトフェロー
学位	博士(社会科学)/Ph D
専門分野	教育史、教育行政史、教育制度史、女子教育史
URL	
E-mail	kawata.atsuko@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

日本教育史
教育行政史
教育制度史
山県有朋の教育政策
ジェンダー

educational history in Japan
history of educational administration
history of educational system
educational policy of Aritomo YAMAGATA
gender

主要業績

【競争的資金の取得】日本学術振興会科学研究費補助金基盤Cを研究代表者として取得「近代日本地方教育行政制度形成期における森有礼と山県有朋」

日本教育史学会第25回石川謙賞受賞講演（2012年4月28日）

研究内容 / Research Pursuits

筆者は、博士論文により近代日本地方教育行政制度形成における内務大臣山県有朋の果たした役割を明らかにした。本研究では、その山県有朋の教育行政政策と当時文部大臣であった森有礼の教育政策との関係を明らかにすることを目的としている。本研究は、次の三つの研究方法によりアプローチする。①両者の政策の相違を現場の教員たちがどのように感じていたかを地方教育雑誌から読み取る。②山県有朋は宗教政策を実施するために井上毅と共に宗教関係者と親交を深めていた。森有礼はキリスト教徒であるために神道関係者の反発を買ったとされている。本研究では、神道および国学関係者の両者の政策に対する反応を調査し明らかにする。③両者の動静を『時事新報』の彙報欄等から明らかにする。本研究の意義は、教員の専門性を教育会講習によって高めようとしていた森と、教員を地方吏員系列の下部に位置づけ文部行政を内務行政に統合しようとした山県の政策の相克を明らかにすることにより、教員の教育権の独立性は如何に確保されるかという現代的課題を歴史的に考察することである。

This research clarifies the conflict between Arinori MORI (Minister of Education) and Aritomo YAMAGATA (Minister of Home Affairs) in 1880's caused by the difference on the educational policy. Arinori MORI intended to realize the professional control by raising the abilities of primary school teachers. The other hand Aritomo YAMAGATA intended to control primary school teachers by ranking them under public officials. This study is approached by three points of view as follows. 1. How the teachers at that time felt about the difference is read from "Journal of educational committee" (Kyōuikukai zasshi). 2. How Shintoists and scholars of ancient Japanese felt about the difference of their religious and moral educational policy. 3. The relationship between MORI and YAMAGATA by using the articles on the newspapers. The importance of this study is how and why the teachers' right and independence on education should be established is considered and discussed historically.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

下記の大学で非常勤講師をしている。・武蔵野美術大学造形学部通信教育(教育原理Ⅰ)・埼玉工業大学(道德教育の研究)・埼玉学園大学(子どもの教育の歴史)

Parttime lecturer:1.Musashino Art University: Correspondence Course, College of Art and Design (Principle of education)2.Saitama Institute of Technology (study on moral education)3.Saitama Gakuen University((history of education on children)

■ 研究計画

教職の専門性は何か。専門性をもつ教員をどのように養成することができるのかが現在世界中で問われている。日本では、1999年地方分権一括法が制定され、かえって、教育公務員特例法によって保障されていた教育者としての独立性が脅かされている。筆者が明らかにしようとしているのは、近代日本において、小学校教員の身分が般行政における地方官系列の中に組み込まれ、その専門性と独立性がないがしろにされていく過程である。筆者は、基本的に教員の専門性は、知識の魅力を教え、被教育者の思考力を鍛えられる力量だと考えている。このような専門性が国家や府県の政治から自由であるために、どのような教員養成システム、教育制度が必要なのかを提案できるような歴史研究をしたいと考えている。

■ メッセージ

氏名	河村 哲也 KAWAMURA Tetuya
所属 職名	教授
学位	工学博士(1984 東京大学)
専門分野	数値流体力学、環境科学、シミュレーション科学
URL	
E-mail	kawamura@is.ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

数値流体力学
環境流体力学
ナビエ・ストークス方程式
シミュレーション科学
自然エネルギー

Computational Fluid Dynamics
Environmental Fluid Dynamics
Navier-Stokes Equation
Simulation Sciences
Natural Energy

主要業績

桑名杏奈、秋保美幸、河村哲也「岩石風食の数値シミュレーション(Numerical Simulation of Wind Erosion for Rock)」日本流体力学会誌「ながれ」第30巻 No.2, pp.69-73 2011

.Yuko Sato and Tetuya Kawamura, "New Numerical Method for Calculation of Flow in a Long Region with Free Surface", Theoretical and Applied Mechanics, Vol.60, pp.73-78, 2011

Anna Kuwana and Tetuya Kawamura, "A Numerical Method for Thermal Convection in a Vertical Long Pipe", Theoretical and Applied Mechanics, Vol.60, pp.155-162, 2011

Akiko Mano and Tetuya kawamura, "Typical Plume Extent of Rhone River Plume", Computational Fluid Dynamics Vol.19(1), 2011.5

Akiko Mano and Tetuya Kawamura, "Numerical simulation for diffusion process by the Kelvin-Helmholtz instability", Natural Science Report of the Ochanomizu University Vol.62(1) pp.1-7, 2011

研究内容 / Research Pursuits

流体現象の数値シミュレーションとその環境科学、環境工学への応用および流体現象の支配方程式であるNavier-Stokes方程式の数値解法に興味をもって研究を行っています。2011年度は科学研究費の研究課題である細長い領域における熱対流問題、および細長い領域における自由表面問題に取り組みました。

また、海洋汚染問題に関連してローヌ川河口域での浮遊物質の拡散の数値シミュレーションも行いました。さらに東日本大震災をうけて、種々の海底地形における津波の伝搬の数値シミュレーションや電力不足に備えて、新しいタイプの風車まわりの流れの解析も行いました。また、都市災害の一因となるマンホールからの水の噴出のシミュレーションや鉄道車両に横風が当たった場合の横転の可能性も数値シミュレーションで調べました。

My research themes are concerned with numerical simulations of various fluid flow and their applications to

environmental sciences. I am also interest in developing numerical method for solving Navier-Stokes equation. I applied new numerical method for the flow in the very long region which is in general very difficult to solve by ordinal method.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

2011年度は1名の課程博士と1名の論文博士を指導し、博士号を取得させました。また3名の博士前期課程2年生を主任指導しそれぞれに修士号を取得させました。また博士後期課程2年生1名、1年生1名の研究指導、博士前期課程1年生5名の研究指導をおこなったほか、情報科学科4名、物理学科2名の4年生に対し、卒業研究指導を行いました。講義としてはシミュレーション科学特論演習(博士前期課程)、環境情報論(博士後期課程)を受け持ちました。

In graduate education, I had one class in master program named "Practice of special lecture of simulation science" and also had one class in doctor program named "Environmental information science". My two students obtained Ph.D degree and my three students obtained master degree this year(2011.4-2012.3). I supervised 2 students (1st year and 2nd year student in doctor course and 5 students (1st year students in master course) in the same period.

■ 研究計画

身の回りの流れや理学的に興味深い流れ、工学において重要な流れ、生物現象による流れ、環境問題やエネルギー問題、防災に関連する流れなど、種々の流体现象を数値シミュレーションによって解明してきましたが、それらをさらに発展させたいと思います。またそのための基本となる数値解法や数値シミュレーション手法(表示法を含む)を開発したいと思います。また、上記のことに関してテーマは問わず積極的に共同研究を行うことを考えています

■ メッセージ

近年のコンピュータの目覚ましい進歩によって、数値シミュレーションは理論と実験に並ぶ第三も研究方法として限らない可能性をわれわれにもたらしてくれました。

数値シミュレーションでは現象をなるべく正確に表す物理モデル、計算モデルを作ってコンピュータで計算して、結果を解析します。モデルを取り扱うだけなので、小は原子分子の世界から、大は宇宙規模の現象まで、また超高温(低温)や超高压(低圧)といった極限状態の現象の解析や、原子力発電所が爆発したときの影響評価など危険で実験できないような現象に対して答えを出してくれます。ただし、モデルに依存するため何らかの検証は常に必要です。私の研究室では主に流体(気体や液体など流れる物質の総称)に関する種々の現象を数値シミュレーションを用いて解析しています。これは理学、工学、医学、環境科学等に幅広い応用があります。原子力発電所の事故で再生可能なエネルギーが注目されていますが、効率がよくまた騒音も少ない風車を提案するというのも流体の数値シミュレーションのひとつの応用です。このようなことを自分の専門にして社会に役立ちたいと考えているみなさんは大歓迎です。

氏名	菅野 健
	KANNO Ken
所属	人間文化創成科学研究科文化科学系
職名	准教授
学位	文学修士 (1975 東京大学)
専門分野	独文学、特にトーマス・マンを中心とする20世紀独文学
URL	
E-mail	kanno.ken@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

ドイツ語
ドイツ文学
トーマス・マン
教養小説
精神史

主要業績

研究内容 / Research Pursuits

コア科目としてのドイツ語を、全学部の学生を対象として、いかに丁寧にかつ効率的に教えるか、ということが、専門のドイツ文学のコースがないお茶大においては(ドイツ語の専任は一人)、常に一方の研究課題にならざるをえません。『改訂・ドイツ語の文法』を作成した後は、どこをどうすればさらによくなるかを考え続けています。ドイツ文学の研究対象としては、ゲーテ、シラー、ショーペンハウアー、ヴァーグナー、ニーチェなどの影響を多大に受けた、20世紀最大の作家の一人トーマス・マンを主たる対象として考察を続けています。時代の精神状況がどこからどこへ、どのようにして流れて行くのか、それを偉大な精神がどのようにとらえて表現しようとするのか、ということを思索の原点にしています。さらにこの大きな精神史の流れをとらえる一環として、このところかなり長期にわたって、『フィヒテ全集』の本邦初訳となる著作の翻訳に取り組み続けています。同様の趣旨で、ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの本邦初訳の翻訳も続けています。

■ 教育内容 / Educational Pursuits

基礎ドイツ語では、文教育学部の文Bというクラスと、理学部全体のクラスの、それぞれ「文法」と「演習」をペアで2コマ、計4コマ担当しました。週2回のリレー形式での授業なので、相当な実力がつき、その教育成果は、多数の独検合格者が出るという形でも現れました。 中級のクラスでは、『ドイツ・ことばと文化ーやさしく読めるドイツ文化史ー』を精読しつつ、ドイツの文化の流れを学び、ドイツ語の読解力を高めました。「初歩」のクラスも担当し、1コマでドイツ語の基本を教育しました。 専門科目「独文学演習」では、ヨハンナ・シュピーリの『ハイジ』を一字一句おろそかにしないで読みつつ、ドイツ語の力を伸ばし、大学院の「近代独文学論」「近代独文学演習」では、ゲーテにつながる、ヨーロッパにおけるドイツ文学特有の教養小説のあり方について、考察を深めました。

■ 研究計画

お茶大生のために長年の授業経験を生かして作成した教科書『改訂・ドイツ語の文法』を、さらによりよきものにしていきたいと考えています。 ドイツ文学の分野では、精神史の大きな流れ、ルター、レッシング、ゲーテ、シラー、ショーペンハウアー、ヴァーグナー、ニーチェ、そしてトーマス・マン(1875-1955)に至る時代の背後に潜む精神状況を考察の対象にしています。人間の精神は、それぞれの時代に、どこから来てどこへ行こうとしていたのか。そして今、我々はどこに向かっているのか。 このような大きな精神史の流れをとらえる一環として、このところかなり長期にわたって、『フィヒテ全集』の本邦初訳となる多数の著作の翻訳に取り組んでいます。すでに一冊は刊行されましたが、さらに二冊刊行される予定です。 また一方で、現在のジェンダー研究に至る先駆的役割を果たしたとも言えるヴィルヘルム・フォン・フンボルトの、まさにジェンダー論の、これまた本邦初訳となる論文の翻訳にも取り組んでおり、発表する予定です。

■ メッセージ

残念ながら専門のコースはないのですが、ドイツ語・ドイツ文学を、広く豊かな世界観・人生観を得るべく学びたい人にこそ、ぜひ入学してもらいたいと思っています。 ドイツ語の論理的構造をしっかり学んで行くことは、どのような学問分野を専攻するにせよ、その専攻分野の認識を深めることに役立って行く作業なのです。ドイツ語の基本構造を理解・分析する能力を高めて行くことは、それぞれの専門分野をより深く理解・分析する能力を高めることと、同時並行的に起こって行くことでしょう。 大学に入って、まさに生まれて初めてドイツ語を学び始めるということは、それまでは経験しえなかった新しい世界に触れることであり、その世界を果てなく広げて行くことでもあるのです。 森鴎外のドイツ留学を挙げるまでもなく、明治以来日本は、ありとあらゆる分野で、ありとあらゆることを、ドイツから学んで来たのでした。そのような文化と文化の交流の歴史に、皆さんも加わってほしいのです。

氏名	岸本 美緒 KISHIMOTO Mio
所属 職名	人間文化創成科学研究科文化科学系 教授
学位	文学修士(1977年3月)
専門分野	中国史
URL	
E-mail	kishimoto.mio@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

中国史

Chinese History

主要業績

Property Rights, Land, and Law in Imperial China, In Debin Ma and Jan Luiten van Zanden eds., Law and Long-Term Economic Change: A Eurasian Perspective, Stanford University Press, June 2011, pp.68-90.

「『中国』的擡頭——明末文章書式所見国家意識的一個側面」『日本中国史研究年刊 2009年版』上海古籍出版社、2011年12月、163-186頁。

「『岐路灯』に見る清代中国の身分感覚」『比較日本学教育研究センター研究年報』8号、

研究内容 / Research Pursuits

2011年度は、英文論文1本、中文論文1本(2009年に刊行した日本語論文の翻訳)、日本語論文1本を刊行した。そのほか、書評6本(日本語4本、英語1本、中国語1本)や展覧会のカタログ解説などを出した。国際学会では、4月にロンドンのLSEで行われたENIUGH会議で経済史関係の報告を、また9月に武漢大学で行われた日中論壇で社会史関係の報告を行った。依頼原稿が多く、なかなか自分の研究ができない状況であるが、書評は学界の活性化にとって必要なことだと思うので、なるべく引き受けるようにしている。そのほか、従来発表した論文などをベースに論文集を2冊まとめた(2012年5月—6月に刊行予定)。

☐ 教育内容 / Educational Pursuits

☐ 研究計画

☐ メッセージ

氏名	北岡 タマ子
	KITAOKA Tamako
所属	知的財産本部
職名	アソシエイトフェロー
学位	修士(コミュニティー振興学)(2007年)
専門分野	知的財産、産学官連携／博物館学
URL	
E-mail	kitaoka.tamako@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

知的財産
産学官連携
文化資源情報
著作権

Intellectual property
Industrial and governmental relations
Cultural heritage documentation
copyrights

主要業績

博物館学事典, 全日本博物館学会(編集), 雄山閣, 2011.9

文化資源のデジタル化に関するハンドブック, 東京大学大学院情報学環・凸版印刷共同研究プロジェクト, 2011.9

研究内容 / Research Pursuits

■ 教育内容 / Educational Pursuits

■ 研究計画

大学における知的財産管理および産学官連携活動の手法等について、事例研究や文献研究によって知見・ノウハウを蓄積している。当分野における大学間のネットワーキングにも積極的に参加しており、今後もこれらをお茶の水女子大学での実践に活かしていく。より多様で質の高い研究成果の創出支援や研究体制構築支援(産学官連携等による資金、設備、人材の充実等)、また研究成果や学術的な知見を応用した社会活動の推進支援につなげていきたい。

■ メッセージ

知的財産本部では、大学の研究成果の知的財産としての管理・活用、また産学官連携活動を通じた研究成果の創出・活用について取り組んでいます。大学の「知」の社会との接点を顕在化する活動を推進しています。お茶の水女子大学にある多様で特色溢れる研究成果、取り組みを社会還元していきたいと思いをします。

氏名	北島 佐知子 KITAJIMA SACHIKO
所属	人間文化創成科学研究科先端融合系
職名	准教授
学位	博士(理学)
専門分野	量子情報理論、非平衡統計力学
URL	
E-mail	kitajima.sachiko@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

デコヒーレンス
量子通信理論
量子情報理論

decoherence
quantum communication theory
quantum information theory

主要業績

Masashi Ban, Sachiko Kitajima, and Fumiaki Shibata: Trace distance in stochastic dephasing with initial correlation, Phys. Rev. A 84, (2011) 042115

Masashi Ban, Sachiko Kitajima and Fumiaki Shibata: Qubit decoherence with an initial correlation, Phys. Lett. A, 375, (2011) 2283-2290

研究内容 / Research Pursuits

非平衡統計物理の分野における基礎的諸問題、またその関連分野として量子情報分野に着目し、具体的な量子系に関わる基礎的課題を取り上げている。特に、量子系における緩和過程、コヒーレンス消失現象に関わる問題について、非平衡統計物理の手法や量子力学の基礎的方法論を用いた系統的な理論研究をすすめている。量子系の緩和過程とは、環境系に囲まれた量子系が、環境系との相互作用を通して時間とともに状態変化を生じ、そのコヒーレンスを失うという現象である。この問題は量子論および非平衡統計物理の基礎的課題として長い歴史をもち、近年では量子情報分野にて情報消失に関わる重要課題の一つとして強い興味の対象となっている。我々の研究では、そのミクロな機構を捉え性質の詳細を明らかにするために、系の情報を担う密度行列の時間変化を追うという方法論を中心に、具体的な量子模型、量子確率模型等を取り上げている。また、近年では初期相関の有無との関連が広く関心を集めており、これまでの成果を踏まえてこの問題についての詳細な解析を行っている。

■ 教育内容 / Educational Pursuits

学部 : 古典力学、電磁気学演習、物理数学演習を担当。大学院: 博士前期過程の講義として、量子物理学特論、理学総論(1回分)を担当。また、博士前期課程の学生2名、学部4年生4名が参加するゼミなどを通して、量子情報理論の基礎、および個々の研究テーマについての議論等を行った。

■ 研究計画

非平衡統計物理分野の基礎的課題を取り上げた研究をさらにすすめる。特に、量子系のコヒーレンス消失および回復過程やエンタングルメント、またこれに関わる諸問題について、量子系の観測問題を扱う際に重要な役割を演じた理論模型や確率模型を基にした研究の発展を目指す。非平衡統計物理の分野と量子情報系の研究の相互作用によって、両分野における重要課題に対して効果的に新たな知見を得て、それを踏まえた理論的枠組構築といった発展を視野に入れて研究を進展させる。

■ メッセージ

氏名	刑部 育子
	GYOBU Ikuko
所属	人間文化創成科学研究科人間科学系
職名	准教授
学位	教育学修士(東京大学)
専門分野	発達心理学・保育臨床学
URL	
E-mail	gyobu.ikuko@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

幼稚園におけるフィールド研究
観察ツール
アートと学習

Field Study in Kindergarten
Observation Tool
Art and Learning

主要業績

Gyobu, I. (2011). How to make a video discussion a "conference"? Proc. of International Society for Cultural and Activity Research (ISCAR2011).

植村朋弘・刑部育子・戸田真志 (2011). 観察記録ツール“CAVScene”のデザイン. 『デザイン学研究作品集』, 16(16), 34-37.

刑部育子 (2011). 「見ると見える」:ビデオツールCAVSceneの開発と活用を通して. 『日本保育学会大会論文集』, 64, 45.

刑部育子 (2012). 幼稚園でアートが生まれる時. 『幼児の教育』, フレーベル館, 111(1), 35-38.

研究内容 / Research Pursuits

(1) 科学研究費(基盤研究(B))助成による教育実践フィールドに有効な観察調査ツール開発を進めた。

My research interests lie in the field of education, specifically pre-school and elementary school level. I conduct collaborative researches in the area of children's school activities with school teachers. I'm part of the observation tool development team. This tool is used for field research in education. We will use this tool as follows. In kindergarten, I will observe the activities in the morning session. Then, I and the teachers will meet and discuss my observations in the afternoon session. Here we will design the next program of activities to better suit the needs of the children.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

平成23年度学部授業として、「保育臨床学」、「人間関係学」、「保育臨床講義購読」、「保育臨床実習」、「発達臨床特別演習Ⅰ・Ⅱ」ほか、を行いました。大学院の授業では「保育実践論特論」、「保育実践論演習」、「保育関係学演習」、を行いました。平成23年度に私の研究室から提出された卒業論文・修士論文として、「幼児全体に笑いがおきる状況に関する研究—ある幼稚園の4歳児の場面から—」、「幼児にとっての狭い空間の意味」、「積み木遊びに見られる乳幼児の形態的美的感覚のビデオ分析による研究」、「活動移行場面において子どもが遊びの終わりを受け入れるまでの過程に関する研究」、「小学校における休み時間の意味—自らの活動を繰り広げる子どもたちの視点から—」、「子どもの“表現”のはじまり—粘土遊びにおける表現行為の内実を探る—」があります。

■ 研究計画

■ メッセージ

お茶の水女子大学敷地内には、日本で最も歴史ある附属幼稚園があります。また、国立大学の中で附属校として初めての保育所、いずみナーサリーが大学と同じ敷地内に設置されました。乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築を開発するため、大学と幼稚園・保育所が連携した研究プロジェクトが進行中です。このような学習環境が備わる中で実践的にそして専門的な保育・子ども理解・発達を学ぶことができます。

氏名	清本 正人 KIYOMOTO Masato
所属	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系
職名	准教授
学位	博士(理学)(1992 岡山大学)
専門分野	発生生物学
URL	http://marine.bio.ocha.ac.jp/
E-mail	kiyomoto.masato@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

棘皮動物
細胞分化
バイオミネラライゼーション
重力環境
化学物質における形態異常

Echinoderm
cell differentiation
biomineralization
gravity
chemical effect for morphogenesis

主要業績

Kiyomoto M, Izumi-Kurotani A, Eguchi H and Yamaguchi M (2011) The culture condition of larval skeletogenic mesenchyme cell for the gravity experiment. Space Utilization Research 27:193-194

研究内容 / Research Pursuits

ウニの発生や生殖について調べています。ウニの卵にはもともと方向性があり、骨や筋肉、消化管などを作る細胞はその片側(植物極側)から作られます。このうち、幼生の骨を作る細胞は、最も早くその発生運命が決定され事が知られており、取り出して培養しても骨を作る細胞になります。単離培養によって明らかになるそれぞれの部分の自律的な発生の能力を調べたところ、筋肉や消化管などになる部分も、小さな部分に分けて培養するとすべて骨を作る能力があることがわかりました。胚の中ではその能力が抑制され、本来の発生運命へ調節されていることになり、これまで知られていた以上に調節能力が高い(多分化能がある)ことを明らかにしました。金属イオンや化学物質の中には、形態形成や配偶子形成に影響を与えるものがあります。エストロゲンやリチウムイオン等の影響を調べています。

I am studying on the development and reproduction of echinoids. The sea urchin egg has a polarity, many kind of cells forming skeleton, muscle and digestive tract appear from the one side of egg (vegetal pole). It is well known that the cell line of skeletogenesis is a first group whose cell fate is decided at first. We have examined the developmental potential of each part in vegetal side and shown that most of all vegetal side has a potential of skeletogenesis in the culture after a separation to a small volume. It is considered that the skeletogenic potential is suppressed and each part is regulated to the normal cell fate in embryogenesis. Some of metal ions and chemicals have an effect on the morphogenesis of digestive tract. Exogastrula induced by Estrogen or Li, in which the digestive tract project to the outside, is examined. The roles of steroid hormones, such as estrogens, are also examined on the yolk protein production and gametogenesis.

教育内容 / Educational Pursuits

動物系統学、動物発生学についての授業、実習を担当しています。動物の系統学の授業では、地球上に存在する主な動物門の特徴を解説し、体制の特徴を系統進化の順にたどります。動物の発生学の授業では、一個の細胞である受精卵から、動物の体が出来上がるまでの形態の変化と、それを引き起こすメカニズムを、組織や細胞の相互作用や、シグナルを伝達する分子や遺伝子発現まで、現在までに明らかにされていることを解説します。実習は、臨海実験所(湾岸生物教育研究センター、千葉県館山市)で行っています。動物の系統学の実習では、潮間帯での磯採集やプランクトン採集により、自分で集めた材料を調べ、無脊椎動物の多様性の実際を理解します。動物の発生の実習では、棘皮動物の受精、初期発生について、胚操作や免疫組織染色等の実験を行います。さらに、水中での生物の観察調査を可能にするダイビングの実習も担当しています。

I teach the lectures and the experimental courses on the systematic zoology and developmental biology. In the lecture of systematic zoology, the characters of body plan of each phylum are expounded in the order of phylogeny. In the lecture of developmental biology, the morphological changes from a fertilized egg to the complete animal body are explained and the controlling mechanism by a interaction between tissues and cells and a signaling pathway of molecules and genes are expounded. Each laboratory courses are in marine laboratory (Marine and Coastal Research Center, Tateyama). In the laboratory course of systematic zoology, students go to sea shore to collect animals and take a boat to collect marine plankton by net. They understand the real animal diversity by examining animals collected by themselves. In the laboratory course of developmental biology, embryo manipulation and immunostaining on the fertilization and early development are performed. I also teach a laboratory course of diving for the observation and research of marine animals.

研究計画

ウニの胚細胞を単離培養することで、各部分の自律的な発生能力を調べている。現在明らかにされつつある、各組織の分化のためのgene regulation networkから、高い自律的な分化能力をどのように説明できるのかを調べていきたい。そこからは、祖先のもっていた発生のプロセスと類似したものが残っていることが近年示唆されており、発生のプロセスの変化として形態形成の進化を説明する手がかりが得られることが期待される。また、このようなウニ胚の細胞分化の技術を使って、化学物質や重力などが、どのステップにどのような影響を与えるかを明らかにし、それら環境要因の生物への作用を調べる生物検定の実験系にウニを利用できるようにしたい。さらに、棘皮動物等の生殖を調節する仕組みを明らかにして、実験材料として安定に供給することを可能にしたい。

メッセージ

生命の生まれた海には、今でも地上にくらべてとても多くの生物のグループが生息しています。本学の臨海実験所(湾岸生物教育研究センター、千葉県館山市)では、海のフィールドに飛び出して、無脊椎動物の多様な姿を見て触れられるカリキュラムが用意されています。もし、あなたに意欲があれば、水の中の世界までも、、、。海辺の施設で、動物の体の作り(ボディープラン)やその形成の過程(個体発生)を調べて、何億年分の進化に思いをめぐらすのはいかがですか？

氏名	工藤 和恵
	KUDO Kazue
所属	お茶大アカデミック・プロダクション
職名	特任助教
学位	博士(理学)
専門分野	量子スピン系、非平衡統計力学、パターン形成/
URL	http://www.cf.ocha.ac.jp/acpro/kudo/kazue/
E-mail	kudo.kazue@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

統計物理学
非線形・非平衡
量子ダイナミクス

Statistical Physics
Nonlinear Physics
Quantum Dynamics

主要業績

K. Kudo and T.S. Monteiro, "Theoretical analysis of super-Bloch oscillations", Phys. Rev. A 83, 053627 (2011)

Kazue Kudo and Yuki Kawaguchi, "Dissipative hydrodynamic equation of a ferromagnetic Bose-Einstein condensate: Analogy to magnetization dynamics in conducting ferromagnets", Phys. Rev. A 84, 043607 (2011)

研究内容 / Research Pursuits

1次元量子系における非平衡ダイナミクス: 1次元量子系に振動外場を加えたときのダイナミクスの研究。実空間上での確率分布の時間発展の数値計算と、量子古典対応を用いた理論解析。／ パターン形成: ソフトマター系および量子系における秩序構造形成の数理モデルの構築と、それを用いた数値シミュレーション。

Nonlinear dynamics in one-dimensional quantum systems: Theoretical study in one-dimensional quantum systems. The time evolution of a wavepacket under a time-periodic field is analyzed by means of quantum-classical relationships./ Pattern formation: Theoretical and numerical study of pattern formation in soft-matter and quantum systems.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

(学部) 物理英語 (大学院) 理学総論

(undergraduate) English for Physics (graduate)
Introduction to Science

■ 研究計画

量子ダイナミクスの研究では、量子輸送現象を効率的に制御する方法を模索する。パターン形成の研究では、量子系と古典系のパターン形成の機構の違いを探究する。また、ナノスケールの物性の制御につながる自己組織化現象を理論的に研究する。

■ メッセージ

物理学は、身近にある最新技術の基礎を支えています。大学4年間で学べる物理学はその中のほんの一部かもしれませんが、その基本的な考え方を身につけることは、将来とても役に立つと思います。

氏名	熊谷 圭知 KUMAGAI Keichi
所属 職名	人間文化創成科学研究科人間科学系 教授
学位	社会学修士(1981 一橋大学)
専門分野	社会文化地理学 オセアニア(パプアニューギニア)地域研究
URL	
E-mail	kumagai.keichi@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

地域	region
場所	place
開発	development
パプアニューギニア	Papua New Guinea
男性性	masculinities

主要業績

熊谷圭知「風景を失うことの意味——陸前高田と原風景をめぐる」『幼児の教育』2011年冬号

Keichi Kumagai (in press) Floating Japanese Young Men, Masculinity and Nation as Home, HAGAR (International Social Science Review), The Humphrey Center for Social Research, Ben-Gurion University, Israel.

研究内容 / Research Pursuits

昨年度前期は、私が研究分担者となる科研費(微量元素から捉える環境利用と文化的適応の地理学的研究。研究 代表者:野中健一立教大学教授)の調査を7-8月に行った。私が1986年以来通っている、パプアニューギニアのクラインビット村に10名の日本人研究者が滞在し、身体・栄養の調査を実施した。村人へのインフォームドコンセントの獲得から始まり、身体計測、食物の栄養分の分析など、多岐にわたる調査を、村人の全面的な協力の下に成功裏に実施できた(写真参照)。後期は、サバティカル休暇を得て、10月下旬~1月初旬まで、ニュージーランドのオークランド大学人類学科に滞在した。オークランド大学、ワイカト大学、ユニテック大学の3つの大学で日本の男性性の変容に関するセミナーを行ない、多くの聴衆の関心を集めた。また11月に採択が決定した科研費「ローカル・センシティブなジェンダー地理学とグローバル・ネットワークの構築」(基盤研究A)の第1回研究会を2月末に大阪で開催した。

1. Field Research in Papua New Guinea: We successfully conducted the research at Kraitbit Village in East Sepik Province, Papua New Guinea in July-August 2011, under the title of "A geographical study of local subsistence and cultural adaptation to the environment by analysis of micro-nutrition and minerals intake through livelihoods for sustainable development" in collaboration with villagers and East Sepik Province's Health Department.
2. Visiting the Department of Anthropology, University of Auckland, New Zealand Affiliating with the department as visiting academics from mid-October to early January, I engaged in the research on Oceanic studies. I presented the papers on Changing Masculinities in Japan at Univ. of Auckland, Waikato Univ. and Unitech.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

主な担当授業は次の通り。フィールドワーク方法論、オセアニア社会文化論Ⅰ・Ⅱ、グローバル文化学総論(共同担当) 地域研究実習Ⅰ(共同担当)、開発地域文化論(大学院) 大学院では、震災後の社会情勢をふまえて、グローバル化の中のローカリズムの可能性をテーマに、授業を行った。グローバル化の中で、北と南の格差、都市と農村の格差が広がる一方で、周縁化される南の地域、先進国を含むローカルの側から、それを積極的に乗り越えようとする運動が広がっている。この授業では、広井良典(2009)『グローバル定常型社会』、ラトゥーシュ(2010)『経済成長なき社会発展は可能か?——〈脱成長〉と〈ポスト開発〉の経済学』、Escobar, Arturo (2008) *Territories of Difference: Place, Movements, Life, Redes*. Duke University Press.などを主なテキストにしながら、グローバル化の中のローカリズムの可能性を、連帯経済やポスト開発論などと交差させて、議論した。

■ 研究計画

2011年度後期に採択された科研費「ローカル・センシティブなジェンダー地理学とグローバル・ネットワークの構築」の活動は、2013年8月の京都国際地理学会でのジェンダーと地理学研究委員会の主宰のための準備段階に入っている。このテーマをめぐる日本からの発信を促すとともに、国際学会でのネットワークを発展させていきたいと考えている。

■ メッセージ

フィールドワークとは、つまるところ身体を介した場所の体験です。その中で、他者・他所との関係性を求め、それを通じて変わっていく(広がり豊かになっていく)自分を見出す、それがフィールドワークの醍醐味でしょう。グローバル化の中で、異なる存在を他者化し、排除する動きが強まる傾向に抗い、他者との出会いを通じて自分が変わり、それに驚き喜ぶ自分を見出すこと、他者との間に差異とともに共有できるものも発見し、つながっていくこと、それを大切にしたいと考えます。またそうした志向性を持つ学生を育てたいと思っています。

氏名	栞田 和正
	KUWADA Kazumasa
所属	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系
職名	講師
学位	京都大学博士(情報学) (2004)
専門分野	確率論/probability theory
URL	
E-mail	kuwada.kazumasa@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

確率解析
カップリング
微分評価
距離空間
リッチ流

Stochastic analysis
coupling
gradient estimate
metric space
Ricci flow

主要業績

Coupling of Brownian motions and Perelman's L-functional (with R. Philipowski) Journal of Functional Analysis Vol. 260, no. 9 (2011) 2742–2766.

Non-explosion of diffusion processes on manifolds with time-dependent metric (with R. Philipowski) Mathematische Zeitschrift Vol. 268, no. 3 (2011) 979–991.

Heat flow on Alexandrov spaces 35th conference on Stochastic Processes and their Applications (invited special session) Oaxaca, Mexico / Jun. 2011

Optimal transport and coupled diffusion by reflection 5th international conference on Stochastic analysis and its applications (contributed talk) Univ. Bonn, Bonn, Germany / Sep. 2011

A probabilistic approach to the maximal diameter theorem 日本数学会年会 2012年度年会 統計数学科分会 東京理科大学 / Mar. 2012

研究内容 / Research Pursuits

Brown運動は、熱の伝播をランダムな粒子の運動として記述する確率モデルである。Brown運動の挙動は粒子の存在する状態空間の幾何学的性質と深い相関を持つ。特に、Brown運動のカップリングとその幾何学への応用について研究している。「カップリング」とは、相互作用を持つ2粒子であって、個々はBrown運動として振る舞うものを指す。状態空間の幾何学的性質を反映した“良い”性質を持つカップリングの存在は、様々な解析的／幾何学的性質と深い相関がある。例えば、空間の幾何学的性質を利用したカップリングの構成により、関数不等式が導出できる。あるいは逆に、関数不等式を持つ意味をカップリングの性質で特徴づけることができる。このような手法は、とりわけ、通常の微積分が展開しにくい特異空間での幾何解析で有用と考えられる。

The Brownian motion is a probabilistic model whose behavior describes propagation of heats. Its behavior is closely related to the geometry of the underlying space. I have worked on couplings of Brownian motions and their applications in geometry. Here “coupling” means two interacting particles each of which moves as a Brownian motion. The existence of a “nice” coupling in the sense that it well reflects the geometry of the underlying space provides a deep connection between several analytic and geometric properties of the underlying space. For example, a construction of a nice coupling by using a geometric structure of the underlying space can produces a family of functional inequalities. Conversely, a functional inequality can be characterized by a property of couplings. I think that such an approach will be useful especially for geometric analysis on singular spaces where usual differential calculus does not work well.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

学部配当として、基礎微分積分学、積分論、数学演習II、数学講話、微分積分学II、微分積分学演習IIの各講義を担当した。大学院配当として確率過程特論を担当した。関連して、主にそれらの授業内容に関連した質問を幾つか対応した。学部学生への研究指導セミナーで確率論に関する輪読を担当した。また、大学院生への研究指導セミナーで確率解析に関する輪読を担当した。

I gave lectures on Basic calculus, Advanced calculus II, Exercises in advanced calculus II, Lectures on mathematics, Measure and integration, Exercise in mathematics II for undergraduate students. For graduate students, I gave lectures on Advanced stochastic processes. I gave some tutorial to students who asked me mathematical question(s), many of which are related to my lecture. I also organize a seminar in probability theory and stochastic analysis for both undergraduate and graduate students.

■ 研究計画

最適輸送理論の言葉で定義された「曲率が下に有界」な測度つき距離空間上で、エントロピー汎関数の勾配流として構成される熱流を確率過程論と結合する。更に確率過程のカップリング法をそれらの熱流に適用することで、既知の関数不等式の性質を精密化する。また、カップリングの性質と関数不等式との対応関係を拡張することで、空間の幾何学的特性に対する多角的な理解を目指す。さらには、この対応を基にして、確率解析および関数不等式手法を無限次元空間、リッチフローや特異空間での幾何解析へ応用する。逆に、確率解析の手法で盛んに研究されている自己相似集合での解析学に対して、既存の手法を最適輸送の理論と結合する事で、新たな観点からの解析手法を確立する。

■ メッセージ

数学においては、公式をひたすら覚えそれらを組み合わせて事に当たるのではなく、問題の意味をよく考えながら勉強しましょう。計算の意味が分かっているならば、公式の覚え間違いなどで計算結果がおかしくなっても、常識で判断して間違いを修正できることが、しばしばあります。物事を深く考える力を身につけることは、数学に限らず、一生の宝となります。もちろん、大学でより進んだ数学を学ぶ場合も然り、です。

氏名	桑名 杏奈
	KUWANA Anna
所属	シミュレーション科学教育研究センター
職名	助教
学位	修士(理学) 博士(理学)
専門分野	数値流体力学/Computational Fluid Dynamics
URL	
E-mail	kuwana.anna@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

数値流体力学
(テーマ例1) 人工水晶育成のためのオートクレーブ
(テーマ例2) 岩石風食

Computational fluid dynamics
(ex.) Autoclave for Synthetic Quartz Crystal
(ex.) Deflation of Rock

主要業績

A.KUWANA and T.KAWAMURA, "A Numerical Method for Thermal Convection in a Vertical Long Pipe", Theoretical and Applied Mechanics Japan, 60, (2011), pp.155-162.

桑名 杏奈, 河村 哲也, "複雑形状パイプ内の熱対流の数値計算", 第25回数値流体力学シンポジウム, (2011), 口頭発表C12-2.

研究内容 / Research Pursuits

2011年度は数値シミュレーションにより下記の問題に対して研究を行った。
・オートクレーブ 人工水晶を生成する際、成長速度の増大・寸法のばらつきの減少のためには、オートクレーブ内の対流を軸対称とすることが有効だと考えられている。高温・高圧であるため、実際に容器内の液体の挙動を観測するのは困難であるため、数値シミュレーションが有効な解析手段の一つとなる。
・風による奇岩生成 風により岩石が浸食される現象の簡単なモデルを、砂輸送方程式を利用して表すことを試みた。トルコの Cappadocia にある奇岩を再現することを目標に、岩の形や硬さを設定してシミュレーションを行った。
・細長い流路内の流れ 細長い流路内の非圧縮性の流れを数値的に求める場合の問題点として、連続の式を精度よく満たすことが難しいことがあげられる。そこで、対象が細長い領域であることに着目して、連続の式は主流によりおおよそ満足させるという考え方に基づいた計算方法の提案を試みる。

■ 教育内容 / Educational Pursuits

情報基盤センターにて、コンピュータ・周辺機器・ソフトウェアに関する質問への対応を行った。

I helped students who had questions concerning the computer, peripheral devices, software at IT Center.

■ 研究計画

2011年度の研究を発展させる。・奇岩生成 風だけでなく雨水による浸食、温度差による岩石表面の風化などを視野に入れてシミュレーションを行う。・細長い流路内の流れ 主に熱対流問題について、複雑な形状の領域にも適用できるよう研究を進める。

■ メッセージ

数学や物理の公式も、コンピュータも、原理を理解すると面白さが数段跳ね上がると思います。ブラックボックス的にただ使うだけに留まらず、ぜひ、なぜそうなるのかを探求して、使いこなして下さい。

氏名	郡 宏
	KORI Hiroshi
所属	お茶大アカデミック・プロダクション
職名	特任助教
学位	博士(理学)
専門分野	非線形ダイナミクス/nonlinear dynamics
URL	http://www.cf.ocha.ac.jp/acpro/kori/
E-mail	kori.hiroshi@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

同期現象
複雑ネットワーク
概日リズム

Synchronization
Complex networks
Circadian rhythm

主要業績

Doi M, Ishida A, Miyake A, Sato M, Komatsu R, Yamazaki F, Kimura I, Tsuchiya S, Kori H, Seo K, Yamaguchi Y, Matsuo M, Fustin JM, Tanaka R, Santo Y, Yamada H, Takahashi Y, Araki M, Nakao K, Aizawa S, Kobayashi M, Obrietan K, Tsujimoto G, *Okamura H: "Circadian regulation of intracellular G-protein signalling mediates intercellular synchrony and rhythmicity in the suprachiasmatic nucleus", Nature Communications 2, 327 (2011)

R. Toenjes, H. Kori: "Synchronization of weakly perturbed Markov chain oscillators", Physical Review E 84, 056206 (2011)

H. Kori, Y. Kawamura, N. Masuda: "Structure of Cell Networks Critically Determines Oscillation Regularity", J. Theoretical Biology 297, pp. 61 – 72, (2012)

研究内容 / Research Pursuits

☐ 教育内容 / Educational Pursuits

☐ 研究計画

☐ メッセージ

氏名	小風 秀雅 KOKAZE Hidemasa
所属 職名	人間文化創成科学研究科文化科学系 教授
学位	文学博士(1995 東京大学)
専門分野	日本史学(日本近代経済史、経済政策史、交通史)
URL	
E-mail	kokaze.hidemasa@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

近代日本史
国際関係史
史料管理学
産業遺産
経済史

Modern History of Japan
Global History in 19th-20th Century
business archives
Industrial Heritage
Economic History in Japan

主要業績

The Political Space of Meiji22(1889) The Promulgation of the Constitution And the Birth of the Nation JAPAN REVIEW(国際日本文化研究センター) 23/2011

『明治時代史大辞典』第一巻 吉川弘文館(海運・港湾関係項目執筆)

小風(編)「ちがさきの関東大震災—市民の記憶—」(茅ヶ崎市史ブックレット14)

小風編『佐渡金銀山の歴史的価値に関する調査2011年度報告書』

小風監修『高校生のためのふるさと富山』(郷土史・日本史学習試作補助教材)

研究内容 / Research Pursuits

19世紀における日本の開国・開港を世界史的視野から再検討し、従来の植民地化の危機の有無を中心とした東西対立的な視点ではなく、日本の開港によって、初めて本格的なグローヴァル社会が歴史的に成立したことを解明しようとしている。また、日本の近代化の特徴を「脱亜入欧」でとらえようとするこれまでの通説に対して、日本的要素を加味し、欧米の模倣でない近代化を進めたことを明らかにしようとしている。また、産業遺産関係では、世界遺産の国内候補となったいくつかの地域を中心に、どのような方針と考え方で遺産として、後世に伝えていくか、という点に関する検討委員会に属し、専門的検討を行っている。そのなかには、当然産業企業の保有する企業史料も含まれるので、史料管理学的見地からの整理・調査を進めている。史料管理学としては、公文書管理法施行にともなう国立法人の文書館機能の保持義務にどのように対応するか、という検討を、アーカイブズ学会や学習院大学アーカイブズ系の研究者とともに進めている。

■ 教育内容 / Educational Pursuits

学部では、日本近代史を中心に、概説・講義・演習・史料講読、などを担当し、高校までの習う近代史から、考える近代史への発想の転換が起こるように、指導している。年に2回は現地調査を行い、実際に近代史の現場に立つことの必要性にも配慮している。大学院では、院生の多様な研究関心に対応して、研究を進めるうえで、適切な助言を与えるよう努力しているほか、外部資金を活用して、企業史料や産業遺産に実際に触れる機会を作り、史料上の研究にとどまらない、幅広い研究関心を持つように指導している。

■ 研究計画

日本の近代化と国際化について、本学出身者を含めた新たな視点からの共同研究グループを立ち上げ、論文集を編纂する企画を進めている。これにより、不平等条約にかんする理解はこれまでとは大きく変化し、新たな19世紀国際関係史を提示することが可能となろう。また、産業遺産関係では、文化庁や関係地方公共団体とともに、近代の文化財保存の新たな枠組み作りを進めていきたい。特に現在稼働中の産業遺産をどのように保全していくのか、という法的枠組みを創出したいと考えている。アーカイブズでは、喫緊の課題である大学アーカイブズに関する基本的な考え方を提示し、今後の大学アーカイブズ機能の拡充に向けた指針を示して行きたい。

■ メッセージ

大学は、高校までと全く異なる学びの場です。そこでは、主体的に自分の関心に従って学ぶことが求められます。教員や提示したものを消化するだけでなく、自ら課題を見つけ、じぶんで取り組み、自分なりの解答を出していくことが重要になります。そういう姿勢は卒業後、専門職を目指す人のみならず、一般社会人としても必要な態度であり、大学はそうした人材を育て、社会に送り出していく役割を担っています。少人数教育を特徴とする本学では、より密度の高い教育を提供し、教員、先輩の学生らとともに自分を磨くことができます。ぜひ一緒に勉強しましょう。

氏名	小坂 圭太
	KOSAKA Keita
所属	人間文化創成科学研究科文化科学系
職名	准教授
学位	音楽修士(1987、東京芸術大学)
専門分野	ピアノ演奏学
URL	
E-mail	kosaka.keita@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

ピアノイズムの発展

日本の近代化とピアノ教育の歴史

主要業績

『カンディンスキーと青騎士』展(主催:産経新聞社、兵庫県立美術館)レクチャーコンサート(企画とお話:岡田暁生)に於けるピアノ演奏(5月8日、兵庫県立美術館)

「芸術する学問 第2日 バーゼンドルファー1920」(企画とお話:伊東信宏) 大阪大学21世紀懐徳堂 修復記念特別企画(11月4日 大阪大学21世紀懐徳堂)

『みる・ハルサイ』水戸芸術館震災復興再開第1弾アートカフェ

研究内容 / Research Pursuits

■ 教育内容 / Educational Pursuits

■ 研究計画

1830年代にChopin,Schumann,Mendelssohnらによって刷新されたピアノニズム、また第1次大戦前後にBartok,Prokofieff,Hindemithらによって刷新されたピアノニズムはどのような点が革命的で、どのような点が伝統からの持続と見做されうるのかを検証する。

■ メッセージ

他人の作った楽曲を「正しく」演奏する、というのは、どう云う事なのだろうか？例えば、こんなにち余りにも、ミスをしない、という事に一元化されていないだろうか？その様な事を演奏に際して常に考え、しかし、他者に何かを伝えるという行為は技量抜きでは成立しないということを理屈抜きに感得したい、そういう皆さんの挑戦をお待ちします。

氏名	小谷 眞男 KOTANI Masao
所属 職名	人間文化創成科学研究科人間科学系 准教授
学位	学術修士(1989東京大学)
専門分野	基礎法学(法社会学、比較法文化史、イタリア法文化論)／sociology of law and comparative legal culture, especi
URL	(日本語版) http://www.soc.ocha.ac.jp/Site/Teacher_Kotani.html
E-mail	kotani.masao@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

イタリア
比較法文化
リベラルアーツ法学教育
ろう文化
法と文学

Italy
comparative legal culture
liberal arts legal education
deaf culture
Law and Literature

主要業績

『世界の社会福祉年鑑2011』(編集代表:宇佐見耕一・小谷眞男・後藤玲子・原島博、旬報社、2011年12月)編集代表として第1部の「総論」を執筆した。

小谷眞男・下城史江・飯泉菜穂子「(総説)新しいリベラルアーツとしての日本手話:お茶の水女子大学における「手話学入門」導入の経験から」(『手話学研究』20、pp.19-38、2011年12月)

「イタリアにおけるバイリンガリズム---コッサート小学校の調査から---」(日本手話学会報告、2011年10月、関西学院大学)

厚生労働科学研究費補助金政策科学総合研究事業『社会的養護における児童の特性別標準的ケアパッケージ:被虐待児を養育する里親家庭の民間の治療支援機関の研究 平成23年度総括・分担研究報告書 研究代表者 開原久代』2012年3月4日、pp.226(分担執筆:「イタリアにおける脱施設化と里親委託率の動向」pp.35-38)

研究内容 / Research Pursuits

1) 貧困・格差と社会福祉という問題について、capability approach の見地から研究をおこない、その成果を発表した(業績1)。2) リベラルアーツにおける日本手話のカリキュラム導入についてケーススタディをおこなった(業績2)。3) 比較ろう文化論の研究として、イタリアにおけるろう児の統合教育に関する実態調査の成果を学会で発表した(業績3、添付のスライド参照)。4) イタリアにおける児童の施設的処遇と里親委託率の関係について最新の状況をレポートした(業績4)。5) 新しい教養法学構想を検討した。具体的成果は2012年度以降の担当科目や新設科目提案に反映される。6) 19世紀イタリア法文化史の研究をおこない、とくに司法統計に着目した分析論文を執筆した(2012年度前半公刊予定)。7) ローマ刑法史の研究に着手した。8) リスク社会(Risikogesellschaft)論の研究をおこなった。9) 比較法文化論の一環としてアラブの春についての調査研究に着手した。

1) capability approach on poverty 2) Japanese Sign Language in the Liberal Arts 3) comparative deaf culture: case study in Italy 4) child welfare in Italy 5) law in the liberal arts 6) Italian legal culture in the 19th century 7) criminal justice of Roman Law 8) Risikogesellschaft 9) comparative legal culture: case study of arabic spring

■ 教育内容 / Educational Pursuits

生活法学演習I・II、生活法学、消費者科学入門(消費者法の分野を分担講義)、法学II(法学入門)、生活法社会論等の諸科目において、生活世界と法システムの関係および法文化をめぐる諸問題について、さまざまな角度から、法社会的に検討した。手話学入門にアテンドし

Lectures and seminars on the sociology of law and the comparative legal cultures.

■ 研究計画

1) イタリア法文化研究を比較法文化論一般に展開させていく構想を温めている。2) 法と文学についての研究、教養法学方法論の研究。3) ベッカリーアの市民社会論の研究。4) マリオ・パガーノ『刑法典の原理』『刑事訴訟論考』の翻訳・研究、ガエターノ・フィランジェーリ『立法の科学』の翻訳・研究、近現代イタリア刑事法史の研究。5) イタリア司法統計史についての調査研究をとりまとめる。6) イタリアにおける国民国家形成とイタリア法の生成という問題のさらなる追究(とくにリソルジメント期)。7) イタリア社会福祉についてのコムーネレベルでのケーススタディ。イタリアにおける災害対策の研究。8) イタリアにおける「ろう文化」、イタリア手話(LIS)の研究。

■ メッセージ

一所不住、雲水行脚、必ず樹下石上を宿とす。まずは異国の土を踏もう。

氏名	小玉 亮子
	KODAMA, Ryoko
所属	人間文化創成科学研究科人間科学系
職名	教授
学位	教育学修士(東京大学, 1986)
専門分野	教育学・家族社会学
URL	
E-mail	kodama.ryoko@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

教育
子ども
家族
社会史

education
child
family
social history

主要業績

小玉亮子(2011)「＜母の日＞が政治に現れるとき、消えるとき—昭和二三年度の「祝祭日の改正」の議論から」(石川照子・高橋裕子編『家族と教育』明石書店)pp.52-76

小玉亮子(2011)「幼児教育をめぐるポリティクス—国民国家・階層・ジェンダー—」(日本教育社会学会編『教育社会学研究』第88集)pp.7-25

小玉亮子(2011)「書評 広瀬裕子著『イギリスの性教育政策史研究—自由化の影と国家「介入」—』」(教育史学会編『日本の教育史学』)

研究内容 / Research Pursuits

比較の視点を重視して、子どもと家族について研究を行っている。主なテーマは以下の通り。

- 1、現代日本における子ども問題についての歴史社会学的研究
現代日本において、児童虐待や少年犯罪、家族内の暴力や貧困といった社会問題について、社会がなぜそれを問題として議論しているのかについて分析している。
- 2、近現代ドイツにおける家族の変遷に関する社会史
近代日本にとって莫大な影響を与えてきた近代ドイツを研究対象として、西欧世界の近代家族と近代的子ども観の変遷を検討し、そのことを通じて、近代社会それ自体がはらむ問題を研究している。
- 3、幼児教育システムの比較社会的研究
幼児教育について、その成立史を含めて国際比較をおこない、現代における保育システムの課題を検討している。

I research on the social issues of childhood and family in Japan and Germany. I have the following three themes.

- 1: The historical sociology on the social issues of childhood.
People become to have a serious interest in the issues of childhood, for example child abuse, juvenile delinquency, domestic violence, poverty of family and so on. I analyze on when and how these have emerged as social issue, why people are so serious interested in the problems of childhood, and what causes people to think about the problems.
- 2: The social history of family in modern Germany.
I research on the process of formation of modern family and modern childhood. Mainly I research on German modern family in 19th and 20 th Century.
- 3: Comparative research on the early childhood education system.
I have a project of the research on the early childhood education in Japan, Germany and U.K. We try to compare the curriculums and systems and history of early childhood education of these three countries.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

学部・大学院ともに、歴史社会的アプローチから子どもと家族と教育に関する講義をしている。キーワードは、教育文化である。教育文化とは、広い意味で、子どもたちが成長していく過程に関わる全ての営みを指すと考えている。講義にあたっては、特に時間的・空間的比較の視点を重視し、喫緊の問題を広い視野から検討することを試みている。

I give some lectures of the historical sociology of childhood and Family. The key word of my lectures is the culture of the education. I think that the culture of education is all matters in the process of children's growth. I consider that the comparative perspective is important, because the research of childhood needs to attempt to think about larger picture.

Graduate course: Comparative study on education and culture, Sociology of childhood.

Undergraduate course: Child study from socio-cultural perspectives, Human relations

Teaching course: Guidance in school

■ 研究計画

現在、行っている三つのテーマのうち、現代の子ども問題に関する研究は、2010年に『現代の親子問題』（共著）として刊行したが、継続して今日家族と子育てがどのように議論されているのかに関する研究を継続しており、近刊書として刊行の予定である。二点目のドイツに関する社会史研究は、現在、科研費の基盤研究として来年度までの研究としてまとめているところである。三点目の幼児教育の国際比較に関しては、今年度文部科学省からの受託研究の研究チームのメンバーとなり、ドイツの幼児教育に関して調査研究を進めているところである。

■ メッセージ

勉強や研究は大変なこともあります、とても面白いものです。学部や大学院で会おう皆さんと、その面白さを一緒に楽しみたいとおもっています。

氏名	小林 一郎 Kobayashi Ichiro
所属 職名	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系 教授
学位	博士(工学) (1995 東京工業大学)
専門分野	言語情報処理、知能情報処理
URL	
E-mail	kobayashi.ichiro@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

言語情報処理
知能情報処理
ウェブインテリジェンス
言語化
潜在的意味解析

language processing
intelligent information processing
Web intelligence
Verbalization
Latent semantic analysis

主要業績

Risa Kitajima and Ichiro Kobayashi, A Latent Topic Extracting Method based on Events in a Document and its Application, student-session paper, The 49th Annual Meeting of the Association for Computational Linguistics: Human Language Technologies, Jun. 19-24, Portland, Oregon, U.S.A. 2011.

Kanako Onishi and Ichiro Kobayashi, Information Enhancement on a Focused Object using Linked Data, Journal of Advanced Computational Intelligence and Intelligent Informatics, Vol.16 No.1, pp. 4-12, 2011.

三野陽子, 小林一郎: ダイエットのための柔軟なレシピ推薦、日本知能情報ファジィ学会誌、Vol.24-1, No.1, pp.616-626, 2012.

味方さやか, 小林一郎: ライフライン網の相互連関を考慮した災害復旧計画問題に関する研究、日本知能情報ファジィ学会、Vol.23, No.4, pp.106-116, 2011.

Midori Serizawa and Ichiro Kobayashi: A Study on Topic Tracking based on Similarity of Latent Topics, 12th International Symposium on Advanced Intelligent Systems, Suwon, Korea, Sep.28th -- Oct.1st, 2011.

研究内容 / Research Pursuits

人工知能や言語情報処理の技術を使って対象となるシステムをより知的に、かつより親しみのあるものにすることに興味を持って研究を進めています。また、Webインテリジェンスに関する技術開発も行っています。

I am interested in anything that makes systems more intelligent and user-friendly using artificial intelligence and language information processing technologies. I am also in charge of developing methods about Web intelligence.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

学部 1年生の後期にプログラミング実習の講義を行い、プログラミング言語であるC言語の実用的な使い方についての技術の習得が行えるよう努めた。3年生の前期に自然言語論を、後期に人工知能論および英文講読を行った。毎回、配布資料を準備し、授業中に演習問題を出し、講義内容を深く理解させることに務めた。英文講読については、英文法だけではなく、取り上げた人工知能理論の内容について学生が深く理解できるよう努めた。大学院 言語情報特論では、自然言語処理の基礎技術から応用システムまでを幅広く取り上げ、講義を行った。

For undergraduate students: At the first year of undergraduate course, I taught an exercise course of C programming language. I prepared for lots of material for the students to brush their skills up and burdened the students with some tasks that they have to do by themselves so that they can acquire the basic skill of programming. At the third year of the undergraduate course, I taught natural language processing (NLP), artificial intelligence (AI), and English training course. As for NLP and AI, at every lecture I gave all slides that I used in my lecture to the students and gave them problems to exercise so that they understand deeply about the content of the lecture. As for English training course, I did not only taught English grammar, but also what artificial intelligence is, which was the subject we studied through the readings. For graduate students: I gave a lecture about advanced natural language information processing. I took up the basic technologies of natural language processing and advanced systems using the technologies as the subjects of the lecture.

■ 研究計画

将来の研究計画: 機械学習を取り入れた自然言語処理研究に力を注ぐつもりです。とくに潜在的な意味解析に基づく様々な手法の開発などを進めていく予定です。また、時系列データの言語化も行う予定です。言語をもっと親和性の高いメディアとして利用できる研究を進めます。共同研究の可能性: 時系列データの言語化や本学が有している実験住宅環境を利用した共同研究をすることが可能です。

■ メッセージ

すでに世界の垣根はなくなり、現在は、世界で活躍する時代となっています。日本国内のことだけではなく、常に世界を意識して一緒に頑張りましょう。

氏名	小林 功佳
	KOBAYASHI Katsuyoshi
所属	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系
職名	教授
学位	博士(理学) (1994 東京大学)
専門分野	物性理論、固体物理、表面物理
URL	http://www.phys.ocha.ac.jp/kobayashilab/home.html
E-mail	sakura@phys.ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

固体物理
表面物理学
ナノスケール物理
計算物理

Solid State Physics
Surface Physics
Nano-scale Physics
Computational Physics

主要業績

Electron transmission through atomic steps of Bi₂Se₃ and Bi₂Te₃ surfaces, Katsuyoshi Kobayashi, Physical Review B 84, 205424 (14 pages) (2011)

One-dimensional surface states on a striped Ag thin film with stacking fault arrays, Takashi Uchihashi, Puneet Mishra, Katsuyoshi Kobayashi, and Tomonobu Nakayama, Physical Review B 84, 195466 (9 pages) (2011)

Electronic structure study of ultrathin Ag(111) films modified by a Si(111) substrate and 3×3-Ag₂Bi surface, M. Ogawa, P. M. Sheverdyaeva, P. Moras, D. Topwal, A. Harasawa, K. Kobayashi, C. Carbone, and I. Matsuda, Journal of Physics: Condensed Matter 24, 115501 (6 pages) (2012)

Surface relaxation of topological insulators: Influence on the electronic structure, N. Fukui, T. Hirahara, T. Shirasawa, T. Takahashi, K. Kobayashi, and S. Hasegawa, Physical Review B 85, 115426 (4 pages) (2012)

研究内容 / Research Pursuits

本年度は、トポロジカル絶縁体表面の原子ステップの電子透過に関する研究を行った。トポロジカル絶縁体とは、2005年に導入された物質の電子的な性質に関する新しい概念である。従来の金属・絶縁体の分類に加えて、絶縁体を2種類に分類することができる。一つは自明な絶縁体であり、もう一つが非自明なトポロジカル絶縁体である。本年度は、トポロジカル絶縁体であるBi₂Se₃およびBi₂Te₃の表面に存在する原子ステップの電子透過特性を理論的に研究した。表面の原子ステップは、物質表面に必ず存在するものであり、トポロジカル表面状態の電子の輸送特性を決める一つの重要な要因である。研究の結果新たにわかったことは、Bi₂Te₃ではhexagonal warping効果が本質的に重要であり、hexagonal warping項に含まれるエヴァネッセント状態により完全反射が生ずることである。このような現象は、2層グラフェンの系でも見られる。この他に銀薄膜に関する研究を2件、ビスマス薄膜に関する研究を1件、実験的研究者とともにを行い、理論的な部分を担当した。

In 2011, I studied the electron transmission through atomic steps of topological insulator surfaces. Topological insulator is a new concept introduced in 2005 for electronic properties of materials. Crystals are classified into metals or insulators. In addition to this conventional classification of matters, it has recently been clarified that insulators are classified into two categories. One is trivial insulator and the other is non-trivial topological insulator. I theoretically studied the electron transmission through atomic steps of Bi₂Se₃ and Bi₂Te₃ surfaces. Atomic steps are commonly present on crystal surfaces, and they are important factors that determine the surface transport properties of topological insulators. It was revealed that the hexagonal-warping effect is essentially important in Bi₂Te₃, and that perfect reflection occurs due to the evanescent waves produced by the hexagonal-warping term. This phenomenon is similar to that in bi-layer graphene. In addition I carried out two researches on Ag thin films and one research on Bi thin films. These researches were done in collaboration with experimentalists. I carried the part of theoretical calculations.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

平成23年度は学部卒研究生2名、大学院修士学生1名の研究指導を行った。卒業研究の題目は「ハイパーレンズ」および「異方性媒質中のエヴァネッセント波」である。担当した授業は、学部では「計算物理学講義・演習」、「量子力学II」、「固体電子論」、大学院では「物性物理学特論」および「物性物理学演習」である。

In 2011 I supervised two undergraduate students and one graduate student in master course. The titles of the graduation researches are "Hyperlens" and "Evanescent waves in anisotropic media". I have teaching classes of "Computational Physics", "Quantum Mechanics II" and "Solid State Physics" for undergraduate students, and "Advanced Lecture on Solid State Physics" and "Exercise on Solid State Physics" for graduate students in master course.

■ 研究計画

今後も、新たに作成された物質のナノスケールでの物性を理論的な立場から調べ、新たな物性を探求する計画である。特に興味あることは、表面・界面系の電子物性、トポロジカル絶縁体の電子物性、電子系のメタ物質の実現に向けた研究などである。

■ メッセージ

大学の物理学科では、現代の物理学の基礎的な内容を学ぶこととなりますが、それとともに卒業研究では、新たな研究を自ら行うこととなります。新しい研究は、その研究方法もすでに決まったやり方があるわけではなく、新たな知識を得るために自らが考えて解決していかなければなりません。そのためにも、大学では単に授業を受けるだけでなく、学問に対して積極的に関わるようになっていければよいと思います。

氏名	小林 哲幸 KOBAYASHI Tetsuyuki
所属 職名	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系 教授
学位	薬学博士(1984 東京大学)／Ph.D. in Pharmaceutical Science (1984, The Univ. of Tokyo)
専門分野	脂質生化学、細胞生化学、脂質栄養学
URL	http://tetkoba.umin.jp/
E-mail	kobayashi.tetsuyuki@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

生理活性脂質
 メタボローム解析
 ソフトイオン化型質量分析
 アレルギーと炎症
 必須脂肪酸

bioactive lipids
 metabolome analysis
 soft-ionization mass spectrometry
 allergy and inflammation
 essential fatty acids

主要業績

Hiroyasu Sato, Yuki Isogai, Seiko Masuda, Yoshitaka Taketomi, Yoshimi Miki, Daisuke Kamei, Shuntaro Hara, Tetsuyuki Kobayashi, et al. Physiological Roles of Group X Secreted Phospholipase A2 in Reproduction, Gastrointestinal Phospholipid Digestion, and Neuronal Function. J. Bol. Chem., 286 (13): 11632-11648 (2011).

Kei Yamamoto, Yoshitaka Taketomi, Yuki Isogai, Yoshimi Miki, Hiroyasu Sato, Mitsuhiro Ohtsuki, Seiko Masuda, Yasumasa Nishito, Kiyokazu Morioka, Yoshikazu Ishimoto, Noriko Suzuki, Yasunori Yokota, Kohji Hanasaki, Yukio Ishikawa, Toshiharu Ishii, Tetsuyuki Kobayashi, et al. Hair Follicular Expression and Function of Group X Secreted Phospholipase A2 in Mouse Skin J. Bol. Chem., 286 (13): 11616-11631 (2011).

Akira Kushida, Kenji Hattori, Nozomi Yamaguchi, Tetsuyuki Kobayashi, Akira Date, Hiroomi Tamura Sulfation of estradiol in human epidermal keratinocyte. Biol. Pharm. Bull., 34 (7): 1147-1151 (2011).

研究内容 / Research Pursuits

我々の研究室では、「脂質分子から細胞機能・病態を探る」をメインテーマとして、細胞生化学的手法や分子生物学的手法、さらには質量分析を駆使して、以下のテーマを研究している。研究姿勢としては、流行を追うというよりは独創的な研究を目指している。1) 生理活性脂質の代謝と機能; 生理活性リン脂質である環状ホスファチジン酸 (cPA) やリゾホスファチジン酸 (LPA) の生物活性を解析すると共に、これら脂質分子の生体内濃度バランスを制御する機構について解析している。2) 脂質メタボローム解析; いち早く最新の質量分析技術を駆使した脂質分子の系統的・網羅的解析手法の確立に努め、リン脂質分子やステロイド関連化合物について新知見の発見を目指している。3) 細胞のストレス応答に関与するステリルグルコシドの合成誘導と機能の解析。4) 必須脂肪酸バランスと生活習慣病 (脂質栄養学); オメガ3系脂肪酸の生理作用; DHA に代表されるオメガ3系脂肪酸について最新の知見を整理し、予防医学的観点から研究成果を社会へ還元することに努めている。

We have investigated cellular functions of lipid molecules using the techniques in biochemistry, molecular cell biology and mass spectrometry. Original research themes rather than fashionable topics are conducted in our laboratory. Our main research interests are as follows. 1) Metabolism and functions of bioactive lipids: Biological activities including of an inhibitory activity toward cancer cell invasion and neurotrophic effects on cultured embryonic hippocampal neurons by cyclic phosphatidic acid (cPA) and lysophosphatidic acid (LPA) have been studied as well as their metabolism. 2) Lipid metabolome analysis based on mass spectrometry. Investigations of phospholipid and steroid molecules using soft-ionization mass spectrometry are performed. 3) Lipid mediators involved in cellular stress responses. We demonstrated the rapid induction of sterylglucoside (CG) by heat shock in human cultured fibroblasts to suggest that CG may act as a lipid mediator in an early stage of the stress signal transduction system. 4) Biological activities of omega-3 fatty acids. I have reviewed the recent research papers concerned with omega-3 fatty acids to return the results of research to society at large from the lipid nutritional point of view.

教育内容 / Educational Pursuits

学部生に対しては、生化学関連の各種講義や実習を担当し、卒業研究の指導を行っている。また、院生に対しては、脂質生化学に関する新しい研究課題を基盤において、博士前期や後期課程の院生の講義・演習や学位取得のための研究指導を行っている。教育目的として、問題解決能力の高い、知的基礎体力のある人材を社会に供給することを目指している。そのための教育理念として、単に知識や技術を教えるのではなく、知識をどうやって得るか、また、どのように適用するか、そのための「知恵」を授けることを念頭において教育を行っている。自主性を重んじ、面白いデータが得られたときの感動を知ってもらいたい。これは大学院での研究に限らず、学部での講義や実習にもあてはまる。質の高い高等教育を行うためには、ハイレベルな研究がその基盤になくてはならない。したがって、私は脂質生化学に関する最新の研究課題に取り組みながら、独創的な研究を展開することを心がけている。

I deliver lectures about biochemistry to undergraduate students and supervise their graduation thesis. I also supervise a dissertation for master- and doctor-course students by co-investigating new research projects of lipid biochemistry. My educational goal is to produce excellent human resources with remarkable problem-solving abilities and fundamental knowledge. Knowledge is not enough, we must apply. Willing is not enough, we must do. With this point in mind I make much account of teaching how to get knowledge, and how to apply it. I regard individual initiative as important. I want them to know new-found excitement during studying in the undergraduate classes or graduate course. Higher education of good quality should be built on highly advanced research. Therefore, I attempt to develop original research by investigating new research project of my research field, lipid biochemistry. I also promote and implement joint research with collaborators outside the University. This collaboration contributes substantially to our educational activities.

研究計画

以前は、生体膜の単なる構成成分としてしか考えられていなかった脂質は、近年、様々な生理機能への関与が明らかにされ、ホットな研究領域の一つとなっている。生理活性脂質としてのcPAやCGに関する我々の研究は、世界的にみても独創的かつ重要な研究となっている。また時代は今、新たなポストゲノム研究に入り、脂質生化学の分野でも代謝産物の構造と機能を網羅的に解析するメタボローム解析が可能となった。新しい質量分析装置を駆使して脂質の構造解析と定量の技術にさらに磨きをかけ、脂質分子の新機能を見出して行きたい。共同研究が可能なテーマとして、以下の項目がある。1) 生理活性リン脂質の機能(アレルギー・炎症・がん)解析と代謝制御の解明 2) 質量分析による脂質メタボローム解析のための基盤技術の構築とその適用 3) DHAをはじめとするオメガ3系列脂肪酸の生理機能

メッセージ

生物には美しいほどの見事な原理や論理性が潜んでいます。私の専門は、脂質生化学という研究分野で、細胞膜などの生体膜やそれを構成する主要な脂質分子の構造や機能を研究対象にしています。細胞膜は単なる仕切ではなく、ダイナミックに変動する脂質分子の変換工場です。脂質分子からは生理活性分子が作られ、そのバランスが崩れるとアレルギーやがん等の病気になることが分かってきました。さらに、神経機能にも関わっています。生命維持や健康において果たす脂質分子の重要な役割について、いっしょに学んで解明してみませんか？

氏名	小林 康明
	KOBAYASHI Yasuaki
所属	お茶大アカデミック・プロダクション
職名	特任リサーチフェロー
学位	
専門分野	
URL	
E-mail	kobayashi.yasuaki@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

非線形科学

nonlinear science

主要業績

Yasuaki Kobayashi, Tatsuo Shibata, Yoshiki Kuramoto, and Alexander S. Mikhailov, "Robust network clocks: Design of genetic oscillators as a complex combinatorial optimization problem", Physical Review E (2011)

研究内容 / Research Pursuits

進化的最適化による遺伝子ネットワークのシミュレーションと, 種々の外乱に対するロバストなネットワークの構築. ノイズのある環境下の, 相互作用する2振動子の同期現象と強結合領域における同期の破れ.

Computational study on the construction of genetic networks robust against various kinds of perturbation by the evolutionary optimization method. Synchronization-Desynchronization transitions of two coupled oscillators in a noisy environment.

☐ 教育内容 / Educational Pursuits

☐ 研究計画

☐ メッセージ

氏名	小山 聡美
	KOYAMA Satomi
所属	お茶大アカデミック・プロダクション
職名	特任アソシエイトフェロー
学位	
専門分野	
URL	
E-mail	koyama.satomi@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

キャリア開発
経済

career development
economics

主要業績

研究内容 / Research Pursuits

ドクター/ポストドクター向けのキャリア開発事業

Career development program for doctor, post-doctor and over-doctor.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

ビジネスマナーセミナー、コミュニケーションセミナー、リスク・マネジメント、コンプライアンス

Business Seminar, Communication Seminar, Risk Management, Compliance

■ 研究計画

■ メッセージ

氏名	近藤 和雄
	KONDO Kazuo
所属	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系
職名	教授
学位	医学博士(1986 東京慈恵会医科大学)
専門分野	医学(内科学 Internal medicine)、脂質代謝学(Lipid metabolism)、臨床栄養学(Clinical nutrition)
URL	http://pea.ieshl.ocha.ac.jp/kondo/default.htm
E-mail	kondo.kazuo@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

動脈硬化
血管内皮機能障害
単球/マクロファージ活性化
活性酸素
抗酸化物

atherosclerosis
endothelial dysfunction
monocyte/macrophages activation
Reactive Oxygen Species (ROS)
antioxidant

主要業績

Emi Saita, Yoshimi Kishimoto, Mariko Tani, Maki Iizuka, Miku Toyozaki, Norie Sugihara and Kazuo Kondo: Antioxidant Activities of *Perilla frutescens* against Low Density Lipoprotein oxidation in Vitro and in Human Subjects : *Journal of Oleo Science* 61 : 113-120, 2012

Nagai M, Tani M, Kishimoto Y, Iizuka M, Saita E, Toyozaki M, Kamiya T, Ikeguchi M, Kondo K: Sweet Potato (*Ipomoea batatas* L.) Leaves Suppressed Oxidation of Low Density Lipoprotein (LDL) in Vitro and in Human Subjects. *J Clin Biochem Nutr.*48: 203-208, 2011

神山真澄、田中稔、藤井雅彦、岩本珠美、貴堂としみ、松本朋世、板倉弘重、近藤和雄 : サルノコシカケ科カワラタケ (*Trametes versicolor*) の酸化抑制能に関する検討 : 機能性食品と薬理栄養 6:329-335, 2011

研究内容 / Research Pursuits

本年度も、食品の抗動脈硬化作用について、様々な側面から研究を行ってきた。(1)LDL酸化に及ぼす影響の検討 *in vitroにおける検討 lag time延長作用、血管内皮細胞を介したLDLの酸化抑制作用(ピーマン、松樹皮抽出物、テアフラビン、ライチポリフェノール など) *in vivoにおける検討(ヒト摂取試験) 松樹皮抽出物摂取により、LDLの酸化抑制作用を示した。(2)血管内皮機能障害に及ぼす影響の検討 酸化LDL刺激および、高血糖刺激による単球の内皮細胞接着や、活性酸素種産生、MMP発現、アポトーシスなどを抑制(シソ、ピスタチオ、イチゴ、柑橘類ポリフェノール、テアフラビン、コーヒー など) (3)マクロファージ機能に及ぼす影響 マクロファージに発現するスカベンジャー受容体発現、炎症性サイトカイン産生、MMP発現などを抑制 (ビタミンC・E、赤米・黒米、ライチポリフェノール など)

①Antioxidant activities against LDL oxidation *in vitro study prolong lag time, suppress the cell-mediated LDL oxidation(pepper, pine bark extract, theaflavin, lychee polyphenol etc.) *in vivo study Intaking pine bark extract prolonged lag time ②Endothelial dysfunction suppress oxLDL or high-glucose-induced ROS generation, inflammatory cytokine expression, apoptosis(perilla, pistachio, strawberry, citrus flavonoid, theaflavin, coffee etc.) ③Macrophage activation suppress scavenger receptors expression, inflammatory cytokine expression, MMP expression (vitamin C・E, red rice・black rice, lychee polyphenol etc.)

■ 教育内容 / Educational Pursuits

学部では、生活科学部食物栄養学科で、病態栄養学、医学概論を担当し、動脈硬化を引き起こす高脂血症、肥満、糖尿病、高血圧、メタリックシンドロームなどの生活習慣病における診断、治療について食物との関わりを中心に講義している。大学院では、学部の講義を一步すすめて、動脈硬化症の成り立ち、老化の問題を、リポ蛋白代謝を中心に、活性酸素と活性酸素に対抗する食物に含まれる抗酸化物の関わりを、生体防御、この防御システムの観点から講義している。

We take charge of the Metabolism and Clinical Nutrition and Medical outline in 4-year education program. We study the relation of food to diagnoses and treatments of the hyperlipidemia, obesity, diabetes, hypertension and metabolic syndrome. In the graduate school, we study the effects of antioxidants contained in food on lipoprotein metabolism, and the preventive roles in the pathogenesis of the atherosclerosis and the problem of aging, from the viewpoint of biological defense such as removing Reactive Oxygen Species (ROS).

■ 研究計画

様々な疾病の予防に、食物に含まれるポリフェノールを中心とした抗酸化物の関与が明らかになっている。ポリフェノールは、LDLの酸化抑制をはじめ、動脈硬化の進展抑制にあらゆる課程で関わっている。ポリフェノールなどの動脈硬化抑制の役割を明らかにするとともに、病気の発症を予防する食環境を探究し、生活習慣病を発症させない食生活を構築する。（共同研究の可能性）・抗動脈硬化作用を有する食品の研究・ヒトを対象とした食品の機能性に関する研究・遺伝子多型を基にしたテーラーメイド食事療法に関する研究

■ メッセージ

氏名	近藤 譲
	KONDO Jo
所属	人間文化創成科学研究科文化科学系
職名	教授
学位	学士(音楽)(1972東京芸術大学)
専門分野	作曲、音楽理論
URL	
E-mail	jk@cc.ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

作曲

composition

主要業績

薔薇の下のモテット(12人の声のための)

バレグメノン(弦楽四重奏と打楽器アンサンブルのための)

トライン(チェロ、ユーフォニアム、ピアノのための三重奏曲)

研究内容 / Research Pursuits

☐ 教育内容 / Educational Pursuits

☐ 研究計画

☐ メッセージ

氏名	近藤 敏啓
	KONDO Toshihiro
所属	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系
職名	教授
学位	工学(博士)(1993、東京工業大学)
専門分野	電気化学、界面物理化学、自己組織化
URL	http://ana4.chem.ocha.ac.jp/~kondo/
E-mail	kondo.toshihiro@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

自己組織化	Self-Assembly
ナノ界面	Nano-Interface
放射光利用表面X線散乱法	Surface X-ray Scattering Using SOR Light
電気化学	Electrochemistry
単結晶電極	Single Crystal Electrodes

主要業績

T. Sakurai, M. Shibata, R. Horiuchi, I. Yagi, and T. Kondo, "Study on Platinum Dissolution Mechanism Using Highly Sensitive Electrochemical Quartz Crystal Microbalance", Chem. Lett., 40(4), 402-404 (2011).

K. Uosaki, J. Morita, T. Katsuzaki, S. Takakusagi, K. Tamura, M. Takahashi, J. Mizuki, and T. Kondo, "In situ Electrochemical, EQCM, STM, and SXS Studies on Ag/AgCl Reaction at Underpotentially Deposited Ag Bilayer on Au(111) Electrode Surface", J. Phys. Chem. C, 115(25), 12471-12482 (2011).

H. Sakuma, T. Kondo, H. Nakao, K. Shiraki, and K. Kawamura, "Structure of Hydrated Sodium Ions and Water Molecules Adsorbed on the Mica/Water Interface", J. Phys. Chem. C, 115(32), 15959-15964 (2011).

T. Kondo, C. Song, N. Hayashi, T. Sakurai, M. Shibata, H. Notsu, and I. Yagi, "Electrocatalytic Activity for Oxygen Reduction Reaction of Pseudomorphic Pt Monolayer Prepared Electrochemically on a Au(111) Surface", Chem. Lett., 40(11), 1235-1237 (2011).

T. Masuda, H. Fukumitsu, S. Takakusagi, W.-J. Chun, T. Kondo, K. Asakura, and K. Uosaki, "Molecular Catalysts Confined on and within Molecular Layers Formed on a Si(111) Surface with Direct Si-C Bonds", Adv. Mater., 24(2), 268-272 (2012).

研究内容 / Research Pursuits

電極／溶液界面における電子移動反応は、厳密に基礎的に理解し、燃料電池やバイオセンサといった次世代ナノテクノロジーに応用していくためには、電気化学活性界面を高い空間分解能／時間分解能で知る必要がある。シンクロトロン放射光利用表面X線散乱 (Surface X-ray Scattering; SXS) 法を利用して、0.01 nmオーダーという非常に高い空間分解能で電気化学活性界面の三次元構造をその場決定する事に加え、時間分解能が低いというこれまでのSXS法の欠点を、装置 (光源、入射波長の選択) や電気化学セルの工夫によって克服し、電気化学活性界面の構造ダイナミクスを高い時間分解能で測定／解析する事を目的としている。平成20年度は、Au(111)、Au(100)表面に形成した酸化膜二重構造を高精度に決定し、ダイナミクスに挑戦した。また、燃料電池のカソード触媒として利用される白金量低減化を目的として、金単結晶表面に白金を単原子層電析した電極において、高効率な酸素還元反応を実現した。

It is very important to study the electrochemical reaction not only for the fundamental surface science but also for the applications related to nanotechnology. Surface X-ray scattering (SXS) technique using synchrotron radiation is one of the most promising methods to investigate the interfacial structure with ultra-high spatial resolutions in situ. In this year, we determined the static structure and discussed dynamics of surface structure change of Au(111) and Au(100) single crystal electrodes during oxidation/reduction reaction cycle measured in a sulfuric acid electrolyte solution using a specially designed electrochemical cell. In this year, in situ structural study on Au(111) and Au(100) single crystal electrodes was carried out. At both single crystal electrodes, bilayer of surface oxide formed and structure of the interface was determined in details. On the other hand, as an aim of Pt reducing at a cathode in the fuel cell, Pt monolayer was deposited on the Au single crystal surfaces and high catalytic activity for oxygen reduction reaction was achieved at these modified electrodes.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

分子分光法(学部3年):昨年度までの「分子分光学」と「機器測定法」を合わせた科目である。まず分子分光についての基本的な部分を量子力学から講義し、その後化学の分野で一般的に用いられる機器分析法を理解し、これらに共通して必要な基礎事項、測定機器使用時のマナー、化学反応や物理現象からセンサにより得られる信号の取り扱いなどを、主に発表／討論形式で行った。電気化学(学部4年(卒論生)):当研究室において必須の電気化学について、基礎的な事項から機器の取り扱い／実験操作まで完璧に理解するよう指導した。また、電極表面修飾剤としてアルキルチオール類の合成、自己組織化単分子層の形成／脱離、及び機能評価についても指導した。

Methods of Molecular Spectroscopy (B3): This subject is summation of Molecular Spectroscopy and Methods of Experimentals, which were opened from last year. As a first, the fundamental phenomenon about spectroscopy was lectured based on the quantum dynamics. After that, in order to understand the methods of instrumental measurements in the chemistry field, general fundamentals for instrumental measurements and operation of the signals from the sensor were discussed. This lecture was carried out in a seminar style. Electrochemistry (B4): Electrochemical methods were completely explained and electrochemical experiments were carried out for the bachelor thesis. Seminar in Interfacial Chemistry (M1, M2): This lecture was carried out in a seminar style. Today's topics for interfacial chemistry were discussed.

■ 研究計画

電気化学活性界面(電子移動を伴う電極／溶液界面)を厳密に理解し、燃料電池やバイオセンサといった次世代のナノテクノロジーへと応用していくためには、構造が原子／分子レベルで制御された界面で電子移動反応を行い、反応が起こっているその場で高い空間分解能／時間分解能で界面構造を知る必要がある。この指針を元に、「自己組織化を利用した界面ナノ構造制御」と「界面ナノ構造その場追跡法の開発」について推進していく。

■ メッセージ

我々の生活の中では、燃料電池、バイオセンサ、化粧品／繊維など、すでにいろいろなところでナノテクノロジーの技術が使われています。より豊かな社会生活にするため、そして次のノーベル化学賞を目指して、一緒に環境にやさしいナノテクノロジーの研究をするために、ぜひ、お茶の水女子大学に来てください。

氏名	近藤 恵
	KONDO Megumi
所属	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系
職名	助教
学位	博士(理学) (1995 東京大学)
専門分野	自然人類学(physical anthropology), 人類年代学(chronological anthropology)
URL	
E-mail	kondo.megumi@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

人類進化
自然人類学
年代測定
化石骨
ジャワ原人

Human evolution
Physical anthropology
Dating
Fossil bone
The Jawa man

主要業績

Matsu'ura, S. and M. Kondo (2011) Relative chronology of the Minatogawa and the Upper Minatogawa series of human remains from Okinawa Island, Japan. *Anthropological Science*, Vol. 119, pp. 173-182. (DOI: 10.1537/ase.100322)

Hyodo, M., S. Matsu'ura, Y. Kamishima, M. Kondo, Y. Takeshita, I. Kitaba, T. Danhara, F. Aziz, I. Kurniawan and H. Kumai (2011) High-resolution record of the Matuyama & Brunhes transition constrains the age of Javanese Homo erectus in the Sangiran dome, Indonesia. *Proceedings of the National Academy of Sciences USA*, Vol. 108, pp. 19563-19568. (DOI: 10.1073/pnas.1113106108)

Kubo, M.O., M. Fujita, S. Matsu'ura, M. Kondo, G. Suwa (2011) Mortality profiles of Late Pleistocene deer remains of Okinawa Island; evidence from the Hananda-Gama Cave and Yamashita-cho Cave I sites. *Anthropological Science*, Vol. 119, pp. 183-201. (DOI: 10.1537/ase.091215)

研究内容 / Research Pursuits

1. 化石骨の年代測定学・年代判定学:化石骨試料に含有される少量・微量元素を調べることで、それらの年代測定または間接的な相対年代判定を行う。2. ジャワ原人の編年および変遷史:インドネシアのジャワ原人に関する遺跡の地質学的調査を行い、各種試料の年代分析をすることにより、化石骨の編年を行う。またそれにより、人類進化の様相を考察する。3. 日本の旧石器時代の人類の編年および変遷史:日本の旧石器時代の人類とされる化石骨について、年代測定または年代判定を行い、それらの編年を行うことにより、日本列島の人類の由来について考察する。4. 放射性炭素年代測定における分析試料の前処理:化石骨試料の化学的処理について再検討し、高精度な分析を目指す。

1. Dating of fossil bones; Measure contents of minor or trace elements contained in fossil bones to determine the absolute age or discriminate the fossil bearing layers. 2. Chronology and palaeoanthropology of the Indonesian fossil hominids; Examine the history of the Java man by geological survey of the site and chronological analyses of several kinds of specimen. 3. Chronology and palaeoanthropology of the Japanese Palaeolithic hominids; Determine the age of the Japanese "Palaeolithic" hominids by absolute or relative dating to examine the origin of hominids of the Japanese archipelago. 4. Improvement of the pretreatment of fossil bone samples for carbon 14 dating; Aim for much higher accuracy of dating.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

以下の内容の講義および演習を担当した。1. 自然人類学 2. 人体計測学 3. 環境化学 4. 人体生理学 5. 科学英語演習

I instructed classes as below. 1. Physical anthropology 2. Somatometry 3. Environmental chemistry 4. Human physiology 5. English practice for science

■ 研究計画

■ メッセージ

氏名	坂元 章 SAKAMOTO Akira
所属	人間文化創成科学研究科先端融合系
職名	教授
学位	博士(社会学)
専門分野	メディア心理学 Media Psychology
URL	http://www.hss.ocha.ac.jp/psych/socpsy/sakamoto/
E-mail	sakamoto.akira@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

メディア
心理学
テレビ
テレビゲーム
インターネット

Media
Psychology
Television
Video games
The Internet

主要業績

Kumazaki (Yamaoka), A., Matsuo, Y., Sakamoto, A., Akiyama, K., Adachi, N., Naito, M., Kurie, I., Sakamoto, K., Takahira, M., & Yonezawa, N. (2011). The effects of Internet use on Internet dependency, psychological health, and interpersonal relationships. *Journal of Socio-infomatics*, 4(1), 17-27.

Ye, S.-Y., Sakamoto, A., Shoun, A., & Aita, M. (2011). Japanese students' impressions formed of Chinese students through cell phone communication: Comparing text and voice messages. In P. Singh, P. Bain, L. Chan-Hoong, G. Misra, & Y. Ohtsubo (Eds.), *Progress in Asian Social Psychology*, Vol.8: Identity, Multiculturalism and Changing Societies: Psychological, Group and Cultural Processes. MacMillan Publishers. Pp. 43-

渋谷明子・坂元章・井堀宣子・湯川進太郎 (2011) テレビゲームの暴力シーンの影響を左右する視点の調整効果—小学校高学年児童を対象にしたパネル研究の検討— *デジタルゲーム学研究*, 5(1), 1-12.

赤堀侃司・永野和男・坂元章他 (2012) *社会と情報* 東京書籍

坂元章(監修) NTTドコモ・サービス(制作) (2011, 4) [スライド、冊子] ケータイ安全教室(小学生用、中学生・高校生用、保護者用)NTTドコモ

研究内容 / Research Pursuits

従来、「メディアと人との関わり」を研究課題としているが、2011年度もそうした研究を進めるとともに、その成果を、論文や学会発表などによって報告した。また、2010年度に引き続き、三菱総合研究所と共同して進めているケータイ使用の影響に関する研究に注力した。共同研究者とともに子どもに対する調査を実施した。この他、高等学校「情報」の教科書作成を完了したり、情報リテラシーやメディア・リテラシー教育の教材の開発に協力するなどの仕事を行った。

My research interests are in relationships between media and people, and in the fiscal year of 2011, I have still conducted some studies on this issue and presented articles where their findings are reported with my coresearchers. In addition, in this fiscal year as well as the fiscal year of 2010, I made the greatest efforts for research on the influence of cell phone use. Coresearchers and I conducted some surveys toward children. I also contributed to the production of textbooks for information study of high school and the development of teaching materials of information literacy and media literacy.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

従来、学部および大学院において、社会心理学に関する授業を担当しており、その領域の研究、理論、方法などの指導を行っている。卒業論文、修士論文、博士論文の研究においては、メディアに関するテーマを持つ学生が多く、その分野の指導を行っている。また、2009年度に開発したメディア分析法の授業を、2009年度に引き続き、協力者とともに実践した。

I have some classes on the field of social psychology for graduate and undergraduate school students, and I have been teaching them its research, theories, methods, etc. In addition, most students belonging to my laboratory study issues on media to make their bachelor's, master's, and doctoral theses, and therefore I have been engaging in the guidance of the field. In addition, I conducted the class of media analysis methods for undergraduate students with my collaborators in the present fiscal year, as well as the fiscal year of 2010 when we designed and conducted it.

■ 研究計画

現在、メディアの心理学的研究について、いくつかのテーマに関する研究を進めているが、今後は、それぞれの研究を充実させるとともに、この分野の研究の活性化や、その「メディア心理学」という一つの研究領域としての確立に尽力したい。その一方で、メディアに関する現実的な問題に取り組むためには、他の分野や専門との連携が重要であり、それゆえ、共同研究にも意欲的に取り組みたいと考えている。

■ メッセージ

「メディアと人間の関わり」について知りたい方は、「メディアと人間の発達」(学文社、坂元 章編、2003年)、「メディアとパーソナリティ」(ナカニシヤ出版、坂元 章編、2011年)をご参照ください。とくにテレビゲームについては、「テレビゲームと子どもの心」(メタモル出版、坂元 章、2004年)をご覧ください。

氏名	坂本 佳鶴恵
	SAKAMOTO Kazue
所属	人間文化創成科学研究科人間科学系
職名	教授
学位	社会学修士(1984 東京大学)
専門分野	社会学、特に社会意識・文化論および家族・女性に関する研究
URL	
E-mail	sakamoto.kazue@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

社会意識
家族／ジェンダー
メディア／コミュニケーション
文化

主要業績

女性・男性雑誌とジェンダー規範、ファッション意識—首都圏男女への質問紙調査の分析「人文科学研究」7,.139-152

ファミリー・バイオレンスの特性をめぐって—社会学の視点から「刑法雑誌」50/3,396-405

研究内容 / Research Pursuits

1)ファミリー・バイオレンスをテーマに、日本の家族の特性によって、どのような暴力の特徴と解決の困難さが存在しているかを、以前おこなった調査と実例をもとに分析した。この結果は学会報告をへて、論文にして発表した。2)19年度におこなった外見に関する首都圏調査から、日本の女性雑誌と男性雑誌の読者のファッションに対する意識を因子分析法を用いて分析し、論文として発表した。

■ 教育内容 / Educational Pursuits

■ 研究計画

■ メッセージ

現代社会では、さまざまな情報が氾濫しています。いかに情報を集め、その良否を確かめ、自分で考え、自分の言葉で語っていくか。私の授業が、そうしたことを、学んでいける場になればと思っています。

氏名	作田 正明
	SAKUTA Masaaki
所属	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系
職名	教授
学位	理学博士(1986 東北大学)
専門分野	植物生理学(特に二次代謝、環境応答)
URL	http://www012.upp.so-net.ne.jp/sakuta-lab/
E-mail	sakuta.masaaki@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

二次代謝	Secondary metabolism
フラボノイド合成	Flavonoid synthesis
転写制御	Transcriptional control
転写因子	Transcription factor
分子進化	Molecular evolution

主要業績

Sakuta, M. and Ohmiya, A. (2011) Plant Pigments II: Betacyanins and Carotenoids. In Plant Metabolism and Biotechnology (Ashihara, H., Crozier, A. & Komamine, A. eds.) 343-372. Wiley

研究内容 / Research Pursuits

多くの高等植物の赤色はアントシアニンがその発色源であるのに対し、一部を除くナデシコ目植物はアントシアニンを合成せず、その赤色はベタシアニンにより発色されている。これまでに、ナデシコ目植物にはなぜアントシアニンが存在しないかという問題に対しアプローチを試み、アントシアニン合成のlate stepの発現制御がその一因である可能性を示唆した。本年度は、ナデシコ目植物のANSの発現制御について、シス領域およびトランス因子の両者に注目し解析を行った。ナデシコ目植物のANSプロモーターの下流にレポーター遺伝子を融合したコンストラクトを作製し、これをシロイヌナズナに導入した。その結果、ナデシコ目植物のANSは、シロイヌナズナにおいてはアントシアニンの合成・蓄積部位で発現することが示された。また、ナデシコ目植物のANSプロモーターを活性化する転写因子を探索した。その結果、シロイヌナズナのTT2 および PAP1が、ナデシコ目植物のANSプロモーターを活性化することが、トランジェントアッセイにより明らかとなった。

Anthocyanins and betacyanins, two types of red pigment, have never been found to occur together in plants. Although anthocyanins are widely distributed in higher plants, betacyanins have replaced anthocyanins in the Caryophyllales. The accumulation of flavonols in the Caryophyllales suggests that the step(s) of anthocyanin biosynthesis from dihydroflavonols to anthocyanins could be blocked in the Caryophyllales. So far, anthocyanidin synthase (ANS) cDNA was isolated from plants of the Caryophyllales and an enzyme activity assay showed that the Caryophyllales possess functional ANS. However, the expression profile revealed that ANS are not expressed in most tissues and organs except the seeds in *Spinacia oleracea*, suggesting the transcriptional regulation might cause the lack of anthocyanin in the Caryophyllales. Therefore, we are trying to reveal the transcriptional mechanics of ANS from two aspects of their regulatory elements, cis and trans.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

2011年度は、大学院および学部において、それぞれ4つの授業を行った。授業の内容としては、植物生理学、植物生化学といった基礎生物学から代謝工学、遺伝子組換え植物といった応用生物学までの広い範囲を扱った。特に植物バイオテクノロジーに関しては、その背景となる基礎研究を解説し、理解させることにより、学生に基礎生物学研究の重要性を認識してもらうように努めた。授業では、学生にわかりやすく、受講者全員が授業内容を理解できるよう心がけた。また研究室では、博士課程後期1名、博士課程前期2名、学部3名の学生の研究指導を行った。

In 2011, I conducted four classes each in undergraduate and graduate courses. The course contents include both basic biology such as plant physiology or plant biochemistry and applied biology for instance metabolic engineering, GMO (gene modified organisms). I have tried to make classroom coursework easier to understand and get my teaching across to all students attending. A doctor, two master and three undergraduate students have worked in lab under my supervision.

■ 研究計画

高等植物の二次代謝は、一次代謝より派生し、進化の過程において多様化したものと考えられている。本研究は、この進化・多様性に関する古くからの仮説に対する分子レベルからの実証的研究である。この研究が契機となり、高等植物の二次代謝が分子進化研究のための優れたモデルとして広く認知されることを期待している。また一方で、花色はバイオテクノロジーの格好のターゲットであり、本研究が新しい花色を持つ植物の創出に大きく寄与することが期待される。

■ メッセージ

私たちは、「花の色」を指標として、植物の分化や環境に応答した遺伝子発現の制御機構、さらには植物の進化を遺伝子レベルで解析するという研究を行っています。「花の色」に代表される植物色素は、紫外線や温度(低温による紅葉の誘導)により合成が促進され、生合成系の遺伝子群が誘導されることから、植物の環境応答の有効なモデル系です。また、深紅の花でも色素が合成・蓄積されるのは表皮の細胞一層のみで内部は白色(リンゴやサツマイモの切り口と一緒にです。)であることから分化の指標として優れています。さらに、花の色は受粉を助ける昆虫や種を運ぶ鳥たちと共に進化してきたといわれており、花色の合成系の遺伝子解析により、植物の進化をうかがい知ることができます。このように、私たちの研究は、生物学のきわめて基礎的な部分に着目したのですが、見方を少し変えると最近話題の「青いバラ」に象徴される、植物バイオテクノロジーの基盤技術でもあります。

氏名	佐々木 泰子
	SASAKI Yasuko
所属	人間文化創成科学研究科文化科学系
職名	教授
学位	文学修士(1978 お茶の水女子大学)
専門分野	日本語教育、日本語学
URL	http://jsl2.li.ocha.ac.jp/kyookanHP/sasa.html
E-mail	sasaki.yasuko@cc.ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

社会言語学	sociolinguistics
語用論	pragmatics
談話分析	disucoursse analysis
コミュニケーション	communication
文化	culture

主要業績

中国人留学生は日本人との友人関係をいかに構築できるかー修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチに基づく視点提示型研究

語用論における選択の自由

言語と文化と日本語教育ー日本語の共感とわきまへの表現を中心にー

研究内容 / Research Pursuits

「言語と文化とコミュニケーションの関わり」を研究課題としており、日本語の話し言葉及び書き言葉のディスコースに関する研究を行っている。

My current research is primarily concerned with the disciplines of discourse analysis. I am concerned to explain the characteristics of the Japanese written and spoken discourses.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

大学院生を対象としたクラスでは、談話分析・会話分析について実際にデータの収集・記述を通して学びつつ、文献講読を通して談話分析・会話分析への理解を深める。指導学生のテーマは、例えば、勧誘・断りなどの言語行動に関する対照研究や発話の分りにくさ、スピーチレベルシフトなどの話し言葉に関するものと作文に現れた引用や接続詞の使用などの書き言葉の研究がある。

I taught the methodology of discourse analysis and conversation analysis. Based on the alternative methods, students were asked to describe their interactions with their friends and neighbors and to investigate how people negotiate and reach an agreement.

■ 研究計画

同一文化内のコミュニケーションだけでなく異文化間のコミュニケーションの実態を明らかにすることを通して、多文化共生社会に資するコミュニケーションのあり方についての考察を行う。対象を2者間の会話のみでなく今後ますます社会的要請が期待される多人数による会話において合意の形成がどのように行われるのかについて、同文化間、異文化間、それぞれの特徴を明らかにし、その成果を幼児から大学生までのコミュニケーション能力の発達モデルの開発、大学での学習を支える日本語表現能力育成カリキュラムの開発に反映することを目指す。

■ メッセージ

日本社会の多文化化に伴い、私達はコミュニケーションスタイルの異なる人たちとコミュニケーションをする機会が今後ますます増えていくことが予想されます。そのような社会にあって言語の果たす役割はこれまで以上に重要になると言えるでしょう。また私たちのコミュニケーションには対面の会話だけではなく、電話による会話、携帯メールやインターネットを媒介としたチャットなど様々な手段が考えられます。皆さん自身や周りの人たちの言語行動を分析することを通して、言語を用いて私たちはどのようにコミュニケーションを成し遂げているのか、それらは文化背景の違いによって異なるのかなどについて一緒に考えてみませんか。

氏名	笹倉 理子
	SASAKURA Michiko
所属	情報基盤センター
職名	アソシエイトフェロー
学位	修士(理学)
専門分野	
URL	
E-mail	sasakura.michiko@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

情報教育
コンピュータ利用教育
離散数学

information education
educational use of computer
Discrete mathematics

主要業績

研究内容 / Research Pursuits

☐ 教育内容 / Educational Pursuits

☐ 研究計画

☐ メッセージ

氏名	椎尾 一郎
	SIIO ITIRO
所属	人間文化創成科学研究科先端融合系
職名	教授
学位	工学博士
専門分野	ヒューマンインタフェース
URL	http://www.sio.jp/
E-mail	sio@acm.org

研究者キーワード / Keywords

ヒューマンコンピュータインタラクション
 ユビキタスコンピューティング
 実世界指向インタフェース
 日用品としてのコンピュータ
 コミュニケーション支援

Human-Computer Interaction
 Ubiquitous Computing
 Real-world oriented interface
 Everyday Computing
 Computer mediated communication

主要業績

中川 真紀, 塚田 浩二, 椎尾 一郎, ライフログを用いた遠隔美肌アドバイシステム, 情報処理学会論文誌 Vol. 52, No. 4, pp. 1537-1551 (Apr, 2011) (<http://sio.jp/projects/papers/ipsj2011-skincare.pdf>)

沖 真帆, 栗原 一貴, 塚田 浩二, 椎尾 一郎, イルゴール: 家庭の生活状況を奏でるオルゴール型インタフェースの研究 情報処理学会論文誌 Vol. 52, No. 4, pp. 1586-1598 (Apr. 2011) (<http://sio.jp/projects/papers/ipsj2011-homeorgel.pdf>)

沖 真帆, 塚田 浩二, 椎尾 一郎, MediAlarm: 多様な目覚めを支援する起床支援インタフェース, ヒューマンインタフェース学会論文誌, Vol.13 No.4, pp.323-334 (Nov, 2011) (<http://sio.jp/projects/papers/his2011-journal-medialarm.pdf>)

神原 啓介, 半田 智子, 塚田 浩二, 椎尾 一郎, 日常空間で常時利用するためのカーテンメタファを用いたビデオコミュニケーションシステム, ヒューマンインタフェース学会論文誌, Vol.13 No.4, pp.291-302 (Nov. 2011) (<http://sio.jp/projects/papers/his2011-journal-smoothcurtain.pdf>)

Azusa Kadomura, Reina Nakamori, Koji Tsukada, Itiro Sio, EaTheremin, SIGGRAPH Asia 2011, Emergency Technology, Hong Kong, China, December 12 & 15, 2011. (http://sio.jp/projects/papers/siggraph2011_eatheremin.pdf)

研究内容 / Research Pursuits

コンピュータが小型, 安価になることで, 日用品としてのコンピュータ利用が今後ますます進展すると予想されています. このようなコンピュータ利用形態をユビキタスコンピューティングと呼んでいます. 近未来においては, ユビキタスコンピューティングの実現により, 家庭でのコンピュータ利用がますます進展すると考えられます. そこで家庭において, 一般の生活者が必要とするコンピュータの実現をめざし, 以下の研究課題に取り組んでいます. この結果を実装し, 実験する目的で, お茶の水女子大学小石川職員住宅跡地に, ユビキタスコンピューティング実験住宅を建設しています. (1) ユビキタスコンピューティングのアプリケーションの提案 (2) 情報家電や日用品に組み込まれたコンピュータ利用のための新しいインタフェース手法の提案 (実験住宅に関する情報は <http://ochahouse.com/> で公開しています) 図はインタラクティブなフォークEaTheremin.
<http://www.youtube.com/watch?v=GINTIMR5kR4>

In the near future, we will be using many single purpose information appliances equipped with ubiquitous, invisible computers. At that time, house will be the most important place for computer developers to deploy ubiquitous computers. We have built an experimental house for ubiquitous computing. The house is designed to live in symbiosis with computers, sensors, and networks. We are developing computer-augmented furniture, decors, and house fixture to realize ubiquitous computing applications at home. Figure shows interactive fork, EaTheremin.
<http://www.youtube.com/watch?v=GINTIMR5kR4>

■ 教育内容 / Educational Pursuits

人と人工物とのインタラクションを考え、使いやすいコンピュータを実現するための考え方を学ぶヒューマンコンピュータインタラクションの授業と、使いやすいコンピュータアプリケーションを開発するためのマルチメディアプログラミングの授業を担当しています。また、卒業研究と大学院では、生活の中で使われるユビキタスコンピューティングアプリケーションを実装し評価する研究を指導しています。

I am teaching human computer interactions and multimedia programming development. In the laboratory, students are developing various ubiquitous computing applications for everyday life of the future.

■ 研究計画

家電製品のみならず、家具、日用品、建具、家、建材など、いままでコンピュータとは無縁だったありとあらゆる身の回りの物に、コンピュータ、センサー、ネットワークが入ることで、今までにない新しいコンピュータアプリケーションが実現されると考えています。コンピュータメカ、通信サービス、家電メカのみならず、日用品、家具、建材、ハウスメカなど、さまざまな分野のパートナーと共同研究が可能であると考えています。

■ メッセージ

ユビキタスコンピューティングの分野では、生活に密着したアプリケーションが主体になります。そこで、女性の視点に基づいたユニークな発想が求められています。情報科学分野の中でも女性の活躍がもっとも期待されている分野であると言えます。情報科学と生活科学の両方を得意とする本学は、この分野の女性研究者、女性技術者の育成を積極的に進めていきます。

氏名	SCHAEFR EDWARD J
所属	SCHAEFER EDWARD JAY
職名	人間文化創成科学研究科文化科学系
学位	教授
専門分野	MA.1修士TESOL1982 カルフォルニア大学ロサンジェルス校大学院応用言語学科
URL	英語教授法／Teaching English as a Foreign Language,Second Language Acquisition.Applied Linguistics.
E-mail	shaefer.edward@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

Second Language Writing
Rasch Measurement in Language Assessment
Teaching Methodology

Second Language Writing
Rasch Measurement in Language Assessment
Teaching Methodology

主要業績

A Many-Facet Rasch Measurement of Differential Rater Severity/Leniency in Three Types of Assessment JALT Journal, May 2012 coauthor

研究内容 / Research Pursuits

This year I supervised an Iranian doctoral student who was a visiting scholar to Ochanomizu University. He collected data from an Iranian university on different types of rater assessment of Iranian students' English essays. I helped him analyze the data using many-faceted Rasch analysis. We coauthored a paper based on this research, which was published in The JALT Journal in May, 2012.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

I supervised a visiting scholar from Iran towards his Ph.D. dissertation. I also supervised two Master's degree students, who both graduated with an M.A. I supervised five undergraduate students on their graduation theses written in English. I continue to supervise two Ph.D. students, who are still working towards their degrees. Moreover, I taught 13 classes in various subjects related to English.

■ 研究計画

As program chair of the Testing and Evaluation Special Interest Group (TEVAL SIG) or the Japan Language Teaching Association (JALT), I helped organize panel discussion on assessment in language teaching for the JALT Pan-SIG Conference which was held at Shinshu University in Matsumoto in May, 2011. I also served on a doctoral dissertation committee at Temple University Japan. I am a reader for three journals: Language Testing, the Journal of the Japan Language Testing Association, and the JALT Journal. I occasionally contribute anonymous reviews of submitted articles for these journals.

■ メッセージ

Students today are under a lot of pressure, facing strict educational requirements and an uncertain job market when they graduate. Expectations of students to master English are increasing. I would like students to view language learning as something that is achievable for them, and not to dread it. I hope they can experience the fun of learning a language, whether it's English or another language.

氏名	柴坂 寿子 SHIBASAKA Hisako
所属 職名	人間文化創成科学研究科人間科学系 教授
学位	理学博士(1988 京都大学)
専門分野	人間行動学,子ども行動学(幼稚園・保育園での子どもの行動観察研究)
URL	http://www.develop.ocha.ac.jp/
E-mail	shibasaka.hisako@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

幼稚園児	preschoolers
仲間集団	peer group
仲間関係	peer relationship
仲間文化	peer culture

主要業績

柴坂寿子・倉持清美(2011) 幼稚園クラス集団における乗り物遊びの変容 日本保育学会第64回大会発表要旨集、576

研究内容 / Research Pursuits

第一に、ある公立幼稚園のクラス集団を入園から卒園まで2年間縦断調査したフィールドワーク資料(収集済み)の分析を行った。このクラス集団で繰り返された乗り物遊びを取り上げて、その変容過程をビデオ資料、フィールドノート等を元に分析し、仲間文化の変容過程を考察した。結果を日本保育学会第64回大会にて発表した。第二に、公立幼稚園において、2010年度入園のクラス集団のフィールドワークを引き続き行い、観察記録、保育者との話し合い記録を収集した。第三に、特別経費「乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築」(代表:浜口順子准教授)により、発達臨床心理学講座専攻科目「発達臨床基礎演習Ⅱ」の授業研究を、菊地知子講師と共同で行った。第四に、科学研究費「大学コミュニティにおける乳幼児保育の重層的カリキュラム」(代表:浜口順子准教授)による研究を本学附属保育所と共同で行った。研究報告書:大学の中で赤ちゃんが笑うⅡ

■ 教育内容 / Educational Pursuits

第一に、生活科学部1年生の学部共通科目の教育を行った。「児童学概論」で子どもを理解する基本的視点を講義した。第二に、生活科学部・発達心理学講座の学生の専門教育を行った。「発達臨床基礎演習Ⅱ」において、菊地知子講師と共同で、子ども理解につながる授業を行った。「発達臨床観察法」では観察法の基礎実習を行った。「発達社会文化論」では、園における子どもの行動について具体的事例を挙げながら講義した。「発達臨床論文演習Ⅰ・Ⅱ」で卒論の進捗状況報告や先行研究論文紹介を行わせ助言するとともに、卒業論文執筆及び口頭発表を指導・助言した。第三に、人間文化創成科学研究科前期課程、保育・児童学コースでは以下の科目を担当した。「子ども行動学特論」及び「子ども行動学演習」では現場における行動観察を行った論文等を取り上げて演習・講義を行った。「人間発達科学論」「保育・児童学研究方法論」で修論の中間報告に対して示唆を行った。また修論指導と修論審査に携わった。人間文化創成科学研究科前期課程の入試に携わった。第四に、人間文化創成科学研究科後期課程人間発達科学専攻、保育・児童学領域では、「比較発達行動論」を担当し、また、博論中間発表において示唆を行うと共に、後期課程入試における審査に携わった。第五に、非常勤講師として、家庭裁判所調査官養成課程研修「子どもの行動観察」の講義を担当した。

■ 研究計画

第一に、幼稚園・保育園などにおける観察と分析を継続し、これらの集積から、幼児集団における仲間関係・仲間文化とその変容について考察を深める。第二に、特別経費「乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築」(代表:浜口順子准教授)における研究を、付属幼稚園、付属保育所の保育者及び本学保育系教員と協力し進める。

■ メッセージ

幼稚園、保育園など、子どもたちの生活の場における行動を観察・記述・分析している。子どもたちが園で体験することの豊さにいつも驚き、それを研究を通して伝えていければと思っている

氏名	柴 真理子 Shiba Mariko
所属 職名	人間文化創成科学研究科文化科学系 教授
学位	博士(学術)(お茶の水女子大学1996)/Ph.D
専門分野	舞踊学・舞踊教育学/ Dance Research and Dance Education
URL	
E-mail	shiba.mariko@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

舞踊運動の体感
感性的コミュニケーション
身体表現
舞踊行動時の脳活動

bodily sensation of dance movement
KANSEI communication
body expression
brain function measurement of dance behavior

主要業績

日韓の舞踊専攻生によるデュエット時の動きと体感の変容 第63回舞踊学会 2011.12.3 (柴真理子・坪倉紀代子) 第63回舞踊学会大会研究発表抄録集 p.20

身体表現の意義に関する体験的理解の構造 第63回舞踊学会 2011.12. (中村あかね・原みなみ・福岡小百合・柴真理子) 第63回舞踊学会大会研究発表抄録集 p.21

研究内容 / Research Pursuits

2010年度は、①科学研究費補助金による研究の3年目(まとめ)の年であった。共同研究先の韓国芸術総合学校舞踊院から2名の舞踊専攻学生を被験者に招聘し、その2名とお茶大の舞踊専攻生2名被験者に「舞踊行動の体感に関する日韓比較」に関する実験を実施し、また、韓国人学生にはお茶大の卒業公演参加を求め、他国の公演でのリハーサル、ゲネプロ、本番で踊る際の体感の相違について調査を実施し、1年目、2年目の研究と合わせて、創造的な身体表現による異文化理解についての研究成果を報告書として日本語、韓国語(成果の一部)でまとめた。②大学院生との共同研究「身体表現の意義に関する体験的理解の構造」を実施。本研究では、舞踊経験の異なる学生の同じクラスでのダンス学習を通して、その間の認知的・心理的変容とその変容の要因を学生の授業記録に探り、舞踊経験の相違を1つの指標として身体表現の意義に関する体験的理解の構造の解明を試みた。

We conducted the Japan-South Korea comparative experiments about the bodily sensation of dancing with a compatriot, or with a foreigner. We conducted comparative experiments with Japanese and Korean students as subjects, about the physical experience of dancing with a person from their same country, and then with a foreigner. As a result, we found that entrainment and the inter-subjective world were formed from the very beginning of dancing with a compatriot. In contrast, in a duet with foreigners, by repeated activity, the partner's breathing was felt, and a sense of security, confidence, and unity were developed, and that physical entrainment was gradually formed, and the inter-subjective world came into being.

教育内容 / Educational Pursuits

学部教育: 舞踊教育学コースの専門科目「舞踊学概論」「臨床舞踊論 実験演習」を担当。前者では舞踊の歴史を中心に講義を行い、後者では体感に関する実験、文献講読、グループ討議の発表などを通して、人間の存在を表現する舞踊の構造、またそのような構造を有する舞踊の教育的価値やセラピューティックな価値についての学生の理解が深まった。また教職科目の「幼小体育実技(舞踊教育法実習初等教育)」では、身体表現の指導力とは何かを理解し、指導力を身につけるために、数人のグループに分かれて言葉かけの実習に力を入れた。また毎時間の授業記録を求めた。その結果、授業記録から、自らが創って踊る力を指導にどのように生かしていけばよいのかを考える態度が養われていることがうかがわれた。大学院教育: ゼミの院生は大学院前期課程5名、後期課程3名であった。各学生の研究テーマに沿った指導を行い、平成23年度は2名が修士論文を提出した。

研究計画

1、韓国芸術総合学校(国立大学)舞踊学部の南教授と始めた共同研究は、2011年度がまとめの年であり、日本語と韓国語(主要部分)での報告書を作成した。また、2010年度に始めた両大学の卒業公演にお互いの学生の作品を出し合うことについて、2011年度は韓国の学生がお茶大の卒業公演に参加したが、時期的な都合により、お茶大からは韓国芸術総合学校の卒業公演に参加できなかった。双方の大学で協議しながら、将来的にも舞踊実践とその実践も基づく研究を共同で進めていきたいと考える。2、自己理解・他者理解としての舞踊の特質を、体感・鏡像・場といった概念によって考察し、そこから舞踊教育、ダンスセラピーなどの指導における臨床的な舞踊の実践的研究を内容とした著書を執筆する。3、脳科学者との舞踊と脳科学に関する共同研究は3年を経過し、光トポグラフィーはどのような舞踊活動時の脳活動の特徴をどのように捉えることができるかが少しずつ明らかになってきている。今後は、実験計画を十分に練り上げ、脳科学者との共同研究を推進したい。

メッセージ

本学の舞踊教育学コースは、日本の国立大学法人で舞踊教育学を専門に学ぶことのできる唯一のコースです。舞踊に関する様々な知識と舞踊実技をバランスよく学びます。舞踊に対する知識が、舞踊創作や鑑賞の力を養い、また自らの舞踊経験が、舞踊に対する学問的なまなざしを拓きます。受験生はきっと「上手になりたい」という強い思いをもっていると思います。しかし、上手くなるには創る技術・踊る技術だけを追うのではなく、「なぜ、上手になりたいのか」「上手くなるとはどういうことなのか」という疑問を持つことが大切です。そのことを考えていくプロセスは、自分自身の向上のみならず、将来、指導者として指導する際の手がかりを得ていく過程でもあります。創り・踊りつつ、自分の舞踊活動に問いを立てそのこたえを探求する、そして、その探求が次の創作への力となる、この

氏名	<p>寫田 智</p> <p>SHIMADA Satoshi</p>
所属	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系
職名	准教授
学位	博士(理学)2000年
専門分野	植物系統進化学/Plant Phylogeny & Evolution
URL	http://bios.cc.ocha.ac.jp/Shimada/member/figs/framepage8.html
E-mail	shimada.satoshi@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

海洋植物
進化

Marine Plant
Evolution

主要業績

Masanori Hiraoka, Kensuke Ichihara, Wenrong Zhu, Jiahai Ma & Satoshi Shimada. 2011. Culture and hybridization experiments on an *Ulva* clade including the Qingdao strain blooming in the Yellow Sea. *PLoS ONE* 6(5): 1-6.

Satoshi Shimada, Maki Watanabe, Kensuke Ichihara & Masayuki Uchimura. 2011. Morphological variations of the seagrass species, *Halophila nipponica* (Hydrocharitaceae, Alismatales). *Coastal Marine Science* 35: 85-90.

Kensuke Ichihara, Frederic Mineur & Satoshi Shimada. 2011. Isolation and temporal expression analysis of freshwater-induced genes in *Ulva limnetica* (Ulvales, Chlorophyta). *Journal of Phycology* 47: 584-590

Rika Horimoto, Yuka Masakiyo, Kensuke Ichihara & Satoshi Shimada. 2011. Enteromorpha-like *Ulva* (Ulvophyceae, Chlorophyta) growing in the Todoroki River, Ishigaki island, Japan, with special reference to *Ulva meridionalis* Horimoto et Shimada sp. nov. *Bulletin of the National Science Museum* 37: 155-167.

研究内容 / Research Pursuits

我々の生育するこの地球上には1千万種の生物種が生育していると考えられていますが、現在の所150万種類が認知されているにすぎません。この地球上にはまだ見ぬ生物種のほうが多いのです。いったいどんな生物種がいるのでしょうか？そもそも、それら多様な生物種はどのようにして多様化・進化してきたのでしょうか？このような素朴な疑問を解決すべく、海洋植物を研究対象に系統・進化・分類に関する研究を行っています。海洋植物は普段の生活では馴染みがなく、近年でも新属が見つかるなど陸上植物に比べて生物多様性の理解がまだまだ進んでいない生物群で、多様性生物学にとって宝の山です。アサクサノリ、カサノリなど綺麗な種が多いことも魅力的です。フィールドでの調査や培養実験・分子系統解析などで生物多様性の実体を把握し、それら生物多様性を生み出した環境適応分子進化についてさらに詳細な研究を行っています。

■ 教育内容 / Educational Pursuits

植物形態学・植物形態学実習・植物学野外実習・植物系統進化学などを担当。光合成をおこないそれによって酸素を発生する生物(陸上植物と藻類)を一般には植物と呼ぶ。それらはクロロフィルaをもつという共通点を有するものの、その実体は互いに系統的にかけ離れ、形態的にも多様な生物の集合に過ぎない。植物の多様性はどのようにしてもたらされたのか？植物は生物界全体にどのように位置づけられるのか？といった疑問に対する答えを探りつつ、各植物群の形態的特徴およびそれぞれの類縁関係などについて概説する。

■ 研究計画

海洋植物における生物多様性の現状を理解し、生物多様化に関わった分子進化を明らかにする。それと同時に、絶滅危惧種などの海洋植物種の保全にも着手していきたい。

■ メッセージ

海洋に生育する植物の進化の謎にチャレンジし、絶滅危惧種の保全に向けた生態学的研究を一緒にしませんか

氏名	菅本 晶夫 SUGAMOTO Akio
所属 職名	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系 教授
学位	理学博士(1978 東京大学)
専門分野	素粒子論、高エネルギー物理学
URL	
E-mail	sugamoto@phys.ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

素粒子論	particle physics
ゲージ理論	gauge theory
重力理論	gravity theory
双対性	duality
ダークマター	dark matter

主要業績

Haruka Kisa and Akio Sugamoto, "Is the electromagnetic force also entropic force?" (in preparation)

研究内容 / Research Pursuits

2011年度に菅本は、木佐はる香 (M2) とともに、電磁気力がエントロピー力と考えられるかどうかを検討した。この研究は2010年に発表されたE. Verlindeによる重力はエントロピー力であると主張する論文に触発されたものである。Verlindeの論旨を電磁気力の場合に置き換えてゆくと、いくつかの修正を加えれば、電磁気力もVerlindeの意味でのエントロピー力と見なせることが分かった。しかしながら情報の伝達に関して更なる検証が必要である。菅本は穂谷野訓子 (M2) とともに、ゲージ理論と重力理論の双対関係を用いて、クォーク・グルオン・プラズマの熱伝導率を、重力理論から導出する研究を行った。又西尾咲子 (D3) と、5次元時空で定義されたニュートリノを用いて暗黒物質(ダークマター)を理解する研究を発展させた。菅本は国立天文台で行っている重力波測定装置の開発研究に、本学の院生西田恵里奈 (D3)、権藤里奈 (M1)、西田恵里奈 (M2) と共に、引き続き協力した。

In 2011, Sugamoto in collaboration with Haruka Kisa (M2), examined whether the electromagnetic force is the entropic force. This study is motivated by a paper by E. Verlinde, which claims that the gravitational force is the entropic force. Following Verlinde's argument but making some modifications, it is understood that the electromagnetic force can be considered as the entropic force in the meaning of Verlinde. About the transportation of the information, however, we need further examinations. Sugamoto studied with Noriko Hoyano (M2) the thermal conductivity of quark gluon plasma from gravity theory, by using the duality existing between gauge and gravitational theories. Also he developed with Sakiko Nishio (D3) the understanding of dark matters using neutrinos defined in the five dimensional space-time. Sugamoto continued to support the research and development of gravitational wave detector ongoing at the National Observatory with the graduate students, Erina Nishida (D3) and Rina Gondo (M1).

■ 教育内容 / Educational Pursuits

2011年度に菅本は、院生3名の研究指導を行った。即ち、木佐はる香は「電磁気力も重力と同じくエントロピー力か？」に関する修士論文を書いて修士課程を修了した。穂谷野訓子は「AdS/CFT対応による熱伝導の解析」に関する修士論文を書いて修士課程を修了した。西田恵里奈は「Development of advanced technology on optical system of gravitational wave detector KAGRA」に関する論文を書いて博士課程を修了した。

In 2008, Sugamoto supervised three graduate students: Haruka Kisa graduated the master course by writing the thesis entitled “Is the electromagnetic force also entropic force like the gravitational force?”. Noriko Hoyano graduated the master course by writing the thesis entitled “Analysis of thermal conductivity using AdS/CFT correspondence.” Erina Nishida wrote the doctor thesis entitled “Development of advanced technology on optical system of gravitational wave detector KAGRA”, and finished the course.

■ 研究計画

■ メッセージ

氏名	菅原 ますみ SUGAWARA MASUMI
所属 職名	人間文化創成科学研究科先端融合系 教授
学位 専門分野	1990年7月文学博士(東京都立大学大学院人文科学研究科・心理学)取得 発達心理学、発達精神病理学
URL	
E-mail	sugawara.masumi@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

発達心理学
発達精神病理学
パーソナリティ心理学
発達追跡研究
発達環境のクオリティ

Developmental psychology
Developmental psychopathology
Psychology of personality
Developmental Follow-up Study
Quality of Developmental Environment

主要業績

「2章 乳幼児期の心身の発達」,『乳幼児期・児童期の臨床心理学』, 永井徹監修, 青木紀久代・平野直己 共編, 培風館, 17-33, 2012.3

小児歯科の論文

教育と医学の論文

“子どもに良い放送”プロジェクトフォローアップ調査中間報告, 第9回調査報告書, 「テレビ視聴に対する親のかかわりと児童期の子どもの社会性」菅原ますみ・酒井厚・坂元章・向田久美子・一色伸夫, NHK放送文化研究所 53-56, 2012.3.

アジアの子どものQOL, 「子ども期のQOL尺度」菅原ますみ(研究分担者), 平成21~23年度文部科学省科学研究費補助金(基盤研究B) 報告書「生育環境とその格差が子どもの生活の質と精神的健康に及ぼす影響」榊原洋一(研究代表者), 11-16, 2012.3.

研究内容 / Research Pursuits

2011 年度には以下の研究を実施した:

1) 発達環境のクオリティと子どもの発達との関連についての縦断調査...家庭および保育・教育施設でのケアの質が子どもの心身の発達に及ぼす影響についての2011年度8回目の追跡調査(小学校2年生時)を完了した。2) グローバルCOE子どものQOLと社会的格差に関する縦断的研究...グローバルCOEの領域融合型研究として、幼児期の国際比較研究と思春期の国内学校調査を実施した。3) メディアと子どもの発達...NHKとの共同研究で9回目の8歳時点調査を完了した。4) 妊娠・出産・子育てに関する追跡調査(3歳時点)および第2回妊娠・出産・子育て期本調査(全国サンプル、N=4,737名)をベネッセコーポレーションとともに実施した。

The following longitudinal research projects were conducted in 2011.

1) Study on Quality of Developmental Environment : The purpose of this study is to find out the effects of the quality of care provided at home and child care centers on children's physical and psychological development by observational assessment from infancy. The eighth follow-up survey was completed. 2) Global COE Project: International comparative study on early childhood; developmental follow-up study on Japanese Junior High and High school students. 3) Child development and media: This is a collaborative research with NHK. The effect of electronic media on children of age 0 through 12 has been examined by longitudinal study. The follow-up project at 8 years of age was conducted. 4) Follow-up study on families during pregnancy, child birth, and child rearing period, conducted in collaboration with Benesse Corporation. In 2011, follow-up survey for families with 3 year-olds was completed, and 2nd. Basic Survey of Pregnancy, child birth, and child rearing (N=4,737) was administrated.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

学部教育:1年次基礎演習(理論)で臨床領域を担当した。2年次・3年次の心理学基礎教育では、実験・演習を通じて発達心理学および臨床心理学の基礎的技法の修得をめざした。4年次では卒論ゼミでは、子ども期の心理的適応と環境要因との関連に関する様々な心理学的アプローチの実際について研究指導をおこなった。

大学院教育:発達精神病理学およびパーソナリティ心理学の基礎に関する基本英文テキストを講読するとともに、演習および個別の研究指導によって具体的研究方法論の指導をおこなった。修士論文・博士論文の指導では、家族関係と子どもの発達に関する広範囲な発達精神病理学的研究の実際について指導をおこなっている。

Undergraduate students: In “Kiso-zemi” for freshman, the major theme was “family”. Studies on family from various academic fields such as psychology, sociology, education, behavioral genetics, and comparative ethology were discussed during the class, and each student did a presentation on summary of their own ideas. Basic education of psychology for sophomore and junior year, basic methodology of developmental psychology and clinical psychology was introduced by experiments and exercises. For seniors, thesis advices were given by discussion on current issues of various psychological approaches for psychological adjustment and environmental factors during childhood.

■ 研究計画

上記の研究プロジェクトを発展させ、また各プロジェクトにおける知見に基づいた研究発表を充実していきたいと考えている。

■ メッセージ

子ども期の健やかな心身の発達には遺伝子から家庭環境、学校での体験、社会的制度に至るまで広範囲な要因が影響を及ぼします。これらの諸要因がどのようなメカニズムとプロセスを経て子どもの心身の発達や健康に関わってくるのか、さらに子ども期の発達は成人期以降の発達や社会適応にどのような関連を持つのかをライフスパンの視点から明らかにすることが私たちの研究室の目標です。

氏名	杉田 孝夫 SUGITA Takao
所属 職名	人間文化創成科学研究科人間科学系 教授
学位	文学修士(1978 東京教育大学)
専門分野	政治学、西洋政治思想史、
URL	http://www.soc.ocha.ac.jp/sugita/%90%99%93c%83g%83b%83v%83y%81%5B%83W
E-mail	sugita.takao@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

政治思想史
ドイツ観念論
カント
フィヒテ
ヘーゲル

History of Political Thought
German Idealism
Kant
Fichte
Hegel

主要業績

(論文)「ドイツ観念論における「家族」観と自由」『哲学』(日本哲学会編)第62号, 知泉書館, 2011年4月, 57頁-71頁所収.

(論文)「啓蒙思潮とドイツ観念論の政治思想—共和制をめぐる言説に着目して—」 『ヘーゲル哲学研究』(日本ヘーゲル学会編) 第17号, こぶし書房, 2011年12月, 66頁-80頁

(論文)「和解は可能か: 政治哲学的問い」 『ぶらくしす』(広島大学応用倫理学プロジェクト研究センター編)第13号, 2012年3月, 79頁-84頁

(口頭発表)「ドイツ観念論における「家族」観と自由」 日本哲学会第70回大会シンポジウム「現代における家族／親密圏」での提題 2011年5月15日, 東京大学(本郷)

(口頭発表)「1812年法論と1813年国家論のテキスト問題—フィヒテ法政治論のテキストとコンテキスト」 日本フィヒテ協会第27回大会シンポジウム「1812年法論講義と1813年国家論講義をめぐって」での提題 2011年11月13日, 立正大学

研究内容 / Research Pursuits

ドイツ啓蒙とドイツ観念論の政治思想史研究 (1)とくにカント、フィヒテ、ヘーゲルの政治思想の諸問題をかれらの共通枠組みである「自由と共同性」の位相を同時代的文脈の中で再検討し、その歴史的固有性を明らかにする作業を行っている。(2)第二の主題として、カント、フィヒテ、ヘーゲルの家族観を、ドイツにおける「近代家族」の形成過程を示すテキストと捉えて、家族の構成と機能を分析し、同時代の社会構造の転換とどのように構造的に連関するものであるかを明らかにする作業をおこなっている。この作業は必然的に家長のものと近代家族と家長を主体とする近代社会の構造的秘密を明らかにするものであり、近代におけるジェンダーの思想的作為性と歴史性を明らかにする作業でもある。(3)以上の二つの側面からの研究によって現代社会における自由と共同性をめぐる問題状況を克服する理論的展望を得ることを目指している。とくに政治思想史の立場から個の生成と家族と市民社会の構造的連関を研究している。

I am chiefly interested in the intellectual history of modern Europe, and with this area I specialize in two related fields. One is the political thought of Modern Germany, especially German Enlightenment and German Idealism. The other is the genesis of Modern Family concept in Germany.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

学部講義「生活政治学I」「生活政治学II」では、第2学年を主対象に、現代デモクラシーの主体である生活者市民にとって必要な政治学の基礎理論を講義した。学部演習「生活政治学演習I」「生活政治学演習II」では、ジャン・ジャック・ルソー『社会契約論』『エミール』を講読した。大学院演習『生活政治論』『生活政治論演習』ではトクヴィル『アメリカのデモクラシー』第一巻を講読した。

■ 研究計画

(1) フィヒテ全集『第16巻 封鎖商業国家論』および『第17巻 ドイツ国民に告ぐ』の担当部分を仕上げるのが当面の仕事である。(2) 『ドイツ観念論の家族観—ドイツにおける近代家族概念の成立—』および『フィヒテの政治思想』をそれぞれ一冊にまとめたいと考えている。(3) ドイツ啓蒙の思想家のうち、ヤコービとフンボルトの政治思想、およびフンボルトのジェンダー論については、18世紀ドイツ思想を理解するうえで重要な対象であるにもかかわらず日本ではまったく手つかずの状態にある。ドイツ観念論の政治思想史研究に一区切りついたならば、ヤコービとフンボルトの研究を行いたい。

■ メッセージ

政治学は古来教養の学として長い伝統を築いてきました。近代以前においては統治者の教養の学あるいは統治の技術でした。政治学は役人や政治家になるための学問であるという見解が生まれた原因はそのような伝統に起因します。しかし統治者＝被治者の時代であるデモクラシーの現代においては、政治学はまず第一にすべての市民の教養の学でなければなりません。政治の世界は、人間が生きている間は絶えず試され、問い続けなければならない実践知の世界です。そのように考えると私たちはいつでもどこでもなんらかの政治のただ中にいることに気づきます。人生は、そこで得られる疑問や経験を手掛かりにして「善く生きる」ための知の探求の旅です。政治学はそのような旅の指南書の一つと言えます。

氏名	杉野 勇
	SUGINO Isamu
所属	人間文化創成科学研究科人間科学系
職名	准教授
学位	社会学修士(1992, 東京大学)
専門分野	理論社会学, 法社会学, 社会調査
URL	http://www.catnet.ne.jp/sugino/sugino_ws.htm
E-mail	sugino.isamu@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

社会調査法

Social Survey Method

主要業績

杉野勇, 「ワーク・ライフ・バランス——多様性と格差」, 佐藤嘉倫・尾嶋史章(編)『現代の階層社会1 格差と多様性』東京大学出版会.

杉野勇, 「量と質の共通の準拠問題」, 米村千代・数土直紀(編)『社会学を問う——規範・理論・実証の緊張関係』勁草書房.

研究内容 / Research Pursuits

社会階層と社会移動全国調査データに関して、Work-Life balanceに着目した分析・研究を纏めた。また、経験的社会調査研究に関する「量的調査(Quantitative Research)」と「質的調査(Qualitative Research)」についての方法論的検討を纏めた。その後は、社会統計学に関わる書籍の企画を進めている。

■ 教育内容 / Educational Pursuits

学部の社会学の入門的講義では、長谷川ほか『社会学』(有斐閣)を参照しつつ、都市と都市的生活様式、日常生活における相互行為、犯罪と逸脱、社会階級・階層と不平等、マスメディアとコミュニケーション、ナショナリズムなどのテーマについて講義した。演習においては、経済学の比較制度分析や司法と社会科学の関係についての実証研究、政治学の比較分析について先端的な内容を学習したほか、阪神淡路大震災についての社会学的研究、震災後のライフヒストリー研究について重点的に検討し、現下の日本社会の状況について考察と講義を行った。社会調査士の認定科目となっている社会調査法では、調査の企画から実施、報告書の纏めに至る迄の調査の全過程を実際に経験させた。大学院の演習では、質的調査についての複数のテキスト、政治学における調査研究方法についてのテキストを講読し、社会科学の方法論について学習と批判的検討を行った。

■ 研究計画

1) Web-surveyやComputer-Assisted Personal Interviewingについての調査方法論的研究を行う。2) 社会統計学或いは計量分析・多変量解析の教授法についての研究を行う。3) 2010年度に実施した、科研費基盤研究(S)の少子高齢化に関する大規模全国調査のデータ分析を進める、

■ メッセージ

私たちは、しつけや教育などの「社会化socialization」を経なければ、きちんとした「社会人」になれません。その意味で「規範」や「常識」を内面化(internalization)することはとても重要です。しかし同時に、そうした規範や常識を対象化してよく考えてみることも極めて重要です。自分達の手が直接届く範囲の割合はますます小さくなり、メディアなどによる情報や疑似体験に否が応にも巻込まれざるを得ない。その中で、経験的・実証的な証拠や事実に基づいて(evidence-based)、かつ論理的・分析的に思考をする(critical thinking)ということの重要性、言い換えれば社会科学的方法論・認識論について考える事の意義は強調し過ぎることはありません。他方で、規範や常識、趣味嗜好の社会的定式は、自分のアイデンティティと呼ばれるものを形成する要因でもあります。社会の理解と自己の理解が表裏一体であることの淋しさと面白さを共に実感することが大切です。

氏名	杉山 進
	SUGIYAMA Susumu
所属	人間文化創成科学研究科文化科学系
職名	教授
学位	体育学修士(東京教育大学)
専門分野	体育学、特にスポーツ哲学とスポーツ社会学
URL	
E-mail	sugiyama.susumu@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

大学体育
スポーツ哲学
スポーツ教育学
身体知
身体技能

Physical Education in University
Sport Philosophy
Sport Education
Wisdom of Body
Motor Skill

主要業績

研究内容 / Research Pursuits

■ 教育内容 / Educational Pursuits

〈授業改善〉スポーツ健康実習等の実技授業の内容と指導方法の改善に努めた。専門科目では、体育教師への関心を深めるべく、保健体育科教育法Iに関連して、附属中高校に授業参観を依頼し、教師養成に成果を挙げている。学生の課外活動支援に関しては、今年度も昨年度同様、運動部活動の低調を憂慮して、運動部代表学生の一緒になって、その対策について協議してきている。

■ 研究計画

体育及びスポーツで養成すべき「身体知」とは、どのようなものかについて、人間諸科学の様々な分野から改めて検討する必要があると考えている。特に体育での教育内容を身体知から構築することを構想している。

■ メッセージ

氏名	鈴木 恵美子 SUZUKI Emiko
所属 職名	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系 教授
学位 専門分野	農学博士/Doctor of Agriculture (1989 東京大学) 栄養学/Nutrition、生化学/Biochemistry
URL	http://www.food.ocha.ac.jp/
E-mail	suzuki.emiko@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

アスコルビン酸
酸化ストレス
社会ストレス
アクリルアミド

ascorbic acid
oxidative stress
social stress
acrylamide

主要業績

Dose of 3-methylcholanthrene enhances vitamin C accumulation and mRNA expression of its transporter in the liver of ODS rats and in HepG2 cells. J Biochem Mol Toxicol, 25:369–376, 2011

Level of Orally Ingested Vitamin C Affects the Expression of Its 3 Transporters and Its Accumulation in the Livers of ODS Rats. Bioscience, Biotechnology, and Biochemistry, 75(12):2394-2397, 2011

研究内容 / Research Pursuits

ビタミンC(アスコルビン酸)は生体内の有効な抗酸化剤で、酸化ストレスを低減化させると考えられる。その体内動態を明らかにすることは、アスコルビン酸の効力を評価するために必要と考え研究を行っている。アスコルビン酸の体内動態に関する詳細な研究は少なく、アスコルビン酸の輸送担体発現に対する酸化ストレスの影響を調べている。さらに、社会ストレスの影響やアクリルアミド生成量低減化に関する研究も行った。

Vitamin C (ascorbic acid: AsA) is an effective antioxidant in the body, and it is considered to reduce the oxidative stress. The bioavailability of AsA is related closely to the behavior and distribution mechanism of AsA in vivo. It is necessary to get more information on the behavior and distribution mechanism of AsA in vivo, in order to know the bioavailability of AsA. The study on the effect of the social stress was done. The study on the decrease of acrylamide formation was done.

教育内容 / Educational Pursuits

学部で担当した主な授業科目としては「生化学」「分析化学」「ライフスタイル栄養学」「ライフステージ栄養学」「応用栄養学実習」である。このうち基礎的なものは「生化学」「一般化学実験」で、より専門的な領域のものは「ライフスタイル栄養学」「応用栄養学実習」である。「生化学」では、人体の構造や機能を理解する上で必要な基礎的な知識を習得させることを目的に行っている。「分析化学実験」では、実験の基礎となる基本操作法を習得させ、安全で正しい実験が行えるようになることを目的としている。「ライフスタイル栄養学」では、人を取り巻く環境因子や生活習慣の違いが身体に及ぼす影響を理解し、その栄養状態の変化を理解することを目的にしている。「応用栄養学実習」は基本的な身体計測や栄養状態を評価するための生理・生化学的検査を行っている。

大学院では「生体制御学特論」「生体制御学演習」「栄養制御学」「栄養制御学演習」を開講した。

“Biochemistry” and “Analytical Chemistry Experiment” are basic subjects. “Human nutrition in the life style” “Human nutrition in the life stage” and “Practice in advanced nutrition” are special ones. In “Biochemistry”, the structures and functions of carbohydrates, proteins, lipids, and nucleic acids are taught. In “Analytical Chemistry Experiment”, the general use of laboratory instruments, such as pipette and burette, is explained, and preparation of reagent solutions and the like, is also taught. In “Human nutrition in the life style”, the effects of several environmental factors and the difference of life style on the body and the proper nutrient intake are taught. In “Human nutrition in the life stage”, the difference of life stage on the body and the proper nutrient intake are taught. In “Practice in advanced nutrition”, physical measurement and the blood and urine tests are done.

研究計画

超高齢化社会では高齢者の健康を考えることは重要である。抗酸化物質により老化の進行抑制等がはかられる可能性が考えられたために抗酸化物質の適切な摂取について明らかにする。この結果により、高齢者のQOLの改善が期待されるものと考えている。また、ヒトの栄養状態が異なる場合での社会ストレスの影響を明らかにすることによりヒトの健康の維持増進に寄与できると考えている。

メッセージ

人の健康や食物のことについて興味をもって学び、将来、人の健康の維持・増進に寄与したいと考えている人を歓迎します。

氏名	鈴木 禎宏 SUZUKI Sadahiro
所属 職名	人間文化創成科学研究科文化科学系 准教授
学位	博士号(学術)(2002年 東京大学)
専門分野	比較日本文化論/比較文学比較文化、生活造形論
URL	http://www.aesthe.ocha.ac.jp/~hp/suzuki/
E-mail	suzuki.sadahiro@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

生活造形論
比較文化論
民芸運動と対抗産業革命
20世紀イギリスのスタジオ・クラフト運動

Theory of Arts and Crafts
Comparative Literature and Culture
Mingein Movement as counter-Industrial Revolution
British Studio Crafts Movement

主要業績

鈴木禎宏「〈民藝〉の歴史」、鞍田崇、編集部編『〈民藝〉のレッスン つたなさの技法』フィルムアート社、2012年1月、182-196頁。

「バーナード・リーチ」、鞍田崇、編集部編『〈民藝〉のレッスン つたなさの技法』フィルムアート社、2012年1月、152-153頁。

研究内容 / Research Pursuits

専門分野: 比較日本文化論/比較文学比較文化、生活造形論 主な研究課題: 1 二〇世紀イギリスの工芸(Studio Potteryを中心に) 2 近現代日本の工芸(民芸運動ほか) 3 その他日本とヨーロッパを軸とする比較文化論(例えば、昭和初期の日本における「世界」観など)

My research subjects so far are as follows: (1) Aspects of "Art for Life's Sake" in Modern and Contemporary Japanese Cultural Scenes; (2) The History of the British Studio Craft Movement (mainly in the field of ceramics); and (3) A Mental Map of the Modern Japanese: A History of World Views Conceived by Modern Japan in the Period between 1905 and 1945.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

主な担当授業科目 (学 部)比較生活文化論、比較文化論演習、比較生活文化史I、生活造形論ほか (大学院)比較文化論、比較生活文化特論、生活造形特論、生活芸術論 学部4年間を通じ、「自分で問題をみつけ、その問題に自分で答えをみつけることのできる人材」の育成を目指しております。 この目的のためには、(1)基礎技能を高めていくことと、(2)専門性を高めていくことという、二つの事柄が重要です。すなわち、(1)語学などの基礎学力、問題設定能力、情報収集能力、分析・思考能力、発表能力などを高めていくことと、(2)比較文化論という方法論を身につけ、異文化理解能力と異文化への発信能力を高めることです。 こうした観点から各学年の授業を組み立て、学部4年間で一通りの能力が身に付くように努力しております。

■ 研究計画

生活造形論の理論化。いわゆる「情報技術革命」が文化のあり方に及ぼす影響の分析。平成23-26年度 科学研究費補助金 基盤研究A「アーツ・アンド・クラフツと民藝 ウィリアム・モリスと柳宗悦を中心とした比較研究」研究分担者

■ メッセージ

日本語の「ハンカチ」と英語の“handkerchief”は似て非なるものですが、その違いをみなさんは御存知でしょうか。「ハンカチ」とは「小型・方形の手ふき布」(『広辞苑』)であるのに対し、“handkerchief”は“a small piece of material or paper that you use for blowing your nose, etc.”(鼻をかむさいなどに用いる、一切れのものまたは 紙) (Oxford 英英辞典)です。「ハンカチ」も“handkerchief”も一切れの布であることには変わりはありませんが、それらが現実の生活において果たす役割は、文化によって異なることになります。このような生活造形などを手がかりとして、文化の接触と変容の問題等に取り組んでおります。こうした問題を考える際には、(1)「異文化」を「自文化」に対して説明すること、および(2)「自文化」を「異文化」に対して説明すること、の2点を常に意識することになります。文化と文化の接触の現場に興味があり、外国語の習得に意欲のある方を、歓迎いたします。

氏名	鈴木 寿子
	SUZUKI Toshiko
所属	人間文化創成科学研究科
職名	リサーチフェロー
学位	
専門分野	
URL	
E-mail	suzuki.toshiko@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

共生日本語教育
持続可能性教育としての日本語教育
日本語教員養成
教育実習
内省

主要業績

鈴木寿子(2011)「移動主体のために言語教育は何ができるか—アイデンティティを紡ぐ場として」細川英雄(編)『言語教育とアイデンティティ—ことばの教育実践とその可能性』春風社, 117-137.

鈴木寿子(2011)『『日本語教師にならない人』にとっても有益な日本語教師養成はどうあるべきか—開放的教師養成のための一考察』『リテラシー』8, 33-38.

鈴木寿子(2011)「共生日本語教育実習生によって見出される教室・自他・社会の視座—実習生の内省レポートの分析から」『言語文化と日本語教育』42, 31-40.

鈴木寿子・張瑜珊(2011)「長期留学中の大学院女子留学生の語り—断絶の感覚をうみだすもの」『ジェンダー研究』14, 53-70.

研究内容 / Research Pursuits

在留外国人の増加に伴い、日本語教師の役割にも変化が起こった。日本語教育は従来の「日本語を効率的に教える」という守備範囲を更新し、「持続可能な社会と個人」を追求するための教育として再構築することに課題を見出すようになってきた。この課題の追求を眼目とした日本語教育が、言語生態学を理論的背景とする持続可能性日本語教育である。持続可能性日本語教育の教師の役割は、持続可能な生き方を学習者と共に模索する“同行者としての教師”である。筆者は“同行者としての教師”の育成方法や育成過程の学びの様相を明らかにすべく、持続可能性日本語教育に基づく教師養成プログラムの開発『持続可能な教師』とはどのような教師かを考える教室を行った。実践の意義としては、参加者の①教師観の変化、②言語使用の活性化、③視野の広がりがみられたこと、改善点としては、①内容を内発的な問いからスタートすること、②形式を座学から実践に展開することによって、自己を起点とした能動的な学びを追求することが挙げられる。

■ 教育内容 / Educational Pursuits

2011年度は後期集中講義「日本語教育学研究演習」を担当した。同科目では、修士論文研究の開始を目前に控えた修士課程1年生を主な対象者とし、日本語教育における実践研究のあり方を考えることを主題とした。特に実践と研究の関係、「自分」が研究を行う意義を仲間と考え、日本語教師(日本語教育学を学ぶもの)としての自分が、研究を通じて何ができるのかを内省する姿勢を養うことを目指した。活動では、主に以下の2つの試みを柱とした。第一に、受講生が、大学院入学前、そして入学後の自分の軌跡をふり返り、互いのふり返りを傾聴することである。第二に、実践(研究)者が執筆した論文を読みとき、インタビューを行うことである。いずれの試みにおいても、履修者は協働で作業にあたり、研究とはなんであるかを言語化することを通して研究に対する理解を深めることを追求した。

■ 研究計画

現在取り組んでいる持続可能性日本語教育に基づく教師養成の研究を遂行し、教師養成シラバスを、教師育成プログラムとしてまとめ上げることを目指している。国内における実践の積み重ねに加え、中国における研究協力者とともに、中国の日本語教育専攻の大学院生などを対象としたワークショップなどの短期的な実践を試行する計画である。これを基に、大学等教育機関日本語教師や地域自治体の日本語ボランティア向けの公開講座・ワークショップとして実施、評価するほか、HP で教材・教案を公開する。

■ メッセージ

氏名	須藤 紀子 SUDO Noriko
所属 職名	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系 准教授
学位	博士(保健学)／Ph.D in Health Science
専門分野	公衆栄養学／public health nutrition 国際栄養学／international nutrition 災害栄養学／nutrition in disasters
URL	
E-mail	sudo.noriko@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

公衆栄養
災害栄養
公衆衛生
国際保健
健康教育

Public Health Nutrition
Nutrition in Disaster
Public Health
International Health
Health Education

主要業績

Sudo N. Characteristics of educational leaflets that attract pregnant women. Health Services Insights 2011; 4: 1-10.

Sudo N. Developing alcohol education leaflet for pregnant women using qualitative and quantitative data. Clin Med Insights: Women's Health 2011; 4: 17-33.

Yen Li Chu, O. Yaw Addo, Courtney D. Perry, Noriko Sudo, Marla Reicks. Time spent in home meal preparation affects energy and food group intakes among midlife women. Appetite 2012; 58: 438-443.

須藤紀子、澤口眞規子、吉池信男. 災害時の栄養・食生活支援に対する市町村の準備状況と保健所からの技術的支援に関する全国調査. 日本公衛誌 2011; 58: 895-902.

須藤紀子、澤口眞規子、吉池信男. 災害時の食生活支援のための管理栄養士養成教育のあり方に関するグループインタビュー. 日本栄養士会雑誌 2012; 55: 28-37.

研究内容 / Research Pursuits

災害時の食生活支援に係る人材育成のあり方を検討することを目的に、管理栄養士養成施設教員4名と被災保健所管理栄養士2名を対象にグループインタビューを実施した。教員からは、(1)卒前教育は重要だが時間的制約のなかで優先順位は低い。(2)今後教科書に関連項目が加われば、授業で触れられる可能性は高い。(3)教育には、災害時の状況をイメージできる臨場感が必要。(4)実際の活動に従事した栄養士の話などを収録した生きた教材の開発が望まれる。(5)災害時に対応できる力は、科目横断的な総合演習によって身に付くという意見がだされた。保健所管理栄養士からは、(1)学生ボランティアによる被災者への栄養教育に対するニーズはある。(2)調理実習室を活用した炊き出しは、問題発生時の責任の所在や、避難所への運搬、食材費の問題があるとの意見がだされた。卒前教育を担う養成施設と現場の管理栄養士を育成する立場にある保健所が連携して人材を育てる必要がある。

Four faculty of registered dietitian training courses and two public health dietitians who had experienced an earthquake in the past participated in a group interview that discussed how to develop registered dietitians who are competent in emergencies. Faculty said: (1) pre-graduate education about nutrition in emergencies is important but its priority in teaching is low under time pressure. (2) If related items are added in new textbooks from here on, there is a high possibility to be talked in class. (3) Lecture should be vivid enough to imagine the situation in a time of disaster. (4) Development of teachware like record of dietitians' talk about their experience in disaster support service is desirable. (5) Competency in disaster situation can be developed through multidisciplinary exercise. Dietitians who work for public health center said: (1) Nutrition education to disaster victims given by student volunteers is welcome. (2) As for preparing meals at test kitchens in the universities, locus of responsibility, delivery methods to evacuation sites and food costs are concerned. Universities and public health centers, those in charge of pre-graduate education and on-the-job training, respectively, should cooperate in development of human resources.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

栄養行政学;公衆栄養学実習;食物栄養管理論総合演習;公衆栄養
臨地実習

Food Laws, Regulations and Quality Assurance;
Practice in Public Health Nutrition;General Seminar of
Human Nutrition;Field Practice in Public Health

■ 研究計画

国際保健分野では、ルワンダにおけるNGOによる支援の効果を評価する介入研究を実施する予定。

■ メッセージ

公衆栄養学は、官公庁や保健所、市町村保健センターで働く行政栄養士の業務に関連した学問です。将来、行政栄養士を目指す高校生や、すでに現場の経験をお持ちで、公衆栄養活動を科学的に研究するために大学院への進学を考えている方を歓迎します。また、外国のことに興味があつて、他国の栄養政策や食生活などを、英語の文献や現地調査を通じて調べることが好きな人も、公衆栄養学研究室(国際栄養学分野)に向いていると思います。

氏名	曾根 保子
	SONE Yasuko
所属	生活環境教育研究センター
職名	助教
学位	学術博士/Ph.D. in Nutrition (2007年 お茶の水女子大学)
専門分野	分子栄養学/基礎予防栄養学 Molecular Nutrition/Preventive Nutrition
URL	
E-mail	sone.yasuko@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

ビタミンC	Vitamin C
活性酸素	Reactive oxygen species
生活習慣病	Metabolic syndrome
遺伝子発現解析	Analysis of gene expression
脂肪酸代謝	Fatty acid metabolism

主要業績

The level of orally ingested vitamin C affected the expression of vitamin C transporters and vitamin C accumulation in the livers of ODS rats. Sone Y, Ueta E, Kodama S, Sannomaru Y, Miyake N, Sone H, Fujiwara Y, Otsuka Y, Kondo K, Inagaki M, Namba E, Kurata T, Suzuki E. Biosci Biotechnol Biochem. 2011&75(12):2394-7. Epub 2011 Dec 7.

Dose of 3-methylcholanthrene enhances vitamin C accumulation and mRNA expression of its transporter in the liver of ODS rats and in HepG2 cells. Sone Y, Ueta E, Sannomaru Y, Miyake N, Sone H, Otsuka Y, Kondo K, Kurata T, Suzuki E. J Biochem Mol Toxicol. 2011 Nov-Dec&25(6):369-76. doi: 10.1002/jbt.20403. Epub 2011 Jul 28.

Antioxidant/anti-inflammatory activities and total phenolic content of extracts obtained from plants grown in Vietnam. Sone Y, Moon JK, Mai TT, Thu NN, Asano E, Yamaguchi K, Otsuka Y, Shibamoto T. J Sci Food Agric. 2011 Sep&91(12):2259-64. doi: 10.1002/jsfa.4448. Epub 2011 May 5.

脂質代謝関連遺伝子FADS、PPAR γ の遺伝子多型が臨床指標に及ぼす影響 曾根 保子、園田 麻里子、貴堂 としみ、市 育代、河原 和夫、森田 寛、近藤 和雄、大塚 譲、藤原 葉子

Anti-oxidant/anti-inflammatory activities and total phenolic content of extracts obtained from plants grown in Vietnam Yasuko Sone, Joon-Kwan Moon, Truong Tuyet Mai, Nghiem Nguyet Thu, Eri Asano, Keiko Yamaguchi, Yoko Fujiwara, Yuzuru Otsuka and Takayuki Shibamoto

研究内容 / Research Pursuits

疾患予防の観点から、動物、細胞、タンパク質・遺伝子レベルで、栄養素による体内調節のメカニズムを科学的に明らかにすることを研究課題とし、疾患予防と健康増進を図るために有効な科学的根拠の蓄積を目指す。【これまでの主な研究テーマ】1)アスコルビン酸の体内動態に関する研究 2)免疫細胞分化制御に対する酸化ストレスの影響 3)脂質代謝関連遺伝子多型と臨床指標との関連性 4)生体内酸化ストレス防御機構の解明 5)食用植物の生理活性の特定および分離精製

My studies are to investigate the effect of nutrients on regulation mechanism in vivo, at the level of an individual, cell and molecule. My main research interests are as follows. 1) Effect of vitamin C intake on the disposition in normal, diabetic rats. 2) Effect of oxidative Stress on the Expression of Cytokine in immunocyte. 3) Association of lipid metabolism profile, polymorphism, and clinical markers. 4) Effect of antioxidant enzymes knockdown by siRNA on cellular proliferation. 5) Isolation and identification of biological active substance in edible plants.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

近年、「食」に関連する情報は、栄養学的側面のみにとどまらず、生活習慣、文化、安全性、その他の環境問題など非常に多様化している。その中には、検証されずまぎれから一般に言われてきたことや科学的根拠のない情報が利用されている場面も散見されます。これに対し、「食」に関して正しい情報を取捨選択し、発信できることのできる人材を育成することは、国民全体の健康維持・増進を目指す上で重要な課題のひとつです。そこで、「食」に関する科学的根拠を自ら構築し、情報を有効に発信・伝達できる高度な「食」の専門化を育成することを目標に、受身の立場での知識学習だけでなく、自ら主体的に研究課題を探索し、課題解決に取り組む場を提供するよう心がけ、授業・研究補助を実施していきます。【担当授業】「食物栄養学科」 ■ 食物栄養学基礎演習「SHOKUIKUプログラム」 ■ 食のサイエンス ■ 食育研究コロシアム ■ 食をめぐる環境論

It is necessary that we deal with the issues about diets to maintain our health. It covers a lot of ground, ex. nutrient, culture, safeness, life-style and food environment. A new revelation about these issues results in the prevention for various disorders. Therefore we have to produce excellent human resources to promote scientific analysis of diet, and also strive to enhance the specialists of diets, who have the ability to resolve these issues, and play a leading role in field of SHOKUIKU. I deliver following lectures to undergraduate students and graduate students..
【Lecture】Department of Nutrition and Food Science
■ Basic training for nutrition and food science
SHOKUIKU Program ■ Science for diet ■ Colloquium for SHOKUIKU ■ Food environmental issue

■ 研究計画

各種疾患発症リスクの低減には、生活習慣の中でも、とりわけ摂取栄養素(食物)が大きな要因の一つである。これまでも様々な食物が疾患の発症や老化の予防につながるという報告が数多くなされているが、食物由来の栄養素による疾患予防効果は、集団や民族間において異なる、或いは、基盤となる科学的根拠に差があるなど、生活習慣病をはじめとする各種疾患の発症リスクの低減効果や老化抑制効果についての評価にバラツキが大きい。これに対し、栄養素による各種疾患予防効果を正確に評価するためには、遺伝型に即した食習慣の改善が期待されるほか、その改善効果の量的・質的程度をより具体的に評価するための指針を明らかにする必要がある。これらの基礎知見となる科学的根拠の蓄積を抗酸化ビタミン、脂肪酸などをターゲットとして行う。下記のテーマについて重点的に取り組む。1) 脂質代謝関連遺伝子の遺伝子多型と脂質代謝プロファイルとの関連解析 2) ビタミンCの体内輸送機構の解明 3) 抗酸化ビタミンの生理機能の解明 ※ 共同研究の可能性 有

■ メッセージ

疾患予防の観点から、栄養素による体内調節のメカニズムを明らかにすることを研究課題としています。そして、疾患予防と健康増進を図るためにより有効な栄養摂取の仕方を科学的に明らかにしていきたいと思っています。栄養学分野の科学的根拠を蓄積し、それに基づいた情報を正しく発信できる専門家が、お茶の水女子大学からたくさん巣立ってくれるよう願っています。

氏名	高崎 みどり
	TAKASAKI Midori
所属	人間文化創成科学研究科文化科学系
職名	教授
学位	文学修士／Master of Arts
専門分野	日本語
URL	
E-mail	takasaki.midori@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

日本語文章論
日本語会話分析
日本語の文章／談話
ことばとジェンダー

Text analysis
Conversational analysis
Discourse and style
Japanese language and gender

主要業績

編著 中村明・佐久間まゆみ・高崎みどり・十重田裕一・宗像和重・半沢幹一『日本語 文章・文体・表現事典』朝倉書店 2011年7月

論文 高崎みどり「文章・文体論と語彙」石井正彦・斉藤倫明編『これからの語彙論』ひつじ書房 2011年12月

論文 高崎みどり「書き言葉における”美味”を意味する語の使用と性差—『おいしい』を中心に」『お茶の水女子大学 人文科学研究』8号 2011年3月

書評 高崎みどり「中村明著『日本語の美』『日本語の芸』『日本語学』2012年1月号 明治書院

学会発表 高崎みどり「書き言葉における”美味”を意味する語の使用と性差—『おいしい』を中心に」ATJ 2011 Annual Conference (in University of Hawai'i)

研究内容 / Research Pursuits

1)「古典文学作品におけるテキスト談話研究・」(平成22・23・24年度科学研究費補助金 基盤研究(C)課題番号22520459 高崎みどり研究代表)) 2)お茶の水女子大学比較文化教育研究センター 共同研究プロジェクト「英語・日本語における食べ物に対する感覚評価と文化的アイデンティティ」 3)国立国語研究所共同プロジェクト「テキストにおける語彙の分布と文章構造」

•I study "The discourse and text analysis of Japanese classic works" under the support of Grant-in-Aid for Scientific Research for JFY 2010 ,2011 and 2012 as the Principal Investigator. •I studied, in collaboration with Professor Polly Szatrowski, "Sensory Evaluation of Food and Cultural Identity both in English and in Japanese "

■ 教育内容 / Educational Pursuits

【学部教育】・学部では日本語構造論演習、日本語学概論等の授業を行った。9人の卒業論文を指導した。【大学院教育】・大学院教育では日本語表現分析論および演習を修士課程および博士課程の学生に対して行った。・日本語学をテーマとする修士論文作成の指導を3名の学生に対して行った。日本語学をテーマとする博士論文準備ゼミを3名の学生に対して行った。・博士論文審査委員会 主査1回(論文博士)、副査3回、博士後期課程主指導5名、副指導4名

【Under graduate Course】・Introduction to studies in Japanese linguistics ・Introductory seminar ・Seminar of Japanese text /discourse analysis ・Lecture on Japanese idiolect and literary ・I supervised nine under graduate students 【Graduate Course】・Methodology of study of text /discourse analysis ・Seminar of theory text /discourse analysis ・I supervised graduate students, five as a main supervisor, four as a sub vice supervisor.

■ 研究計画

文学作品のテキスト分析と、談話分析を引き続きおこなっていく。また、言語行動とジェンダーの関係についても探究していく。

■ メッセージ

近現代の日本語について、文芸作品やジャーナリズムの言語から、日常会話、ツイッター等の新しいメディアまで、幅広く研究しています。ことばと、変動する社会状況との関係に興味のある方は、是非一緒に勉強しましょう。

氏名	高島 元洋
	TAKASHIMA Motohiro
所属	人間文化創成科学研究科文化科学系
職名	教授
学位	博士(文学)(1993 東京大学)
専門分野	日本倫理思想史・倫理学
URL	
E-mail	takashima.motohiro@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

倫理学
日本倫理思想史

ethics
history of Japanese ethical thought

主要業績

高島元洋編著『近世日本の儒教思想—山崎闇斎学派を中心として』、お茶の水女子大学附属図書館(E.bookサービス)、2012月3月

「第5章 江戸時代における道德思想(徳育論)について考えてみよう(1)」第6章 江戸時代における道德思想(徳育論)について考えてみよう(2)」、押谷由夫編著『道德性形成・徳育論』、放送大学教育振興会、2011年9月

研究内容 / Research Pursuits

日本思想を極東の特殊な思想として理解するのではなく、これを手掛かりとして人間の普遍的な倫理そのものを考察する。主とする専門領域は、江戸時代の思想・文化、特に儒教であるが、古代(神道)・中世(仏教)をも視野に入れながら日本思想全体を概観して研究する。また現代の倫理の問題(人倫＝人間関係)に関しても、特に超越的な存在(神・仏・天など)や他界の観点を考慮しつつ、心(理性)に対する身体(感情)の問題として再考する。A個別研究(モノグラフ)としては、1儒教関係、2儒教以外の研究(仏教・武士道・演劇など)、3道德教育関係があり、またB方法論の分野の研究もある。

■ 教育内容 / Educational Pursuits

学生に対する教育内容は、主として「講義」と「ゼミ」である。「講義」は教員が中心となる授業であり、「ゼミ」においては学生が中心となってレポートをする。教育の意図は、学生の主体的な問題意識を育成することであるが、「講義」の現状においてその趣旨はよく理解されており、「ゼミ」においても活潑な議論がなされていることから、期待どおりに機能していると判断している。

■ 研究計画

日本思想は、インド・中国など外来思想の強い影響を受け、独自のものは少ないと思われるが、実際はきわめて洗練された多様な内容を含み、西洋思想にも匹敵する普遍性を持っている。今日海外との文化交流は、能・歌舞伎・茶道だけではなく文学・演劇・美術など高度に専門的な学問分野においても活発である。海外の研究者との共同研究を進めながら、日本思想が特殊であるとする誤解を是正し、正確な思想・文化を発信する必要がある。

■ メッセージ

授業においては、テキスト(資料)を正確に読みとる訓練と相互の討論をとおして、資料の意味、著者が何を考えていたかを時間をかけて考えたい。膨大な情報の中から、いかにして正確なものを選択するか、いかにして自身の行為に結び付けていくかの練習をする。

氏名	鷹野 景子 TAKANO Keiko
所属	
職名	教授
学位	理学博士 / Ph D
専門分野	理論化学
URL	
E-mail	takano.keiko@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

計算化学
反応機構
相互作用解析
糖鎖科学
有機金属化学

computational chemistry
reaction mechanism
interaction analysis
glycoscience
organometallic chemistry

主要業績

Y. Mori and K. Takano, Reaction Mechanism of Di- π -methane Rearrangement of 4-phenyl-4H-pyran: A CASSCF/MRMP2 Study, J. Photochem. Photobiol. A, Chemistry, 219, 278-284 (2011)

Y. Mori and K. Takano, Quantum Chemical Study on the Mechanism for the Cycloreversion of Anthracene-benzene and Naphthalene-benzene [4+4] Cycloadducts, Chem. Phys. Lett., 219, 278-284 (2011)

M. Otsuka, H. Mori, H. Kikuchi, and K. Takano, Density Functional Theory Calculations of Iodine Cluster Anions: Structures, Chemical Bonding Nature, and Vibrational Spectra, Comput. Theor. Chem., 973, 69-75 (2011)

N. Tsuchida, M. Isoi, H. Nakazawa, and K. Takano, A DFT Study on Geometric Preference of Non-bridging Form to Bridging Form in Molybdenum Complexes with Phosphenium Ligand, J. Organometal. Chem., 697, 41-50 (2012)

研究内容 / Research Pursuits

量子化学的手法をベースに、分子や化学反応のシミュレーション計算を行っている。実験科学に対する相補的情報の提供と実験結果の理解や解釈に加えて、新しい分子の設計や現象の予測を目指している。対象とする分子のサイズは大小様々で、無機分子・有機分子・生体系の認識部位など多岐に渡る。

Our ultimate goal is to understand and predict properties of molecules, characteristics of chemical bonding, mechanisms of chemical reactions, and molecular interactions from the viewpoint of quantum chemistry. There are many kinds of complicated intermolecular and intramolecular interactions in materials. We try to understand and clarify origin and features of the interactions.

教育内容 / Educational Pursuits

理学部全体と化学科、および大学院理学専攻における教育活動に従事した。全学共通科目の「基礎化学B」のほかに、化学科の専門科目を複数担当した。「物理化学I」量子化学の基礎的内容。「専門化学実験I」および「基本化学実験III」における物理化学分野の実験を担当し、物理化学の重要概念を修得させることを意図した実験に従事した。「特別研究」卒業研究生(2010年度は3名)の研究指導。大学院前期課程理学専攻の科目としては、「理論化学特論」分子軌道計算の実習と学術論文を読むための専門用語の解説。「理論化学特論演習」量子化学の専門書の輪読と問題演習により、理論的基礎を養う。大学院生(博士前期課程理学専攻6名、博士後期課程複合領域科学専攻・理学専攻各1名)の研究・論文指導。修士論文審査においては、主査2名、副査2件を務めた。

"The classes I provided for undergraduate students are as follows: "Basic Chemistry B," "Physical Chemistry I," "Lab Course of Physical Chemistry." Those for graduate students are as follows: "Advanced Theoretical Chemistry," "Exercise in Theoretical Chemistry." I supervised three undergraduate students, six master's course students, and two PhD students."

研究計画

量子化学的手法を用いて、分子およびその集合体を対象とするコンピュータシミュレーションを行う。実験科学に対する相補的な情報の提供、化学現象の先見的な理解および予測を目指す。生命科学に重要な役割をもつ糖鎖科学への計算化学からのアプローチは先導的な研究と位置づけられ、重要テーマの一つとして推進していく。金属錯体の構造と反応、分子の励起状態と分光学など実験精度に匹敵する計算研究を推進する。現在実施している共同研究テーマとして下記のものがある。(1)フラグメント分子軌道法による酵素と基質、ウイルス表面糖鎖と抗体との相互作用の解析 (2)マイクロドメイン糖脂質糖鎖の立体構造と分子間相互作用の解析 (3)有機金属錯体の構造と反応機構の解明 (4)ポリハロゲンの構造と結合特性に関する研究 (5)量子化学文献データベースの開発。今後の共同研究の可能性としては、以下のものがある。(1)量子化学の触媒化学への応用 (2)原子クラスターの幾何学構造と結合性の系統的解析

メッセージ

計算化学は、化学の長い歴史とは対照的に、20世紀になってからスタートした若い学問・研究分野ですが、現在では、化学のあらゆる分野の研究に必須の役割を果たしています。結合の性質や化学反応の過程や機構をコンピュータシミュレーションによって精度よく調べることができます。現象を説明するだけでなく、予測も夢ではありません。化学科では、1年次の「基礎化学B」の前半で、原子・分子に関する概念の導入を行い、2年次の「物理化学I(講義)」と「計算化学(実習)」で量子化学の基礎と実際に学びます。さらに4年次の計算化学および大学の計算化学特論において、化学分野の研究に活用できるレベルの計算化学の知識と技術を修得できます。計算化学を学び、化学の新しい領域を共に開拓していきましょう。また私たちは、国際的視野で活躍できる理系の女性人材育成をめざし、理系英語の教育や留学支援にも力を入れています。本学の支援を大いに活用して、力を伸ばしてほしいと願っています。

氏名	鷹野 光行
	TAKANO Mitsuyuki
所属	人間文化創成科学研究科文化科学系
職名	教授
学位	文学修士(1974年 東京大学)
専門分野	考古学・博物館学
URL	
E-mail	takano.mitsuyuki@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

博物館学
縄文土器研究
火山噴火罹災遺跡

museology

主要業績

研究内容 / Research Pursuits

874(貞観16)年の開聞岳噴火によって埋没した鹿児島県指宿市・敷領遺跡の発掘調査により、埋没以前の古代 地方村落の実態と集落跡と生産に関わる水田・畑などにおける復旧作業の程度の違いを明らかにすることで、噴火災害に対応して住民がどのような行動をとったかを明らかにすることを第2の目的として敷領遺跡の発掘調査を行っている。指宿市敷領遺跡の内部における土地利用の大きな枠組みは、これまでの調査でほぼ明らかになりつつある。平成23年度は居住地域の確定を目指して発掘調査地を平成20年度に建物跡を検出した中敷領地点近くの十二町地点に求めた。発掘の結果、期待された建物跡を含む明瞭な遺構の検出できなかったが、874年の開聞岳の噴火によって堆積した火山灰(紫コラと通称する。)の直下から、多量の土器片がちょうど水の流れによって流されたような状況で出土したなどの結果から、発掘した区画には遺構は存在しなかったものの、この近辺に人の生活する場が存在したであろうことはほぼ明らかであると想定できるだろう。

■ 教育内容 / Educational Pursuits

[学部]1.博物館実習:実習履習者22名について、学内実習、実務実習、見学実習を実施。2.博物館資料特殊講義:博物館活動の根幹をなす資料の取り扱いについての講義。3.考古学通論1:考古学の定義、研究法、など縄文時代を題材として講義した。[大学院]1.博物館経営論:博物館の教育活動に関する実態調査を博物館の年報を利用して行った。

■ 研究計画

後期の半年間、サバティカル期間をいただけたので、近い将来に向けての博物館学教育への展望を開いてきた。

■ メッセージ

大学では高校までにはなかったさまざまな分野の研究／教育がおこなわれます。また学芸員をはじめとして各種の資格／免許が大学の学修によって得られます。新しい分野に好奇心を持って、チャレンジして欲しい。

氏名	高濱 裕子 TAKAHAMA Yuko
所属 職名	人間文化創成科学研究科人間科学系 教授
学位 専門分野	博士(人文科学)(2000お茶の水女子大学) 生涯発達心理学・保育学
URL	
E-mail	takahama.yuko@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

葛藤処理方略の文化差
世代性についての研究
世代性
三世代

Conflict management skills in children
Study of Generativity among Three Generations
Generativity
Three Generations

主要業績

著書 氏家達夫・高濱裕子編著『親子関係の生涯発達心理学』風間書房 2011年7月

論文 高濱裕子・渡辺利子著『日本の幼児の自己主張はなぜ洗練されないのか:2歳, 2歳半, 3歳時点の自己主張の変化と親の認知』2012年3月
お茶の水女子大学人文科学研究 第8巻, 2-13

論文 高濱裕子著『二〜三歳児の反抗・自己主張の意味と親の対応』2011年5月 教育と医学 No.695 慶應義塾大学 出版会

学会発表 高濱裕子・渡辺利子「日本の幼児の自己主張はなぜ洗練されないのか:2歳, 2歳半, 3歳時点の自己主張の変化と親の認知」2012年3月
日本発達心理学会第23回大会名古屋国際会議場

学会発表 江村綾野・高濱裕子「母親のポジティブ感情とネガティブ感情の日内変動」2012年3月 日本発達心理学会第23回大会 名古屋国際会議場

研究内容 / Research Pursuits

「葛藤処理方略の文化差の発生過程についての比較文化的研究」(科学研究費補助金B:連携研究者) 第一次反抗期以降、家庭での社会化や就学前施設(保育所・幼稚園)および小学校での文化化の結果として出現すると予想される処理方略の文化差を検討した。発達過程に焦点化した比較文化的研究は、おそらく本研究が世界で初めてのものである。2010年度は、2008年度および2009年度に収集した縦断データの分析をおこなった。対象者は、日本、中国および韓国における4歳児のコホートと6歳児のコホートそれぞれ50名であった。内容は、家庭訪問による親への面接、親子課題、子ども課題であった。年齢差や文化差が析出されており、それらを統一的に説明する理論枠組みを引き続き検討した。

三世代(祖父母、父母、子ども)を射程に入れた世代継承性についての研究を始めた。世代継承性はエリクソンによる概念であり、養護性や養育性とも密接に関連するが、実子の有無を超えた文化・芸術などの継承をも含めて検討したい。先行研究を概観すると、二世帯をカバーする研究はかなりおこなわれているが、三世代はあまり検討されていない。血縁距離や居住距離と、社会資源の授受、資源の流れを検討することによって、現代の日本で展開されている三世代の交流の実情を明らかにしたい。

■ 教育内容 / Educational Pursuits

大学院博士前期課程では、「保育者養成論特論」、「保育者養成論演習」を担当した。「保育者養成論特論」(前期)では、親子関係を研究する際に援用されることの多い「愛着理論」、「家族システム理論」などを取りあげ、その理論の生まれた背景や関連する理論などを紹介した。さらに『縦断研究の挑戦: 発達を理解するために』(三宅和夫・高橋恵子編著、金子書房)をテキストとして使用し、講読・討論を進めた。「保育者養成論演習」(後期)では、“Handbook of Parenting” Vol.3をテキストとして使用した。これらのテキストのもつ魅力が受講生の意欲を一層高め、毎回議論が活発であったこと、深化したことを特記しておきたい。学部教育では、前期に「生涯発達講義講読」、「人間関係学」、「児童学概論」、「人間生活論」、教職科目の「生活科教育論」を担当した。後期には「発達過程論」、LA科目の「情緒と発達の心理学」を担当した。これらの授業科目においてとりわけ意識した点は、親や大人側から見る(とらえる)という視点である。ともすると、乳幼児、児童、生徒側から見たりとらえたりすることが多い。しかし、養育する側(親、保育者)からの見え方やとらえ方を知ること、発達の相互影響性、互惠性に気づくことになった。

■ 研究計画

■ メッセージ

現代社会におけるさまざまな課題を、生涯発達心理学的な視点をもちながら検討しています。親や保育者などの成人発達のメカニズムには、まだよくわからないことがあります。家庭や幼稚園・保育所などのフィールドに関与しつつ、対象を長期的に追跡するアプローチを採用しながら解明したいと思っています。親子関係を検討する時に、2世代ではなく3世代の関係から、つまり世代性という概念を導入して検討しようと考えています。データの収集などに難しさがありますが、より実態に迫るためには相応の努力をしようと思います。また、私たちはいかなる道筋をたどって日本人になってゆくのかという疑問を解明するために、日本、韓国、中国そしてアメリカとの比較文化研究に取り組んでいます。社会・経済的変化が、親になるプロセスや家庭の養育機能にどのような影響を与えているのかを、東アジア諸国との比較によって明らかにしたいと思っています。

氏名	田中 琢三 TANAKA Takuzo
所属 職名	大学院人間文化創成科学研究科文化科学系 助教
学位 専門分野	文学修士/MA (1998年3月 東京大学) 文学博士/Ph.D. (2005年3月 パリ第4大学) フランス文学/French literature
URL	
E-mail	tanaka.takuzo@ocha.ad.jp

研究者キーワード / Keywords

フランス文学
フランス語教育
比較文学

French literature
Teaching of French
Comparative literature

主要業績

(単著)「ポール・ブールジェ『死』と二つの世界大戦～戦時下の日本における仏文学受容の一側面」、『比較日本学教育研究センター研究年報』, お茶の水女子大学比較日本学研究センター, 第7号, 2011年4月, pp. 293-300. 「フランス自然主義文学と検閲～ルイ・デブレの裁判をめぐる」, 『お茶の水女子大学人文科学研究』, 第8巻, お茶の水女子大学, 2012年3月, pp. 109-118. (共著)『仏検対応 クラウン フランス語熟語辞典』, 三

研究内容 / Research Pursuits

1. フランス自然主義文学の総合的研究 2. 近現代の日本とフランスにおける文学検閲の分析 3. フランス語の効果的な教育方法の開発

教育内容 / Educational Pursuits

学部 1.中級フランス語の読解、聞き取りの訓練 2.演習形式によるフランス語の小説の講読 3.ヨーロッパの文学・思想に関する講義 4.卒論指導 大学院 1.演習形式によるフランス語の小説の講読 2.文学論に関する講義

研究計画

1.第三共和政期を中心とした近現代フランスにおける文学と政治の相互的影響関係の考察 2.近代日本におけるフランス自然主義文学の受容と検閲の実態に関する研究 3.アンデルセンの童話『人魚姫』の世界各国における受容に関する共同研究 4.最新のフランス語教授法の研究と実践

メッセージ

大学は思考力、判断力、そして何よりも主体的な生き方を身につける場所です。できるだけ多くのことを学んで、多角的な視野を養いましょう。

氏名	棚谷 綾
	TANATANI Aya
所属	人間文化創成科学研究科先端融合系
職名	准教授
学位	博士(薬学)
専門分野	超分子化学、創薬化学、構造有機化学
URL	http://www.sci.ocha.ac.jp/chemHP/tanataniHP/index.html
E-mail	tanatani.aya@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

機能性分子
超分子
芳香族アミド
創薬
核内受容体

functional molecule
Supramolecule
Aromatic amides
Drug discovery
Nuclear receptor

主要業績

Sakai, H.; Hirano, T.; Mori, S.; Fujii, S.; Masuno, H.; Kinoshita, M.; Kagechika, H.; Tanatani, A. 6-Arylcoumarins as novel non-steroidal type progesterone antagonists: an example with receptor binding-dependent fluorescence. *J. Med. Chem.* 2011, 54, 7055-7065.

Fujii, S.; Masuno, H.; Taoda, Y.; Kano, A.; Wongmayura, A.; Nakabayashi, M.; Ito, N.; Shimizu, M.; Kawachi, E.; Hirano, T.; Endo, Y.; Tanatani, A.; Kagechika, H. Boron Cluster-based Development of Potent Non-Secosteroidal Vitamin D Receptor Ligands: Direct Observation of Hydrophobic Interaction between Protein Surface and Carborane. *J. Am. Chem. Soc.* 2011, 133, 20933-20941.

Wongmayura, A.; Fujii, S.; Ito, S.; Kano, A.; Taoda, Y.; Kawachi, E.; Kagechika, H.; Tanatani, A. Novel Vitamin D Receptor Ligands Bearing A Spherical Hydrophobic Core Structure–Comparison of Bicyclic Hydrocarbon Derivatives with Boron Cluster Derivatives–. *Bioorg. Med. Chem. Lett.* 2012, 22, 1756-1760.

Kanai, M.; Hirano, T.; Azumaya, I.; Okamoto, I.; Kagechika, H.; Tanatani, A. Solvent-dependent Conformational and Fluorescence Change of a N-Phenylbenzohydroxamic Acid Derivative Bearing Two Pyrene Moieties. *Tetrahedron* 2012, 68, 2778-2783.

Kudo, M.; Katagiri, K.; Azumaya, I.; Kagechika, H.; Tanatani, A. Synthesis and Helical Properties of Aromatic Multilayered Oligoureas. *Tetrahedron (Special Issue: Chemistry of Foldamers)* 2012, 68, 4455-4463.

研究内容 / Research Pursuits

本研究室では、分子やその集合体の立体特性や動的制御に基づいた機能性分子の創製を行っている。有機化学を基盤に、材料科学や医薬化学への展開をはかっており、主な研究内容は以下の2項目からなる。
1. アミド結合の立体特性を活かした機能性芳香族分子構築: 芳香族N-メチル化アミド類がシス型を優先するという立体特性をもとに、芳香族多層構造やらせん構造を構築し、その機能を解析している。また、外的刺激で立体構造を変化させる分子スイッチの創製へと展開している。
2. 核内受容体を分子標的とした医薬化学研究: 核内受容体は脂溶性ホルモンや活性型ビタミンの機能を担う生体内分子で、癌や生活習慣病などの難治性疾患の治療薬開発の重要な分子標的である。アンドロゲン、プロゲステロンなどのホルモン受容体、ビタミンD受容体を分子標的として、その機能を特異的に制御する新規化合物を創製し、その機能を検出するバイオプローブ開発を行っている。

Novel unique molecules in the field of materials sciences and medicinal chemistry are developed. Based on our finding about the conformational properties of aromatic amides and related functional groups, we develop aromatic molecules with unique three-dimensional structure and dynamic behaviors, such as aromatic multi-layered and helical molecules. Further, the molecules whose conformation is changed by the environmental stimuli are designed, and synthesized. In the field of medicinal chemistry, we develop the novel specific ligands for nuclear receptors, such as androgen, progesterone, and vitamin D receptors, and elucidate their biological functions.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

学部:「一般化学実験」「化学基礎実験」「有機化学1」大学院「超分子化学特論」

■ 研究計画

分子やその集合体の三次元構造とその動的挙動は、その物性や機能を発揮する上で重要な要素の一つであり、機能性分子の設計には立体構造や動的挙動の制御が必須である。本研究では、芳香族アミドのユニークな立体特性の発見を元に、その特性をいかした機能性芳香族分子の構築を行っている。芳香族多層構造やらせん構造といった分子の構築と構造制御、分子スイッチなどの機能開発を中心に、新たな機能性分子の創製へと展開している。一方、核内受容体を分子標的とした医薬化学研究では、新規骨格を持つアンドロゲン、プロゲステロン受容体アンタゴニスト、ビタミンD誘導体を創製しており、その生理活性を明らかとし、医薬への応用展開を図っている。

■ メッセージ

氏名	棚橋 訓 TANAHASHI Satoshi
所属 職名	人間文化創成科学研究科人間科学系 教授
学位	文学修士(1984年3月、慶應義塾大学)／M.A. in History, Keio University, 1984.
専門分野	文化人類学、社会人類学、歴史人類学、オセアニア地域研究、ジェンダー・セクシュアリティ研究／Socio-Cultura
URL	
E-mail	tanahashi.satoshi@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

文化人類学
歴史人類学
オセアニア地域研究
ジェンダー／セクシュアリティ研究
文化景観論

Cultural Anthropology
Historical Anthropology
Oceanic Studies
Gender and Sexuality Studies
Cultural Landscape Studies

主要業績

「環礁支配の景観史—マジュロ環礁とプカプカ環礁の植民地開発と環境変化をめぐる考察」、日本文化人類学会第45回研究大会分科会「オセアニア環礁州島の景観史—文理融合型研究の成果」(於:法政大学)『日本文化人類学会第45回研究大会発表要旨集』(同準備委員会編、pp.57-61.)に発表要旨掲載]

「「もろさ」、「つながり」、そして「つよさ」—オセアニア環礁世界で生きる術」、第6回人類学関連学会協議会合同シンポジウム「島—離島の生態をめぐる」(於:沖縄県立博物館・美術館)『第6回人類学関連学会協議会合同シンポジウム・プログラム「島—離島の生態をめぐる」』(日本人類学会同準備委員会編、p.3)に発表要旨掲載]

研究内容 / Research Pursuits

2011年度は科学研究費補助金の研究分担者として「サンゴ礁—人間共生系の景観史」(新学術領域研究(研究領域提案型)の研究課題のもと、八重山諸島石垣島で臨地調査と景観史に関する古文書調査を実施した。過去3年度に亘って環境省地球環境研究総合推進費(全球システム変動分野)の研究分担者として実施した「環礁上に成立する小島嶼国の地形変化と水資源変化に対する適応策に関する研究」の研究成果の取りまとめを5月に公表して環境省のアセスメントを受けたが、リーダーを務めたサブグループの成果に対してS評価を得た。また、東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所、国立民族学博物館の共同研究員として2件の共同研究に携わった。

During the academic year of 2011, I conducted field and archival research on Ishigaki of Yaeyama Islands with JSPS grant concerning landscape history of coral reefs—human symbiosis. I also submitted the final report of three-year research project titled “Sustainable Land and Water Resource Management in Atoll Island Countries” to Japanese Ministry of Environment, and received S-rank evaluation as its final assessment. I was appointed as the affiliated/visiting researcher of Tokyo University of Foreign Studies ILCAA and National Museum of Ethnology.

教育内容 / Educational Pursuits

学部において「ジェンダーLA科目」「人間と発達」「教育科学研究指導Ⅰ・Ⅱ」「文化人類学概論」「民族誌学演習」等の授業を、大学院において「開発人類学」「開発人類学演習」「開発・ジェンダー論特論」「比較文化ジェンダー論演習」等の授業と研究論文指導を実施した。また、放送大学客員教授、東京大学・慶應義塾大学・成城大学・聖心女子大学等の非常勤講師として文化人類学分野の教育と研究指導を実施した。

For the academic year of 2011, I gave the lectures, seminars, directed-reading courses for both undergraduate and graduate programs at Ochanomizu University. List of the courses I offered were as follows: Globalization, Locality and Gender, Introduction to Cultural Anthropology, Seminars on Cultural Anthropology, Introduction to Educational Sciences, Development Anthropology, Special Studies on Development Anthropology, Comparative Studies in Gender and Culture. As a visiting professor of the Open University of Japan, I was in charge of an introductory TV lecture series of cultural anthropology which has been on the air since April, 2007. I also gave undergraduate-level lecture series on different topics of cultural anthropology for University of Tokyo, Keio University, Seijo University and University of Sacred Heart.

研究計画

2007年度から、サンゴ礁学、自然地理学、地形学、考古学、形質人類学、海洋生態学、海洋工学、リモートセンシングの各分野の研究者との共同によるオセアニア環礁の地球温暖化適応策の総合的研究を開始した。2008年度から文部科学省科研費(新学術領域研究)「サンゴ礁学」にも参画して当該分野での次世代の育成にも取り組んでいる。今後は、文化人類学の立場から、オセアニア島嶼諸国や国内小島嶼域の環境変動対策と国土保全・景観分析の分野での実戦的な適応策をめぐる政策提言を視野に入れた、地球貢献型の研究を一層推進していく計画である。また、ジェンダー・セクシュアリティ研究においては、公衆衛生学、疫学、社会学の各専門分野の研究者たちとの連携を視野に入れた総合的な研究枠組の検討を行い、文化人類学の新たな実戦的貢献の可能性を切り拓きたいと考えている。

メッセージ

私は文化人類学の視点と方法から現代世界の様々な問題群を実証的に分析・理解して、その成果を現代社会に還元することを目指して研究を続けています。フィールドワーク(現地での実態調査)によって人間の多様性をこまやかに捉えつつ、その背後にある普遍的課題に目を向けていくのが文化人類学という分野の特徴です。文化人類学では「多様性に向き合う眼」と世界をつなぐ「外向と共生の思考」を核に、研究を進めていきます。多くの受験生のかたがたにとって、文化人類学は、あまり耳にしたことのない未知の分野だと思いますが、お茶大に入学の際には、是非ともこの未知の分野に積極的に分け入り、現代世界を見る新たな眼(芽)を手に入れて頂きたいと思います。

氏名	垂見 裕子 TARUMI Yuko
所属	人間発達教育研究センター
職名	特任助教
学位	学術博士
専門分野	比較教育
URL	
E-mail	tarumi.yuko@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

格差
学力
家庭的背景
社会関係資本
養育

Inequity
Student achievement
Family background
Social capital
Parenting

主要業績

Bornstein, M, Britto, P. R., Nonoyama-Tarumi, Y., Ota, Y., Petrovic, O. and Putnick, D. L., "Child Development in Developing Countries: Introduction and Methods", Child Development, 83(1), 2012.

垂見裕子 2012年、「小学校および中学校における学力の学校間格差—ふたつの地域の比較—」『青少年期から成人期への移行についての追跡的研究 JELS第15集 CエリアWave3調査報告および香港調査報告』お茶の水女子大学グローバルCOE事務局

「PISAから日本の学力格差をみる—家庭的背景・学習方略を中心に—」『日本教育社会学会公開国際シンポジウム「学力格差と教育政策—香港・上海・日本のPISA結果から—」』お茶の水女子大学・2011年9月

研究内容 / Research Pursuits

1. 学力格差の国際比較 家庭背景と学力の関係は、学校が教育機会・教育システムを通して社会の平等化に寄与しているかという重要な指標である。国際比較学力調査を用いて、日本の学力格差の特徴はいかなるものか、またどのような教育制度で家庭背景による学力格差は緩和されるかを実証。2. 幼少期の養育環境の格差の国際比較 幼少期の養育環境は、子供の発達に長期的な影響を及ぼす。国際比較家計調査を用いて、幼少期の家庭における養育環境、親の養育活動に、発展途上国間で、更にそれぞれの国内で、どのような格差があるのかを実証。3. 社会関係資本と教育 少子化、共働き家庭、地域の人間関係の希薄化の中で、社会関係資本という概念が注目されている。Japan Education Longitudinal Study (JELS)の分析をとおり、親の社会関係資本が学力に及ぼす影響またその影響力が家庭的背景により異なることを実証。

1. Comparative research on inequity in educational achievement Using international comparative educational achievement data, I investigate the characteristics of inequity in student achievement in Japan, and institutional factors that modify inequity in educational outcomes. 2. Comparative research on inequity in parenting environment in early childhood in developing countries Using international comparative household surveys, I examine to what extent home environment and parenting practices vary across countries and within countries. 3. Social capital and education More attention is given to the concept of social capital with the decreasing fertility rate, increasing dual-income families, and decreasing sense of community. Through the analyses of JELS data, I examine the effect of social capital on student achievement, and how the effects vary by family background.

教育内容 / Educational Pursuits

1. 人間発達科学論III この授業では、以下のテーマを通して、格差を比較教育社会学の視点から学びます。(1)社会的・教育的格差が再生産される構造や原因を解明するための社会学の理論、(2)格差を国際比較教育の視点から分析するための枠組み・調査手法、(3)教育格差の諸要因。授業を通して、社会および教育における格差を分析・理解するために必要な理論および国際比較の調査手法の基礎を習得することを目指します。2. 社会調査の設計と実施 この授業では、社会調査の設計・実施から最終報告までの手順と方法について、作業などを実際に行いながら学びます。第一部で、各自の問題意識を調査の問いへと変えていくための手続き、適切な調査方法を選択する仕方について学びます。第二部で、量的調査のプロセス(対象者の選定とサンプリングの考え方、調査票作成の技術、調査実施上の注意、収集した調査データの処理、調査結果報告の方法)を学びます。第三部で、質的調査の特徴と諸方法について学びます。

1. Science of Human Development III This course is intended as an introduction to the major theories, methods, and findings of comparative and international research on social and educational inequity. The first part will cover basic sociological theories of why social and educational inequity exists and persists. The second part will introduce frameworks and methods for comparative and international analysis of inequity. The third part will investigate various bases of educational inequity, such as family, gender, school, and the link between school and work. 2. Design and Implementation of Social Research In this course, students will learn the process and steps of designing and implementing a social research. The first part will cover the process of turning an idea into a research question and choosing the appropriate research method. The second part will cover the process of quantitative research (sampling, questionnaire, things to be aware when collecting data, data input, and data presentation). The third part will cover various characteristics and methodologies of qualitative research.

研究計画

1. 国際比較学力調査を用いて、東アジアにおける家庭の学校外教育への投資の特性を研究。特に地域内の共通性と各国の固有性に注目する。またJELS調査をととして、特に香港と日本の学校外投資の状況、規定要因、学年間の推移を比較する。2. 社会資本と教育 質的調査をととして、以下の点を実証する。保護者の学校参加や子育てネットワークの場では、どのようなつながりが構築されているのか。そこでどのような資源が生成されているのか。親はそれらの資源を子どもの教育にどのように活用しているのか。さらに、親の社会関係資本の質やそれらの子どもの教育達成への影響力は家庭的背景により異なるか。

メッセージ

教育を、社会学と国際比較のレンズを通して見ると、日頃当たり前にとらえている学校の様々な現象、教育政策に対して、新しい発見、疑問が出てくると思います。大学では多くの理論とさまざまなアプローチを学び、考察、分析、実証する力を養ってください。

氏名	千葉 和義 CHIBA Kazuyoshi
所属 職名	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系 教授
学位	理学博士(1990 東京工業大学)
専門分野	発生生物学、細胞生物学、理科教育
URL	http://bios.cc.ocha.ac.jp/lab/chiba/index.html
E-mail	chiba.kazuyoshi@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

卵成熟	oocyte maturation
アポトーシス	Apoptosis
減数分裂	Meiosis
受精	Fertilization

主要業績

Chiba, K. 2011. Evolution of the acquisition of fertilization competence and polyspermy blocks during meiotic maturation. *Mol Reprod Dev* 78, 808-813.

Otsuki, J., Nagai, Y., Lopata, A., Chiba, K., Yasmin, L., and Sankai, T. 2011. Symmetrical division of mouse oocytes during meiotic maturation can lead to the development of twin embryos that amalgamate to form a chimeric hermaphrodite *Hum. Reprod.* 27, 380-387.

堀田のぞみ、千葉和義 小学校理科の学級担任と理科専科の指導に関する一考察 人間文化創成科学論叢(お茶の水女子大学)第14巻351-359. 2012年 3月。

研究内容 / Research Pursuits

卵と精子の形成では、減数分裂が起り、染色体数は半減する。一方、受精に引き続く精子核と卵核の合体によって、染色体数はもとにもどる。従って減数分裂と受精は、生物学的な意味において、独立した別々の事象である。しかしほとんどの動物において、受精は卵減数分裂の途中で成立する。そのタイミングは種によって厳密に制御されており、減数分裂が適切な段階まで進行しなければ受精は正常に起らないし、受精しなければ卵減数分裂が完了しないことが知られている。本研究では、減数分裂と受精がどのように干渉しあい、生命の連続性を成り立たしているのかを明らかにすることを目標とする。具体的にはヒトデ、マウス等を研究対象として、1)どのように減数分裂が休止して受精を待つのか、2)未受精卵がアポトーシスで死んでしまうのはどのような機構によるのか、について研究を進めている。

The number of chromosomes decreases during meiotic division, and it increases upon fertilization. Thus, meiosis and fertilization seem to be biologically independent and different events. However, in many animals, fertilization occurs during meiotic division of oocytes. The timing of fertilization is definitely restricted; fertilization does not occur until meiosis proceeds to an appropriate stage and meiosis reinitiation is induced by fertilization. I am interested in the fact that meiosis and fertilization proceed interactively, and would like to find molecular mechanisms of the interaction using starfish and mouse oocytes.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

ー学部ー 発生生物学:卵と精子の形成から受精を経て、細胞分裂が始まり、発生・分化が進行していく各過程を取り上げて、それらの分子メカニズムについて解説する。 内分泌学:個体や細胞は、外部環境からどのようなシグナルを受け取り、どのような機構で対応するのかについて、研究の経緯やトピックスを交えながら、解説する。 発生生物学実習:ヒトデ、カエル、ニワトリ等を用いて減数分裂と受精、そして発生を観察する。また、減数分裂や受精を制御している生理活性物質を単離して、その働きについて探究的な実験を行う。 海洋環境学ダイビング実習:ダイビング技術、水中観察・記録技術の習得とダイビングライセンスの取得を行い、海洋生物の観察を行う。科学コミュニケーションや教員養成(理科教育論)に関しても担当している。

Developmental Biology: The molecular mechanisms of fertilization, cleavage, cell division, and organogenesis are covered in this class. Endocrinology: It will be discussed how extracellular signals such as hormones affect whole body and cells. Also, the current important issues will be covered in this class. Laboratory course of developmental biology: Using eggs or oocytes from starfish and frog, meiosis reinitiation, fertilization and cell division are observed. Molecular Developmental Biology: Graduate level lecture and literature discussion in this class covers the molecular mechanisms of development. Other Classes: Scuba Diving course, Science education for science communicator.

■ 研究計画

減数分裂中期休止機構と、未受精卵におけるアポトーシス機構を解明し、初期発生を分子レベルで理解したい。

■ メッセージ

大学で授業を受けてみれば、いままでにない新しい世界が広がっていることが感じられると思います。その世界は、あなた自らが歩み出すことで、より深く遠くまで、見えてくるものです。また研究とは、これまで誰も手にしたことがない、全く新しい価値の創造であり、興奮と感動に満ちた自己実現を伴います。あなたが来るのを楽しみにしています。

氏名	塚田 和美
	TSUKADA Kazumi
所属	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系
職名	教授
学位	理学博士(1983 東京都立大学)
専門分野	微分幾何学
URL	
E-mail	tsukada.kazumi@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

リーマン部分多様体
擬リーマン幾何学
四元数微分幾何学
等質空間
曲率テンソル

Riemannian submanifolds
pseudo-Riemannian geometry
quaternionic differential geometry
homogeneous spaces
curvature tensors

主要業績

A remark on complex Lagrangian cones in H^n , (with N.Ejiri), Proc. of the 2nd International Colloquium on Differential Geometry and related fields, Veliko Tarnovo, Bulgaria 6-10 September 2010, (2011) 151-157.

Conformally flat homogeneous Lorentzian manifolds, (with K.Honda) to appear in Proceedings of VI International Meeting on Lorentzian Geometry, Granada 2011, September 6-9

研究内容 / Research Pursuits

(1) 共形平坦等質ローレンツ多様体の構成及び分類: リッチ作用素の形に着目し、共形平坦等質ローレンツ多様体の構造を調べ、そのようなものの構成及び分類問題に取り組んだ。リッチ作用素の型の多くの場合に、構成分類問題を解決することができた。以上の結果をスペインで開催されたローレンツ幾何学に関する国際研究集会で発表した。その内容は同研究集会のProceedings に発表される予定である。(2) 四元数多様体特に四元数射影空間の全複素部分多様体に関する基礎理論を構築した。Ferus らによる四元数正則曲面の理論の高次元化を目指している。

(1) The construction and the classification of the conformally flat homogeneous Lorentzian manifolds: we investigate the structure of the conformally flat homogeneous Lorentzian manifolds according to the form of the Ricci operators and study the construction and the classification of such manifolds. For almost all types of the Ricci operators, we have solved the construction and the classification problem. I talked our results in the VI International Meeting on Lorentzian Geometry, Granada(Spain) . The paper will be published in the Proceedings. (2) I made the fundamental theory on the totally complex submanifolds in a quaternionic manifold , in particular , in a quaternion projective space. I study the higher-dimensional version of the theory on surfaces of a four-dimensional sphere from the view point of quaternionic holomorphic geometry by Ferus et al

■ 教育内容 / Educational Pursuits

線形代数学I及びその演習(数学科1年生向け)「行列と行列式の理論」「連立一次方程式の解法」等について解説と問題演習。位相空間論及びその演習(数学科2年生向け)距離空間、位相空間に関する基礎的事項の解説と問題演習。多様体構造特論:大学院生向け。「アインシュタインの相対論」を微分幾何学の立場から論じ、あわせて(擬)リーマン多様体の基礎的事項の解説を行った。数学講究(数学科4年生):ユークリッド空間内の曲面論を中心とした微分幾何学及びLie 群の基礎理論の学習の指導。数学講究(数学コース修士1年生):リーマン幾何学に関する学習の指導。

■ 研究計画

取り組みたいと考えている課題は、次の2つである。(1)四元数ケーラー多様体の全複素部分多様体論の発展:四元数微分幾何学と複素微分幾何学が相互作用する興味深い幾何学が展開されることが期待される。当面の課題として、Ferus らによる四元数正則曲面の理論の高次元化を目指す。(2)擬リーマン幾何学における対称性と等質性: 1. 擬ユークリッド空間の対称部分多様体の構成と分類 2. 擬リーマン多様体に対し、Singerの無限小等質空間の理論を整備すること。即ち擬リーマン多様体における等質性を曲率テンソルの観点から明らかにすること。曲率テンソルは、扱いが難しく幾何学的意味を理解するのも困難である。上記の課題を追求する中で、曲率テンソルのより深い理解に貢献できればと考えている。3. 上記2の理論を、等質擬リーマン多様体に関わる様々な問題に応用すること。例えば、共形平坦等質擬リーマン多様体、自然簡約等質擬リーマン多様体、等質四元数ケーラー多様体などの構成、分類問題を研究する。

■ メッセージ

インゲンマメのつる、閉じた枠に張られる石けん膜、シャボン玉から宇宙までいろいろな「形」を主題に数学も挑むことができます。様々な問題に様々なアプローチ、そして応用。興味をもったら、始めて下さい。応援します。

氏名	出口 哲生
	DEGUCHI Tetsuo
所属	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系
職名	教授
学位	理学(博士)(1992 東京大学)「色付き絡み目の多変数不変量および関連する統計力学の可解模型」
専門分野	数値物理学、物性基礎論、統計物理学
URL	
E-mail	deguchi@phys.ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords



主要業績

1次元ボース気体における局所的な多体状態の厳密な緩和ダイナミクス J. Sato, R. Kanamoto, E. Kaminishi, and T. Deguchi, Exact Relaxation Dynamics of a Localized Many-Body State in the 1D Bose Gas, Phys. Rev. Lett. Vol. 108, 110401 (2012).

可解高次スピン量子XXZ鎖の形状因子の還元公式 T. Deguchi, Reduction formula of form factors for the integrable spin-s XXZ chains and application to correlation functions, JSTAT (2012) P04001

互いに絡み合った環状鎖が連なった開放鎖および環状鎖のダイナミクスにおける普遍的な比 N. Kanaeda and T. Deguchi, Universal ratios in the dynamics of open and closed chains of linked ring polymers in solution via Brownian dynamics, Prog. Theor. Phys. Supplement Vol. 191 (2011) 146–155.

理想環状鎖に対する絡み合い確率の頂点数依存性 N. Hirayama, K. Tsurusaki and T. Deguchi, General polygonal length dependence of the linking probability for ideal random polygons, Prog. Theor. Phys. Supplement Vol. 191 (2011) 154–164.

「可積分高次スピンXXZ鎖とアフィン量子群」における間違いの訂正 T. Deguchi and C. Matsui, Erratum to “Form factors of integrable higher-spin XXZ chains and the affine quantum-group symmetry” [Nucl. Phys. B 814 (2009) 405–438], Nuclear Physics, Section B 851 (2011) pp. 238–243,

研究内容 / Research Pursuits

一次元ボース気体は可積分系量子多体系であるが、そのハイゼンベルグ方程式は、ソリトン方程式として有名な非線形シュレーディンガー方程式と同じ形で与えられる。非線形シュレーディンガー方程式は孤立したソリトン解を持つ。一次元ボース気体は量子系であるが、何らかの古典系への極限において、ソリトン解に対応する量子状態が存在するかどうかは、古くから興味をもたれた問題であった。本研究では、一次元ボース気体のホール励起状態を重ね合わせると、古典系でソリトン解を与えるような量子状態が導かれることが見出された。(J. Sato et al, PRL(2012)) 具体的には、粒子数N個に対するホール励起状態を全て重み1で足し合わせると、古典系でソリトン解を与えるような量子状態が導かれた。

■ 教育内容 / Educational Pursuits

4年生の3人を二つのグループに分け、一方は高分子物理学の基礎を勉強して研究を行い(高分子チーム)、もう一方は線形波動に関する教科書を勉強して内容をまとめるという活動を行った(数理物理チーム)。

高分子チームは、夏学期は川勝著の高分子統計物理学の教科書を輪講した。末端間距離のスケーリング則や慣性半径(回転半径)を環状鎖に対して解析的計算を行った。冬学期はフォートラン90を学習してプログラムを作成し、4元数を用いた環状高分子のランダムな配置の生成アルゴリズムを学び、実際に数値計算を実行した。研究成果を2012年3月の日本物理学会で講演を行って発表した。数理物理チームは毎週、波動の本を勉強して発表し、連続方程式を差分法によって解く数値計算スキームを勉強し、最後にソリトンなど非線形波動について学び、卒研発表会で発表した。

■ 研究計画

■ メッセージ

理論物理の研究を行うことは、決して難しいことではありません。実は研究は勉強と異なるのです。もちろん、これまでに人類が蓄積した様々な物理学上の知識を相当量学ぶことは、これまた決して容易なことではありません。大学で物理学の基礎知識をじっくり学んで深く理解することはもちろん重要ですが、一方、研究というのは今までに知られていない事柄を見つけることが目的なので、極論すると多くの基礎知識がなくても出来ることなのです。もしも必要な知識を例えば指導教員に聞いて理解できるならば、研究の初期段階ではそれで済んでしまうこともあるのです。新発見をした後で、何を自分が見つけてしまったのかを確認するのも、人生の楽しい経験の一つになるのではないのでしょうか。 出口研究室では、数理物理と高分子物理の2分野で、世界最先端のテーマを数多く研究しています。特に、外国の人と一緒に議論や研究をしてみたい人にはうってつけです。ぜひ参加して一緒に研究を楽しみましょう。

氏名	時田 みどり
	TOKITA Midori
所属	人間文化創成科学研究科人間科学系
職名	リサーチフェロー
学位	博士(学術) / Ph D
専門分野	認知心理学
URL	
E-mail	tokita.midori@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

心理物理学
数量の表象
視覚的注意
知覚と学習
割合判断

Psychophysics
number representation
visual attention
learning
proportion judgment

主要業績

Midori Tokita, Akira Ishiguchi, Temporal information affects the performance of numerosity discrimination: behavioral evidence for a shared system for numerosity and temporal processing, *Psychonomic Bulletin & Review*, 18(3), p550-556, 2011, doi 10.3758/s13423-011-0072-2, Psychonomic Society. 原著, 査読あり, 第一著者, 学術雑誌

Effect of perceptual variables on approximate numerosity comparison in 5-year-olds and adults, *認知感性科学年報*, vol.7 p18-33, 2011, Midori Tokita, Akira Ishiguchi, 共著

“Psychophysical Test for the Interaction between Numerosity and Area”, Midori Tokita, Akira Ishiguchi, 2011, Abstract of 52st annual meeting of the Psychonomic Society, Seattle, Washington

“Perceptual variables affect the performance of numerosity judgment in preschoolers and adults” Midori Tokita, Akira Ishiguchi, 2011 May 26-29, Proceedings of 23st annual convention of Association for Psychological Science, Washington, DC.

5歳児における離散量識別の精度と正確さの検討 一連続量の効果と数唱流暢性との関連-, 日本発達心理学会第22回大会発表論文集、p274, 時田みどり, 単著

研究内容 / Research Pursuits

本年度は、事象の“数”を抽出する過程の前段階に、入力時の感覚モダリティに依存する処理過程が存在するか否かを検討し、数表象過程の精緻化を試みた。1) 視覚刺激、聴覚刺激と触覚刺激を用いて、逐次提示刺激の離散量識別における感覚モダリティの効果を検討した。2) 聴覚刺激、触覚刺激を用いて数識別課題を行った。識別精度について、モダリティ内、モダリティ間の3条件で差異が示されなかったことから、感覚モダリティに依存しない離散量表象過程の存在が示唆された。ただし、触覚刺激数が、聴覚刺激数に比較して過小評価される傾向が示されたことから、感覚モダリティは、アイテム数の識別の処理過程の何らかの段階に影響を及ぼすことが示唆された。3) 視覚刺激、聴覚刺激を用いて、一方の刺激での数識別の練習効果が他方の識別成績に転移するか否かを検討した。結果から、相互に転移の生じていないことが示唆された。また、視覚刺激、聴覚刺激の練習前、練習後の成績を比較した結果、聴覚刺激の成績が顕著に高いことが示された。

“Little evidence of cross-modal transfer in approximate number discrimination”: We tested whether the training of approximate number discrimination can be transferred from one modality (e.g., visual) to another (e.g. auditory). The results show that extensive training in the auditory modality has little benefit for the visual. Moreover, the numerosity discrimination was much more efficient in the auditory modality.

“A discrepancy between spatial and temporal numerosity discriminations”: We investigated the processing of spatial and temporal numerical information in humans. Weber fractions were used as a measure of the numerosity discrimination of 5 to 40. We suggest that the sequential and simultaneous processing of numerosities is format (i.e., spatial vs. temporal) dependent and mediated by independent systems.

“How people judge the relative frequency of sequential events: Comparison of behavioral data, accumulator model and Bayesian model”: We investigated the manner in which people judge the relative frequency of sequential events, while incorporating recent findings from studies of numerosity representation. In the behavioral experiment, we tested whether and how both the total number and perceptual features of events affect the precision and accuracy of the relative frequency discrimination in which the observers were asked to choose the sequence consisting of more events. The comparison results showed that the Bayesian model fitted better the behavioral data, although previous studies have

■ 教育内容 / Educational Pursuits

■ 研究計画

1. 意思決定時の情報利用特性の検討: 複数の次元からなる刺激の識別課題を行う. 多次元信号検出分析を用いて非関連情報の抑制、促進の効果を検討する。
2. ダイナミック状況での意思決定過程の検討: 確率的カテゴリー学習課題を用いて報酬予測誤差による強化学習を行う. ネットワークモデルによるシミュレーション結果と、行動結果の比較を行い、各発達段階の学習過程の特性を検討する。

■ メッセージ

氏名	徳井 淑子 TOKUI Yoshiko
所属	人間文化創成科学研究科文化科学系
職名	教授
学位	博士(学術 2003)
専門分野	西洋服飾史、中世と近代を中心とするフランス文化史
URL	http://www.aesthe.ocha.ac.jp/fukshok%20history/
E-mail	tokui.yoshiko@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

服飾
色彩
紋章
中世フランス

fashion
color
device
mediaeval France

主要業績

『衣服の歴史人類学に向けて』アルフレッド・フラン克蘭『パリの私生活』別冊解説、1-13頁、アティエナ・プレス。

「中世フランスの寓意物語と色彩表現：憂鬱と悲嘆の表象」『中期英語における自然・感覚・文化』吉村耕治編、47-61頁、大阪教育図書出版、2011年3月。

「ココ・シャネルの挑戦と革新」「ヨーロッパ服飾史からみたジェンダー規範」平成23年度NWEC男女共同参画プログラム第二回「今を生きる私たちに、ココ・シャネルからの贈り物」講演、国立女性教育会館、2012年1月20日。

研究内容 / Research Pursuits

1 涙文のドゥヴィーズを16～17世紀のペトラルキスムを視野に入れて、文様の変容とその意味の考察。2 紋章・文様の意想研究として、中世末期の「心」の文様の文学起源について考察。3 ヨーロッパ近代の服飾史および色彩文化史をジェンダーの視点で読み直す作業。

1 Study of literary source of the device of tears, especially through the Petrarchism. 2 Study of literary source of the motif "heart", a device in the late mediaeval France. 3 Gender studies of fashion and color in Modern European history.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

服飾の歴史を通してヨーロッパの人々の生活感情を理解させる。それによって、私たちが意外にも西洋の歴史のなかで育まれた感性を受け継いでいること、またヨーロッパとの比較によって日本人には独自の感性のあることに気が付くよう西洋服飾史に関する講義・演習を行っている。具体的には、服飾史の調査にはどのような資料とアプローチがあるのか、調査の方法と資料の分析について解説しながら、西洋服飾史の基礎知識と服飾文化の厚みを理解させている。上級生に対しては、中世フランス服飾に関する論文の講読と、図像・文書資料の分析によって、服飾史と周辺の文化史に関する論文作成のための基礎演習を行い、ヨーロッパ生活文化論に関する卒業論文へと繋げている。

Lecture and seminar on cultural and historical studies of clothes, especially through the literary and iconographic sources in order to clarify the sensibility of Europeans.

■ 研究計画

中世の服飾文様について、特にドゥヴィーズと称された個人の信条や心情を語る紋章の表現に注目し、同時代文学の背景や古代以来の思想的背景を調査する。涙文と心臓の形象については、ここにヨーロッパの恋愛思想や中世医学、あるいは抒情詩の伝統や宮廷祝祭など、多様な背景を見出すことができる。その全体像を明らかにすることにより、ヨーロッパ文明の一つの特徴を描き出すことができると考えている。

■ メッセージ

日ごろ何気なく使っている色や文様に深い歴史が隠されていることがあります。ファッションは着るひとの趣味や社会的立場を表しているばかりではありません。それまでの歴史が育んできた美意識や感性など、実に多様なものを表現しています。それを解き明かす服飾史研究に多くの方が参加してほしいと思います。

氏名	外館 良衛 TODATE Yoshiei
所属	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系
職名	准教授
学位	理学博士(東北大学)
専門分野	固体物性
URL	http://www.phys.ocha.ac.jp
E-mail	todate@phys.ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

凝縮系物理学
協力現象と創発
磁性体物理学

Condensed Matter Physics
Cooperative Phenomena and Emergence
Physics of Magnetic Materials

主要業績

不完全フラストレート希釈FCC格子における反強磁性磁気秩序: 外館良衛 日本物理学会2011年秋季大会

音響物性における過渡カオスの応用: 矢作沙織、外館良衛 日本物理学会2011年秋季大会

研究内容 / Research Pursuits

固体中で相互作用する多数の要素の、新しい秩序形態とマクロな応答の発現機構の実現と解明。特に磁性体を舞台にした磁性(スピン自由度)、構造、伝導特性が相互に関連している現象を、新たな視点から明らかにする、また新しい観点である幾何学的自由度を用いて新たな機能を導き出すこと主眼とする。また、非線形力学系、あるいは二次元帰還系における新奇な時空間パターン形成について、我々が独自に作成するリアルタイム可視化システムを用いた実験的研究も行っている。

We study the emergence of novel macroscopic response of an ensemble of interacting elements in condensed matter, especially in magnetic materials with coupled degrees of freedom such as structural (geometrical) and transport properties. We also study chaos, transient chaos, and novel pattern formation in the nonlinear dynamical systems with the use of a unique real-time visualization system.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

2011年度実施した講義の内容 [学部] (1) 基礎エレクトロニクス: 高度に発達した現代エレクトロニクスを物理学的観点から概観する。半導体デバイスの成り立ちから電磁波利用技術、デジタルエレクトロニクスなど。(2) 物理学実験: 電気伝導、電子回路、カオス・フラクタル、高温超電導の各テーマについて、各種実験技術の習得と物理学における観測の重要性にふれつつ指導を行っている。[大学院] (1) 核物性特論: 物性実験手段として不可欠な粒子線 (中性子線、ミュー粒子線など) を用いた観測手法について原理、特長、重要な応用例などについて学ぶ。(2) 応用磁性物理学特論演習: 物質の持つ対称性や協力現象、非線形現象の観測と解析などについて学んでいる。[2011年度の修士論文・卒業研究] ・拡張ビデオフィードバックにおけるパターン形成 (修士) ・パーコレーションと囲碁 (学部) ・時間標準 (原子時計) の原理と応用 (学部)

Summary of educational activities in 2011: Lectures for undergraduate course: (1) Elementary electronics. (2) Physics experiments (electrical conduction in metals and semiconductors, electric circuit, chaos and fractal, Superconduction). Lectures for graduate course: (1) Nuclear technique in condensed matter physics. (2) Exercise in applied magnetism. Subjects of master and graduation theses in 2011: (1) Pattern formation in generalized video feedback. (2) Percolation and the game of go. (3) Physics and application of the atomic time-standard.

■ 研究計画

最近開始したテーマである非線形システムにおける時空間パターン形成の研究を発展させる。各種の系で自発的にあるいは創発現象として形成される特長的な幾何学的パターンの制御と新機能発現を目指す。また従来に引き続き“幾何学的自由度を結合させた反強磁性体”の研究も発展させる。普遍性のある非常に重要な概念を含んでいるので、それを明確にするとともに現実の物質や現象への応用を図る。

■ メッセージ

氏名	戸谷 陽子 TOTANI Yoko
所属	人間文化創成科学研究科文化科学系
職名	准教授
学位	文学修士 (M.A.in English Literature)
専門分野	舞台芸術論、パフォーマンス研究、アメリカ演劇、アメリカ文学、文化政策、比較演劇 (Theatre Theory, Performanc
URL	
E-mail	totani.yoko@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

舞台芸術論	Performing Arts Theory
パフォーマンス研究	Performance Studies
アメリカ演劇	American Theatre
文化政策	Cultural Politics
比較演劇論	Comparative Drama

主要業績

「Tennessee Williamsと前衛」日本アメリカ文学会第50回全国大会

「Williamsというテキスト——近年のWilliams作品上演をめぐって」日本アメリカ文学会東京支部シンポジウム「テネシー・ウィリアムズ再訪」パネリスト

研究内容 / Research Pursuits

2011年は、アメリカ演劇の主要な劇作家テネシー・ウィリアムズの生誕100年にあたり、これを機会にウィリアムズの作品をあらためて見直す作業を行い、学会で発表した。

■ 教育内容 / Educational Pursuits

1. 学部教育: 全学部対象コア科目英語、英語圏言語文化コース学生対象の専門科目(英米文学演習、米文学史)を担当、パワーポイントなどを使用して視聴覚教材を作成し、立体的な授業を心掛けている。このほか卒論指導として、3名の学部学生の個人指導を担当。2. 大学院教育: アメリカ演劇関連科目を担当、また修士論文の個人指導および博士後期課程院生の個人指導。3. 英語圏言語文化コース主任として、複数選択プログラム制度の初年度におけるプログラムの監督、履修相談・指導。全学部の英語科目の履修相談を担当。4. 国際本部室員として、留学生受け入れ、派遣の選考および留学に関する相談を担当。5. リーダーシップ要請教育研究センターと共同で、WEW(世界女子大学連盟)の大会に出席する学生の事前教育を担当。

Conducted lectures and classes in the 11-12 academic year include: 1. Intermediate English for sophomores. 2. English and American Literature Seminars for undergraduate English major students. 3. History of American Literature for undergraduate junior students. 4. Seminars for graduate students to study American theatre and its theory. In addition to teaching, the following contributions were made: 1. Supervising B.A. and M.A. theses. 2. Consulting and advising undergraduate students taking Core Curriculum English classes. 3. Coordinating Core Curriculum English Program and carrying out our new program for sophomore students. 4. Consulting and advising foreign students as well as students preparing to study abroad.

■ 研究計画

■ メッセージ

今日IT化、グローバル化の時代にあって、知や情報を手にすることは容易に可能になりました。したがって、大学でそれ自体を学ぶことは、以前と比べると重要な価値ではなくなったといえるかもしれません。みなさんにはインターネットで検索して得られる知や情報ではなく、知の集積する大学という空間で、それをいかに有効に活用するか、そしていかに発信するか、実際の技術的な訓練はもちろん、そのための深い思考力と想像力を鍛錬してほしいと願っています。グローバル化の時代、さまざまな立場や価値観が拮抗する社会にあって、わたしたちが知識や情報のみでは解決できない複雑な問題に直面する時、この思考力と想像力が、そしてそれを備えたみなさんのような人材が必要とされていると思うからです。

氏名	内藤 章江
	NAITO Akie
所属	リーダーシップ養成教育研究センター
職名	助教
学位	博士(学術)
専門分野	
URL	
E-mail	naito.akie@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

色彩
着装

color
wearing

主要業績

中学生・高校生・大学生の着装規範意識と着装に関わる教育経験について,日本繊維製品消費科学会2011年年次大会(2011)

色弱者に配慮した衣服の色表示に関する研究(7) 布地における色名の認識,日本家政学会第63回大会(2011)

研究内容 / Research Pursuits

色弱者に配慮した衣服の色表示に関する研究では、色弱者に配慮した衣服の色表示を提案するために、これまで色票を用いて色弱者の色認識や色弱模擬フィルタを用いた判別、色名の認知について検討してきた。本報では衣服の色を想定して布地の色の認識について実験を行い、検討した。科研費(若手研究B)による「服育教育に利用可能な客観的評価に基づく教育ツールの開発」では、「服育」の中でも「着こなし方」や「着装衣服と着用場面のふさわしさ」に着目し、それらを評価・判断する基準や指標の構築を目的としている。平成22年度は「着こなし方」に関わる中学生、高校生、大学生の着装規範意識と着装に関する教育経験について明らかにしたが、平成23年度は「着装衣服と着用場面のふさわしさ」をどのように捉えているのかを明らかにするために、中学生、高校生、大学生による衣服と着用場面の適合性評価を行った。

■ 教育内容 / Educational Pursuits

■ 研究計画

■ メッセージ

お茶の水女子大学は、様々な場面で活躍する先輩を数多く輩出し、高度な知識と実践力を身に付けることができる環境、女性が安心して勉強できる支援体制を整備しています。この環境を十分活かして、勉学に励んで頂きたいと思います。これからも、皆さんの勉学に対する意欲をさらに増大させ、夢を実現するための環境整備と支援体制の充実化をはかっていきたいと思います。

氏名	内藤 俊史 NAITO Takashi
所属 職名	人間文化創成科学研究科人間科学系 教授
学位 専門分野	博士(教育学)(1998 慶応義塾大学) 教育心理学、異文化間心理学
URL	http://members.aol.com/naitot/morality.htm
E-mail	naitot@aol.com

研究者キーワード / Keywords

道徳的感情
感謝

moral emotion
gratitude

主要業績

研究内容 / Research Pursuits

感謝心、負債感、すまないという感情のもつ道徳的感情としての機能と社会的適応について予備的な考察と調査を行った。そのほか、修養概念に焦点を当て、修養における感謝心の位置についての論文を執筆した。そのなかで、道徳教育、自己啓発書、修養書における感写真の扱いの相違について検討した。

A primary study concerning relation between gratitude and well-being was conducted using university students as participants.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

学部では、教育心理学に関連する講義、演習を担当し、大学院では、道徳性に関する授業を担当した。学部の演習では、思いやりをテーマとしつつ、コメントの作り方に焦点を当てた授業を実施した。

I had classes in the undergraduate course and the graduate course: lectures on Educational Psychology, Introduction of Psychology with other faculties, and seminars on Educational Psychology. In the seminars, moral development, pro-social behaviors, and gratitude as a moral emotion were selectively focused as main themes.

■ 研究計画

道徳的感情、なかでも感謝心について、その発達の様相を、アジア諸国との比較研究と観察や実験研究を組み合わせることにより明らかにする。感謝心に関する共同研究。

■ メッセージ

心理学のテーマは、私たちの日常のなかにも多く見出すことができます。大学は、それをより確かな方法で探究する場です。心理学にはいろいろな方法があります。問題意識を大切にしつつ、方法を学んでいく意欲を持ち続けることを期待しています。

氏名	中居 功
	NAKAI Isao
所属	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系
職名	教授
学位	理学博士(1985 京都大学)
専門分野	幾何学(WEB幾何学)、位相幾何学(特異点論、複素力学系)
URL	
E-mail	nakai@math.ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

常微分方程式のセンター問題

Center problem of ODE

主要業績

研究内容 / Research Pursuits

☐ 教育内容 / Educational Pursuits

☐ 研究計画

☐ メッセージ

氏名	仲西 正 NAKANISHI Tadashi
所属 職名	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系 教授
学位 専門分野	工学博士(1987 東京工業大学)/Doctor of Engineering (1987 Tokyo Institute of Technology) 材料物性, 高分子化学
URL	http://www.eng.ocha.ac.jp/matsci/
E-mail	nakanishi.tadashi@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

含金属イオン繊維の消臭機構
高分子ゲルの溶質選択的膨潤
高分子膜の塩選択透過

Deodorization by the fibers containing metal ions
Solute specific swelling of polymer gels
Selective solute transport in polymer membranes

主要業績

葛西 路子, 仲西 正, 小林 泰子, ガスクロマトグラフ法による含銅染色布の消臭機構解明, 繊維製品消費科学, 52/1, 65-66 (2011).

JUNG Jong-sun, KOMAKI Motoko, NAKANISHI Tadashi, SATOU Teiji, AIKAWA Yoshihiro, Improved coloration and fastness to washing and light by applying smectite to cationic dyeing, Sen'i Gakkaishi, 67/11, 252-255 (2011).

仲西 正, 池上 夏菜, 直接染料水溶液中における含水PVAゲルの膨潤挙動, 日本学術振興会繊維・高分子機能加工第120委員会年次報告, 62, 58-61 (2011).

研究内容 / Research Pursuits

本年度は科学研究費補助金(基盤研究(C), 継続)を研究代表者として受けることが出来るとともに, 研究分担者として1件を担当した. 本年度は, 「銅塩で媒染染色した繊維の消臭機能」, 「含水高分子膜の塩の収着特性」, 「高分子ゲルの溶質選択的膨潤」などの研究を行った. 本年度行った研究のすべてが, 高分子-低分子間の相互作用に関係したものである. 高分子-低分子間相互作用の積極的な利用が, 有用な機能性高分子の設計において重要であるとの視点から研究を行っている.

I received Grants-in-Aid for Scientific Research as a head investigator and also received the grants as a co-worker. In this year, I was researching in "Deodorizing abilities of the fibers mordanted with dyes and copper salts," "Salt sorption of water-swollen polymer membranes," "Solute specific swelling of polymer gels," etc. The interaction between polymers and small molecules is a main theme for all my researches carried out this year. This interaction has an important meaning for designing useful functional polymers.

教育内容 / Educational Pursuits

(学部)物理化学英語Ⅱ, 環境材料物性, 機器分析演習, 人間環境・科学実験実習, 人間環境・科学演習などの授業を担当した。授業に際しては, わかりやすく説明することを最大の目標とした。卒業論文指導学生は3名で, 卒業論文テーマは, 消臭機能繊維に関するものが1件, 高分子ゲルの膨潤挙動に関するものが1件, 高分子膜の塩収着特性に関するものが1件であった。卒業論文指導においては, 理系的方法を理解させることと, 言葉によって, 自分の考えをまとめ相手に伝える力を持たせることを主眼とした。(大学院)環境生活工学演習, 機能材料特論を担当した。指導した前期課程学生は, 1年生1名, 2年生2名であった。博士前期課程学生の指導においては, 研究の背景と方向性を明確に理解し, 自身の力で実験を計画し遂行でき, 得られた結果を合理的に説明できる力を与えることを目標に指導を行った。

(Undergraduate) I offered the following courses in 2011: "English for Physical Chemistry," "Materials Science for Human Life Environment," "Exercise in Equipment Analysis," "Laboratory for Human-Environmental Sciences," "Exercise in Human-Environmental Sciences," and so on. I supervised the three students making their graduation theses. The titles of the theses were "Deodorant properties of cotton fabrics dyed with reactive dyes and a copper salt," "Solute specific swelling of polymer gels," and "Salt sorption of water-swollen polymer membranes." The chief aim of supervision for the students was to develop their faculties for scientific research and their ability for scientific presentation. (Graduate School) I had two courses in 2011: "Exercise in Human Life Engineering for Environment," "Special Topics in Functional Materials." I supervised two master course students. My objectives for supervision for the students were to give the abilities of searching and understanding scientific information from various sources, for example, the papers on journals, and to give the abilities of planning and accomplishing the studies by the students' own capacities.

研究計画

消臭繊維については, におい物質の吸着や分解などの消臭機構の基礎的な点について調べると同時に, 実用的な観点からの開発的な研究を行いたい。高分子ゲルの研究については, 環境対応などの観点から, 天然高分子ゲルへも拡張したい。特に, 天然高分子ゲル固有の高い機能性にも注目したい。高分子と低分子の相互作用が, 機能発現にかかわる材料について研究を広げたい。

メッセージ

現在, 高校生や大学生の皆さんも, いつかは社会に出られ仕事をして活躍されることになります。社会に出る直前で大学や大学院で学ぶことにはどのような意味があるのでしょうか。私は「未知の問題を解決できる力」を備えることではないかと考えています。大学では, ひとつの専門について深く学びます。大学院では専門的な研究も自ら行います。大学や大学院で学んだ専門分野は, 将来の仕事と直接に関係ないかもしれません。しかし, 私は, 皆さんがどのような専門を選ばれても, 「深く」学び, 「深く」考えることが大切であると考えています。「深く」考えた人には, その人にしか見えなかったり気づけなかったりするものが見えるのです。そのような能力こそが, 皆さんが活躍される将来のどのような分野や状況においても, 必ず役に立つのです。私は, 講義室や研究室で, 自分の専門を通して, 学生の皆さんが「深い」見方ができるように指導したいといつも考えています。

氏名	永原 恵三 NAGAHARA Keizo
所属 職名	人間文化創成科学研究科文化科学系 教授
学位	博士(文学)(1999 大阪大学)
専門分野	音楽学、合唱指揮、声楽
URL	
E-mail	nagahara.keizo@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

音楽学	musicology
キリスト教音楽	Church music
合唱音楽	Choral music
観光と音楽	Tourism studies of music

主要業績

(合唱指揮)シューベルト『ミサ曲第2番ト長調』、木下牧子『地平線のかなたへ』他 コール淡水・東京、第6回定期演奏会 2011年5月1日

(四重唱と独唱)アンサンブル・ブラーナ演奏会 2011年5月8日

(公開講座)典礼聖歌ワークショップ、アンサンブル・アルボス主催 2011年10月9日、10日、3月24日

研究内容 / Research Pursuits

1)合唱指揮者として、男声合唱団を中心に、発声法の指導および現代合唱作品の演奏とルネサンス作品の演奏法の研究をした。2)声楽アンサンブルの研究会において発声法の研究と発表を行なった。3)キリスト教音楽の研究者として、とくにカトリックの典礼聖歌のワークショップを開催し、典礼研究家の宮越俊光氏と共同で研究と指導をした。4)東洋音楽学会の情報委員として、機関誌の電子ジャーナル化を行なった。

1)Performance study about contemporary Japanese and renaissance European choral works. 2)Performance study of vocal ensemble and vocal technique. 3) Research for contemporary Japanese Catholic church music. 4) Construction of E-Journal system as a member of IT committee in the Society for research in Asiatic music.

教育内容 / Educational Pursuits

学部教育 1) LA科目の色・音・香23:グレゴリオ聖歌の楽譜と江差追分の楽譜を用いて楽譜の多様性を示した。2) 西洋音楽史 I と II :単旋律聖歌の成立から16世紀のポリフォニーまでの音楽史と音楽学の課題 3) 音楽学概論: 音楽学の最新の研究課題の解説 4) 音楽学研究演習: 音楽学のゼミとして『現代日本社会における音楽』と“Thinking musically”の2冊のテキストを用いて、講読と受講生各自の研究発表で構成される。5) 卒論作成演習: 卒論作成のゼミ 大学院教育 1) 音楽表象文化論特論、同演習: 近年の研究文献を用いて受講生各自の研究発表を中心にディスカッションを行ない、各自の研究を深めている。2) 音楽研究方法論、同演習: 修士論文作成のゼミ 3) 博士後期課程は毎週、修士課程と合同で研究発表のゼミを行ない、さらに、個別に研究指導をしている。

Undergraduate school 1) Liberal arts program: notation in gregorian chant and Japanese folksong. 2) Western music history from ca.7c to 16c and musicological issues. 3) Fundamental study of musicology, especially contemporary subjects. 4) Seminar of musicology 1, reading Japanese and English textbook and presentation training. 5) Seminar of musicology 2, graduation thesis. Graduate school 1) Advanced Seminar of musicology 1. Presentation of each member about recent problems of musicology. 2) Advanced Seminar of musicology 2. master's thesis 3) Seminar for doctoral course

研究計画

2012年度はこれまで蓄積してきた研究を単行本として刊行することを計画している。1冊目は2012年4月に刊行された『合唱の思考 柴田南雄論の試み』(春秋社)で柴田南雄の研究書としては、唯一であり、柴田のシアター・ピースと称される合唱作品群を中心として、人間の共同存在を考える書である。2冊目は「観光研究のパースペクティヴ」(仮題)で、安福恵美子氏との共同研究である。D. マッカーネルの古典的名著の“The Tourist”の翻訳を基盤にした現代の観光研究の課題を、具体的事例を交えて、この分野での本格的な研究書として刊行する。1冊目は刊行済みなので、後者は次年度の刊行を目指している。大学院のゼミで、現代の民族音楽学者Bruno Nettl氏による歴史的著書を講読しつつ、音楽学の研究史をたどっている。演奏面では、合唱における発声法の研究とルネサンス音楽の演奏慣習の研究について実践研究をしている。さらに、ドイツリートとバロックのテノール独唱曲についても、発声法とともに演奏実践の研究を予定している。

メッセージ

本学の音楽表現コースは、演奏(ピアノまたは声楽)と音楽学の両方を高い水準で習得することを目指している、日本でも唯一のコースです。本コースでは、ほとんどのテキストが英語です。英語で理解するだけでなく発信することも重要です。日本の優れた思考を世界に発信するためにも英語力は必要です。また、音楽学という分野は日本ではほとんどその存在を知られていませんが、世界標準ではごく当然の学問分野です。私たちは世界で通用する人材を育てることを目標としています。演奏と音楽学とは、最終的にはどちらかをメインにしてもらいますが、全力を尽くして、勉強と演奏の両方に学生時代の可能性を求めたい人に、是非来てもらいたいです。大学院は日本の音楽学における、大阪大学、東京藝術大学と並ぶ拠点です。世界基準の先端的研究ができる実力のある学生を求めています。男子学生は入学できませんが、東京芸大、東大とは単位互換制度があるので、本学で勉強することは可能です。本学は規模は小さいですが、内容の濃い研究ができることを目指しています。

氏名	中村 俊直 NAKAMURA Toshinao
所属 職名	人間文化創成科学研究科文化科学系 教授
学位 専門分野	文学修士(1979 東京大学)、D.E.A. (1982 ポール・ヴァレリー大学) 近・現代のフランスの文学と思想及び言語論
URL	
E-mail	nakamura.toshinao@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

ヴァレリー
異文化としての子ども
児童文学
自伝と日記
文学者の美術批評

主要業績

『ヴァレリー集成V 〈芸術の肖像〉』(筑摩書房、2012年)の編集と翻訳

研究内容 / Research Pursuits

1 19世紀末から20世紀前半にかけて活躍したフランスの詩人・批評家のポール・ヴァレリーに関する多角的・総合的な研究。さらに彼に関係する文学者や芸術家、思想家に関する研究、並びに彼の生きた時代と社会に関する研究。2 言語記号と視覚記号の両者の機能の比較研究。3 日本の近代の文学者や芸術家の営為にフランスの文学や文化が与えた影響の解明。又逆に日本の芸術がフランスの文学や美術に与えた影響の解明。4 ヨーロッパにおける児童文学の比較研究

■ 教育内容 / Educational Pursuits

学部 フランス語の初級文法の教授 自伝をめぐる諸問題の考察 ヨーロッパの児童文学の比較対照的考察 大学院 ヨーロッパにおける芸術思想の展開の解明 日記形式の考察

■ 研究計画

視覚記号と言語記号との両者の機能を総合的に比較検討する。文化史、社会学、記号論、美術批評、文学批評、情報伝達論などの多様な視点から研究を進める。歴史的に見れば、現代の社会、文化の特徴の一つは、これら二つの表現・コミュニケーションの手段の共存並びに相互影響関係であると言えるからである。上記の研究の成果の一つとして、フランスの詩人・批評家のヴァレリーの美術に関する評論を集めて翻訳し出版したが、引き続き、他の文学者の美術批評の考察を行う。

■ メッセージ

大学は自由にものを考え、探求する場所です。大学での学問の範囲は明確に限定されているわけではなく、またあらかじめ問題に対する答えが定められているわけではありません。従って、はっきりした一つの答えが見つからなくてもよいのです。思考や探求の結果もちろん大切ですが、それと同じくらいに、あるいはそれ以上に重要なのは、結論に達するまでの過程です。その過程においてたくさんのことを考え、調べ、さらにはいろいろ迷うことが、後々大きな意味を持ってきます。そのようにして、柔軟な思考力や幅の広い判断力を養成することが、卒業後の長い人生において大きな力となることでしょう。

氏名	中村 美奈子 NAKAMURA Minako
所属 職名	人間文化創成科学研究科文化科学系 准教授
学位	芸術学士(東京藝術大学)、人文科学修士(お茶の水女子大学)
専門分野	民族舞踊学、舞踊記譜法、ダンスとテクノロジー
URL	http://buyou1.li.ocha.ac.jp/Nakamura/index.html
E-mail	nakamura.minako@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

主要業績

Worawat Choensawat, Sachie Takahashi, Minako Nakamura, and Kozaburo Hachimura: A Labanotation Editing Tool for Description and Reproduction of Stylized Traditional Dance Body Motion, Proc. Digital Humanities 2011, pp.296-300, 2011.査読有Bursary award 2011受賞

Minako Nakamura, Worawat Choensawat, Sachie Takahashi, and Kozaburo Hachimura, "The evaluation of LabanEditor3, an interactive graphical editor, from a choreologist's perspective : the case study of Noh Play and Classical Ballet", 国際シンポジウム「Human Body Motion Analysis with Motion Capture(モーションキャプチャ技術と身体動作処理)」2012年 1月21日

研究内容 / Research Pursuits

筆者は、インドネシア・バリ島の舞踊などアジア地域の民族舞踊を研究対象とし、その舞踊の技法、表現特性、舞踊構造の分析を行っている。2010年度は、電子ジャーナルJournal for the Anthropological Study of Human Movementに最終年度の基盤研究(C)「日本の創作バレエ作家に関するドキュメンテーションとアーカイブ化—佐多達枝を中心に」の研究成果を掲載した(2010年4月)。また、舞踊学の教科書として「舞踊学の現在—芸術・民族・教育からのアプローチ」(遠藤保子ほか編)に、分担執筆者として「インドネシア・バリ島の舞踊の動作分析—文理融合型の民族舞踊研究の視点から—」を執筆し、出版した(2011年3月)。立命館大学GCOEの客員研究員としては、モーションキャプチャ国際シンポジウムにおいて「モーションキャプチャ技術を用いた舞踊動作の筋骨格シミュレーション」(モーションキャプチャとSIMMを用いたバリ舞踊の分析)についての研究発表を行い、共著論文として、舞踊記譜法Labanotationのコンピュータ用エディタの研究にかかわった。

■ 教育内容 / Educational Pursuits

舞踊教育学コース所属の学生らのほとんどは、バレエやモダンダンスなど西洋の芸術舞踊を実践してきている人たちである。筆者の教育目標は、さまざまな身体表現、舞踊表現が世界には存在すること、また、舞踊は、その社会文化的背景と深く結びついた表現様式をもっていること、そして、舞踊は芸術的なものだけではなく、民俗芸能のように社会的な機能をも果たしていることを講義や実技を通して学生に伝えることである。2011年度は、常設の専門教育科目に加えて、後期に特殊講義として舞踊記譜法(Labanotation)の授業を行った。大学院の授業では、民族舞踊の舞台化にともなう舞踊の内容や形態の変容に関して、民族音楽学の分野で民族舞踊の研究をしている研究者による論文購読を通して考察した。また、3月に、学術提携校である台北国立芸術大学舞踊学部において招待講演および専門であるバリ舞踊の実技授業を行い、教員間の学術交流を行った。アジアの文化における舞踊の表現の多様性について学生たちに伝えていきたいと考えている。

■ 研究計画

文化人類学から情報学までさまざまな領域の研究者らとの学際研究を通じて、舞踊および身体表現に関する研究を行ってきた。今後も幅広く身体文化、身体表現、身体運動の解明にかかわる研究をしていきたいと考えている。また、無形文化財のデータベース(アーカイブ)化、特に舞踊や身体表現に関するデータのアーカイブ化についての研究は事例が少なくメタデータの整理も進んでいないことがプロジェクト研究を通して分かってきたので、これらの点についても検討を行っていきたい。

■ メッセージ

舞踊は、その社会文化的背景と深く結びついた多様な表現様式があること、そして、舞踊は芸術的なものだけではなく、民俗芸能のように社会的な機能持つものもあることを是非みなさんにも知ってもらいたいと思っています。同時に、バリ島の舞踊は見ていと緩やかで楽しそうですが、実は中腰の姿勢で踊るのはいかにかきつかいということを是非実技授業で体験してください。「伝統的」な舞踊の研究をしている私ですが、実は大変な新しいもの好きで、共同研究のほうでは、1998年頃からずっとモーションキャプチャという装置で舞踊の3次元計測をしてきています。舞踊とデジタル技術がどうつながるのだろうと不思議に思われる人もいるかもしれませんが、この方法論は、現在では、舞踊学の一分野のようになっています。

氏名	難波 知子
	NANBA Tomoko
所属	人間文化創成科学研究科文化科学系
職名	リサーチフェロー
学位	博士(学術)(2010年 お茶の水女子大学)
専門分野	服飾文化論/日本服飾史
URL	
E-mail	namba.tomoko@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

学校制服史
制服文化
洋装化
服装改良

主要業績

難波知子『学校制服の文化史—日本近代における女子生徒服装の変遷』創元社、2012年

研究内容 / Research Pursuits

主な研究課題 1 近現代日本の学校制服文化 2 服装をめぐる近代化の諸相 3 学校教育における洋裁文化 学校制服は、明治期以降に成立、広く普及し、かたちやあり様を変えながら、現代においても引き継がれている文化の一つといえます。学校制服文化とは、その時々の政治や教育を反映するばかりでなく、流行や衣生活習慣、制服の製作技術、経済および産業の構造などとも関連し合い、さまざまな立場の人々の思惑や価値観が交錯する地点に形成されてきたと考えられます。そうした制服文化のもつ多義性・多様性について、具体的な記録や証言、モノを通じて検証し、考察を進めています。

■ 教育内容 / Educational Pursuits

主な担当授業科目（学部）服飾美学概論、服飾史Ⅰ・Ⅱ、日本服飾史演習Ⅰ・Ⅱ、服飾美学演習ほか

■ 研究計画

学校制服をめぐる歴史や文化の実証的研究を通じて、服装文化の多面的理解を目指す。

■ メッセージ

現在、テレビや雑誌などのメディアから、非常に多くのファッション情報が提供され、ショップやデパート、インターネットを介して、気軽に衣服を購入する生活を私たちは経験しています。こうしたモノや情報の氾濫する生活の中で、私たちはどのようにして衣服に対する判断力や価値観を養うことができるでしょうか。その一つの方法として、歴史を知ることをお勧めします。歴史には、現在の私たちの生活や価値観を見直させる材料やアイデアが豊富に含まれています。衣服の歴史や文化を学びながら、あなた自身やこれからの社会における衣服のあり方・意味・役割をともに考えていきましょう。

氏名	新名 謙二
	NIINA Kenji
所属	人間文化創成科学研究科文化科学系
職名	准教授
学位	修士(教育学)(1991 東京大学)
専門分野	スポーツマネジメント、特にスポーツ施設の立地とスポーツ消費者行動
URL	
E-mail	nina.kenji@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

スポーツ消費
時系列分析

sports consumption
time series analysis

主要業績

研究内容 / Research Pursuits

スポーツ消費の時系列分析 世界同時不況や東日本大震災等の影響により、消費支出全体が縮小する中で、スポーツに関する支出がどのように変動しているかを分析する。具体的には、家計調査報告のデータ分析により、特にスポーツ用品に対する支出が低下傾向にあることが見て取れるが、その動向や経済全体を表す指標との関連について、時系列分析の手法で研究を行っている。現在はスポーツ関連支出の時系列データとしての特徴を分析しているところである。

■ 教育内容 / Educational Pursuits

コア科目においては、必修科目である「スポーツ健康実習」の担当者として、前期は共通フィットネスを1コマ、後期はバドミントンを2コマ担当した。選択科目の「生涯スポーツ」では、前期にゴルフを1コマ、後期にバドミントンを1コマそれぞれ担当した。授業担当以外に、木曜日の曜日担当者として実技関係授業の雑務を担当した。学部専門科目においては、「スポーツ人間学」、「スポーツ人間学実験演習」、「表現行動論Ⅱ」の授業を担当した。また、卒業論文の指導を通じて、スポーツ及び舞踊分野におけるマネジメントの考え方を学生に対して指導した。卒業論文は1名の指導を行った。卒業論文の分野は下記の通りである。ダンスのマネジメント(1) 大学院博士前期課程においては「スポーツマネジメント特論」、「スポーツマネジメント演習」の授業を担当した。後者は文化マネジメント副専攻の選択必修科目である。また、平成19年度入学生1名の主任指導教員として指導を担当し、9月修了生として修士論文の作成を指導した。修士論文タイトルは下記の通りである。「現代社会における身体の消失とコンテンポラリーダンスの意義」

■ 研究計画

スポーツ消費を説明する経済モデルの構築 国家レベルのスポーツマネジメントの比較研究

■ メッセージ

スポーツマネジメントの分野は現在多くの大学において取り組みが始まっている注目すべき分野です。残念ながら、スポーツマネジメントに関わる女性の数はまだまだ少数です。スポーツに興味を持っている人が集まることを期待します。

氏名	西川 朋美 NISHIKAWA Tomomi
所属 職名	人間文化創成科学研究科文化科学系 助教
学位 専門分野	University of Hawaii at Manoa (PhD) 横浜国立大学大学院教育学研究科(修士) 第二言語習得年少者日本語教育
URL	http://www.dc.ocha.ac.jp/comparative-cultures/jle/nishikawa/index.html
E-mail	nishikawa.tomomi@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

第二言語習得
年齢要因・臨界期
年少者日本語教育

Second Language Acquisition
age effects/critical period

主要業績

西川朋美(2012)「JSLの子どもを支える教員の養成-日本語教育分野からの貢献-」『横浜国大言語研究』第30号、1-13.

西川朋美(2011)『『小学校の日本語教育スペシャリスト』の養成-小学校教員養成課程・日本語教育専攻の取り組み-』『学校の多文化化で求められる教員の日本語教育の資質・能力とその育成に関する研究』(pp.95-115)、平成19～22年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書、研究代表者 齋藤ひろみ.

西川(長谷川)朋美(2011)「『在日ベトナム系児童の継承語としてのベトナム語能力』『母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)研究』第7号、46-65.

研究内容 / Research Pursuits

専門は、第二言語習得(SLA)です。研究の対象言語は、日本語で、特に自然習得環境における子どもの第二言語習得を中心に研究を進めてきました。第二言語習得における年齢要因の研究と観点からは、今後は、年少時から日本語を第二言語として習得し始めた大人の日本語能力の研究にも手を伸ばして行こうと思っています。また、習得開始年齢に関係なく、母語話者並みの高いレベルの日本語能力全般に興味があります。また、大学院生時代から、日本国内の公立小学校をフィールドとして調査研究を進めてきたり、前任校で小学校教員養成課程の学生を対象に日本語教育を教えてきたりした経験から、教育現場での子どもの指導や、子どもたちに向き合う教員の養成・研修にも、興味を持っています。

■ 教育内容 / Educational Pursuits

大学院:応用日本言語学研究法実習、言語学習論実習／同演習 学部:日本語表現法概論・日本語表現法Ⅰ、日本語教育学研究法実習
留学生特別科目:日本語演習ⅠA/B、日本事情演習ⅠA/B 特設日本語:日研生指導

■ 研究計画

第二言語で、母語話者レベルの高い能力を身につけることは、大人だけでなく子どもにとっても、簡単なことではないと思います。(子どもの場合は、第一言語をいかに保持するかという課題もあります。)人間がいかに新しい言語を学ぶかという基礎科学としての第二言語習得(SLA)研究と、その成果(の一部)を国境を越えて、複数の言語・文化の中で育って行く子どもや大人たちへの(言語)教育に活かすことの両方を、バランスよく進めて行きたいと思っています。

■ メッセージ

私が担当する授業の対象は、学部生、大学院生、日研生・短期留学生と、出身国・言語背景も、年齢も、お茶大での在籍期間も様々です。授業で扱う内容もその難易度も様々です。ですが、どの授業にも共通して言えることは、学生のみなさんには、主体的な学習者であって欲しいと思っています。人間がいかに2つ目以降の言語を習得するのかを知りたい人、お待ちしております。

氏名	野口 徹
	NOGUCHI Toru
所属	人間文化創成科学研究科文化科学系
職名	准教授
学位	Ph.D. (1995 マサチューセッツ大学アマースト校)
専門分野	文法理論 (統語論・意味論・形態論)
URL	
E-mail	noguchi.toru@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

文法理論
生成文法
統語論
意味論
照応

grammatical theory
generative grammar
syntax
semantics
anaphora

主要業績

研究内容 / Research Pursuits

昨年度に引き続き、中心的な研究課題である再帰代名詞の文法化に関する研究を進めた。再帰代名詞の歴史的変化と文法化全般に関する比較的最近の研究書に目を通して、データベースを構築すると同時に、理論的問題点の整理を行った。

I continued research into the grammaticalization of reflexive pronouns, which I had been doing for several years. I looked into relatively recent works in the historical development of reflexive pronouns and grammaticalization in general, adding up to the data base and clarifying some of the theoretical issues involved.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

学部においては、コア科目「基礎英語I文3b」において英語を、学科共通科目「言語学入門I・II」において主に言語文化学科所属の学生を対象に言語学の入門の授業を担当した。英語圏言語文化コースの専門科目として、「英文法演習」、「特別演習(言語研究方法論)I」および「英語学特殊講義II」において、主に統語論の初級から中級レベルの授業を行った。「特別演習(言語資料分析)II」においては、卒論作成中の学生に対する専門分野の指導を行った。また、教職に関する科目「英語科教育法II」も他教員と共同で授業を行った。大学院においては、「英語学特論(統語論)」および「英語学演習(統語論)」において、比較的最近の文法理論に関する文献をいくつか取り上げ、詳細な検討を行った。

For undergraduate students, I taught classes such as "Basic English I," "Introduction to Linguistics," "Seminar: English Grammar," "Advanced Seminar: Methodology in Linguistic Research I," and "Special Lecture on English Linguistics II." I also co-taught "English Teaching Methodology II." For graduate students, I taught "English Linguistics (Syntax): Advanced Lecture" and "English Linguistics (Syntax): Advanced Seminar." I also supervised six BA theses in the area of English linguistics.

■ 研究計画

再帰代名詞の文法化の研究を更に進める予定である。多くの言語に見られる普通名詞から再帰代名詞への歴史的変化に特有の文法上の条件について、一般言語理論の立場から明らかにしたい。英語のデータはかなり豊富に記録されているが、日本語を含めその他の言語の再帰代名詞の歴史的変化については、十分に明らかにされたとは言えない。データベースを構築すると同時に、妥当な照応理論の方向性を探る予定である。

■ メッセージ

私が専門科目を担当している英語圏言語文化コースでは、英語学と英米文学を専門に学ぶことができます。私は、英語学の授業科目を担当していますが、理論言語学的な立場から、統語論、意味論、形態論などを授業では扱っています。一言で言えば、英語を人間のことばの一つとして捉え、英語を背後から支えている仕組みをできる限り客観的に明らかにしようという取り組みです。(一般的には、「生成文法」と呼ばれています。)英語に限らず、人間のことばには、表面をただただでは分からないような深い意味を持つ仕組みが潜んでいます。そのような「無意識の知識」を明らかにすることにより、英語とはどのような言語なのか、また、人間のことばにはどのような仕組みが働いているのか、学生の皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。このような事柄に興味を持つ方を歓迎いたします。

氏名	萩田 真理子
	HAGITA Mariko
所属	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系
職名	准教授
学位	2000年3月博士(理学)慶應義塾大学
専門分野	離散数学, 情報数学, 暗号理論
URL	
E-mail	hagita@is.ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

組み合わせ論
暗号理論
誤り訂正符号系列
グラフ彩色

Combinatorics
Cryptography
error correcting sequence
coloring

主要業績

特許第4774509号, 発明者:松本眞, 西村拓士, 斎藤睦夫, 萩田真理子, 権利者:お茶の水女子大学, 広島大学, 発明の名称:擬乱数発生システム, 取得日:平成23年7月8日

研究集会での口頭発表 Mariko Hagita 2-error correcting sequence WilsonFest: A Conference in Honor of Rick Wilson Caltech(アメリカ)2012年3月

研究集会での口頭発表 萩田真理子, 菊池智子, 山口真実 グラフの分散彩色の評価 日本応用数理学会研究部会連合発表会 日本応用数理学会九州大学伊都キャンパス 2012年3月

研究集会での口頭発表 萩田真理子 誤り訂正符号系列について 研究集会『離散数理構造とその応用』名古屋大学多元数理科学棟 2011年11月

研究集会での口頭発表 萩田真理子 2-誤り訂正符号系列の存在条件 関西グラフ理論研究集会 加計国際学術交流センター 2012年3月

研究内容 / Research Pursuits

これまでに、離散数学を利用して情報通信のセキュリティを高めるための研究を進め、暗号鍵更新方法や電子署名強化方法や、乱数を用いて既存の暗号化方法を強化し、文書の改ざん防止を行う暗号強化方法、暗号用擬乱数発生システムの特許を出願している。これらの離散数学を用いた情報セキュリティアルゴリズムは、現在使われているアルゴリズムよりも数学的に優れていることが証明でき、情報化社会を支える重要なアルゴリズムとなることが期待できる。現在はこれらのアルゴリズムの性質の良さを定量的に証明し、数学を知らない人でも簡単に使える形にして提供することを目的とした研究を進めている。2005年度にeSTREAM標準ストリームサイファの募集に応募し、この改良を進めている。この他に、グラフの分散彩色アルゴリズムに関する研究と、誤り訂正符号系列の存在性についての研究を進めている。

We propose two stream ciphers based on a non-secure pseudorandom number generator (called the mother generator). The mother generator is here chosen to be the Mersenne Twister (MT), a widely used 32-bit integer generator having 19937 bits of internal state and period $2^{19937}-1$. One proposal is CryptMT, which computes the accumulative product of the output of MT, and use the most significant 8 bits as a secure random numbers. Its period is proved to be $2^{19937}-1$, and it is 1.5-2.0 times faster than the most optimized AES in counter-mode. The other proposal, named Fubuki, is designed to be usable also as a block cipher. It prepares nine different kinds of encryption functions (bijections from blocks to blocks), each of which takes a parameter. Fubuki encrypts a sequence of blocks (= a plain message) by applying these encryption functions iteratedly to each of the blocks. Both the combination of the functions and their parameters are pseudorandomly chosen by using its mother generator MT. The key and the initial value are passed to the initialization scheme of MT.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

研究室の学生はグラフの彩色アルゴリズム、誤り訂正符号系列の存在条件、暗号の実装と評価、擬似乱数の乱数性の高さの評価方法の研究などを研究テーマとして、離散数学と情報数学についての基礎知識を見につけ、積極的に研究を進めています。この分野では学部生が研究発表を行うことはとても難しいのですが、なるべく扱いやすいテーマを選び早くから発表の場に立ち、しっかり研究をしていることをアピールできるように誘導したいと思っています。

■ 研究計画

最先端の離散数学を用いて、情報セキュリティに必要な数学を研究します。理論から実用までを見通して研究を行い、実際に高速に動くものをつくることが目的です。数学的には同一のオーダーの計算量を持つアルゴリズムでも、実装して実験してみると速度に大きな差があることも多くあります。本研究では、実際に計算機実験を重ねることで先端的純粋数学理論のどの部分が実用に供せるかを探るという点で、旧来の研究形態を超えた成果を狙っています。数学的に質の良さを保証された情報セキュリティアルゴリズムを提供することで、情報化社会の発展に貢献できると期待しています。

■ メッセージ

研究の場で活躍するためには十分な基礎学力を身につける必要があります。高校の勉強はもちろんのこと、大学に入学してからは授業で習うだけでなく、できるだけたくさんの専門書を読んで、幅広く学んでください。学術的に大切なものが何なのか、自分が面白いと思う分野、得意な分野が何なのか探して自分に合った専門分野を見つけましょう。

氏名	長谷川 直子
	HASEGAWA Naoko
所属	人間文化創成科学研究科先端融合系
職名	准教授
学位	博士(理学)
専門分野	自然地理学
URL	
E-mail	hasegawa.naoko@ocha.

研究者キーワード / Keywords

琵琶湖
諏訪湖
密度流

主要業績

長谷川直子(2012)「日本の事例 諏訪湖、湖岸境界過程」pp33-35, 87-98. 永田・熊谷・吉山編「温暖化の陸水学」京都大学学術出版会(分担)

Kitazawa, Kumagai, Hasegawa(2010)Effects of internal waves on dynamics of hypoxic waters in Lake Biwa. Journal of the Korean society of marine environmental engineering. Vol.13,No.1.pp.30-42, February 2010.

長谷川直子(2010)授業実践報告1—自然と人間編—.お茶の水地理 50.143-150

田中博春・小林仁美・長谷川直子(2010)島緑地の気候緩和効果に関する基礎研究.お茶の水地理. 50.106 - 111.

水野勲・長谷川直子ほか(2010)諏訪巡検報告.お茶の水地理.50.151 - 162.

研究内容 / Research Pursuits

琵琶湖の中の水の動き、気候変動が水塊に与える影響

■ 教育内容 / Educational Pursuits

文教育学部の中で唯一自然科学を基礎とした教育をやっています。お茶の水女子大学では現在、文理融合リベラルアーツという基礎教養教育が動き出していますが、文理が融合しているという意味では地理学はその中心にある学問だと考えています。自然科学だけを学ぼうとするのならば完全な理学系の学部や学科へ行く方がその専門性は身につくでしょう。私のいる自然地理学・環境地理学研究室は、自然科学的アプローチを基礎としつつも、社会・人文科学視点も交えて物事を見ていくことを目指しています。こういったものの見方や考え方は社会に出てからも自分の人生観を形成する上でも重要であると考えています。また、日本の中で、女性の自然地理学者はとても少ないのですが、女性の自然地理学者を輩出する数少ない機関としての使命も果たして行きたいと考えています。女性がのびのびと研究し、日本の女性自然地理学者のタマゴたちが集える場になればと思っています。

■ 研究計画

水草を用いた水質保全とエネルギーづくりをテーマとして、現在の自由経済下での環境負荷型の社会システムを環境にやさしいシステムに替えていくことを目指している

■ メッセージ

氏名	服田 昌之 HATTA Masayuki
所属	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系
職名	准教授
学位	博士(理学)(1993 京都大学)
専門分野	進化発生学
URL	http://marine.bio.ocha.ac.jp
E-mail	hatta.masayuki@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

サンゴ
進化発生

Coral
EvoDevo

主要業績

Takahashi T., Hatta M The Importance of GLWamide Neuropeptides in Cnidarian Development and Physiology. Journal of Amino Acids 2011: ID 424501 (2011)

研究内容 / Research Pursuits

ミドリイシサンゴのプラヌラ幼生には、切断されても再生して変態する能力がある。一般に、再生様式は再編再生と付加再生の2種類に大別される。再編再生では、残った組織の軸に沿った位置価が再編成され、全体のプロポーションが作り直される。付加再生では、残った組織の再編はなく、切断面に失われた組織は末端から順次付け足されるように再生する。ミドリイシサンゴのプラヌラ幼生における再生が、再編再生か付加再生かを確かめるため、切断した幼生断片を再生前後で変態させて形態を比較した。その結果、ミドリイシサンゴのプラヌラ幼生における再生は、口側組織を再生する様式は再編再生で、反口側組織を再生する様式は付加再生であることが示された。

The planula larva of the coral *Acropora* reveals regeneration activity. In general, there are two regeneration modes, morphallaxis and epimorphosis. The former is the way to reorganize the body proportion in the remained part prior to regeneration, and the latter is the way to reconstruct missed tissues in an additive manner. Planula larvae were bisected and induced to metamorphose, and morphologies of metamorphosed fragments were inspected. The results suggest that regeneration mode of the oral part is morphallaxis and that of the aboral part is epimorphosis.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

リベラルアーツ科目: 多様性生物学、海洋環境ダイビング実習(分担)
生物学科専攻科目: 進化生物学、発生遺伝学(分担)、内分泌学(分担)、生物学実習II(分担)

■ 研究計画

■ メッセージ

氏名	浜口 順子 HAMAGUCHI Junko
所属 職名	人間文化創成科学研究科人間科学系 准教授
学位 専門分野	2005 博士(人文科学、お茶の水女子大学) 保育学・幼児教育学
URL	ECCELLプロジェクト: http://www.cf.ocha.ac.jp/nyuyoji/index.html
E-mail	takeuchi.hamaguchi.junko@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

保育	early childhood care and education
幼児教育	pre-school education
保育者	carer
子ども学	child studies
大人性	adulthood

主要業績

お茶の水女子大学「乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築」(平成22～27年度 特別経費プロジェクト初年度報告書、プロジェクトリーダー:浜口順子)全153p。

幼児指導のヒント～子どもが安心して自分を出せる場所に～、SMILE 328、学研エデュケーショナル, pp.1-6

お茶の水女子大学・附属いずみナーサリー「大学の中で、赤ちゃんが笑うⅡ」(平成21～23年度 文部科学省科学研究費補助金・基盤研究(C)報告書、代表研究者:浜口順子) 全81p。

アーカイブズ散策(2)～関東大震災直後の記事から～ 「幼児の教育」フレーベル館、第110巻第5号、pp.67-70

研究内容 / Research Pursuits

特別経費によるプロジェクト「乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築」事業(2010-2015,略称:ECCELL)のリーダーとして、お茶の水女子大学における乳幼児教育・研究のフィールドや組織の協働を生かした、生涯教育の視点に立った保育者養成のシステム企画、実践を進めている。具体的には、社会人向けの保育・幼児教育プログラム(生活科学部特別設置科目として、学部生との共同的学びの場を創成)、発達臨床心理学講座の専門授業の方法の実験的計画(参加型、省察型)、附属幼稚園・附属いずみナーサリーとの共同研究、幼稚園・家庭科教職授業との連携、総合的保育者養成の視点にたったテキスト(季刊誌『幼児の教育』)の企画などを行なっている。

The subsidized research project(2010-2015) ECCELL: Early Childhood Care/Education and Lifelong Learning, whose project leader is J.Hamaguchi PhD(associate prof.), aims to realize a collaboration of the bodies relating with ECCE in Ochanomizu University. 1)Setting up several learning programs on ECCE for adult students, 2) fostering collaborative research with the teaching and caring staffs in the affiliated kindergarten and nursery school. 3)Restructuring teaching curriculum on ECCE of undergraduate courses collaborating with the affiliated kindergarten and nursery school, and the learning course for adult students.4) Planning the quarterly magazine 'Youji no Kyouiku'.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

保育者養成の方法論として、保育史・幼児教育史研究を行う。具体的には、倉橋惣三のカリキュラム研究、および雑誌編集を研究対象とする。

As to reform the current teachers training courses, it is to clarify the reason why to study on the history of ECCE should help ECCE practioners develop their teaching competencies. S.Kurahashi 's theory and his practices of editing some magazines were the objects on such research questions.

■ 研究計画

2009～2011年度の科研費研究「大学コミュニティにおける乳児保育の場から生成される重層的カリキュラムの開発」、0～2歳児の教育プログラムの一つの成果として、お茶大の独自性を明確にして発表したい。本学ECCELLプロジェクトといずみナーサリーの共同研究となるだろう。また、附属幼稚園の「探求・活用力」研究との共同研究、附属小学校との「幼小連携」をテーマとした共同研究も予定されている。

■ メッセージ

「保育early childhood care and education」が軽んじられ、「教育education」とはまったく別の範疇で、より簡単な、専門性とは関係のないことのように(また)考えられるようになってきています。保育の危機の時代です。そのギャップは戦後の保育現場の努力と自治体の努力によって縮まってきていたはずなのに、またその溝は深くなっています。Why is care thought less meaningful than education? It is an indispensable process for a child to be a human.

氏名	浜野 隆
	HAMANO Takashi
所属	人間文化創成科学研究科人間科学系
職名	准教授
学位	教育学修士(名古屋大学:1991年)
専門分野	教育開発学・比較国際教育学
URL	http://researchers.ao.ocha.ac.jp/4222451594.html
E-mail	hamano.takashi@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

教育開発
比較教育
開発途上国
国際協力
国際機関

educational development
comparative education
developing countries
international cooperation
international organization

主要業績

浜野隆「教育格差は正に向けた乳幼児発達支援の実践－発展途上国の教育開発と幼児教育－」『教育社会学研究』第88集、47－64頁、2011年

浜野隆・三輪千明『発展途上国の保育と国際協力』東信堂、2011年

浜野隆・垂見裕子監訳、『隠された危機－武力紛争と教育』JICA/JNNE/ACCU、2011年

浜野隆ほか『幼児のリテラシー習得に及ぼす 社会文化的要因の影響』お茶の水女子大学・ベネッセ共同研究報告書

浜野隆、「乳幼児のケアと教育－早期介入と子どもの発達」勝間靖(編著)『国際開発論』、ミネルヴァ書房、2012年、173-191頁

研究内容 / Research Pursuits

1. 学力と教育政策 近年、日本においても学力調査が幅広く行なわれるようになってきており、また、その結果に対応して政策立案がされる傾向にある。学力調査の意味や解釈、政策との関連について検討を行っている。2. 初等教育における住民参加と格差に関する研究 本研究では、初等教育における住民参加(ベトナムではそれを社会全体での教育支援という意味で「教育の社会化」と表現している)の現状はどうなっているのか、また、教育格差との関係はどのようになっているのかを検討している。3. 保育・幼児教育分野における国際協力に関する研究 国際協力の場において、幼児の発達や幼児教育は1990年代から重要な領域として注目されるようになってきている。本研究では、開発途上国における幼児教育の現状分析と政策課題について、国際協力のあり方も含め検討している。

1. Assessment of Academic Achievement and Educational Policy Assessments of academic achievement are widely conducted in recent years and the educational policy tend to be made based on the result of the assessment. In order to make the policy to be effective, it is important to analyse the assessment deeply. 2. Community Participation and Disparity in Primary Education This study discusses the current state of and future challenges for the “socialization of education” as one aspect of the move towards community participation in education (mainly primary education) in Vietnam and Cambodia. 3. International Cooperation in Early Childhood Care and Education The importance of international cooperation in early childhood care and development has been recognized since the 1990s, emphasized on the one hand from a human rights perspective and on the other in terms of developmental cost-benefit. But ECD does not enjoy a high level of priority for the governments of developing countries. This study discusses t

教育内容 / Educational Pursuits

1. 学部 学部段階における教育内容としては、以下の様なものがあげられる:①教育開発概論、②比較教育演習、③教職概論、④教育原論(制度・社会)の「制度」に関する部分(教育行政)。他大学においては国際協力論・地域と世界の共生(武蔵野大学)を担当した。2. 大学院 大学院の授業においては、学生たち自身の研究テーマの報告、及びそれに関する討論を多く行った。共通文献としては、“EFA Global Monitoring Report”の最新版を読んだ。近年、国際協力において教育分野での協力が重視されるようになってきている。教育開発に関する授業においては、途上国の教育の現状、国際機関の役割、日本の協力のあり方などを多くとりあげた。

1. Undergraduate course Classes given in Ochanomizu University during 2010.4-2011.3 are as follows, (1) Introduction to Educational Development, (2) Seminar: Comparative Education, (3) Introduction to the Teaching Profession, (4) Educational Administration. Also, “International Cooperation Studies” are given in Musashino University. 2. Graduate course At graduate level, I took much time on discussing students’ reports written on their own theme. In the class, I gave some reading assignments: latest “EFA Global Monitoring Report” by UNESCO. In the age of globalization, international cooperation is very important. Recently, education cooperation is one of the most important topics in the field of development assistance studies. In my class (Introduction to Educational Development, Advanced Lectures in Educational Science 1, Seminar: Educational Policy, and graduate course), I gave a lecture on the real situation of education in developing countries, the role of international organization, the challenges of

研究計画

1.教育格差、とくに学力階層差・学力格差に関する研究 2. 幼児教育・早期子ども発達(ECD)分野における理論的・実証的分析、国際協力の効果分析 3. 教育開発、国際教育協力のあり方をより具体的に検討する。4. 発展途上国、特にアジア・アフリカにおける国際機関・国際援助の役割。援助理念・政策と現実との関連 5. ベトナム・カンボジア等における初等教育および就学前教育の構造の解明。6. 教師教育に関する実証研究および国際協力手法の検討。

メッセージ

グローバリゼーションが進む今日、教育学・教育科学は必ずしも日本の教育のみを対象にするものではなくなりつつあります。教育を考える際にも、グローバルな視点が求められつつあります。私が専門とする「教育開発」は、教育学の中では新しい領域です。「教育開発」はこれまでに培ってきた教育学の知見を発展途上国など海外の教育改善に活かしていくという、きわめて実践的な学問領域です。日本からの援助や提言が、発展途上国の教育政策や教育内容・教育方法の変容をもたらすこともあります。また、途上国の教育について考えること、途上国に日本の教育経験を伝えていくことは、日本の教育経験を相対化する(振り返る)契機にもなります。世界の人々ともに教育問題を一緒に考えていきたい人におすすめです。

氏名	浜谷 望
	HAMAYA Nozomu
所属	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系
職名	教授
学位	理学博士(1981東京大学)
専門分野	極限環境物質科学
URL	
E-mail	hamaya.nozomu@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

高压科学 放射光X線回折実験 凝縮系物性 分子性液体相の相転移 分子性結晶の相転移	High Pressure Science Synchrotron Radiation X-ray Diffraction Experiment Condensed Matter Physics Phase Transition in Molecular Liquid Phase Transition in Molecular Crystals
-------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

主要業績

K. Fuchizaki, N. Hamaya, T. Hase and Y. Katayama, Communication: Probable scenario of the liquid-liquid phase transition of SnI₄ J. Chem. Phys. 135, 091101_1-4 (2011).

K. Fuchizaki and N. Hamaya Equation of state for the low-pressure crystalline phase of SnI₄ Phys. Rev. B 84, 144105-144114 (2011).

研究内容 / Research Pursuits

高圧力で表れる様々な新奇な相転移の実験的研究が主要テーマである。近年はアモルファスや液体状態などの構造不規則系の中で起きる相転移に注目している。「三ヨウ化ホウ素の高圧結晶構造」の研究は本年、科研費に採択された。このような現象を実験的に調べるには強力な探査プローブが必要である。そのために、研究室に設置されている強力X線発生装置の使用に加え、大型実験施設として共用されている放射光X線を利用している。本年度は2件の論文を発表した。

Our principle research objective is to experimentally study various novel phase transitions occurring under high pressure. In recent years we have focused on phase transition in structurally disordered systems such as amorphous and liquid. "Study of crystal structure of BI₃ at high-pressure" was funded this year. To experimentally study these phenomena, the use of very powerful probe is indispensable. We exploit extremely brilliant x-rays emitted from a synchrotron radiation light source as well as a laboratory apparatus capable of generating very intense x-rays. Two papers were published this year.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

大学院博士前期課程の教育 書籍購読(週1回通年)とゼミ(週1回通年) 研究室および学外放射光実験施設(KEK, SPring-8)における実験研究

Education of graduate students in the master's program Reading a text book (weekly for a year) and seminar (weekly for a year) Research using synchrotron radiation x-ray at KEK and SPring-8 as well as a laboratory x-ray source

■ 研究計画

・四ヨウ化スズの液体-液体相転移と第二臨界点の実験 的検証 ・三ヨウ化ホウ素の圧力誘起ダイマー化の実験的検証 ・イオン液体の高圧相転移 ・高圧力下の相転移実験 ・放射光X線回折実験

■ メッセージ

不思議なことに心ときめかせ、未知の世界に飛び込みましょう。

氏名	番 雅司 BAN Masashi
所属 職名	人間文化創成科学研究科先端融合系 教授
学位	理学博士(1987、筑波大学)
専門分野	非平衡量子統計力学、量子情報理論
URL	
E-mail	m.ban@phys.ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

量子系の非平衡統計力学
量子情報理論
量子力学の基礎

Nonequilibrium Quantum Statistical Mechanics
Quantum Information Theory
Basis of Quantum Mechanics

主要業績

Exact Time Evolution and Second-order Quantum Master Equations for Two Interacting Qubits, M. Ban, Physics Letters A, 375, 422 (2011).

Exact time-evolution of the dispersive Jaynes-Cummings model: effect of initial correlation and master equation approach, M. Ban, Journal of Modern Optics 58, 640 (2011).

Qubit Decoherence with an Initial Correlation, M. Ban, S. Kitajima and F. Shibata, Physics Letters A 375, 2283 (2011).

Trace Distance in Stochastic Dephasing with Initial Correlation, M. Ban, S. Kitajima and F. Shibata, Physical Review A 84, 042115 (2011).

Thermal Effects in Jaynes-Cummings Model Derived with Low-temperature Expansion, H. Azuma and M. Ban, International Journal of Modern Physics C 22, 1015 (2011)

研究内容 / Research Pursuits

(1)環境系の中に置かれた相互作用する2個の量子ビットの時間発展を単一励起厳密解、2次摂動の時間畳み込み積分型量子マスター方程式の解、2次摂動の時間畳み込み積分無型量子マスター方程式の解の3つのを用いて解析し、各量子マスター方程式の近似解の精度を評価した。(2)環境系と注目する量子系の間の初期相関が量子系の不可逆過程に及ぼす影響を解明する為に、外部環境の中に置かれた2準位一光子系の時間発展を分散極限のJaynes–Cummings模型を用いて解析した。(3)環境系と相互作用する量子ビットの縮約された時間発展を記述する写像の厳密な解析的表現を求め、その数学的性質を明らかにした。(4)環境系の量子系への影響が古典的な確率過程で与えられる場合の量子系の縮約された時間発展を確率的Liouville方程式を用いて調べた。確率過程と量子系の間に初期相関が存在する場合に、縮約された時間発展が必ずしも完全正写像にならないことを明らかにした。

(1) Time evolution of two interacting qubits under the influence of thermal reservoirs is considered. When there is only one excitation in the whole system, an exact reduced dynamics can be obtained. The result is compared with those obtained by the time-convolutionless and time-convolution quantum master equations in the second order approximation. (2) Time-evolution of the dispersive Jaynes–Cummings model interacting with a bosonic reservoir is considered in the presence of an initial correlation between the cavity field and reservoir. When there is at most one excitation in the whole system, the exact time-evolution can be obtained. (3)Decoherence of a qubit system interacting with a bosonic reservoir is considered when there is at most one excitation in the whole system and there is an initial correlation with the reservoir. An exact timeevolution of the system is obtained and the effect of the initial correlation on the time-evolution is examined in detail. (4) The time evolution of the trace distance between quantum states of a qubit which is placed under the influence of stochastic dephasing is investigated within the framework of the stochastic Liouville equation. When stochastic dephasing is subject to the homogeneous Gauss-Markov process, the trace distance is exactly calculated in the presence of the initial correlation between the qubit and the stochastic process, where the stochastic process is inevitably a nonstationary process. It is found that even the initial correlation with the classical environment can make the trace distance greater than the initial value if stochastic dephasing causes the slow modulation of the qubit.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

学部では、量子力学I, 量子力学演習、量子統計力学、量子光学、及び物理学基礎研究を担当。博士前期課程では、統計力学特論、量子物理学演習を担当。

■ 研究計画

量子系の非平衡統計力学や量子情報の研究を通して、物理学における基礎理論の研究を推進する。

■ メッセージ

氏名	半田 智久
	HANDA Motohisa
所属	教育開発センター
職名	教授
学位	文学修士/Master of Arts
専門分野	心理学/Psychology、自由学術/Liberal Arts
URL	
E-mail	hanada.motohisa@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

構想
 知能環境
 想像
 リベラルアーツ
 高等教育

Kohsouh
 intelligence ambient
 imagination
 liberal arts
 higher education

主要業績

半田智久『GPA制度の研究 ―functional GPAに向けて』大学教育出版 2012.

半田智久「心理学概論書における「想像」と「構想」の扱われ方」構想, 10, 1-38, 2011.

半田智久「GPA 算法の比較検証 : 従前の GPA から functional GPA への移行とその最適互換性をめぐって」高等教育と学生支援, 2, 22-30, 2011.

半田智久 2011 大学教育学会第33回大会(桜美林大学) June 5functional GPA の算法検証 : 従前の GPA からの移行とその最適互換性をめぐって」(抄録: 大学教育学会第33回大会発表要旨集録, 96-97 2011)

研究内容 / Research Pursuits

学問の先端領域では知性が眩しく輝いています。その輝きが増すほどに、他方ではわたしたち自身や社会、そして未来に健やかさを実感できる感性の豊かさが一層求められています。創造の導きは知性と感性の行き交いに織りあがる表象にあるとみられるからでしょう。その表象をつくる力として、ある哲学者は2世紀も前に構想力に着目しました。とはいえ、その力に対する研究はいまだ十分とはいええず、よく語られるわりにはわかっていません。そこで、その構想が行き交う絶好のフィールドで、その正体を捉えるべく採集や観察の研究活動を展開しています。

Understanding is a dazzling, eye-catching feature of advanced science. As this understanding starts to sparkle ever more brightly, we need a richer sensibility with which to appreciate the healthiness of ourselves, our society, and the future. This is perhaps because the guidance of creativity appears to lie in the representation woven by the interchange and shifts between understanding and sensibility. Over 200 years ago a certain philosopher focused on *Einbildungskraft* (faculty of *Kohsouh*) as a faculty for creating representation. But research in this field is far from adequate, and though it is often talked about it is little understood. We will use the perfect field of advanced science, where *Kohsouh* interchanges and shifts, to conduct research activities aimed at grasping and observing the true identity of *Kohsouh*.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

2011年度の授業、コンテンポラリー・リベラルアーツ(総合科目)、コンテンポラリー・リベラルアーツ2(総合科目)、知能環境論(LA科目)を実施した。心理学(認知・記憶・想像・知能・神経生理)関係や教育学(大学)、事業論などを主な領域とする

I had classes in Ochanomizu Univ.("Contemporary Liberal Arts", "Contemporary Liberal Arts 2", "Intelligence Ambient, Kuwasawa Design School("Creativity and Intelligence.

■ 研究計画

人間の心的過程を追うなかで構想力(puissance and faculty of Kohsough)に関心をもち、その正体への接近を試みてきた。その結果、この概念がとくに英語との通用性をもたず、日本語に特有のものとして成立していること、それでいて現代日本語として語用豊かに使われている実態がつかめている。わたしたちが日常、自然に運用している概念には、こうした一定の言語文化に特殊性をもって息づいているものが少なからずある。その探求は特定の文化環境のもとでバナキュラーに生息するところの特性を考察していくうえで、重要なアプローチのひとつとなるだろう。今後、こうした概念のナチュラルヒストリーに光を照らし、あらたな知能環境の構想にむけて歩みを進めたく思っている。むろんそのためには学際はもちろん広く社会／文化諸領域の人びととの共同研究が欠かせない。

■ メッセージ

現代の高校生や生涯学習の場での学び人とも年に一度は授業を通して触れ合う機会をもち、現代の高等教育の実相の一端を普段とは違う角度から感じ取ろうとしている。そうした経験から実感していることは、自分がその時分であった頃よりも、いまの若者や若い社会人のほうが知的にずっと豊かであるということだ。だが、その豊饒さゆえに、そこに敏感な感性が響きすぎてしまって、素朴な強さよりも上滑りな巧みさにはしりすぎている観もある。だからこそ、現代の高等教育にはこの社会にありながらの超絶的な聖域性が必要になりつつあるように思う。もし大学がそれを満たし得ない社会的制約をもつようになってきているとすれば、別様の場が必要とされているのかもしれない。

氏名	平岡 公一 HIRAOKA Koichi
所属 職名	人間文化創成科学研究科人間科学系 教授
学位	社会学修士(1980 東京大学)
専門分野	比較社会政策、社会福祉政策論、福祉社会学
URL	
E-mail	hiraoka.koichi@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

社会政策
社会保障
社会福祉
福祉社会学
プログラム評価

social policy
social security
social welfare
welfare sociology
program evaluation

主要業績

「社会保障制度体系再構築への視座——普遍主義に基づく最低生活保障、および少子化対策の体系化——」『社会政策』第3巻第1号、13～27頁、2011.

平岡公一・杉野昭博・所道彦・鎮目真人『社会福祉学』有斐閣、2011

研究内容 / Research Pursuits

1) 科研費プロジェクト : <1>「ケアの連続体」の形成の視点に基づく高齢者ケア・サービス体系の国際比較(研究代表者<2>「実践家参画型福祉プログラム評価の方法論及び評価教育法の開発とその有効性の検証」(連携研究者) 2) グローバルCOEプログラムによる共同研究——教育・社会的格差領域を担当。3) 社会政策学会誌に論文「社会保障制度体系再構築への視座」を発表。4) 『社会福祉学』(平岡公一、杉野昭博、所道彦、鎮目真人共著)を刊行。

1) Research project supported by The Grants-in-Aid for Scientific Research----- a) International comparison of long-term care system based on the perspectives of the formation of the "continuum of care"(Principal Investigator). b) Development and Evaluation of the methods of the program evaluation and the training of evaluators in the fields of social welfare services 2) Research project conducted as part of the Global COE Program 3) one journal article: Restructuring of the social security system in Japan 4) publication of a co-authored book entitled "Social Welfare Studies: Social Policy and Social Work"

■ 教育内容 / Educational Pursuits

＜学部＞ 社会政策論Ⅰ：社会保障の概念、研究枠組みと社会保障制度の歴史、現状、課題を講義。社会政策論Ⅱ：ニード基底型社会政策・運営論にもとづく社会福祉政策の分析 社会政策論演習Ⅰ、社会保障論演習Ⅱ：社会政策に関する基礎的文献の講読 社会学研究指導1・2、卒業論文：卒業論文指導 ＜大学院前期課程＞ 社会福祉論演習：日本の社会福祉分野の主要な学術誌に掲載された論文の講読。社会政策論演習：社会政策分野の最新の英文雑誌論文の講読 政策科学：ヒューマン・サービスに関する政策科学的研究の枠組みと手法を講義。プログラム評価の設計と解析：ヒューマンサービス分野のプログラム評価の設計と解析に関わる研究動向の概観 ＜大学院後期課程＞ 演習1、演習2：個別指導、研究発表と討議

＜Undergraduate courses＞ Social Policy I: Concept, analytic framework, history and main issues of social security Social Policy II: analysis of social care services based on the framework of need-based social policy and administration Social Policy Seminar I and II: Reading of academic articles on social security <MA courses＞ Social Welfare Semiar: Reading of new articles published in the major academic journals in Japan Social Policy Semiar : Reading of new articles published in the major English journals Policy Science: Outline of policy-oriented studies on human services Design and Analysis of Program Evaluation: Overview of the studies on the design and analysis of programu evaluation in the human services. <Ph.D. Courses＞ Seminar I, Seminar II: Supervision of research and discussion.

■ 研究計画

(1) 現在取り組んでいる研究、および今後取り組む予定の研究の主なテーマは以下の通りです。1. 介護・福祉分野のサービス・プログラムの開発と評価に関する研究 2. 介護・福祉分野の質の確保策についての総合的な研究 3. 生活リスクの変容に対応して社会保障改革のあり方と、改革に関わる合意形成の方法の研究 4. 社会保障・社会福祉に関する諸学問分野の研究史の検討 5. 社会保障・社会福祉の制度設計が、格差構造の再生産に及ぼす影響の研究 (2) 可能な共同研究のテーマとしては次のことが考えられます。1. 介護サービス分野の効果的なプログラムの開発と評価方法についての研究(自治体、福祉・医療施設等との共同研究) 2. 合意形成可能な年金、医療改革についての世論調査の実施と解析(報道機関、調査機関等との共同研究)

■ メッセージ

他の国立大学にはあまりみられない本学の特色の一つとして、①家族に関する専門的研究を行っている社会学・心理学・経済学・法学等の教員、②社会保障・社会福祉・雇用労働等を専門に研究している教員、が多く、この分野の研究・教育が充実していることをあげることができます。特に、社会保障・社会福祉等の分野の研究者、高度な専門性を持った職業人の養成に対する社会的な期待は高く、この分野の大学院レベルでの教育の充実をさらに図っていきたいと考えています。これらの分野の研究者や専門的職業人を目指す方の入学を期待しています。

氏名	藤崎 宏子 FUJISAKI Hiroko
所属 職名	人間文化創成科学研究科人間科学系 教授
学位 専門分野	家政学修士(1978年、お茶の水女子大学) 家族社会学 family sociology
URL	http://www.soc.ocha.ac.jp/fujisaki/
E-mail	fujisaki.hiroko@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

高齢者	senior citizen
家族	family
福祉政策	welfare policy
社会的ネットワーク	social network
ライフコース	life course

主要業績

藤崎宏子「日本の家族社会学は今—過去20年の回顧—研究方法論の展開を中心に」『家族社会学研究』23:2, 2011.10.

藤崎宏子「中高年期の家族関係—ジェンダー・ジェネレーションの視点から」『ケース研究』309, 2011.11

藤崎宏子「老人福祉行政の生成と展開—老人福祉担当課長の語りから」副田義也編『戦後日本における内政体制の研究』(科学研究費補助金研究成果報告書)2012.3

研究内容 / Research Pursuits

(1)高齢者介護における公私の機能分有。とくに、介護保険制度の導入が、高齢者の家族関係や高齢者介護をめぐる家族的責任に及ぼした影響に関する研究 (2)高齢期の家族関係、友人関係、地域社会とのかかわりや社会活動のあり方に注目した、高齢期のライフスタイルに関する研究 (3)中高年期の転機と危機的移行、世代間関係に関する研究

①The functional sharing of elderly care between formal and informal sectors, focusing on the family's care provider role. The impact of enactment of Long-term Care Insurance (Kaigo Hoken) on family relations and family responsibilities. ②The lifestyle of elderly, including their family relations, friendship, social activities, and consciousness of autonomy, based on the theory of social networks and life course. ③Critical transitions and turning points in midlife. Generational relationship of midlife.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

学部教育】家族関係論:歴史変動と文化比較を軸とする日本の家族の現状に関する講義 社会福祉学:社会福祉の法制度の概要とサービス利用の諸問題に関する講義 老年学:老年学の成立と背景、その主要なトピックに関する講義 生活福祉学演習:社会学の基礎的文献の講読・論文指導【大学院教育】生活福祉論:ライフコース論に関する文献講読 生活福祉論演習:家族と福祉政策に関する文献講読 家族社会学:家族研究の学説史に関する文献講読 家族変容論:家族研究・福祉研究の理論的基礎の強化と論文指導

【Undergraduate courses】Sociology of Family Sociology of Social Welfare Gerontology Sociology and Social Policies Seminar 【Graduate seminars】Family and Life Course Seminar Family and Social Policies Seminar Family Sociology Seminar Family Transition Seminar

■ 研究計画

(1)継続的に ongoing している中高年者の危機的移行と世代間関係に関する調査研究を続けるとともに、これまでに蓄積された量的・質的データを用いて研究のとりまとめをする予定である。(2)高齢者介護政策の動向と家族介護の実態との間に生じている諸問題に関するこれまでの研究を整理し、できれば単行本にまとめたいと考えている。(3)過去20年の日本の家族社会学研究の動向を理論展開と方法論の特質に注目してレビューする共同研究の成果を単行本として出版する予定である。

■ メッセージ

「あたりまえ」の世界に安住しないで日常を疑ってみること、あるいは視点を少しずらして別の面を見ようとする。そんなちょっとした冒険が、あなたの世界を広げ、より豊かなものにしてくれるでしょう。社会学の研究テーマは無限です。研究することと、自分が生活すること、そして生きることそのものが密に絡み合っているところが社会学の魅力であり、同時にしんどさでもあるかもしれません。閉塞感の強い時代ですが、だからこそ、自分について、周囲の人間関係について、そして社会のしくみについて、社会学的思考の武器をもって、深く掘り下げて探求していきましょう。

氏名	富士原 紀絵
	FUJIWARA Kie
所属	人間文化創成科学研究科人間科学系
職名	准教授
学位	修士(1995 お茶の水女子大学)
専門分野	教育方法学(教育実践史、カリキュラム論)
URL	
E-mail	fujiiwara.kie@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

カリキュラム
教育方法
日本教育実践史
教育課程

curriculum
educational methods
history of educational method in Japan
course of study

主要業績

「カリキュラムを動的に動かす視点と取組ー教科、道徳、特別活動の関係」天笠茂編『学力を創るカリキュラム経営』2011、ぎょうせい、pp.44-62

研究内容 / Research Pursuits

戦後初期の小学校のカリキュラム改革に関する研究

Research on elementary school curriculum reform during the early post-war period.

教育内容 / Educational Pursuits

学部)教育課程や教育方法、教職関係科目の授業を担当した。専門科目の教育方法概論では現代の教育方法につながる問題点を意識して、日本の戦前から現在にいたる教育方法の特徴について講義を行った。教育課程演習では基礎的な文献購読と共に、先進的な教育課程に取り組んでいる学校参観を行った。この他、教職関係の授業を担当し(オムニバス形式も含む)、教育実習の事前・事後指導を担当した。また、実際の教育現場と学生との接触を図るための授業運営や、インターンシップのコーディネートを担当した。(大学院)修士課程の教育方法演習・特論では、日本とアメリカの教育課程をテーマにした。

(For Undergraduate) I taught classes regarding educational curriculum, educational method, teacher training and others. In the 'Introduction to educational method' class, I ran a series of lectures regarding the characteristics of the educational methods in Japan from the pre-war era up to the present, highlighting the issues which lead to the present educational methods. In addition, I taught classes aimed at teacher training, and coordinating and supervising the students on-site teacher training throughout. (For Postgraduates) I took up the theme of educational methods on Japan and America.

研究計画

1. 日本の戦前・戦後初期の義務教育のカリキュラム改革の歴史的研究 2. 教育における新聞メディア活用に関する研究 3. 教師の教育評価観に関する研究

メッセージ

将来、教職を志望する学生を育てること、あるいは現職の教師の方の実践研究への手助けをすることが自分がこの職に就いた理由です。学校に対する社会の期待は年々大きくなる中で、教師や子どもをめぐる様々な困難が取りざたされています。しかし、教師という仕事は目に見えない子どもの可能性、そしてその子どもらによって創られる未来を生み出す手助けをするという意味において、社会の行く末を左右する重要な仕事であるのみならず、本来、未知のものを扱う創造性豊かな楽しい仕事であると考えます。そうした仕事に進んで携わろうとする、そして現に携わっている人たちの期待や夢、そして直面している困難と一緒に考え学んで行くことを基本的なスタンスとしています。これまで小・中・高等学校の教師と子どもたちと様々な問題と一緒に取り組む中で多くのことを学んできました。研究対象は歴史的な実践ですが、歴史の中に登場する教師からも多くのものを学んでいます。実践に即していれば時空を問いません、学校や教師について一緒に考えてゆきましょう

氏名	藤原 葉子 FUJIWARA Yoko
所属 職名	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系 教授
学位	学術博士(1993 お茶の水女子大学)
専門分野	栄養科学、脂質生化学
URL	
E-mail	fujiiwara.yoko@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

多価不飽和脂肪酸
ポリフェノール
ビタミンE
生活習慣病
脂質栄養

polyunsaturated fatty acids
polyphenols
vitamin E
life-style related diseases
lipid nutrition

主要業績

Identification of MIG12 as a Mediator for Stimulation of Lipogenesis by LXR Activation. Inoue J, Yamasaki K, Ikeuchi E, Satoh SI, Fujiwara Y, Nishimaki-Mogami T, Shimizu M, Sato R. Mol Endocrinol. (2011) 25, 995-1005

Regulation of lipid metabolism by palmitoleate and eicosapentaenoic acid (EPA) in mice fed a high-fat diet. Shiba S, Tsunoda N, Wakutsu M, Muraki E, Sonoda M, Tam PS, Fujiwara Y, Ikemoto S and Kasono K (2011) Biosci Biotechnol Biochem 75, 2401-2403

脂肪酸の新規機能と栄養管理-メタボリックシンドロームにおける脂肪酸の質的变化の重要性- 藤原葉子 日本病態栄養学会誌 (2011) 14 (2),158-161

Effect of gamma tocotorienol on the glucose tolerance in high fat-induce obese mouse. Chikamatsu I, Yoshihara C, Yamashita K, Akao M, Sonoda M, Sone Y, Ishikawa T, Nishikawa K, Ichi I, and Fujiwara Y. 2011 International Conference on Food Factor P1-392, 2011 Nov. 20-23, Taipei, Taiwan

レスベラトロール誘導体の生理機能とそのメカニズム 第5回ポリフェノール学会 2011年11月10 東京大学弥生講堂一条ホール 招待講演

研究内容 / Research Pursuits

肥満や生活習慣病を予防するために、日本人の食生活の中でも脂質の摂取に関する問題は、量だけでなく質をどうするかが重要であり、メタボリックシンドロームの原因となる肥満と食物との関係を、培養細胞を使ったin vitroの系から動物を使ったin vivoの系の両方から研究している。今年度は、脂質を構成する脂肪酸の種類とその個々の生理作用を検討した。骨格筋モデルとしてC2C12細胞を用い、DNAマイクロアレイによる網羅的以下遺跡により種々の多価不飽和脂肪酸の細胞に対する直接的な影響を調べた。また、食品中に含まれる成分の中で、ビタミンEの同族体やポリフェノール類の生活習慣病抑制効果を動物レベルと細胞レベルの両方から検討している。

It is important to investigate the appropriate fat intake for the prevention from obesity and life-style related diseases. Especially, we are interested in the biological function of fatty acids. We have been studied the relationship between the food and metabolic syndrome using both of cell culture system and animal model. In our previous study using DNA microarray, polyunsaturated fatty acids increased the expression levels of inflammation markers in adipocytes. In 2011, we analyzed the expression profile of C2C12 myotubes treated with several polyunsaturated fatty acids. We also studied the effects of vitamin E analogues and some derivatives of polyphenols on the glucose tolerance of obese mice.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

学部では「代謝栄養学」、「応用栄養学」、「栄養学実験」を担当している。管理栄養士養成課程の基礎栄養学、応用栄養学にあたり、どのような食物をどれだけ摂取すればよいのかについて、科学的根拠のもとに理解する知識と方法を教育している。卒業論文指導は、研究の初歩としてのスキルを身につけ、論文としてまとめて発表できることを目標としている。大学院前期課程は「栄養化学特論」「栄養化学特論演習」講義と演習を行っている。修士論文指導では、与えられたテーマから、実験を組み立てて研究を進め、論文を書くことを目標とする。大学院後期課程は「分子栄養学」を担当。博士課程では、将来は研究者として「独り立ち」できる人材教育を目指している。食べ物を化学的な物質として理解でき、科学的根拠のある栄養学研究を担える人材を育てた

Undergraduate course Nutrition and metabolism
Practical nutrition Experiments of Nutrition
Postgraduate course Nutrition chemistry Nutrition
chemistry seminar Molecular nutrition seminar Minor
SHOKUIKU education cours Evidence based
SHOKUIKU study

■ 研究計画

研究室では、肥満を基盤とする生活習慣病に関する影響をin vitro, in vivoの両方から、生理学および生化学的に評価するシステムが確立できた。通常の食生活改善を目的とした基礎研究のほか、食品成分の関連を研究する上で、その成分の誘導体の中にさらに強い作用をもつものを探すなど、創薬への応用も視野に入れ、有機成分分野との共同研究も進めている。

■ メッセージ

栄養化学は、食物と身体を科学する、生活に身近な基礎科学です。健康を維持し、生きていく生活の質(QOL)を向上させるために、どのようなものをどれだけ食べればよいかということ、生物や化学の知識を利用して研究しています。TVの情報番組やCMに流されたり、食という身近な問題なのに、意外と正しい知識を身につけていない人が多いことに気づかれます。食育が盛んな今、あらためて多くの人に食の大切さと、正しい知識を広めることの重要性を感じています。

氏名	古川 はづき KAWANO-FURUKAWA Hazuki
所属	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系
職名	教授
学位	博士(理学) (1995 東京大学)
専門分野	強相関電子系の中性子散乱実験(超伝導、ペロブスカイト型Mn酸化物等)/ Neutron scattering studies on Stron
URL	http://www.phys.ocha.ac.jp/furukawalab/
E-mail	furukawa.hazuki@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

強相関電子系
超伝導と磁性
物性実験
低温
中性子散乱実験

Strongly correlated electron system
superconductor and magnetism
condensed matter experiment
low temperature
neutron scattering experiment

主要業績

Vortex structures, penetration depth and pairing in iron-based superconductors studied by small neutron scattering, M. R. Eskildsen, E. M. Forgan and H. Kawano-Furukawa, Rep. Prog. Phys. 74, 124504 (2011)

Gap in KFe2As2 studied by small-angle neutron scattering observations of the magnetic vortex lattice, H. Kawano-Furukawa, C. J. Bowell, J. S. White, R. W. Heslop, A. S. Cameron, E. M. Forgan, K. Kihou, C. H. Lee, A. Iyo, H. Eisaki, T. Saito, H. Fukazawa, Y. Kohori, R. Cubitt, C. D. Dewhurst, J. L. Gavilano and M. Zolliker, Phys. Rev. B 84, 024507 (2011)

Incommensurate spin fluctuations in hole-overdoped superconductor KFe2As2, C. H. Lee, K. Kihou, H. Kawano-Furukawa, T. Saito, A. Iyo, H. Eisaki, H. Fukazawa, Y. Kohori, K. Suzuki, H. Usui, K. Kuroki and K. Yamada, Phys. Rev. Lett. 106, 067003 (2011)

研究内容 / Research Pursuits

中性子散乱法を用いて強相関電子系の研究を行っている。研究対象として近年取り上げた物質は、新奇超伝導CeCoIn5、モット絶縁体、p波超伝導Sr2RuO4、RENi2B2C(RE=Y and rare earth)とその関連物質である。主な研究成果は以下のようにまとめられる。(1)CeMIn5 (M=Co, Rh,Ir) 異常超伝導状態について 準2次元重い電子系超伝導体CeCoIn5では強いパリティ常磁性効果により特異な超伝導混合状態(FFLO状態)が実現すると考えられている。古川研では、FFLO状態の存在を直接的に実証するため中性子小角散乱実験による超格子反射の観測に挑戦している。試料の作成およびその物性評価を行った。(2)Sr2RuO4の超伝導体対称性の検証 Sr2RuO4はp波超伝導であると言われている。しかし、p波超伝導の発現に寄与することが期待される強磁揺らぎについてはその存在が明確でなく、逆に、大きな反強磁性揺らぎを示す。来年度以降実施を計画している中性子小角散乱実験用の大型単結晶試料の育成、および、得られた試料の物性評価を行った。

By using neutron scattering technique, we are studying strongly correlated electron systems, mainly CeMIn5 (M=Co, Rh,Ir), Mott insulators (Ti and Mn systems), Sr2RuO4, RENi2B2C (RE=Y and rare earth) and their relatives. Recent progress in my research activity is summarized as follows: (1)Superconducting properties in CeMIn5 (M=Co, Rh,Ir) FFLO state has been proposed to realize in quasi-two dimensional heavy electron superconductor CeCoIn5. Then we have tried to verify it by SANS experiments. (2) Superconducting symmetry in Sr2RuO4 Sr2RuO4 has been suggested to be a spin triplet superconductor. The system posses a huge incommensurate AFM spin fluctuations at $q=(1/3, 1/3, L)$ but any direct evidence of ferromagnetic spin fluctuations has not been reported so far. We plan to perform SANS experiments on this material. Then we tried to grow new single crystals.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

(学部) 物性物理学序論、物理学基礎実験、凝縮系物理学 (大学院) 磁性体演習 (卒業研究・修士研究指導) 研究室所属の学生各自に1つずつ研究テーマを与え個別の研究指導を行っている。これまでの研究課題は研究室のHPに記載している。各人、担当した研究テーマの試料を作成し、X線構造解析、電気抵抗、磁化測定、中性子散乱等を用いて物性研究を行う。研究の目的の熟知と最適な実験・解析法の議論に徹する時間が長い、その中で「新しい問題への解決法を、自分の手で、いかにうまく切り開くか」といった研究のおもしろさを伝える様心がけている。

■ 研究計画

最近、超伝導現象と磁性の関わりについて研究を行っています。現在の研究テーマは、強磁性超伝導に期待される自発的磁束格子構造の実証、および、CeCoIn5で実現していると思われるFFLO相を実証する事です。これら2つの現象は、ともに数十年前に理論的に予言された現象で、これまでに現実の系で実現していることが確認されていない問題です。これらの現象を実験で実証するのは非常に難しく、チャレンジングです。これまでに培った知識を生かし、可能な限りの集中力で実験の準備を進めています。

■ メッセージ

将来的な人口の大幅減少を見据え、近年、女性パワーの活用が注目されています。個々の活躍の場を見つけるため、大学生活を充実したものにする事は大切なことです。自分が興味を持てる事を見つけることができる場所、そして、その興味を延ばすことができる場所を見つけましょう。一番、大切なことは、ポジティブ思考をもち自らの意思で走り続ける事だと思います。

氏名	古瀬 奈津子 FURUSE Natsuko
所属 職名	人間文化創成科学研究科文化科学系 教授
学位	博士(文学)(1999東京大学)Ph.D. in Literature
専門分野	日本史学(日本古代史、特に日本古代の政治制度、儀式、平安時代史)
URL	
E-mail	furuse.natsuko@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords	
天皇制 律令制 儀式 日唐比較史 日唐関係史	Japanese Imperial System Code-Statute System Rituals and Ceremonies Comparative History of Japan and China Historical Relationships between Japan and China

主要業績	
古瀬 奈津子『シリーズ日本古代史⑥摂関政治』	岩波書店、2011年12月、244頁
古瀬 奈津子「隋唐と日本外交」 年5月、56-91頁	荒野泰典他編『律令国家と東アジア』 (日本の対外関係2) 吉川弘文館、2011
古瀬 奈津子「遣唐使中止の原因和意義」 25-36頁	王勇主編『東亜文化的伝承与揚棄』 中国書籍出版社、2011年7月、
古瀬 奈津子「Fujiwara no Michinaga's Consumer Lifestyle: Powerful People and Consumption」 2012年3月、143-146頁	『比較日本学教育研究センター年報』8号
古瀬 奈津子「摂関期(平安時代中期)的対外関係」 史学系	北京大学歴史学系学術講座招待講演 2012年3月16日、於北京大学歴史学系

研究内容 / Research Pursuits	
<p>1. 平安時代史について、摂関期(平安時代中期)の歴史を『シリーズ日本古代史⑥摂関政治』としてまとめ、刊行した(主要業績1)。通史ではあるが、摂関政治の成立過程について独自の見解を示した。また、藤原道長について「Fujiwara no Michinaga's Consumer Lifestyle: Powerful People and Consumption」を、International Workshop “Consumption and Consumerism in Japanese Culture”(於カレル大学)において発表し、『比較日本学教育研究センター年報』8号に収録した。(主要業績4)</p> <p>2. 日中交流史については、8世紀における日本外交を、唐および新羅との関係を中心に概観し、その性格を明らかにした論文を刊行した(主要業績2)。遣唐使中止の原因と意義について研究した論文を発表した(主要業績3)。また、「摂関期(平安時代中期)の対外関係」というタイトルで、北京大学歴史学系学術講座において招待講演を行った。</p>	

教育内容 / Educational Pursuits

1. 学部では、比較社会史で、他者をテーマに日本古代史の講義を行うとともに、他の時代や地域との比較を行った。古文書学では、古代・中世史料の読み方・調べ方の手ほどきをした。日本文化史概論では、安田次郎教員と合同で日本古代・中世史を都市に着目しながら概観した。日本古代中世文化史では、摂関期の政治、社会、文化、対外関係などについて論じた。日本古代史演習では『続日本紀』延暦6年～7年条を講読し、桓武朝前半期の政治・社会の変化について考察した。大学院では、『令集解』葬喪令と『小右記』寛仁3年条を講読し、律令制の基礎とその後の社会的展開について理解を深めた。卒論・修論・博論については発表会と個別指導を併用した。2. 大学院教育改革支援プログラムを引き継いだ比較日本学教育研究センター主催の国際日本学シンポジウム「感覚・文学・美術の国際日本学」および国際日本学コンソーシアム「日本文化における消費とコンシューマリズム」(カレル大学との共催)を開催して、大学院教育の国際化に寄与した。

研究計画

1. 東アジアにおける日本という視点から、日本古代の天皇制研究を進め、日本社会の特質に迫る。2. 共同研究「日唐宋律令法の比較研究と新唐令拾遺」の編纂(科学研究費による)を継続し、天聖令による日唐令比較研究から、日唐古代社会の本質的差異と歴史的展開の共時性を明らかにする。3. 平成19年度科学研究費に採択された「文書様式からみた日唐古代官僚制の比較研究」を進展させ、日唐の上表文・奉表文を分析することにより、唐の皇帝と官人の関係と、日本の天皇と官人の関係との違いから、日中における集団と個人関係を考察する。4. 共同研究「身分感覚の比較史的研究」により、従来とは別の見方で、日本古代における身分について考える。5. 日本学の観点から、海外の日本研究者と共同で、日本の社会と文化について、異なった視点からの学際研究を進める。

メッセージ

女子大という閉ざされたイメージがあるかもしれませんが、お茶の水女子大学の場合それは当てはまりません。サークルだけではなく、ゼミや勉強会を通じて他大学との交流もあります。他大学の単位を取得する制度もあります。お茶大の中だけに閉じこもらずに、積極的に外の世界とのつながりをもつようにしましょう。ただし、国立女子大学の意義もまたあると思います。現代社会においては、まだ就職や、結婚をし子どもをもった後に仕事を続けようとした場合などに、男女平等とは言えない部分があるのではないのでしょうか。子どもの出生率が下がったままなのは、こうしたことに原因があるのではないのでしょうか。本当の意味において男女がそれぞれの特性をいかして生きていける社会を実現するために、国立女子大学の意義はまだ大きいと言わざるを得ないと思います。

氏名	古田 悦子 FURUTA Etsuko
所属	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系
職名	講師
学位	博士(理学)
専門分野	放射線計測学
URL	
E-mail	furuta.etsuko@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

中性子放射化分析	neutron activation analysis
即発ガンマ線放射化分析	prompt gamma-ray analysis
放射性コンシューマプロダクト	radioactive consumer products
天然放射性物質を含む一般消費財	NORM
放射線影響	radiation exposure

主要業績

A new smear method with plastic scintillator (LSC-2010掲載)

新表面汚染拭き取り法の提案(日本保健物理学会、口頭発表)

Unjustified exposure by radioactive consumer products(ICRR-14,ポスター発表)

プレスレットに含まれる放射性物質とその規制(化学生物総合管理掲載)

Imaging technique for detection of leaf surface contamination with fission products scattered by Fukushima nuclear power plants accident(NAMLS-10,oral presentation)

研究内容 / Research Pursuits

■ 教育内容 / Educational Pursuits

放射線に関わる安全管理概論を1年生の実験系学生を中心に行った。講義では、放射線の基礎、メリット(利用のされ方)、デメリット(被ばく)と放射線事故例を紹介した。放射線測定器(サーベイメータ)とチェックングソースを用いた簡易測定実習を行い、線源からの距離、遮蔽物の存在による放射線の減少、測定器の方向依存性について学ぶとともに、サーベイメータの使用方法を習得した。ライフサイエンス専攻の修士学生に対し、放射線の使用に係る講義及び実習を行った。非密封放射性同位元素の取扱と測定器の詳細について説明後、実際に線源を探す、拭き取りを体験する、液体シンチレーションカウンター、イメージングプレートの正しい使い方について実習を行った。リベラルアーツ(LA)生命と環境24の中の「環境」を担当した。受講生各自が興味を持った環境問題について調べ、1講義に1名の割合で、調査結果を発表し、ディスカッションを行った。放射線業務従事者として登録した者への、新規教育訓練と再教育訓練を担当した。新規教育訓練では、6時間の法定教育プラス0.5時間の安全教育(放射線の人体に与える影響:0.5時間、安全取扱:4時間、放射線障害防止法:1時間、予防規程:0.5時間、緊急時の対応:0.5時間)を行った。1時間の再教育訓練では、法律に関わる事項を伝達した。

■ 研究計画

■ メッセージ

東京電力福島第一原子力発電所事故により、放射線・放射能が、にわかに注目されました。種々の報道がなされていますが、中には残念ながらサイエンスではないものもあります。放射線は、私たちの生活に欠かすことのできない有効利用もされています。放射線＝悪ではなく、正しく知って、正しく恐れてくれたらと思います。

氏名	古谷 希世子 FURUYA Kiyoko
所属 職名	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系 講師
学位	博士(理学)(1991 広島大学)
専門分野	関数解析学(特に、発展方程式と偏微分方程式)
URL	
E-mail	furuya.kiyoko@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

シュレディンガー方程式の経路積分の表現
ディラック方程式の経路積分の表現
非放物型方程式を適切にする空間の研究

Feynman path integrals for Schroedinger equations
Feynman path integrals for Dirac equations
Wellposed space of nonlinear parabolic equations

主要業績

Furuya,Kiyoko,: シュレディンガー方程式に対する経路積分-ベクトル値の経路 積分を考える. RIMS 共同研究「経路積分と超局所解析の入門」数理解析研究所 講究録 1723, (2011)79-100.

Furuya,Kiyoko: GENERALIZED FORM OF THE TROTTER-KATO THEOREM FOR WEAK CONVERGENCE. The seventh international conference on Nonlinear Analysis and Convex Analysis , ABSTRACTS August 2 - August 5, (2011)P .100. (査読有)

K.Furuya: 形式的自己共役なシュレディンガー作用素. 第 37 回 発展方程式研究会報告集 , 第 37 回発展方程式研究会: 総合研究 (A)2011 年 12 月 23 日ー 12 月 25 日

研究会「放物型発展方程式とその応用」2011 年 9 月 22 日ー 9 月 24 日 K.Furuya:Formally Self-Adjoint Schrödinger Operators with Singular Potentials.

MR2668249 (2011i:47057) Neuberger, J. W. Lie generators for local semigroups. Nonlinear analysis and optimization I. Nonlinear analysis, 23–238, Contemp. Math., 513, Amer. Math. Soc., Providence, RI, 2010. (Reviewer: Kiyoko Furuya),

研究内容 / Research Pursuits

シュレディンガー方程式の経路積分の表現、シュレディンガー方程式を作用素空間での ファインマンの経路積分により数学的に 意味を持つ様にする ファインマンの経路積分は直感的な定義により物理の世界では市民権を得ているが 数学の立場から見ると 厳密な定義が与えられていない 積分を定義する為の一次元の測度が存在しないためである 空間を激しく振動していることを考慮して 無限次元空間(作要素空間)での”ベクトル測度”を 定義する事によりファインマンタイプの経路積分を定義する

The idea of Feynman's integral is a topic of great interest in mathematics and physics. But rigorous mathematical treatment of this integral is not enough. We shall define a kind of operator-valued integration and define the path integrals Reducing matrix-valued functions to scalar functions, we prove path integrals for Dirac equations are represented by an $L(L^2, L^2)$ -valued measure.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

■ 研究計画

方程式の解が存在するより応用範囲の広い関数空間を構成する。量子力学など物理学の分野で重要な方程式を測度論的に記述し数学的基礎付けをする。（物理学で使われているファインマンの経路積分は未だ数学理論が定まっていない。）非線形方程式を適切にする空間の研究

■ メッセージ

10年後、どんな状態でいたいのかを思い浮かべながら自分の頭で考え判断し計画を立て実行に移してください。今 人気がある、高収入につながる 他人に勧められた といった理由では 大変なときに 頑張りが効きません。辛い時には 苦勞したことは 無駄には ならない 何らかの形で 身に付くということを 忘れないでください。

氏名	戸次 大介 BEKKI Daisuke
所属 職名	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系 准教授
学位	博士(理学)
専門分野	数理言語学/Mathematical Linguistics
URL	http://www.is.ocha.ac.jp/~bekki/
E-mail	bekki@is.ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

範疇文法
動的意味論
高階依存型理論
限定継続
モナド

categorial grammar
dynamic semantics
Higher-order dependent type theory
delimited continuations
monad

主要業績

「数理論理学」戸次大介. (2012). 東京大学出版会

Extractability as Deduction Theorem in Subdirectional Combinatory Logic. Ozaki, Hiroko. Bekki, Daisuke. (2011).

Conjoined nominal expressions in Japanese: Interpretation through monad Hayahishita, J.-R.. Bekki, Daisuke. (2011).

Combinatory Categorical Grammar as a Substructural Logic — Preliminary Remarks — (revised version) Bekki, Daisuke. (2011).

Conditional Logic Cb and its Tableau System Ozaki, Yuri. Bekki, Daisuke. (2011).

研究内容 / Research Pursuits

☐ 教育内容 / Educational Pursuits

☐ 研究計画

☐ メッセージ

氏名	Diane Hawley Nagatom
所属	Diane Hawley NAGATOMO
職名	人間文化創成科学研究科文化科学系 准教授
学位	博士(文学)／ Ph D in Linguistics
専門分野	English Education
URL	
E-mail	hawley.diane.edla@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

language teachers' professional identity
second language teaching/learning
language learners' identity
gender in language education
language teaching materials development

主要業績

"A Critical Analysis of Gender Representation in an EFL Textbook." Journal of Ochanomizu English Society. 第1号2011年53-61頁.

"An Investigation of the Identity and Teaching Practices of Japanese Teachers of English in Japanese Higher Education" 『お茶の水女子大学人文科学研究』第7号2011年165-180頁.

"The Impact of 'Imagination of Students' in the Development of the Professional Identity of Four Japanese Teachers of English in Japanese Higher Education" Asian TEFL Journal Professional Teaching Articles 51, 2011, 年63-71 頁.

. "A Case Study of How Beliefs Toward Language Learning and Language Teaching Influence the Teaching Practices of a Teacher of English in Japanese Higher Education" The Language Teacher 35 (6), 2011 年25-29頁.

"Motivating Students: Difficulties in Negotiating Japan's Complicated Love-hate Relationship with English." 平成23年度教育研究開発研究発表会 中間報告 (Plenary Speaker) November 26, 2011.

研究内容 / Research Pursuits

My research focuses on what teachers think, believe, and do in a foreign language classroom. In particular, I have been looking at Japanese university English teachers who are relatively unexamined in the discourse surrounding language education in Japan and yet have a wide ranging influence on language education from multiple perspectives. I am interested in narrative qualitative research and uncovering data that is embedded in the stories that people tell.



教育内容 / Educational Pursuits

Most of the classes that I teach help students build English language skills that will enable them to use English in business or in academic settings. Classes range from developing basic communication skills to be able to carry on a conversation, to discussing more abstract and academic topics. Basic writing classes teach students the fundamentals of English composition and advanced writing classes prepare students to write research papers in English. At the graduate level, my classes focus on readings that pertain to second language learning and second language teaching.



研究計画

In the past few years my research has focused on how Japanese teachers of English in Japanese higher education construct their professional identities as language teachers and as scholars in their academic areas. My interest in language teacher identity has now expanded to include non-Japanese teachers of English. Over the next several years I hope to conduct an extensive study of foreign women who are married to Japanese who teach English in contexts ranging from tertiary and secondary institutions to private eikaiwa teaching in homes. Investigating the beliefs, teaching practices, and identities of these teachers may help shed some light on language education in Japan from an under examined perspective.



メッセージ

English is a necessary for tool for everyone in today's society. What are your purposes for learning English? What do you wish to do with it in the future? These are important questions for students to consider when starting their academic career. The important thing to remember is that becoming a proficient user of English, or even becoming bilingual, is not an impossible dream. Anyone can reach their language learning goals if they work hard enough.

氏名	真島 秀行
	MAJIMA Hideyuki
所属	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系
職名	教授
学位	理学博士(1985 東京大学)
専門分野	複素領域における微分方程式論
URL	http://www.sci.ocha.ac.jp
E-mail	majima@math.ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

複素領域における微分方程式
数学史
数学教育

Differential equations in the complex domains
Mathematical History
Mathematical education

主要業績

Majima, Hideyuki, Seki Takakazu, his life and bibliography, to appear in the Proceedings of the International Conference on History of Mathematics in Memory of Seki Takakazu(1642?-1708), Springer-Verlag(to appear)

高木貞治の書籍についてのいくつかの注意、京都大学数理解析研究所講究録 No.1739. 21-36、2011年5月.

関孝和三百年祭から建部賢明・賢弘兄弟年間(2011~2014)に向けて、九州数学史シンポジウム講演記録集、73-80、2012年1月

研究内容 / Research Pursuits

複素領域における微分方程式論については、関数の漸近展開についての研究をした。数学史に関しては、1. 関新助孝和の「解伏題之法(天和三年重訂)」と「大成算経第17巻伏題」には現代数学的には、終結式・行列式のことを書いてあるが、数学的な発想からすると「大成算経」に書いてある式の係数に関する展開式の方が自然で、本来はこの方法が初めに考えられ、「解伏題之法(重訂)」で2次行列、3次行列、4次行列についての計算を関孝和は逐式交乗と呼び表にまとめ、さらに、この表からうまく組み合わせられて交式斜乗で表わされるという考えを得たが、5次以上の行列について交式斜乗は誤っている、大成算経では元の考えに戻したと推察されることを指摘した。2. 建部賢弘が「綴術算経」等で関孝和の業績に関して言及している。それを手がかりに「大成算経」の記述や「綴術算経」の類書の成立について考察した。数学教育については、高校数学の課題学習・数学的活動として「虹の数学」、「油分け算」という教材の改良を行った。

■ 教育内容 / Educational Pursuits

全学共通科目として、数の歴史の講義、LA科目「数理のこぼれ」、理学部数学科3年生向けに関数論とその演習、3～4年生向けに微分方程式論の講義を行った。大学院博士前期課程向けに、関数方程式特論として確定特異点を持つ線形微分方程式の解の局所的挙動、大域的な接続関係、リーマン・ヒルベルトの問題について講義した。学部4年の数学講究では、微分方程式論のテキスト、数理ファイナンスのテキストを読ませた者があったが、いずれも発表させ、質問、演習を通じて理解度を上げた。大学院博士前期課程の1年生には、テキストを読ませ、質問、演習を通じて基礎知識が修得させるよう指導に当たり、大学院博士前期課程の2年生には、修士論文としての研究課題を与え、そのために必要な知識を本や論文を読ませることによって獲得させ、修士論文の指導に当たった。

■ 研究計画

1. 特殊関数を漸近解析の手法を中心に研究してきている。Bessel関数などは様々な場面で応用されている。まだ知られていない応用があれば共同研究したい。2. 関新助孝和の伝記的な面が分かってきたが、引き続き関孝和の数学と職業との関わりについて明らかにしていきたい。また、弟子である建部兄弟、特に徳川吉宗の相談役であった建部賢弘についても数学と職業との関わりを明らかにしていく。3. 新学習指導要領の解説で「算数・数学的な活動」を通じて算数・数学を学ぶ姿勢を育てる方向性が強く出されているが、どのような教材が適切か研究していく。

■ メッセージ

数学は元々人間生活の必要性から発祥し、発展し、人びとの生活を支え続けてきています。物を数えたり、量を測ったり、形を作ったり、空間内の位置を表したりするのに必要な数の概念、図形の概念はもちろんのこと、それらを基礎として、関数の概念が生まれ、それを解析する手段である微分積分学などが確立されてきました。そのお蔭で、他の科学、技術とも相俟って、今日、人工衛星を打ち上げることなどが可能となり、より正確な天気予報が可能になったり、衛星放送が見られたり、GPS(全地球測位システム)が開発されナビゲーションができるなど、人びとはその恩恵に浴しています。数学は地味な学問ですが、強力で、その良さを社会の多くの人びとに知っていただきたいと思っています。江戸時代の関孝和、建部賢弘、近代日本の高木貞治の業績など、日本では世界的な数学が生み出されてきています。数学を何らかの意味で人生に役立てていこうという志のある方が、「虹の数学」などを学びに、そしてさらに研究を目指して進学して来てくれることを期待しています。

氏名	増田 優
	MASUDA Masaru
所属	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系
職名	教授
学位	博士(学術)
専門分野	化学物質総合経営学
URL	http://www.lwwc.ocha.ac.jp/
E-mail	masuda.masaru@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

化学物質総合管理・経営学
評価指標
社会技術革新学
リスク管理・危機管理
知の市場・公開講座

Integrated Management of chemicals
Evaluation Indicator
Socio-Techno Innovation
Risk Management・Crisis management
Market of Wisdom・Open multiiversity

主要業績

増田優、規範科学-レギュラトリー・サイエンス-、生命科学概論、朝倉書店、145-153 (2012.3.31)

星川欣孝、増田優、化学物質総合管理による能力強化策に関する研究(その13)ー化審法改正時の国会附帯決議への対応の検証と今後の課題ー、化学物質総合管理、7(2)、化学物質総合管理学会、58-74 (2011.12.28)

須藤繁、増田優、米国石油精製業におけるパレロ・エナジーの事例に見るポリシー・イノベーションが導く事業展開、技術革新と社会変革ー現場基点一、4(1)、1-12 (2011.9.30)

増田優、機能性化学産業の競争力とビジネスモデルの変革-ポリシーイノベーションが導く素材産業から部材産業への展開-、化学工学、75(8)、490-494 (2011.8.30)

八木雅浩、増田優 大量破壊兵器拡散防止の観点での特許制度上の問題点とその対応策、化学生物総合管理、7(1)、化学生物総合管理学会、4-18 (2011.6.22)

研究内容 / Research Pursuits

1.日本の国際競争力に陰りが見える中で国際的に強い存在感を示している機能性化学企業の事例研究を行い、競争力の主要な要因としてポリシー・イノベーションの概念を提起した。2.持続可能な発展に関する2002年の世界首脳会議(WSSD)において化学物質総合管理に係る活動の強化が合意され、2006年の国際化学物質管理会議(ICCM)において戦略的アプローチ(SAICM)が採択された。このように化学物質総合管理を巡る国際的な動きは加速化しており、国内体制の強化が喫緊の課題となっている。2-1.このため、化学物質総合管理において重要な役割を果たす各主体の自主的活動を促進する方策について検討を行い、化学物質の総合管理に係る行動を評価する指標体系を開発し、企業、政府機関、大学、試験研究機関の評価を行い比較検証した。2-2.また、国際的な比較を行いつつ、化学物質のもたらすリスクを科学的知見と科学的方法論に基づいて管理していくのに相応しい国内の法律体系について検証し、変革の方向について提言した。

1.We created new concept of policy innovation in addition to process and product innovation through case studies of Japanese functional-chemicals companies to explain strong international competitiveness and great Presence in global market. 2.Integrated Risk Management of Chemical Sub- stances are a worldwide issue since the formulation of UNCED action plan in 1992. Because of a pressing need to secure enhanced domestic structure when international actions such as treaties on persistent organic pollutants are accelerated, we examined domestic law systems appropriate to manage risks through scientific knowledge and methodology, and strategies to promote self-management by developing index systems to evaluate corporative efforts.

教育内容 / Educational Pursuits

1. 国際的な行動計画においても、キャパシティー・ビルディングが最重要課題のひとつとして掲げられているが、化学物質総合管理のためには、化学物質の特性に関する自然科学的な知識から条約や法律に関する社会科学的知識まで幅広い知見を身につけることが必要である。その出発点として、社会技術革新学に加えて安全管理概論やリスク管理(演習)の講義を行い、科学的知見および科学的方法論と法律や条約の関わりなどについて論じた。2. また、多様な社会人を対象に、化学物質や生物の管理、或いは技術革新と生活や社会の変革の関わりなどに関して、実践的で総合的な学習の機会を提供するために「知の市場」を実施した。2011年度は、専門機関や実務機関などから総勢654名の講師陣を組織化し、全国30拠点で99科目相当(1科目当たり120分授業15回で2単位)を開講した。その結果、20歳台から50歳台までの現役世代を中心に、企業人から教員、公務員までの幅広い分野から総勢2751の受講応募者を全国から得て、過去8年間の受講応募者の累積は12341名に達した。

1. Capacity building of human resource is stated as the highest priority issue at UNCED & WSSD. To provide a broad range of knowledge from natural, social & cultural science essential to fully understand risk management, lectures on Regulatory Science and innovation of society & technology were given to introduce students to relationship between scientific knowledge & methodology and law & treaties. 2. Open multiversity, so called “Chino-Icjiba” is held. 99 extension lectures with 654 lecturers introduced 2751ers of the society including students and graduates to practical and comprehensive studies on managing risk of chemical substances & living organisms, or on relationship between technical innovations & social transformations.

研究計画

1. 教育機関、試験評価機関、政府機関などに対しても適用可能な化学物質総合管理に関する評価指標を用いて企業などの活動評価を実施するとともに公開する。2. 国際的な整合性に配慮しつつ国内の法律体系を検証し、科学的知見と科学的方法論に基づいてリスク原則に従って化学物質総合管理を行うのに相応しい法律体系のあり方などについて提言を行う。3. 技術革新と社会変革の関わりについて現場を基点にしつつ、技術の視点、人間の視点、制度の視点、社会の視点から検証する。4. ABCあるいはNBCの分野における危機管理のあり方について比較検証する。5. ポリシー・イノベーションの視点から成長が著しい企業の競争力の要因を検証する。6. 化学物質総合管理学に関する教育体系の構築に関し調査研究するとともに人材の育成と教材の開発を行う。7. 社会技術革新学に関する教育体系の構築に関し調査研究するとともに人材の育成と教材の開発を行う。8. 公開講座「知の市場」を開講し、全国的に展開する。

メッセージ

技術革新は日々加速度を増しながら進展し、社会や生活の変革は激しさを増している。そうした中で、国際社会は大きな変貌を遂げつつあり、化学物質総合管理に関するだけでも過去10年間に3つを越える条約が締結されるほど急速に、世界的な枠組みの構築が新たに進んでいる。こうした内外の動きを的確に理解し主体的に行動するため、現代社会に相応しい教養(ニュー・リベラル・アート)を身につけることが不可欠である。しかし現代社会の教養は、基礎的な学問を学ぶだけで身に付くものではない。1980年代以降の世界の学界における論議を経て、学問そのものがScience for Society やScience for Policyの概念の展開の中で社会との関わりを強く指向している。「現場基点」の視点を持って社会の現場との交流の中で「互学互教」に励み、学問に溺れることなく産学連携を越えた「社会学連携」の視点を持って活動し、大学を大学人のための「知の拠点」から社会と世界のための「知の市場」へと昇華するため、学生・院生の存在は大きく重要な役割を担っている。

氏名	益田 祐一 MASUDA Yuichi
所属 職名	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系 教授
学位	理学博士(1984 名古屋大学)
専門分野	溶液化学、無機物理化学
URL	
E-mail	masuda.yuichi@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

solvent effect
proton transfer
molecular rotation

nuclear magnetic relaxation
electron transfer
hydrogen bond

主要業績

Y. Masuda, T. Nakano, and M. Sugiyama "First Observation of Ultrafast Intramolecular Proton Transfer Rate between Electronic Ground States in Solution", J. Phys. Chem. A, 116, 4485-4495 (2012)

研究内容 / Research Pursuits

プロトン移動反応に伴う電荷移動(PT)は、周囲の環境とつよく相互作用する。特に溶液中における反応障壁の比較的小さい分子内PTプロセスでは、溶媒和の静的あるいは動的揺らぎが直接そのダイナミクスに関与する。しかしながら、このような系について、PT速度を直接観測した例は、今のところ見あたらない。本研究では、核磁気緩和に対する、PT過程による磁氣的相互作用の揺らぎの寄与を抽出し、溶液中で分子内PT速度を決定する方法を確立するとともに、2, 3のOH...O分子内水素結合系に適用した。また、同様の方法を、NH...H水素結合系へ拡張し、その分子内PT速度を決定した。これらの実験から得られた結果により、これまで行われてきた分子軌道法を中心とする理論計算の結果が、多くの場合、実測値を反映していないことが示されたとともに、この原因として、溶媒との局所的な相互作用の重要性が示唆された。

The charge migration accompanying protontransfer(PT) reactions strongly couples with the environment. Static and dynamic fluctuations of the solvation should contribute the PT dynamics in intramolecular PT processes, which have relatively low reaction barriers in most of the cases. Nevertheless, there is no report of a direct observation the PT rate. In the present study, an method to determine the PT rates in solutions is presented: extracting the contribution of the fluctuation of magnetic interactions by PT to the magnetic relaxations. The method has been applied to several OH...H and NH...N hydrogenbond systems. The obtained rates were different from those predicted by theoretical and quantum mechanical calculations in many cases. The results were related to contribution of local solute-solvent interactions.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

・「基本化学実験」:化学科新入生に対して、大学における化学特に実験に関する包括的理解と基本的な実験手法についての教育を行う。化学実験を中心に、高大の補完的な内容も含む。・「無機実験」:配位結合の概念を機軸におき、基礎的な無機化学の定性実験を通じ、多様な無機化合物の反応を体系づけて学ぶことをめざす。・「基礎無機化学」においては、「無機化学」の範疇を超え、今日的意味での、化学における様々なモデルやその背景についての理解を深めることをめざす。また、「分子分光学」においては、分光学の技術的、知識的側面ではなく、量子化学の实在の分子への適用といった側面から、今日の化学が根ざす理論的な背景の理解に努める。・その他、各種演習、コアクラスタ(オムニバス)など。・卒業研究指導 <大学院>・液体、溶液に関する講義演習。核磁気共鳴法を中心とする分光法の原理と応用、測定技術に関する教育。・修士特別研究の指導。

<Undergraduate> – “Basic Chemistry Experiment” : An education for introductive chemical experimental techniques and the comprehension of chemistry at undergraduate level including complementary subjects between undergraduate and high school chemistry. – “Inorganic Experiment” : An education of the comprehension of basic inorganic chemistry through inorganic qualitative analysis and inorganic synthesis based on coordination chemistry as well as techniques for inorganic synthesis.. – “Basic Inorganic Chemistry” : A lecture for an education of basic concepts and models in (inorganic) chemistry – “Molecular Spectroscopy” : A lecture for an education of understanding quantum chemistry as well as basic principle of spectroscopies. <Graduate> – lectures and seminars accounting for solution chemistry: Comprehensions of basic concepts and models for solution including applications of various methodologies and their principles.

■ 研究計画

■ メッセージ

氏名	松浦 悦子 MATSUURA Etsuko
所属	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系
職名	教授
学位	理学博士(1982 東京都立大学)
専門分野	遺伝学
URL	
E-mail	matsuura.etsuko@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

ショウジョウバエ
ミトコンドリア
老化

Drosophila
mitochondria
ageing

主要業績

Yui, R., and Matsuura, E. T. (2011) Selective transmission of mitochondrial DNA occurs in individual flies. *Cytologia* 76:367-372.

Oda, Y., Yui, R., Sakamoto, K., Kita, K., and Matsuura, E. T. (2012) Age-related changes in the activities of respiratory chain complexes and mitochondrial morphology in *Drosophila*. *Mitochondrion* 12:345-351.

研究内容 / Research Pursuits

酸化ストレスに対するミトコンドリア転写因子A(TFAM)の過剰発現の効果:mtDNAの転写因子であるTFAMの過剰発現は、ショウジョウバエにおいて寿命の変化を引き起こす。酸化ストレス下におけるTFAMの過剰発現が、寿命や遺伝子発現に及ぼす変化を解析することによって、酸化ストレスに関わるTFAMタンパクの新たな機能について考察する。ミトコンドリア置換系統におけるミトコンドリア機能の変化:mtDNAが異なる塩基配列のタイプに置換した*D. melanogaster*の系統は、非置換系統に比べて寿命が短い。活性酸素種の産生量測定、アミノ酸配列の変化と立体構造との関係の解析、およびメタボローム解析によって、置換系統の特徴について理解を深め、寿命決定のしくみとの関連について考察する。

Effects of overexpression of Tfam gene in *Drosophila*: TFAM, necessary for transcription initiation of mtDNA, has been shown to package mtDNA molecules. We previously found that TFAM overexpression changed lifespan in *Drosophila*. In the presence of oxidative stress (1% H₂O₂), the effects of Tfam overexpression on lifespan and expression of other genes were investigated, and the role of TFAM against oxidative damage was discussed. Mitochondrial function of mitochondrial transformants in *Drosophila*: It has been observed that lifespan of the strains in which endogenous mtDNA is completely replaced with that derived from foreign species is shortened. We previously showed that the ROS production was relatively higher in the strains with shorter lifespan. Based on the structure of the complex I of *E. coli*, positions of amino acid replacements in the transformants were examined and the relationship to ROS production was discussed. In addition, metabolome analysis was conducted to assess metabolic changes in the transformants.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

1) 学部(基礎) 共通科目「基礎生物学B」, 学科必修科目「基礎遺伝学」「分子遺伝学」を分担で担当した。「基礎生物学B」では, DNAの性質, 複製, 突然変異などの分子的基础, 「基礎遺伝学」「分子遺伝学」では, メンデル遺伝学の分子的な解釈, 遺伝子の構造, 遺伝子発現の調節, ゲノムなどを取りあげた。2) 学部(専門)「分子遺伝学実習」を分担で担当し, DNA断片のクローニングから塩基配列決定までの一連の実験を行った。3) 大学院前期課程「オルガネラ遺伝学」および遺伝カウンセリングコース対象の「オルガネラ遺伝学特論」では, ミトコンドリアに関連する内容を講義したのち, 受講者がそれぞれの興味に基づいて選んだ論文を発表形式で読み, 最新の研究動向に対する理解を深めた。

1) For Undergraduates (Compulsory) In “General biology B”, I lectured on the chemical structure of DNA, DNA replication, mutation, and DNA repair. In “Basic Genetics” and “Molecular Genetics”, I lectured on the molecular aspects of Mendelian genetics and the structure and expression of genomes. 2) For Undergraduates (Optional) In “Laboratory Course of Molecular Genetics”, the cloning of DNA fragments and their sequence analysis were carried out. I talked about the guidelines for recombinant DNA experiments in general and in our university. 3) For Graduate students In “Organelle Genetics”, I lectured on basic mitochondrial genetics and introduced some of recent topics. Several newly published papers in mitochondrial research were picked up by the students and discussed.

■ 研究計画

ショウジョウバエの実験系を用いて, ミトコンドリアのもついくつかの機能, 伝達様式, ミトコンドリアゲノムなどに関する解析をさらに進める。ミトコンドリアのゲノム情報に基づく機能予測と実験による解析を対応させることにより, さらにミトコンドリア機能についての理解を深めることが可能である。

■ メッセージ

氏名	松浦 秀治
	MATSUURA Shuji
所属	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系
職名	教授
学位	理学博士(1982 東京大学)
専門分野	自然人類学(特に人類進化学、先史学、年代学)
URL	http://www.eng.ocha.ac.jp/anthropol/index.htm
E-mail	matsura.shuji@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

人類の起源と進化
 化石骨
 年代推定
 日本の旧石器時代人
 ジャワ原人

human origins and evolution
 fossil bone
 dating method
 Palaeolithic hominid remains of Japan
 fossil hominid of Java

主要業績

Matsu'ura, S. and M. Kondo (2011) Relative chronology of the Minatogawa and the Upper Minatogawa series of human remains from Okinawa Island, Japan. *Anthropological Science*, Vol. 119, pp. 173-182. (DOI: 10.1537/ase.100322)

Hyodo, M., S. Matsu'ura, Y. Kamishima, M. Kondo, Y. Takeshita, I. Kitaba, T. Danhara, F. Aziz, I. Kurniawan and H. Kumai (2011) High-resolution record of the Matuyama & Brunhes transition constrains the age of Javanese *Homo erectus* in the Sangiran dome, Indonesia. *Proceedings of the National Academy of Sciences USA*, Vol. 108, pp. 19563-19568. (DOI: 10.1073/pnas.1113106108)

諏訪 元・藤田祐樹・山崎真治・大城逸朗・馬場悠男・新里尚美・金城 達・海部陽介・松浦秀治 (2011) 港川フィッシャー遺跡(沖縄県八重瀬町)の更新世人骨出土情報に関する新たな知見. *Anthropological Science (Japanese Series)*, Vol. 119, pp. 125-136. (DOI: 10.1537/asj.110727)

Kubo, M.O., M. Fujita, S. Matsu'ura, M. Kondo, G. Suwa (2011) Mortality profiles of Late Pleistocene deer remains of Okinawa Island; evidence from the Hananda-Gama Cave and Yamashita-cho Cave I sites. *Anthropological Science*, Vol. 119, pp. 183-201. (DOI: 10.1537/ase.091215)

研究内容 / Research Pursuits

<主要研究テーマ> 1. 人類の起源と進化:特にその年代論、年代・環境的背景 2. 化石骨の年代測定・判定学 3. ジャワ原人や日本の旧石器時代人類の編年および変遷史 <研究目的> 大きな目的は「ヒトとはどういう生物か」を知ることである。それには多面的・多角的な調査が必要となるが、私の場合は、地球における人類の起源と進化という面に興味を持ってアプローチしている。人類の進化を研究するには、進化の道筋をたどる具体的な資料であり、様々な生命・生命体情報の宝庫として「化石となった生」とも言える古人骨を対象とした研究が不可欠である。そうした研究においては、資料の「古さを特定し、編年をおこなう」ことは「古人骨からのわかること」への基盤情報をなす。以上の観点と興味から、主に上記の3つのテーマで研究をおこなっている。

The main purpose of my research is to understand the uniqueness of our species, "why a human", and there should be diversified and many-faceted attacks to this problem. I have been approaching this problem from the palaeoanthropological and evolutionary perspectives, especially through working on human skeletal remains which provide many and various information for the reconstruction of life and the human career. More specifically, my main research subjects at present are as follows: i) human evolution and origins with special reference to the geochronological backgrounds, ii) dating of fossil bones.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

以下の授業等を担当するとともに、主に自然人類学に関する研究を指導した。＜学部＞ 生物人類学／自然人類学(全学共通科目) ヒトと文化／生物人間論(生活科学部共通科目) 人類進化史(生活科学部専門科目) 人間・環境科学実験実習(生活科学部専門科目) 人間・環境科学演習(生活科学部専門科目) 人間・環境科学輪講Ⅰ及びⅡ(生活科学部専門科目) ＜大学院＞ 人類進化学特論(ライフサイエンス専攻)

In the school year of 2010, I supervised graduation studies mainly on physical anthropology, and instructed classes such as introduction to biological/physical anthropology, general human biology, human evolution, experiment and training on human-environmental sciences, special seminar on evolutionary anthropology, and some other lectures or seminars.

■ 研究計画

2011年度に交付を受けた主な日本学術振興会科学研究費補助金には、基盤(B)「ジャワ原人の年代論争の終結へ向けて」(代表者)がある。本研究は、ジャワ原人化石に関する年代論争の終結に向けて、2000年からの地質年代学的国際共同調査の成果を踏まえ、異なる年代観が錯綜する現状を検証しつつ、確かな基盤を持った編年モデルの再構築を行うものであり、東方アジアにおける人類進化史の解明を目指すものである。また、日本人の起源に大きく関与する縄文時代人の起源と形成史について考察を進めるため、日本の旧石器時代人骨の再評価と編年の再検討を行っているが、特に沖縄の人類化石に関する共同研究を発展させる予定である。＜共同研究可能テーマ＞ 1:化石骨の年代測定に関する研究

■ メッセージ

受験準備としては「理系パターン」「文系パターン」への対処は必要であるが、そもそも理系・文系というのは受験区分であり、学問の区分ではない。自分の目指す学問にそうしたレッテルを貼る必要は全くない。入学後は、「自分は理系」「自分は文系」などという枠を自らにはめることなく、自分は何に興味があり、何を解決したいのかという原点を大切に考えて、必要な知識と技術を身につけてほしいと思う。

氏名	松浦 素子
所属	MATSUURA Motoko
職名	学校教育研究部
学位	講師
専門分野	
URL	
E-mail	matsuura.motoko@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

発達心理学	Developmental Psychology
臨床心理学	Clinical Psychology
精神病理	Psychopathology
キャリア発達	Career development

主要業績

研究内容 / Research Pursuits

☐ 教育内容 / Educational Pursuits

☐ 研究計画

☐ メッセージ

氏名	松崎 毅
	MATSUZAKI Takeshi
所属	人間文化創成科学研究科文化科学系
職名	准教授
学位	文学修士(1985 東京都立大学)
専門分野	イギリス文学、特に17世紀詩
URL	
E-mail	matsuzaki.takeshi@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

イギリス文学
17世紀
詩

English Literature
the seventeenth century
Poetry

主要業績

「詩的意匠としての「時間」: “The First Anniversary of the Government under O.C.”と“A Poem upon the Death of O.C.”について」英文学研究 支部 統合号 Vol.IV pp.209-218

研究内容 / Research Pursuits

昨年に引き続き、17世紀の詩人アンドルー・マーヴェルの作品についてその政治的アイデンティティーの問題を考察した。特に内乱後の共和制期にオリバー・クロムウェルについて書かれた讃歌、哀歌を研究対象とし、テキストの精読と研究書の多読を心がけた。その過程で、政治的アイデンティティーと深く関わる問題として、そのプロテスタント的な救済史観に注目し、それが至福千年やキリストの再臨を希求する急進的なものではなく、王党派や多くの穏健派と共通するごく正統主義的な救済史観にすぎない点を明らかにした。

■ 教育内容 / Educational Pursuits

■ 研究計画

現在はアンドルー・マーヴェルという詩人の膨大な量の作品を精読するとともに、先行研究の確認を行っている。今後は、この詩人の作品を、正典、非正典を問わず、同時代の多様な文学テキストと関連付けることで、その作品の持つ政治性を、より詳細な部分まで明らかにしていきたい。また、マーヴェルがクロムウェルに捧げた追悼詩からも分かるように、イギリス内乱前後の文学において哀歌というジャンルが見せる政治的振舞いについても検討したい。科研費等の獲得も視野に、共同研究の道も模索している。

■ メッセージ

氏名	松本 聡子 MATSUMOTO, SATOKO
所属	人間発達教育研究センター
職名	特任リサーチフェロー
学位	博士(人間科学)/Ph.D
専門分野	環境心理学/Environmental Psychology
URL	
E-mail	matsumoto.satoko@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

環境心理学
住環境
発達心理学

Environmental Psychology
Residential Environment
Developmental Psychology

主要業績

【学会発表】松本聡子・菅原ますみ・室橋弘人・榊原洋一 養育環境と子どものQOL (2) 日本心理学会 第75回大会, 東京, 2011.9.

【学会ワークショップ】縦断データ解析のためのマルチレベルモデリング(1)—理論と実践— 日本心理学会 第75回大会, 東京, 2011.9. (企画・司会・話題提供)

【シンポジウム】“Parent and Child Quality of Life: A Longitudinal Study” Ochanomizu University Global COE Symposium: QQOL of Asian Children, Ochanomizu University, Tokyo, 2012.1. (Report)

研究内容 / Research Pursuits

子どもをとりまく養育環境について、主に住環境と母親の子育てストレスに関する縦断研究を行っているが、2011年度も継続して調査研究を実施した。

One of my major research interest is the relationship between child-rearing environment and child development. In our longitudinal research project, I am examining the relationship between residential environment and mothers' parenting stress. In 2011, I continued this research project including data collection and analysis.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

■ 研究計画

住環境が子どもの発達や養育者に及ぼす影響について行っている経年調査を継続して実施し、分析を進めていきたいと考えている。

■ メッセージ

氏名	三浦 徹
	MIURA Toru
所属	人間文化創成科学研究科文化科学系
職名	教授
学位	文学修士(1986 東京大学)
専門分野	歴史学(特にアラブ・イスラム史)、都市研究、中東地域研究
URL	
E-mail	miura-t@pis.bekkoame.ne.jp

研究者キーワード / Keywords

イスラム
中東
都市
比較研究
裁判

Islam
Middle East
city
comparative study
lawsuit

主要業績

“The Salhiyya Quarter of Damascus at the Beginning of Ottoman Rule: The Ambiguous Relations between Religious Institutions and waqf Properties”, Syria and Bilad al-Sham under Ottoman Rule: Essays in Honour of Abdul-Karim Rafeq, edited by Peter Sluglett, Leiden:Brill, 2010, pp.269-291.

三浦徹編著『イスラーム世界の歴史的展開』(放送大学教材)放送大学教育振興会、平成23(2011)年3月、243頁。

熊谷圭知・小林誠・三浦徹編『グローバル文化学:文化を越えた協働』法律文化社、平成23(2011)年4月、198頁

Toru Miura, “Islamic Legal Institutions of Contracts and Courts: A Comparative Perspective”, Debin Ma et al. ed., Islamic Legal Institutions of Contracts and Courts: A Comparative Perspective, Stanford University Press, 2011, pp.68-90

研究内容 / Research Pursuits

1. 人間文化研究機構プログラム「イスラーム地域研究」東洋文庫拠点「イスラーム地域研究史資料の収集・利用の促進とイスラーム史資料学の開拓」の拠点代表者として、研究事業の総括を行った。2. 東洋文庫西アジア研究班「イスラーム世界における契約文書の研究」の研究代表者として、ヴェラム文書(モロッコの皮革に書かれた契約文書)の解読のための研究会を主宰し、モロッコでの資料調査を行った。3. 科学研究費補助金「ワクフ経済の社会史:16世紀ダマスカス州ワクフ調査台帳の研究」(平成22-24年度)が採択され、ワクフ(宗教的寄進財)に関するデータベース構築を開始するとともに、ダマスカス(シリア)での史料調査を実施した。4. ウズベキスタンでの法廷文書調査、オランダのライデン大学での招待講演(日本の中東・イスラーム研究)、アンカラ(トルコ)での紛争処理に関する日ト比較研究ワークショップなどに参加し、国際研究を進めた。

■ 教育内容 / Educational Pursuits

1. 文教育学部グローバル文化学環および比較歴史学コースの教員として、授業および卒業研究指導を行った。2. 「グローバル・ヒストリー（グローバル文化学、比較歴史学専門科目）において、ウェブサイトによる学修支援システムPloneを用い、ウェブによる教材の提示や課題提出など新たな授業方法を活用し、学生から高い評価をえた。3. 放送大学客員教授として担当する「イスラーム世界の歴史的展開」の授業が放映開始され、市民のイスラーム世界への理解を進めている。

■ 研究計画

■ メッセージ

授業では、量より質を重視している。講義をただきくだけでは、考える力や学ぶ意欲は減退する。「なぜそうなのか」「どうすればいいのか」を授業のなかで考えることで、知識が身についていく。こういう授業をすることは、教員も学生もたいへんなのだが、頭を使うことは、体を動かすことと同じくらい、爽快になる。

氏名	水野 勲
	MIZUNO Isao
所属	人間文化創成科学研究科文化科学系
職名	教授
学位	博士(理学)、東京都立大学、1998年
専門分野	数理地理学、経済地理学
URL	
E-mail	mizuno.isao@cc.ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

地理的モデリング
 地理的不均等
 パネル調査
 地図と匿名性
 韓国在来市場

geographical modeling
 uneven geographical development
 panel survey
 map and anonymity
 Korean traditional market-place

主要業績

研究内容 / Research Pursuits

科学研究費「地図と匿名性に関する地理学研究」の研究会を2度開催し、パネルデータの地域分析、小地域統計による震災リスク地図作成、文学における景観・場所表現の報告を行った。
 学内共同研究費で2件「震災後の避難空間に関する地域性とマイノリティの予察的研究」「地理的シミュレーション教材の防災への応用に関する基礎研究」を共同研究で行い、学内報告会で研究内容を報告した。

We held on the meeting "Geographical studies of maps and anonymity", where we had the presentation about regional analysis of panel data, map-making of earthquake risks using small area data, and literatural description of places and landscape.
 The collaborators and I have made the two joint-studies, "The preliminary study of spatiality and minority in evacuation space" and "The applicability of geographical simulation models to disaster prevention". These studies were reported at the meeting on campus.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

学部では、リベラルアーツ科目で「地図を読む」の演習を担当し、専門科目では「都市と自然」「経済地理学」「地誌学」「地理学特殊講義」「人文地理学分析基礎演習」「地域分析学演習Ⅰ・Ⅱ」「地理学フィールドワークB(お茶の水、吉祥寺)」を行った。2名の卒論指導を行った。

大学院では、博士前期課程の「地域経済論」「地域経済論演習」「ジェンダー基礎論」を担当し、4名の院生の研究指導を行った。博士後期課程では、「地域分析論」を担当し、2名の院生の研究指導を行っ

At the undergraduate level, I delivered four lectures (Urbanity and Nature, Economic Geography, Regional Geography, and Special Geographical Lecture), four seminars (Reading Maps, Human Geography Analysis, and Regional Analysis 1, 2), and fieldtrips (Kanda river and Kitijoji). I made two theses of undergraduate students.

At the graduate level, I had two lecturers (Regional Economy and Basic of Gender Studies) and one seminar (Regional Economy) in master course. And I had one seminar (Regional Analysis) in doctoral course. I advised four master course and two doctor course graduate students.

■ 研究計画

1. 地図と匿名性の研究で得られた知見を、地理学と固有名の関係についての研究、リスクマップにおけるプライバシー、地域分析と統計的推測の諸問題などのテーマに結び付けていく。

■ メッセージ

ローカルな舞台で起るさまざまな現象どうしを関連づけて理解し、さらにそれらの関連をより広い文脈の中に位置づけること、そして既存の人文・社会科学の知を、地図や地域統計の分析を通して、多様性を内部に含んだ理論へと拡張すること、これらが地理学の課題としてあります。理論的な志向と、ユニークな現象への愛着を同時にもつために、私の授業が役立てばいいと思っています。

氏名	水村 真由美
	KUNO MIZUMURA Mayumi
所属	人間文化創成科学研究科文化科学系
職名	准教授
学位	教育学博士（1997 東京大学）
専門分野	身体運動科学(特に運動生理学およびバイオメカニクス)
URL	http://buyou1.li.ocha.ac.jp/Mizumura/HTML/index.html
E-mail	mizumura.mayumi@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

身体運動
運動生理
画像解析
舞踊動作
健康科学

Human movements
Exercise physiology
motion analysis
Dance movement
Health science

主要業績

「歩行のしくみを探る～機能する美しい身体～」2011, 内田伸子編著、「女性のからだところ: 自分らしく生きるための絆をもとめて」(金子書房)、東京、pp 65-80.

「高校生女子の身体および体力特性と運動習慣」(水村(久埜)真由美、吉田康行、片野坂有紀、松浦愛、原野泉、増田かやの、土方伸子)人文科学研究、2011, 8, 165-170.

「Muscle oxygenation and fascicle length during passive muscle stretching in ballet-trained subjects」(Otsuki A, Fujita E, Ikegawa S, Kuno-Mizumura M) Int J Sports Med. 2011 Jul;32(7):496-502.

「グランジュッテにおけるバレエダンサーの衝撃緩衝スキル」(吉田康行、片野坂有紀、松浦愛、水村(久埜)真由美)人文科学研究、2011, 8, 159-164

Mayumi Kuno-Mizumura and Yasuyuki Yoshida, "MOTOR SKILLS DURING DROP LANDING AND ITS RELATIONS TO PHYSICAL FITNESS AND PHYSICAL ACTIVITY OF ELEMENTARY SCHOOL CHILDREN" Proceedings of 17th annual meeting of European College of Sports Science (2011.7. Liverpool) CD-R

研究内容 / Research Pursuits

今年、昨年に引き続き、1) 舞踊動作の自然科学的研究に加え、科研費の研究課題として2) 幼児の調整系能力の発育発達研究の研究、加えて企業との共同研究として赤ちゃんの抱っこ姿勢と装具に関する研究データの解析を行なった。また本学共通機器として、新規導入されたモーションキャプチャーシステムを用い、クラシックバレエの基本的な複数の動作を、学生からプロダンサーにいたるまでさまざまな技術レベルを対象にデータを取得し、熟練差がみられる動作特性を検討した。

Research project in 2011 was consisted of three main topics. 1) Biomechanical characteristics of dance movements. 2) Physical fitness and motor skills in preschool children. 3) Muscle fatigue induced by holding baby in standing. First research topic was long-term research project for our laboratory In 2011

教育内容 / Educational Pursuits

学部教育としては、解剖学、運動学、動作学、生理学、動作学実験演習、表現行動論、身体文化論、健康スポーツ実習(バレエエクササイズ)を担当し、大学院では表現行動科学特論、表現講堂科学実験演習を担当した。また研究指導は、学部生3名、博士前期課程2名の卒業論文と修士論文の指導を行った。また博士後期課程2名の大学院生については、引き続き学位論文に向けての研究指導を行った。卒業論文、修士論文のテーマは以下の通りである。卒業論文「トウシューズで行なう動作の発育発達に関する研究」「長期クラシックバレエトレーニングが重心移動時の姿勢調整能力に及ぼす影響」「クラシックバレエの長期トレーニングが体幹の筋機能に与える影響」修士論文「中年女性を対象としたバレエトレーニングの運動効果」「主運動前の間欠的運動が足関節底屈運動時の筋酸素動態および持続時間に及ぼす影響」なお院生が、国際ダンス医科学会、日本体力医学会にて5演題、それぞれの研究テーマで研究発表をし、その指導を行った。

In 2011, I have taught anatomy, exercise physiology, biomechanics, kinesiology, biomechanical experiment, human movement science and PE class (ballet exercise) for undergraduate students. For graduate students, I have had two more classes. I have supervised three under-graduate students, four master students, and two Ph.D students for their own research project. Five graduate students made presentation at both international and national conferences.

研究計画

舞踊を中心としたさまざまな身体運動による人間の身体諸機能の可塑性を検討するとともに、熟練した舞踊動作、いわゆる芸術性の高いと評される運動の成立のメカニズムを解明したいと考えている。メタボリックシンドロームなどの健康問題が社会的に注目されている今日、運動実践の意義は現代に生きる我々にとって大きな意味をもつ。こうした運動を行う健康科学意義あるいは難しい運動を学習する過程での身体の可塑性について今後も研究を発展させたい。共同研究の可能性としては、子供から高齢者に至る老若男女あらゆるヒトの健康に対して運動の有効性を検証する研究を、「健康」に関わるすべての団体(民間企業や地方自治体など)と共同に行う実績もあり、今後もそうした共同研究を進めたい。また運動の中でも「踊り」を中心とした、研究対象としては、「子供」や「女性」を対象とした研究に興味をもつ方たちとの共同研究を進めたい

メッセージ

人間の行う動きは非常に複雑で巧みです。その動きや動きを起こす身体のかたちに興味をもって地道に研究を続けられる若い人たちと一緒に研究をしたいと思っています。私が所属するコースは、国立大学法人唯一の舞踊を専攻することのできるコースです。またその中であって、私は唯一自然科学系の学問領域から、舞踊やスポーツ、さまざまな運動を対象として、研究を行っています。「舞踊を科学」してみたい人にとっては、まさに日本で唯一の教育環境といってもいいでしょう。また働く女性とし、母として、女性のライフスタイルと運動や健康に関しても大きな興味をもっています。エネルギー溢れた女性のライフスタイルをサポートする研究を一緒に行ってみませんか？老若男女を問わず、運動が人間の身体に及ぼす影響について、健康科学や身体表現の観点から、企業とも共同研究を進めています。今後とも積極的に共同研究を行いたいと思っています。

氏名	耳塚 寛明
	MIMIZUKA, Hiroaki
所属 職名	教授
学位	教育学修士(1979 東京大学)
専門分野	教育社会学(特に学校社会学、教育選抜と学校組織、青少年文化、教育政策)
URL	
E-mail	mimizuka.hiroaki@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

教育社会学
学力
教育政策
学校組織

Sociology of education
Academic achievement
Educational policy
School organization

主要業績

お茶の水女子大学・Benesse 教育研究開発センター共同研究『教育格差の発生・解消に関する調査研究報告書』、188 頁(2009)

耳塚寛明(王傑中国語訳)「日本基礎教育中の学業成就制約要因分析」中国教育経済学研究会編『教育与経済』2008 年2 期、59-65 頁(2008)

Mimizuka, Hiroaki, "Determinants of children's academic achievements in Japanese primary education", 『JELS』第12 集、1-15 頁(2008)

「時の眼」(コラム)『月刊高校教育』学事出版に連載(月1号)

研究内容 / Research Pursuits

教育社会学。とくに教育政策、学校組織、進路選択、学力形成に関する社会学的研究。1. 学力格差の社会的形成過程研究「だれが学力を獲得するか」は、教授学上の焦点 関心であるのみならず、教育選抜の帰結を左右する中核的問題である。19 年度からはじまったグローバルCOE プログラム「格差センシティブな 人間発達科学の創成」(拠点リーダー耳塚)の中で、「青少年期から成人期への移行についての追跡的研究」(JELS)を継続する。2. 進路選択の社会学 だれが、どのように進路を選択し、選抜されるのか。とくに高校生の進路選択 の社会学的分析。3. 教育政策の社会学

Sociological Study of Education: Educational Policy, School Organization, Educational Selection, Academic Achievement. Theme 1. Ecological Study of Student Achievement: I administered a empirical research on the relationship of students achievement, their career formation and family background. Theme 2. Sociological Study of Student Career Formation: I analyzed changing patterns of youth transition from school to workforce. Theme 3: Sociology of Educational Policy in Japan

■ 教育内容 / Educational Pursuits

学部、大学院において以下の授業を開講した。1. 教育社会学、学校社会学の概論および特殊講義 2. 社会調査法、教育調査法に関する講義、演習 3. 教育社会学方法論に関する講義、演習 4. 教職課程における教育社会学を中心とした講義

1. Introduction of Sociology of Education, Sociology of School 2. Lecture and Exercise of Social Research 3. Lecture and Seminar on the Methodology of Sociology of Education 4. Lecture on Social Foundation of Education(Teacher Training Course) In the 2008/2009 term, major theme of seminars in the undergraduate course and in graduate course was limits and possibilities of educational policies of the new right.

■ 研究計画

だれが学力を獲得するのか。グローバルCOE プログラム「格差センシティブな人間発達科学の創成」によって実施してきたJapan Education Longitudinal Study(JELS2003、2006、2009) を用いた分析を通じて、子どもたちの学力形成に家庭の経済と文化的環境が関わり、学力格差が生まれていることが明らかになりつつある。格差を縮小する上で、どこにいかなる資源配分が必要であるのかの分析を行い、業績主義の衣を羽織った不平等を是正する方策を模索したい。青少年期から成人期までを対象とした縦断的研究であるJELSを継続し、育てたい。なお、JELSをモデルとしこれと比較可能な調査が、香港、上海でも実施された。調査フィールドを受けていただける自治体や国との協働研究が可能となればうれしい。

■ メッセージ

いま日本の教育は激動期にあります。義務教育は、長い間変わらなかった制度の根幹が崩れようとし(たとえば義務教育費国庫負担制度や教員人材確保法)、「脱ゆとり路線」へと舵が切られました。行政の重点は、教育条件整備から結果の評価に基づく資源配分へとシフトしつつあります。全国一斉学力テストの導入や学校評価システムの整備はその一例です。こうした教育界を襲う変化は、子どもたちの発達に、学校の機能に、さらには社会そのものの姿に、どういう帰結をもたらすのでしょうか。とりわけ、格差が再生産される社会に日本は変わっていくのでしょうか。教育と社会の現在に危機感を持ち、エビデンス・ベースにアプローチしようとする皆さんを歓迎します。

氏名	宮内 貴久 MIYAUCHI Takahisa
所属 職名	人間文化創成科学研究科文化科学系 准教授
学位	博士(文学) (2003年 筑波大学)
専門分野	民俗学、文化人類学
URL	
E-mail	miyauchi.takahisa@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

風水
大工儀礼書
三輪神道

Fubg Sui
Carpenter etiquette book
Miwa shintou

主要業績

論文 "Change in Viewing a Fetus: Consumption of Ultrasound Photos"『お茶の水女子大学比較日本学研究センター研究年報』第8号 2012 39-47頁

口頭発表(招待講演)「日本の家相民俗」中部大学大学院国際人間学研究科国際関係学専攻主催学際シンポジウム「風水思想と東アジア」 2011年10月8日 中部大学

口頭発表(招待講演)「Change in Viewing a Fetus: Consumption of Ultrasound Photos」Consumption and Consumerism in Japanese Culture 2011年11月15日 CharlesUniversity Pragu

研究内容 / Research Pursuits

大工が所蔵する巻物について、三輪神道系統の大工儀礼書「番匠十六巻一流之大事」、「日本番匠記」系本の大工由緒書「番匠記」、唯一神道系と推定される「唯一神道上棟次第」の主に三つの儀礼書・由緒書を中心に、その所在調査を全国的に行った。三輪神道系統の大工儀礼書では、長崎県立歴史文化博物館所蔵山口麻太郎史料に注目すべき史料があった。同史料は長崎県壱岐の史料で、慶長年間の肥前国名護屋の大工が伝授された巻物である。管見では最古であり、秀吉の朝鮮出兵と関係があると推察される。三輪神道系統の大工儀礼書は、近世初期の銘を持つ文書が全国各地で発見することができることから、近世初期から広範囲に流布したと考えられる。しかし、流布していく経緯、高野山あるいは三輪神道との支配関係など不詳な点が数多くある。今後の課題としたい。

■ 教育内容 / Educational Pursuits

民俗学、文化人類学関係の授業を担当している。学部では、1年次には「民俗学」では民俗学の概論を学び、基礎的な知識を学ぶ。2年次から考現学を通しての生活文化を研究する視点、歴史民俗学的視点などを「民俗文化史各論」「民俗文化史概論」「歴史民俗文化論」で講義した。3年次から「民俗文化史基礎演習」「民俗文化史演習」で資料調査、プレゼンスキルの習得を目指した。昨年度は柳田国男『明治大正史世相編』をテキストにした。「生活文化実習」では埼玉県川越市で実習を行った。大学院では「民俗文化論特論」「民俗文化論研究」で Yankee 文化に関する論文の購読を行った。

■ 研究計画

東アジアの建築に多大な影響を及ぼしている風水が、日本本土においてどのように受容され展開していったのか、その歴史的過程と実態を史料と調査資料の両側面から民俗学的に研究を進めている。また、大工が所蔵する由緒書・儀礼書について、所在調査、系譜関係についても研究を進めている。今後、中国・韓国など東アジア諸国との風水の比較研究、近世における大工支配と三輪神道との関連の研究、建築儀礼の比較研究などについて共同研究を進めていきたい。

■ メッセージ

大学はキャンパスで学ぶだけでなく、図書館や美術館・博物館といった学外の施設、さらにはフィールドワークにより広く学ぶところです。私は機会があるごとに学生を連れて色々なところに出かけています。昨年は実習で埼玉県川越市の街並み保存運動について調査しました。また、パナソニック美術館で開催された「今和次郎採集講義」展の見学、国立劇場で開催された歌舞伎鑑賞会に行きました。お茶大に入って色々なところを訪れて学びましょう。

氏名	宮尾 正樹
	MIYAO Masaki
所属	人間文化創成科学研究科文化科学系
職名	教授
学位	文学修士(1982 東京大学)
専門分野	中国現代文学
URL	
E-mail	miyao.masaki@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

中国
文学
近代
現代

China
literature
modern
contemporary

主要業績

宮尾正樹「断片」『お茶の水女子大学中国文学報』30、pp. 11-15

研究内容 / Research Pursuits

グローバル化する中国における文学、文化の問題について考えてきましたが、当面の研究課題として、以下の3つに取り組んでいます。

1) 母語(中国語)以外の言語で書くことの意味日本語で創作する楊逸、英語で創作するHa Jinなど、中国で育った作家の中国語以外の言語による創作について、母語以外の言語で書くこと、母語で書かないこと、の2方向から考えています。

2) 中国近現代文学と宗教中国近現代文学が宗教(中国伝統、土着の宗教、キリスト教やイスラムなどの世界宗教、その他)とどのように向かい合ってきたのか、張承志や許地山を手始めに考えています。

3) 中国近現代文学と暴力

中国近現代文学が暴力をどう描いたか、あるいは描けなかったかについて、余華を手始めに考えています。

I have been working on the transformation of culture and identity in globalizing China, focusing on exile writers, culture crisis, etc. At present, I have started to study following topics.

1) to write exophony

There are many Chinese writers who have published their works in non-Chinese, such as Yang Yi(Japanese), Ha Jin(English) etc. I plan to approach from two directions, why write in non-mother tongue, and why not write in mother tongue?

2) modern Chinese literature and religion

How has modern Chinese literature dealt with religion, death, life? Through studying writers such as Zhang Chengzhi(Islam), Xu Dishan(Buddhism) etc

3) modern Chinese literature and violence

How has modern Chinese literature depicted violence, or how has it not written violence..

■ 教育内容 / Educational Pursuits

○中国語

通常の授業の他、学年末にはグループに分かれて寸劇を作成、上演しました。

○近代文学史

中国の近代文学、現代文学の代表的な作品に触れてもらうとともに、中国の近代、現代における文学のあり方についても考えるきっかけをつかんでもらうことを心がけています。

○中国事情

中国をテーマにしたドキュメンタリーを鑑賞し、受講者がそれぞれのテーマについて調査、発表を行いました。

*Chinese language

At the end of the school year, we did a group work of writing and performing short plays.

*Chinese modern literature

conider the functions of literature in modern China.

*Today's China

through watching videos about contemporary China, and make one's own research.

■ 研究計画

社会や文化の中に文学や言語を置いて研究していきたいと思っています。

最近では宗教、母語神話、暴力に興味を持っていますが、社会史的なテーマ、近代や現代の都市の風景を形作るもの、たとえば、1920年代、30年代の人力車(夫)と現代中国のタクシー(運転手)の文学における表象についても興味を持っています。

将来的には、書かれなかったものに関する文学史、あるいは忘却の文学史のようなものを考えられればよいと思っています。

■ メッセージ

”何事についてもそうですが、中国について、マスコミが流す情報だけを信じないこと。同時に、中国に旅行したり、身近な中国人を通じて作り上げた自分なりの中国イメージを過信しないこと。

「中国は～」とか「中国人は～」とかいう言い方には特に注意が必要かと思っています。

氏名	三宅 亮介
	MIYAKE Ryosuke
所属	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系
職名	助教
学位	博士(理学)
専門分野	錯体化学／coordination chemistry
URL	http://web.me.com/ryosuke1130/miyake_group/Top.html
E-mail	miyake.ryosuke@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

錯体化学
超分子化学

coordination chemistry
supramolecular chemistry

主要業績

研究内容 / Research Pursuits

☐ 教育内容 / Educational Pursuits

☐ 研究計画

☐ メッセージ

氏名	宮澤 仁 MIYAZAWA Hitoshi
所属 職名	人間文化創成科学研究科人間科学系 准教授
学位	博士(理学) 東京都立大学 2003年
専門分野	都市地理学, 福祉地理学, 地理情報システム(GIS)
URL	
E-mail	miyazawa.hitoshi@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

少子高齢化社会
福祉
地理情報システム(GIS)
外邦図

aging society with a falling birthrate
welfare / well-being
geographic information system
Gaihozu

主要業績

小林 茂・宮澤 仁 編著 2012.『グローバル化時代の人文地理学』放送大学教育振興会, 260. (編著書)

新沼星織・宮澤 仁 2011. 東日本大震災における医療機関の津波被害と内陸部医療機関の患者受け入れ状況. 季刊地理学 63: 215-227. (査読あり)

松本由宇貴・宮澤 仁 2012. 草加松原団地における建替えにともなう高齢者の社会関係の変化と居場所づくりの取組み. お茶の水地理 52. (査読なし)

Miyazawa, H. 2011. Population in areas affected by the 2011 tsunami off the Pacific coast caused by the Tohoku Earthquake: From Sanriku coast to Sendai Bay area. The 2011 East Japan Earthquake Bulletin of the Tohoku Geographical Association. (査読なし)

Miyazawa, H. 2011. Land Use and Tsunami Damage in Pacific Coast Region of Tohoku District. The 2011 East Japan Earthquake Bulletin of the Tohoku Geographical Association. (査読なし)

研究内容 / Research Pursuits

1.少子高齢時代の生活問題と環境整備に関する地理学的研究 高齢社会における社会保障事業と地方行財政 都市における障害体験とバリアフリー整備 女性の社会参加とジェンダー化された都市空間 など
2.縮小型経済社会の地域分析 都心回帰の動向と行政対応 都市郊外の衰退と再生への取組み 地方の経済問題と地域活性化 など 3.「外邦図」デジタルアーカイブの作成 今年度は、1の研究に関して論文1編を執筆した。また、東日本大震災の被害調査に関する論文を4編執筆した。さらに、人文地理学分野の教科書を執筆した。

1.Geographical studies on welfare problems and living environmental planning 2.Regional analysis of a shrinking economy and society 3.Gaihozu Digital Archive

■ 教育内容 / Educational Pursuits

・お茶の水女子大学 地理学の専門教育: 人文地理学一般/ 都市地理学/ 福祉地理学/ 人文地理学分析演習/ 地理情報システム/ フィールドワーク・放送大学 一般科目: 人文地理学(分担)

・Ochanomizu University: Human Geography, Urban Geography, Welfare Geography, Analytical Human Geography, Geographic Information Systems, Field Work
・The Open University of Japan: Human Geography

■ 研究計画

1. 科学研究費補助金に採択された研究プロジェクト「現代日本の人口減少問題に対する外国人定住化の貢献に関する研究」に参加しており、社会学等他分野の研究者と共同研究を行う。2. 「外邦図デジタルアーカイブ」の構築作業に継続して参加し、今後は本学の外邦図のデジタル化を進め、インターネットによる公開のシステムを整備する。何れも多方面の研究者・実務関係者との共同研究が可能である。

■ メッセージ

地理学は文系と理系の両方の立場から取り組むことのできる学問です。文系的なテーマを理系の視点から、逆に理系のテーマを文系の視点からみる。そうすると、これまでと異なった見え方をすることがあります。一緒に、新しい世界の見方を考えませんか。

氏名	宮本 泰則
	MIYAMOTO Yasunori
所属	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系
職名	准教授
学位	理学博士(1989 筑波大学)
専門分野	分子細胞生物学(特に細胞接着分子の分子細胞生物学)
URL	http://www13.plala.or.jp/miyamotolab/
E-mail	moyamoto.yasunori@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

細胞接着	cell adhesion
細胞外マトリックス	extracellular matrix
神経形成	neurogenesis
ビトロネクチン	vitronectin
インテグリン	integrin

主要業績

Rina KIHARA, Yoshinori KASASHIMA, Katsuhiko ARAI, and Yasunori MIYAMOTO "Injury induces a change in the functional characteristics of cells recovered from equine tendon" Journal of Equine Science (2011) 22, 57-60 (査読有)

研究内容 / Research Pursuits

生物の体制は、細胞同士の接着及び、細胞と細胞の周りにある不溶性成分である細胞外マトリックスとの接着により構成されている。研究目的として、これらの接着が、細胞の増殖、分化、細胞死に及ぼす影響を明らかにすることをめざしている。特に、神経形成に対する影響を細胞外マトリックス、ビトロネクチンや細胞間接着に関わるカドヘリンの影響を解析している。具体的には、カリフォルニア大学サンフランシスコ校Huang博士と、中脳ドーパミン神経形成に対するN-カドヘリンの役割の解析に関する研究を進めている。また、並行して、マウスの小脳顆粒前駆細胞運命決定における細胞接着分子ビトロネクチンおよびそのレセプターとしてのインテグリンの役割解析を進めている。

Organisms are constructed with adhesion between cells and between cell and extracellular matrix. Purpose of my study is to examine the effect of the adhesions on cell proliferation, cell differentiation, and cell apoptosis. Especially I am analyzing the effect of one of extracellular matrix, vitronectin and a cell-cell adhesion molecule, cadherin on neurogenesis of cerebellum and midbrain. About the study about cadherin, I co-laborate with Prof. Huang's lab in University of California, San Francisco. On the other hand, I am running the following project, functional analysis of a extracellular matrix protein vitronectin and its receptor, integrin on fate of mouse cerebellar granule cell precursors.

教育内容 / Educational Pursuits

教育では、私が専門としている分野である分子細胞生物学を生物学科の中で担当している。2011 年度学部担当科目 全学共通科目「基礎生物学A」学科必修科目「分子細胞情報学」細胞外シグナルが標的分子までのシグナル伝達機構に関して概説した。学科専門科目「遺伝子工学」「細胞生物学実習」細胞外マトリックス分子に関する精製法、細胞接着活性測定を含め、動物細胞への遺伝子導入及びタンパク質発現などの実習を行った。「生物学実習Ⅱ」物質分離Ⅱを担当「特別研究」2名の学生を担当し、卒業研究発表会及び卒業論文の指導を行った。大学院担当科目「動物分子細胞生物学」、「動物分子細胞生物学演習」

I deliver lectures about molecular cell biology, which is my major, for undergraduate and graduate students. My allotted class in 2011 of undergraduate program. "Basic Biology A" Basic biology about animal "Molecular cell signal transduction" The outline of signal transduction from extracellular signal to the targeted molecule. "Gene technology" Lecture about gene technology. "Laboratory Course of Cell Biology" Experiments of purification of a extracellular matrix protein, assay of cell spreading, introduction of gene into animal cells, and expression of proteins in animal cells. "Research on Biology" I was in charge of two undergraduate student and supervised her graduation thesis. My allotted class in 2011 of graduate program. "Animal Molecular Cell Biology", "Seminar: Animal Molecular Cell Biology".

研究計画

動物の組織、特に神経組織がどのような気候で形成されており、維持されているのかを、細胞外マトリックスの持つ空間情報及び細胞間接着に着目して、解析を進めていく計画である。具体的な計画として、細胞外マトリックスのビトロネクチンが、小脳の顆粒細胞の神経形成にどのように関わるかの解析を中心に進めていく。このことにより神経系におけるビトロネクチンの果たしている役割が明らかにされることが期待される。また中脳のドーパミン神経形成における細胞間接着の及ぼす影響についても解析を進めていく計画である。これらのテーマに関心のある方々との共同研究を進めていきたいと考えている

メッセージ

最近の生物学では、ゲノムプロジェクトやプロテオームに代表されるように生体の構成要素を網羅的に解析する技術が急速に普及し、生物学に大きな変化を与えています。しかしそれだけで、生物を理解できるのでしょうか？生物は、それぞれ“かたち”を持っています、この“かたち”が、あるからこそ、生物として機能することができます。この“かたち”に関わっているのが、細胞の周りにある細胞外マトリックスです。動物組織は、細胞同士の接着や、細胞外マトリックスと呼ばれる不溶性の3次元構造物との接着を介し、構築されている。このようにして、組織そして生物の“かたち”を構築しています。宮本研究室では、これらの接着が、どのように3次元構造を作り上げ、細胞の増殖や分化などの現象に関わっているのかを分子レベルで解明することを目指しています。少人数の研究室ではありますが、一人一人を大事にしながら、各々の研究テーマと各自向かい合いながら研究に励んでいます。宮本研究室で研究してみたいという方は、大歓迎です。お待ちしております。

氏名	三輪 建二
	MIWA Kenji
所属 職名	人間文化創成科学研究科人間科学系 教授
学位	1983.3.31 教育学修士 東京大学
専門分野	生涯学習論、成人教育学、社会教育学、組織学習論、教師教育論、専門職大学院論
URL	lw.cc.ocha.ac.jp/qube.li.ocha.ac.jp/hss/educi/miwa/
E-mail	miwa.kenji@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

省察(リフレクション)
成人学習
社会教育主事講習
学習する組織
学びあうコミュニティ

reflection
adult learning
special course for social education directors
learning organization
learning community

主要業績

平成23年度文部科学省生涯学習政策局の委嘱事業であるお茶の水女子大学社会教育主事講習を、年間(5月29日から2012年2月17日)にかけて、月曜日夜、土日を利用して本館306室で実施し、36名の修了生に社会教育主事資格を提供した。

平成23年7月24日(日)に、お茶の水女子大学社会教育主事講習および本学学校教育研究部の共済の形で、第3回お茶の水女子大学ラウンドテーブルを実施した。主事講習の受講者、附属学校教員、大学院生・学生など合わせて90名以上が参加し、自らの実践の語り合いと聴き合いを行った。

印刷教材『生涯学習の理論と実践』(三輪建二著、放送大学教育振興会、2010年)に基づいて、放送大学大学院の講義「生涯学習の理論と実践」(15回)を、年2回に分けて、テレビで放映した(火曜日夜)。

全国の社会教育主事課程をもつ大学150校に、社会教育実習に関するアンケート調査を実施した。現場体験と振り返りを軸とする「社会教育実習」を中核に据えた新しい社会教育主事カリキュラムを構想し、実践力を養成する必要性を検討し、文部科学省に政策提言を行った。

韓国の釜山国立大学師範学部イ・ブンジョン教授と年数回にわたって日本および韓国において協定について交渉し、協定案をまとめた。2012年3月のお茶大の文教育学部・大学院人間文化創成科学研究科と釜山国立大学師範学部との交流協定締結に貢献した。

研究内容 / Research Pursuits

平成23年度お茶の水女子大学社会教育主事講習を実施した。従来の社会教育主事講習が夏の40日間集中であり、社会教育主事になる公務員・学校教員のみを対象とするものであるのに対して、(1)職場と講習を往還することで実践力を要請する年間サイクルにすること、(2)社会教育指導員や指定管理者にも門戸を開き、汎用性ある資格とし提供することを行った。36名の受講者に修了章を提供できた。平成23年7月24日(日)9:30～16:00までの時間、本館306室において、第3回お茶の水女子大学ラウンドテーブルを主催し、実施した。現職研修のあり方として、知識のブラッシュアップのほか、自らの実践を異業種にも語ることが力量形成につながるという考えから、(1)社会教育主事講習受講者、附属学校園の教員、行政職員など多様な参加者が異なるメンバーでグループをつくり、(2)実践を物語り聴き合う体験をしてもらった。100名ほどの参加者があり、付属からも15名もの参加者があった。2010年度に引き続き、印刷教材『生涯学習の理論と実践』(放送大学教育振興会、2010年)に基づいて、放送大学大学院の授業「生涯学習の理論と実践」を担当した。全国社会教育関係職員養成研究連絡協議会(社養協)および研究代表者となっている科学研究費基盤研究(B)「社会教育職員・学習コーディネーターの養成に関する研究」に基づいて、全国の社会教育主事課程をもつ約150の大学にアンケート調査を実施した。「社会教育実習」の実態調査をふまえた上で、社会教育実習を軸に据える実践力養成の社会教育主事家庭の提案、およびモデル・カリキュラムの策定を行った。釜山大学には、ライフヒストリーと成人学習というテーマで講演を行いつつ(2011年8月)、その機会を利用しながら、お茶の水女子大学と釜山国立大学の交流協定の詰めの作業を、イ・ビョンジュン釜山大学教授と行った。その結果、2012年3月に、学部レベル(文教育学部)と大学院レベル(人間文化創成科学研究科)と釜山大学市販学部・大学院との交流協定の締結が実現できた。

As a chef lecturer, I organized annually cycled "Special Course for Social Education Directors, which was held at Ochanomizu University during 2011 fiscal year and was sponsored by the Ministry of Education and Science. 36 Participants finished this course and got the qualification of "social education director". On 24 July, as a chef lecturer, I was organized and held the 3rd Ochanomizu University Round Table. Participants were members of Ochanomizu University Special Course for Social Education Directors, Teachers at Ochanomizu University schools (kindergarten primary school, middle and high school) etc. They told their own teaching and caring practice to others. This round table will become a new method for professional development. I made a TV lecture on "Theory and practice about Lifelong Learning" at the Open Air University Japan. As a Chairman of the "Japan Society for the Educating and Training Social Education Director at University", I and members researched about "Practicum on Social Education" programs at universities. We will plan and develop new, more practicum-oriented, and more practical training course for social education directors. Professor Yi BYung Jun and I made sometimes contact each other, planned the international exchange programs between Ochanomizu University and Pusan National University. As a result of this effort, on March 2012, Our two universities could make a research and education treatment between two universities.

教育内容 / Educational Pursuits

富士原紀絵先生と共同で、教育科学コースの「教育実地研究」を担当した。江戸川総合人生大学、長野県の伊奈小学校の訪問に加え、今年度は江戸川区の二つの小学校の放課後事業「すくすくスクール」に学生を派遣し、学生が企画・実施する放課後プログラムを体験し、振り返りを行った。学部の社会教育学演習の後期には、フィールドワークを実施し、参与観察の成果をゼミ論にまとめる作業を半年間実施した。至民中学校、アトム共同保育園などに参与観察してまとめる作業を通して、学生は教育施設の理解を深めると同時に、共同探究の作業を体験することができた。

Associat Professor Kie FUJIWARA and I organized the OJT programm on "Educational Research" for 1st grade students. 2011 we had added a new programm. Students went to 2 primary schools at Edogawa District, Tokyo, put in practice a afterschool project to pupils, and then have reflected on their own practice. At rhe second semester on "Seminar on Scial Education Theory", I organized some filld works and seminar reports to students. They went and observed Shimin Middle High School at Fukui Prefecture and ATOM nursery at Osaka Pfeecture etc., observed the programm and some activities and then wrote "seminar reports" collaboratly. Students could understands not only objectives, but also what is the meaning of collaborate inquiry.

研究計画

平成24年度お茶の水女子大学社会教育主事講習を開催し、年間サイクル(5月13日～平成25年2月17日)で実施し、現職研修としての意義を確認すると共に、社会教育主事資格の汎用性について文部科学省に問題提起できるようにする。2012年度の第4回お茶の水女子大学ラウンドテーブルを、以下の観点をふまえながら7月22日に実施する。第3回の成果に立った上で、2012年度はさらに、(1)学部学生(教職課程を履修中の学生など)、(2)本学を卒業した新任教員、(3)自主研究でラウンドテーブルを体験する附属中学校の生徒、(4)附属以外の学校教員などに参加者の範囲を広げながら、現職者や学生・生徒にとっての実践の省察の一般的な意味を確認できるようにする。

メッセージ

生涯学習や成人学習・社会教育のイメージはなかなかわからないと思います。私自身は、生涯学習を、当のおとなにとって、また子どもや若者にとっての二つに分けて考えています。 おとなにとっては、変化の激しい社会において、生涯にわたり学び続ける必要性という観点に加え、仕事・職業に関わる学び、アイデンティティを問い直す学び、あるいは学んだ成果を社会に生かす学びについても考えていきたいと思います。 子どもや若者にとっての生涯学習とは、生涯という長いスパンをしっかりと見据えたうえで、今受けている学校教育について捉え直しを行う学び、基礎学力に加えてコミュニケーション力やネットワーク力などの「生きる力」を育む学びを行うこと、などを提案したいと考えています。

氏名	村田 容常
	MURATA Masatsune
所属	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系
職名	教授
学位	農学博士(1987東京大学)
専門分野	食品加工貯蔵学(食品生化学、食品微生物学)
URL	http://www.food.ocha.ac.jp/chozo/murata.htm
E-mail	murata.masatsune@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

メイラード反応と食品の褐変

農産物の酵素的褐変

ポリフェノールオキシダーゼとPAL

黄色ブドウ球菌

Maillard reaction and browning of food

Enzymatic browning of agricultural products

Polyphenol oxidase and PAL

Staphylococcus aureus

主要業績

Yuri Nomi, Junko Sakamoto, Makiko Takenaka, Hiroshi Ono, and Masatsune Murata: Conditions for the formation of dilysyl-dipyrrolones A and B, and novel yellow dipyrrolone derivatives formed from xylose and amino acids in the presence of lysine. *Bioscience, Biotechnology, and Biochemistry*, 75, 221-226 (2011).

Kanako Amaki, Eri Saito, Kumiko Taniguchi, Keiko Joshita, and Masatsune Murata: Role of chlorogenic acid quinone and interaction of chlorogenic acid quinone and catechins in the enzymatic browning of apple. *Bioscience, Biotechnology, and Biochemistry*, 75, 829-832 (2011).

Saya Okumura, Midori Hoshino, Keiko Joshita, Takashi Nishinomiya, and Masatsune Murata: Hinokitiol inhibits polyphenol oxidase and enzymatic browning. *Food Science and Technology Research*, 17, 251-256 (2011).

Eriko Tanaka, Saya Okumura, Rikako Takamiya, Hitomi Hosaka, Yuko Shimamura, and Masatsune Murata: Cinnamaldehyde inhibits enzymatic browning of cut lettuce by repressing the induction of phenylalanine ammonia-lyase without promotion of microbial growth. *Journal of Agricultural and Food Chemistry*, 59, 6705-6709 (2011).

Yuko Shimamura and Masatsune Murata: Pulsed-field gel electrophoretic analysis and some characteristics of *Staphylococcus aureus* isolated from retail foods and human hands. *Bioscience, Biotechnology, and Biochemistry*, 75, 1177-1180 (2011).

研究内容 / Research Pursuits

(1) 食品におけるメイラード反応と褐変: ビタミンCやフルフラール、五単糖とアミノ酸との褐変反応を食品化学的に解析している。フルフラールとリジンから新規黄色物質furpilateを発見した。また、キシロースとリジンからも新規黄色化合物ジリジルジピロン類を見出した。(2) 酵素的褐変の食品学的研究: リンゴやレタスの酵素的褐変を生化学的、食品学的に解析し、その制御法を提案している。具体的には酵素(ポリフェノールオキシダーゼ)の単離、性状、クローニング、アンチセンス法による発現抑制、ポリフェノール類の分析、フェニルアラニンアンモニリアーゼの役割、その抑制による褐変制御などを研究している。(3) 食環境における微生物制御と利用: 黄色ブドウ球菌の毒素生産条件を検討している。また、乳酸菌のビタミン生産能を検討した。

(1) Maillard Reaction and Browning in Foods: We analyzed the Maillard reaction in which AsA, furfural and pentose is involved. We found a novel yellow compound, furpilate, derived from furfural and lysine. We further identified novel yellow compounds, dilysyldipyrrolones A and B derived from xylose and lysine. (1) Enzymatic Browning of Foods: We have analyzed the enzymatic browning of apple and lettuce, and have proposed the regulation method. Our group has isolated, characterized, and cloned polyphenol oxidase of apple fruit. We then repressed its expression by the antisense technology. Further we have examined and regulated phenylalanine-ammonia lyase in cut lettuce. (3) Microbiological Safety: The conditions for production of staphylococcal enterotoxin A and its regulation method were examined.

教育内容 / Educational Pursuits

食品は生物を原料とするがそのものではなく、加工貯蔵して食に供される。加工貯蔵中に食品素材は化学的、物理的、生物学的変化を受け、その制御は食生活上重要である。食物栄養学科の学部教育においては、食品保存・製造学(農産物の性質と加工法、貯蔵法の原理、貯蔵法各論)、食品製造・保存学実験(豆腐、チーズの製造、水分活性測定、イソフラボンのHPLC分析、食中毒毒素のELISA等)、食品微生物学(微生物とは、微生物学の歴史、微生物の生理、醸造食品、細菌性食中毒等)、生活環境学(生態学、食環境と安全、遺伝子組換え作物、農薬等)等を担当し、当該分野の知識、概念を教えるとともに、実験指導を行っている。博士前期課程では食品加工貯蔵学特論を、博士後期課程では食品貯蔵学を担当し、食品の加工貯蔵中に起る様々な化学的、生化学的、微生物学的変化とその制御法について論じている。ゼミにおいては学生各自が研究について報告し、それについて参加者全員で討論するとともに、英文の関連論文の紹介および討論を行っている。

Foods are derived from organisms, which are processed and preserved. During processing and preservation, chemical, physical, and biological changes happen. The understanding and regulation of these changes are important from the standpoint of food science. I have taught food processing and preservation of agricultural products, laboratory course of food processing and preservation, food microbiology, food safety etc. In graduate school, I have taught biochemistry and microbiology on food processing and preservation, and supervised several students every year. All students give presentations on their research in seminar and discuss each other. They also introduce novel informations on their research field and discuss on them.

研究計画

(1) 食品におけるメイラード反応の解析: モデル系を用い、新規メイラード反応生成物を探索するとともに、その制御法を開発する。醤油など食品系色素の解析等。(2) 酵素的褐変の食品学研究: 様々な野菜や果物の酵素的褐変を生化学的、食品学的に解析し、その制御法を提案する。レタス、リンゴ、アボカド、もやし等。

メッセージ

(学部の受験生へ): 食品を科学しましょう。食品は生物が原料ですが、生物そのものではありません。製造、保存の間に様々な変化がおきます。化学や生物学を使い、食品の作り方、保存のし方を考えましょう。食べ物と実験科学の好きな人には最適なところですよ。高校では、化学や生物、物理など理科の基礎や原理をしっかり勉強してください。(大学院の受験生へ): 食品の変色(メイラード反応や酵素的褐変)を主に研究しています。食品学、分析化学、酵素学、微生物学などが基盤になります。食品の変化を科学の目で分析し、新たな発見をするのは何より楽しいものです。研究は継続が力です。毎日しっかり実験し、考えましょう。

氏名	最上 善広 MOGAMI Yoshihiro
所属	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系
職名	教授
学位	理学博士(1983 東京大学)
専門分野	動物生理学, 宇宙生物学
URL	http://bios.cc.ocha.ac.jp/data/Mogami/MOG.html
E-mail	mogami.yoshihiro@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

動物生理学	animal physiology
重力生物学	gravitational biology
複雑系科学	complexity
バイオメカニクス	biomechanics
アロメトリー	allometry

主要業績

Kage A., Asato E., Chiba Y., Wada Y., Katsu-Kimura Y., Kubota A., Sawai S., Niihori M., Baba S.A. and Mogami Y. (2011) Gravity-Dependent Changes in Bioconvection of *Tetrahymena* and *Chlamydomonas* during Parabolic Flight: Increases in Wave Number Induced by Pre- and Post-Parabola Hypergravity. *Zool. Sci.*, 28, 206-214.

Hosoya, C., Akiyama, A., Kage A., Baba S.A. and Mogami Y. (2011) Reverse bioconvection of *Chlamydomonas* in the hyper-density medium. *Biol. Sci. Space*, 24, 145-15

研究内容 / Research Pursuits

重力は地球上での生命活動を規定する要因ではあるものの、生物の大きさやデザインさらにはそのマクロな行動を制限する拘束的な作用力としてのみ捉えられてきた。この既成概念をうち破り、個々の構成要素のレベルでは極微弱な応答(重力応答)が、要素間の協同作用と、その産物である動的不安定性を通じて、集団としての「思いもよらない特性」が発現されるという、新しい概念の検証を試みている。新たな研究のツールとして、生物対流パターン・マイクロ・マクロ同時観察のための装置を開発し、航空機微小重力実験に応用した。さらに宇宙ステーションでの候補テーマとして採択されている実験について、装置や運用手順の改訂を行った。

Gravity has been considered as a kind of restrictive force providing such as the mechanical limits of growth and morphology of the organisms. I would like to reveal the possibility for gravity to develop new functions of the biological systems via collective interactions between the elements of the system. Collective interactions, which are ubiquitous in nature, and the resultant dynamic instability of the system itself are known to have an ability to amplify the subtle effects of external forces, such as that of gravity on the biological event the cellular dimensions. A novel method was developed for the simultaneous recording of the microscopic and macroscopic movement of the convective motion, and applied to the microgravity experiment using parabolic flight of the airplane. Feasibility studies were carried out on the research proposal onboard ISS.

☐ 教育内容 / Educational Pursuits

☐ 研究計画

☐ メッセージ

氏名	元岡 展久 MOTOOKA Nobuhisa
所属	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系
職名	准教授
学位	博士(工学)
専門分野	建築設計学
URL	http://www.eng.ocha.ac.jp/architecture/motookastudio/index.html
E-mail	motooka.nobuhisa@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

18世紀フランス建築史
建築教育
近代住宅論
建築設計理論
震災復興小学校

History of Architecture in the 18th Century France
Education of Architecture
Modern Individual House Design
Architectural Design Theory
reconstruction of schools

主要業績

日本建築家協会 JIAゴールデンキューブ賞2011 展覧会会場の設計(お茶の水女子大学元岡研究室、河野泰治アトリエと共同)(東京ビックサイトにて、2011.08.28-30の期間、展覧会場として実施)

日本産業デザイン振興会2011 年度グッドデザイン賞(住宅部門)受賞(お茶の水女子大学学生寮SCCにより受賞)(お茶の水女子大学、河野泰治アトリエと共同). 2011.11.

高橋節子, 元岡展久『幼児のための物理的環境—モンテッソーリ園と一般園の比較による検討』, 日本建築学会大会学術講演梗概集F2, 155-156.

UIA 2011 Tokyo: The 24th World Congress of Architectureにおけるポスターセッション発表, Nobuhisa MOTOOKA, Taiji KAWANO, Tomoya NABENO, etc.『Ocha House』平成23年9月

UIA 2011 Tokyo: The 24th World Congress of Architectureにおけるポスターセッション発表, TAKAHASHI Setsuko, MOTOOKA Nobuhisa, "Successful Japanese Architectural Embodiment of the Principles of Progressive Education: The Cronk Memorial Kindergarten in Kumamoto", 平成23年9月

研究内容 / Research Pursuits

「建築設計」に関する理論, 手法, 教育について研究をおこなっている。建築家が設計する際に描く様々な図面を分析し, これらと実際に建てられた建築物や, 出版された理論等と比較することで, 設計過程において空間を「描く」行為の意味を分析している。また, 新しい木質の構法による空間のデザインについての研究も行っている。こうした「建築設計」についての研究成果を, 教育に反映させると同時に, 実際の建築物の設計においても実践している。

Theories of design, techniques of construction on architecture in are my current research themes. By comparing architectural theories and educational systems with concrete building works, I analyze the significance of "drawing" in the creation process of architecture. At the same time, based on the result of these studies, I practice design skills in proper building construction.

教育内容 / Educational Pursuits

学部教育:建築分野の学問は多岐にわたる。したがって建築に関する教育は、自らの研究分野のみならず、幅広い分野での講義ならびに実習が必要となる。2009年度より充実された2級建築士受験資格対応のカリキュラムが順調に進められている。「設計製図基礎」「建築一般構造」などの建築学関連授業では、幅広い領域をカバーするよう構造、計画、環境、意匠の体系にそった講義、演習をおこなった。また、人間・環境科学実験実習では、大手ゼネコンの技術研究所の協力のもとに、構造材料実験の内容を整備した。卒業論文指導:4名の学生の卒業論文指導をおこなった。修士論文指導:1名の学生の修士論文指導をおこなった。

UNDERGRADUATE EDUCATION For architectural education includes a large field of studies, lectures and practices of a wide domain are necessary. In the courses that I had in 2011, I concentrated mainly on the categories below: architectural structure, architectural planning, environmental engineering, and architectural design. GRADUATION THESIS Four students conducted their researches under my direction. MASTER THESIS One student conducted their researches under my direction.

研究計画

「建築設計」に関する理論、手法、教育についての研究は、いわば人々が建築をどのようにとらえ、何をもとに設計していたかという点を明らかにすることである。1)「建築の形態分析」では、建築家のデッサンや、実作品に現れた形態を調査比較し、建築家が空間を創造する際の思考や手法を解析する。2)建築を専門にしない市民や子供たちを対象とした「住育」に関する国際比較調査から、教材開発を試みる。3)近代の都市小住宅空間についての研究をおこない、その研究成果から具体的な住宅設計を実践し、社会への関わりを積極的に進める。現在、共同研究を行っているテーマ、ならびに受託研究が可能なテーマは、主として以下のものがあげられる。木造建築の構法開発(間伐材を利用した建設技術)ならびに、環境に配慮した木造住宅の設計「住育」の国際比較、ならびに子供の環境教育用教材開発 ユビキタスコンピュータを応用した住宅の提案と設計 東北地方の震災を受けた小学校の復興計画 さらに、持続可能性をもった環境配慮型の住宅の研究を進めていきたい。

メッセージ

元岡研究室は、建築や都市の空間のデザインを専門とする研究室です。美しい空間とはどういう空間なのでしょう。建築にあらわれた「かたち」は、どんな意味を持っているのでしょうか。建築を設計する際に、何をどのように考え、どのようにデザインしていくべきなのでしょう。過去の建築から現代の建築にいたるまで、様々な作品を対象に実例を分析し、作品にある美の根拠を探っていきます。巨匠建築家の作品についても分析し、具体的な作品にあらわれた「かたち」から、その設計の思想や設計の手法を考察していきます。こうした研究の成果を、自らの建築やインテリアの設計へとつなげ、社会のなかで建築デザインを実践することを目指しています。

氏名	森田 寛 MORITA Yutaka
所属 職名	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系 教授
学位	医学博士(東京大学1984)
専門分野	内科学、アレルギー学、呼吸器病学
URL	http://www.ocha.ac.jp/healthho/index.html
E-mail	morita.yutaka@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

気管支喘息
気道炎症

bronchial asthma
airway inflammation

主要業績

森田 寛. 気管支拡張薬、他. 浦部晶夫、島田和幸、川合眞一、編集. 今日の治療薬. 2012年版. 東京:南江堂;2012. pp306-12, pp656-68, pp682.

研究内容 / Research Pursuits

・気管支喘息の本態である気道炎症の発症機序を好塩基球、マスト細胞に焦点を当てて解明する。・気管支喘息の治療法を研究する。

・to elucidate the role of mast cells and basophils in the pathogenesis of airway inflammation in bronchial asthma • to study asthma therapy

■ 教育内容 / Educational Pursuits

・生活科学部食物栄養学科の学生に「臨床医学総論」、「臨床医学各論Ⅱ」を講義した。・人間文化創成科学研究科ライフサイエンス専攻の学生に「健康医学特論」を、遺伝カウンセリングコースの学生に「解剖学」を講義した。

・I lectured on pathology, and clinical medicine in Nutrition and Food Science, Faculty of Life and Enviromental Sciences. ・I lectured on common diseases, and anatomy in Life Sciences, Graduate School of Humanities and Sciences.

■ 研究計画

■ メッセージ

氏名	森光 康次郎 MORIMITSU Yasujiro
所属	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系
職名	准教授
学位	博士(農学)/Ph D
専門分野	食品機能化学、食品分析化学、食品有機化学
URL	http://www.hles.ocha.ac.jp/food/foodchem/foodchem.htm
E-mail	morimitsu.yasujiro@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords	
<ul style="list-style-type: none"> 食品成分と生理機能性 食用植物中の機能性含硫成分 野菜消費拡大を目指した基礎と応用研究 スパイスとハーブの研究 酸化ストレスに関する基礎研究 	<ul style="list-style-type: none"> food chemistry and functionality bioactive organosulfur compounds in edible plants fundamental and applied studies on vegetables and fruits spices and herbs studies on oxidative stress

主要業績	
<p>Hirono, H., Morimitsu, Y., Kato, A., and Higashio, H., Glucosinolate profiles in Cabbage (<i>Brassica oleracea</i> var. capitata) cultivars and their induction of a phase II detoxification enzyme, <i>J. Jpn. Horticult. Sci.</i>, 80(4), 499-505 (2011).</p> <p>Ishida, M., Kakizaki, T., Ohara, T., and Morimitsu, Y., Development of a simple and rapid extraction methods of glucosinolates from radish roots, <i>Breeding Sci.</i>, 61(2), 208-211 (2011).</p> <p>Wakabayashi, M., Wakabayashi, H., Elsenreich, W., Morimitsu, Y., Kubota, K., and Engel, K.-H., Determination of the absolute configuration of 4-mercapto-2-alkanones using the ¹H NMR anisotropy method and enzyme-catalyzed kinetic resolution of the corresponding 4-acetylthio-2-alkanones, <i>Eur. J. Food Res. Technol.</i>, 232(5), 753-760 (2011).</p> <p>中谷延二、菊崎泰枝、渡辺達夫、森光康次郎編著「スパイス・ハーブの機能と最新応用技術」(分担)、シーエムシー出版 (2011).</p>	

研究内容 / Research Pursuits	
<p>野菜を中心とした食品機能性成分を化学的に明らかにするとともに、その生理作用機構などを生化学的アプローチにて解析を行った。2011年度は、新野菜ピーマン(こどもピーマン)の研究や新形質ダイコンの特許申請、中間母本申請に関する成果を蓄積できた。</p> <p>研究題目は以下の通りである。</p> <ol style="list-style-type: none"> 食品機能性成分とその生理機能に関する研究 アブラナ科野菜に関する加工及び機能性研究(新形質ダイコン) 野菜利用拡大を目指した基礎と応用研究(こどもピーマン) スパイスとハーブの機能性成分と利用(ディール) <p>(その他、共同研究等による研究題目は秘密保持のため公開を全て省略する。)</p>	<p>Chemistry and Biochemistry of the bioactive compounds in food stuffs have been steadily investigated. In 2011, studies on the crucifer vegetables (especially novel strain of Japanese radish), green pepper for child, dill and the other vegetables were achieved well.</p> <p>Our research titles in 2011 were as follows:</p> <ol style="list-style-type: none"> Chemistry and bioavailability of food phytochemicals. The crucifer vegetables: constituents and functionality of Japanese radish. Basic and applied studies on vegetables for expanding the Japanese consumption. Studies on spices and herbs.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

学部教育においては、「基礎有機化学」と「食品分析化学実験」という基盤科目から「食品機能論」や「卒業研究」などの専門科目までを網羅し担当した。また、大学院教育では、「食品機能学特論」と「食品分析化学特論」(前期課程)、「食品生理機能学」、「食品生理機能学演習」(後期課程)を通し、一貫して食品の成分と機能性に関する専門知識、最先端の研究内容などを教え、食と健康科学の社会的必要性和その専門性が要求されている現状を伝えた。また、食育プロジェクト大学院コースにおける「エビデンス食教育論」も分担担当した。

From the fundamental subject “Fundamental Organic Chemistry” to the special subjects “Investigation for Undergraduates” were taught to undergraduates. Through the subjects “Chemistry and Functionality for Food Factors (master course)” and “Ideas of Food Functions (doctor course)”, the special knowledges and advanced sciences of this research area, were taught to the graduated students consistently. And I commented to the students that the social necessity and requirement of high specialty for this research area of food factors were also very important.

At the experiment education, I taught and navigated the isolation and identification of food factors from edible plants, and how evaluation for functionalities of food factors by using in vitro and in vivo methods.

Also, I have administered the common equipment (MS, etc.) of this university for supporting students' experiments.

■ 研究計画

1. 食のおいしさを第一義とし、食の健全性を重視した上での新たな機能性研究分野のさきがけ的研究を試みる(つまり、おいしくて健康というイメージ)。
2. 日本の野菜消費拡大を目指した野菜のおいしさ、成分化学的、そして生理機能的研究の展開と、実用化へ向けての応用研究(地域農産物の振興や新野菜・新果物素材の開発)。
3. ユニークな食品含硫成分の基盤的研究
4. 味とおいしさと美味しさの研究とその生理機能研究
5. 酸化ストレスを介した生理機能性の二面性研究とその制御方法に関する基盤的研究

■ メッセージ

べものの機能性研究は、身近な話題だけあって面白い科学研究の世界です(^)。正しい「食と健康」の在り方を考えてみましょう。また、日本の農産物生産と消費の将来を、科学研究を通して元気づける方法は存在すると思っています。

とにかく、食品成分に関する研究を一生懸命にやってみたい人、また食べ物が大好きな人をお待ちしてまーす。(^)/

氏名	森山 新 MORIYAMA Shin
所属 職名	人間文化創成科学研究科文化科学系 教授
学位	文学博士(日本語教育学)
専門分野	応用言語学(日本語教育学、第二言語習得、認知言語学)
URL	http://jsl.li.ocha.ac.jp/morishin1003/
E-mail	moriyama.shin@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

日本語教育学
認知言語学
第二言語習得
応用言語学

JapaneseLanguage Education
Cognitive Linguistics
Second Language Education
Applied Linguistics

主要業績

内閣府調査報告書「諸外国における専門職への女性の参画に関する調査」スウェーデン、韓国、スペイン、アメリカ合衆国」発行(2011.11)(調査研究委員として韓国における調査を担当)

『日本語多義語学習辞典 名詞編』『日本語多義語学習辞典 形容詞・副詞編』(アルク)の編集主幹

招待講演「グローバル時代に求められる多文化・多言語教育」(多言語多文化同時学習支援国際シンポジウム、2011年12月、宮崎大学)

招待講演「How does the way of thinking about business influence the meaning of buy/sell? Comparative study between Japanese and Korean」(2011年11月、カレル大学)

日本認知言語学会ワークショップ「認知言語学は第一、第二言語としての日本語習得を説明できるか」, JCLA Conference2011, 奈良教育大学, 2011, 9月17日, Conference handbook, 35-51, 1st author

研究内容 / Research Pursuits

認知言語学的観点から、第二言語習得や第二言語教授法について模索した。また、認知言語学の観点からの日本語学習辞典の主幹として執筆した(2011年、2012年刊行)。さらに比較日本学教育研究センターの研究プロジェクトとしてグローバル時代に求められる総合的日本語教育のあり方などを模索した。

1)I continued researches from cognitive linguistics perspective on second language acquisition and teaching. 2)And I supervised a Japanese language dictionary for learners from cognitive linguistics perspective. 3)I continued researches on the holistic education of Japanese language in the global era.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

グローバル教育センター長として留学生の受入、日本人学生の海外派遣を推進し、グローバル教育に貢献した。8月には本学の学生10名と韓国に行き、多文化交流実習を実施した(JASSO採択プログラム)。3月には世界7大学から学生14名を招き、東日本大震災をテーマに国際学生フォーラムを開催した(JASSO採択プログラム)。比較日本学教育研究センター日本語教育部会で、梨花女子大学大学院韓国語教育専攻の院生、教員14名を招待し、東日本の多言語教育を考える日本語教育・韓国語教育国際合同コンソーシアムを開催した(JASSO採択プログラム)。またチェコで開催された国際日本学コンソーシアムに招待、講演した。またグローバル文化学環の教員として、世界7カ国の大学と多文化多言語サイバーコンソーシアムを結成、TV会議を用いた遠隔共同授業を行った。

As the director of the Global Education Center, I promoted the global education by accepting international students and sending Japanese students. I, furthermore, have been to Korea with our 10 students and had "the Practicum of Inter-cultural Communication" in August, and held "the Global Consortium 2012 Student World Forum in Tokyo; International Cooperation for Japan Relief 3.11", invited 14 students from 7 countries in March. As a member of the Center for Comparative Japanese Studies I held the international consortium on Japanese and Korean Language Education for the Multilingual Education in the East Asia. I was also invited the international consortium on Japanese Studies held at Charles University in Prague. As a member of the faculty of the Global Studies for Inter-Cultural Cooperation I conducted remote joint-classes of Japanese language and culture with 7 universities in the world.

■ 研究計画

これまで継続してきた以下のプロジェクトをさらに発展させる予定である。1) 認知言語学的観点からの意味構造分析と日本語学習辞典の編纂 2) 認知言語学的観点からの教授法研究 3) グローバル時代に求められる文化を取り入れた総合的言語教育の模索

■ メッセージ

現在の言語教育に満足できないと考えている方、時代のニーズに応えうる新たな言語教授法や教材開発に関心を持っている方はぜひ以下のサイトをご覧ください。 <http://jsl.li.ocha.ac.jp/morishin1003/>

氏名	矢島 知子 YAJIMA Tomoko
所属	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系
職名	准教授
学位	博士(工学)(1997 東京工業大学)
専門分野	有機化学
URL	
E-mail	yajima.tomoko@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

有機化学
含フッ素有機化合物
ラジカル反応
アミノ酸

Organic Chemistry
Organofluorine Compounds
Radical Reaction
Amino Acid

主要業績

Promotion effects of optical antipodes on the formation of helical fibrils:chiral perfluorinated gelators; Kazuhiro Kohno, Kazuya Morimoto, Naoko Manabe, Tomoko Yajima, Akihiko Yamagishi and Hisako Sato; Chem. Comm., 2012, 48, 3860-3862

Stereoselective synthesis of β -perfluoroalkyl amino acids and peptides; Rie Hirokane, Kanako Yamaguchi, Tomoko Yajima; Peptide Science, 2011, 186

Photoinduced radical perfluoroalkylation and synthesis of fluorinated amino acids 5th Pacific Symposium on Radical Chemistry, September 25-28, 2011 (Shirahama, Wakayama)

研究内容 / Research Pursuits

1. 立体選択的ラジカル付加反応の開発 ラジカル反応ではこれまでに高い選択性、低い触媒量での有機触媒の手法の報告例はない。我々は、 β -シロキシ- α -メチレンエステルへの高いジアステレオ選択的ラジカル付加反応を開発しており、この中で、有機触媒を添加することにより不斉分割を伴い高い立体選択性でアルキルラジカルの付加反応が進行することを明らかにしている。この手法を基に、新規有機不斉触媒的ラジカル付加反応の開発を行っている。2. ラジカル反応を用いた含フッ素化合物の合成法の開発とその応用 含フッ素化合物は、医薬品、機能性材料として我々の生活に欠かすことのできない化合物であり、その合成法の開発は急務である。我々は、これまでに光ラジカル付加反応を用いた有機化合物へのペルフルオロアルキル基の導入について開発を行ってきた。現在、この手法を基に芳香族化合物への導入、ポリマー合成への応用について検討を行っている。また、得られた化合物の、ゲル、撥水ポリマーとしての可能性についても検討を行っている。

☐ 教育内容 / Educational Pursuits

☐ 研究計画

☐ メッセージ

氏名	安田 次郎 YASUDA Tsuguo
所属 職名	人間文化創成科学研究科文化科学系 教授
学位	博士(文学)(2002 東京大学)
専門分野	日本史学
URL	http://www.li.ocha.ac.jp/hum/yasuda.htm
E-mail	yasuda.tsuguo@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

寺院
室町時代
芸能
都市
庄園

Temple
Muromachi Period
Traditional Performing Art
Town
Manor

主要業績

『大乗院寺社雑事記』(尋尊)一門跡繁昌のための克明な記録一(元木泰雄・松菌 齊編著『日記で読む 日本中世史』ミネルヴァ書房、2011年11月、pp217-231)

「破産した御師」(石川県立図書館『加能史料』会報23号、2012年3月、1-4p)

研究内容 / Research Pursuits

『大乗院寺社雑事記』の記主である興福寺大乗院尋尊の伝記執筆準備の一環として、尋尊と先代門跡である経覚との関係などをあらためて探ってみた。従来、両者の関係は、対立的なものとして把握されてきたが、つねにそうだったわけではない。時期によって関係は変化している。『大乗院寺社雑事記』や経覚の『安位寺殿御自記』などからより精密で具体的な把握に努めた。

■ 教育内容 / Educational Pursuits

一年生とは戦国時代における宗教のありかたについて考えた。二年生には、古代中世の古記録を読むための初歩的な訓練を行った。3年生以上とは、満濟准后日記をともに読み解きながら、室町期の政治や社会などについて考えた。大学院生とは、『大乘院寺社雑事記』紙背文書の研究を行った。

■ 研究計画

寺院は中世社会の諸階層、諸身分が会う場でもある。人と人とのつながりのなかから、中世の法や制度などが実際にはどう機能していたのかを解明していく。すでにいくつか共同研究は行っており、今後とも新しい連携を模索していく。

■ メッセージ

きちんと史料を読み、解明された事実を組み立て、それらを文章にまとめていくのが好きな学生、院生諸君をお待ちしています。

氏名	安成 英樹
	YASUNARI Hideki
所属	人間文化創成科学研究科文化科学系
職名	准教授
学位	文学修士(1990 東京大学)
専門分野	西洋史学、フランス近世国制史
URL	
E-mail	yasunari.hideki@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

西洋史学
フランス近世史
国制史
官僚制
フランス宮廷

主要業績

「アンジエン・レジーム期フランスの文学に見る身分感覚—モリエール『町人貴族』、ラ・ファイエット夫人『クレヴの奥方』、ラクロ『危険な関係』—」
『お茶の水女子大学比較日本学研究センター年報』vol.8, 2012.3., pp.27-37

研究内容 / Research Pursuits

フランス近世国制史の研究。とくに絶対王政期の官僚制度(官職売買制度)を中心とする権力構造や官僚組織としての宮廷構造の解明、そこを舞台に展開する儀礼の分析を通じて、当時の統治システムとその有効性を検討する。 具体的な研究課題としては、次の2点。1絶対王政期の官僚制の考究 2権力を補完するものとしての権威構造の解明 平成23年度は、採用された基盤(C)「フランス宮廷役人のプロソボグラフィ」の研究代表者として、フランス宮廷の人的構造を広く考究した。また基盤(B)「身分感覚の比較史的研究」(研究代表者:岸本美緒、最終年度)の研究分担者として、フランス近世社会の身分意識、実際に当時の人々が感じていた身分感覚についての研究を継続して行い、7月の国際日本学シンポジウムで研究報告を行った。またその報告を、『比較国際日本学教育研究センター研究年報』に掲載した。

■ 教育内容 / Educational Pursuits

学部の特講では、昨年に引き続いて最新の社会史、とりわけ歴史人口学の成果をもとにフランス近世の民衆(農民)の日常生活をとりあつかった。歴史人口学の手法、そこからえられる知見をもとに、村の日常生活、国王儀礼(聖別戴冠式)、農村社会の教育や学校のあり方といったテーマについて詳細に論じた。学部の演習では、旧体制下の農村社会の構造や人口問題などに関連する文献の講読を行った。2年生対象の西洋史研究法では西洋史学史を論じ、後半では歴史学の情報検索方法についてITルームを利用して実践的な授業を行った。また全学年対象の西洋史概説では昨年と同じく、パリとロンドンの比較史を協同で担当し、また毎年継続しているフランス語テキストの輪読の授業を行った。大学院の演習では、P.グベールの研究所をテキストにしてフランス近世社会の貴族階層についての考究を行った。また、学部4年生のなかで西洋史分野で卒論を書く学生(11名)、修論を書く博士前期課程学生2名についての研究指導を行った。

■ 研究計画

フランスの宮廷の構成メンバーのプロソポグラフィー研究を包括的に行うことでその集団的特質を析出し、当時の宮廷の果たしていた社会的機能について多角的に検討する。また、従来からの官職保有者や直轄官僚全般についてさらに研究の進展を図り、あわせて絶対王政期の権力と権威の問題を深く掘り下げる。また、フランス近世社会の身分構造、とくに上下関係についての分析を平行して行っていく予定である。

■ メッセージ

大学で学ぶ(ことのできる)歴史は、暗記中心の高校のそれとは違います。年号や固有名詞を覚えることにあまり意味はありません。ある時代のさまざまな事件、あるいは社会そのものがどうして生成され、変容していくのか、自分のオリジナルなテーマを見つけてそのための材料(史料)を集め、自分で考え、自分なりの解を見出すものです。そのために、大学で歴史を勉強したい人には、できるだけたくさん本(必ずしも歴史関連のものに限りません)を読み漁ってほしいと思います。そのうえで、自分の取り組みたいテーマを見つけ出せばいいのだと思います。したがって卒論は自由にテーマが選べます。やれるかどうかを含めアドバイスはしますが、基本的に自分がなにを取りあげ、調べてみたいのかが重要なのです。

氏名	山田 眞二 YAMADA Shinji
所属	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系
職名	教授
学位	工学博士(1986 北海道大学)
専門分野	有機化学、合成有機化学、構造有機化学
URL	http://www.sci.ocha.ac.jp/chemHP/yamadaHP/index.htm
E-mail	yamada.shinji@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

カチオン- π 相互作用
分子配列制御
有機光反応
有機触媒化学
立体選択的反応

cation- π interaction
controlling molecular orientation
organic photochemistry
organocatalytic reaction
stereoselective synthesis

主要業績

S. Yamada, Y. Tokugawa, Y. Nojiri, E. Takamori, "Cascade reactions in crystals through cation- π -controlled reorientation on exposure to HCl gas", Chem. Commun., 2012, 48, 1763-1765.

Y. Mori and S. Yamada, "Contribution of cation- π interactions in iminium catalysis", Molecules, 17, 2012, 2161-2168.

S. Yamada and J. S. Fossey, "Nitrogen cation- π interactions in asymmetric organocatalytic synthesis", Org. Biomol. Chem., 2011, 9, 7257-7580.

S. Yamada and Y. Nojiri, "Water-assisted assembly of (E)-arylvinylpyridine hydrochlorides: effective substrates for solid-state [2+2] photodimerization", Chem. Commun., 2011, 47, 9143-9145.

Nakamura, H. Irie, S. Hara, M. Sugawara and S. Yamada, "Regiospecific [2+2] photocyclodimerization of trans-4-styrylpyridines templated by cucurbit[8]uril", Photochem. Photobiol. Sci., 2011, 10, 1496-1500.

研究内容 / Research Pursuits

カチオン- π 相互作用に基づく有機結晶の分子配列制御 カチオン- π 相互作用は生体内において、極めて重要な役割を果たしていることが明らかにされ、超分子化学、ホスト-ゲスト化学の分野において利用されている。最近、筆者らはカチオン- π 相互作用が有機結晶における分子配列制御に有効であることを明らかにしてきた。本研究では、ピリジン誘導体の配列を制御することで固相光二量化反応が立体選択的に進行することを明らかにした。

Cation- π interactions have been widely exploited and utilised in the structural biology arena, their fundamental importance in supramolecular chemistry and the pivotal role they play in host guest chemistry has rapidly expanded. We have clarified the importance of cation- π interactions in the orientation of molecules in organic crystals. We found that the pyridinium compounds are arranged head-to-tail fashion in crystal, irradiation of which produced syn head-to-tail dimers in high stereoselectivity.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

学部「有機化学III」、「有機化学IV」の講義では、有機化学の教科書「ブルース有機化学下巻」の芳香族化合物、カルボニル化合物、アミン等の合成、構造、反応、さらにWoodward-Hoffman則について講義した。「基本化学実験IV」では、基礎的な合成操作、分離精製、構造決定の方法について、実習と講義を行った。さらに「専門化学実験II」では様々な有機化合物の合成に関する実習およびNMRの講義を行った。「基礎化学A」では様々な物質の基礎となる有機化合物の構造と性質について分子模型などを用いて解説した。大学院「有機立体化学」では、有機化合物の立体化学の基礎から立体選択的反応まで、最近のトピックスも含めて講義した。さらに、学生に立体化学に関連するテーマを選択させ、最新の論文も含めた発表会と質疑応答を行った。

[Organic reaction chemistry], [Synthetic organic chemistry]. In these classes, I lectured synthesis, reaction and structure of organic compounds that have an oxygen containing functional group and amines and so on. [Organic chemistry III], [Organic chemistry IV]. In these classes, the synthesis, reaction and structure of organic compounds that have an oxygen containing functional group and amines and so on were lectured. [Experiment of organic chemistry] Basic methods for organic synthesis, separation and purification methods were instructed. [Organic stereochemistry] In this class, I lectured basic technical terms related to stereochemistry, historical backgrounds of stereoselective synthesis, and modern synthetic methods.

■ 研究計画

現在の主な研究テーマは以下の2つです。いずれも新しい有機分子の立体配座および分子配向の制御方法やシステムを研究し、それを基盤とするものです。1) カチオン- π 相互作用の有機合成化学への利用 2) 固相における有機分子の配列制御と固相反応ほとんどの研究は基礎的なものですが、将来以下のような領域で役立つことを期待しています。1) 新しい構造や性質を持った分子の創製 2) 生理活性化合物の創製 3) 新規機能性物質の創成

■ メッセージ

私たちの身の回りをながめると、ほとんどのものは化学的に合成された化合物が関係していることに気が付くでしょう。新しい化合物を創り出すことは、「化学」の最も得意とすることの一つです。現在までに数千万の化合物が合成されて来ましたが、その可能性は無限にあります。あなたも自分の手で、この世に存在しない分子を創り出してみたいと思いませんか？

氏名	山野 春子 YAMANO Haruko
所属 職名	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系 助教
学位 専門分野	医学博士(1982 東京医科歯科大学) 病態生化学
URL	
E-mail	yamano.haruko@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

食品機能性成分 腫瘍抑制遺伝子 血管新生 血管内皮増殖因子(VEGF) VEGF レセプターファミリー	bioactive food components tumor-suppressor gene angiogenesis vascular endothelial growth factor(VEGF) VEGF receptor(VEGFR) family
-----------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

主要業績

研究内容 / Research Pursuits

生活科学部生活環境学科生活工学講座においては、地球環境の悪化に伴って生じた様々な問題のなかで、紫外線の影響で増加してきた皮膚障害の予防に関するテーマで研究を行ってきた。なかでも皮膚障害を予防する目的で開発された様々な紫外線遮蔽加工製品の効果について、生化学的手法による評価法の開発を行った。学科改組に伴う異動先である同学部食物栄養学科では、食品機能性成分と腫瘍抑制に関するテーマを企画した。日常の食生活で摂取している食品のなかで、抗変異原性や腫瘍抑制作用が報告されている食品機能性成分について、血管新生に及ぼす影響を検討する。血管新生はがんの増大や転移の主要な要因となり、がん治療の大きな障害となっているため、これを抑制することはがん治療において重要と考える。そこで、ラット肝臓の血管内皮培養細胞を用いた系により、血管新生を抑制する効果を持つ食品機能性成分を探索し、分子生物学的手法により、その作用機構を解明することを目指している。

My research topic is the suppressive effect of bioactive food components on angiogenesis.

教育内容 / Educational Pursuits

学部の教育については、前期は「食品化学実験」、「食品製造・保存学実験」(いずれも食物栄養学科3年生39名)の実験準備および指導補助を行い、提出レポートの添削を分担した。後期は「食品微生物学実験」(食物栄養学科2年生37名)の指導を行った。また、管理栄養士国家試験の模擬試験実施計画(同学科4年生全員と3年生希望者が受験)の立案、企画企業との交渉、試験場、試験監督者の手配等を行った。所属研究室に在籍する4年生(4名)に対して、「食物栄養学輪講」での文献紹介、研究報告についてのディスカッションを通して、卒業論文の指導補助を行った。大学院の教育については、所属する研究室に在籍する博士前期課程学生(1年生2名、2年生2名)に対して、「食品加工貯蔵学演習」における文献紹介、研究報告についてのディスカッションを通して、修士論文の指導補助を行った。また、卒・修論要旨集を作成し、卒論発表会、修論審査会の準備を行い、当日はそれらに出席し質疑応答を行った。

I instructed undergraduate in Food Microbiology Laboratory. I instructed undergraduate in Food Processing and Preservation Laboratory, Food Chemistry Laboratory and graduate in Seminar in Food Processing and Preservation as research associate.

研究計画

がんの増大や転移の主要な原因である血管新生を抑制する食品機能性成分を探索し、その作用機構を分子生物学的に解析したいと考えている。がんのみならず、生活習慣病の予防に効果がある食品機能性成分に関するテーマで、共同研究ができればと考えている。

メッセージ

近年、食品関連分野の企業の求人票や大学及び短期大学の食物学科の教員募集要項の資格欄に「管理栄養士資格を持つ者」と明記されている場合が多く見受けられます。本学科は、関東圏の国立大学法人としては初めての管理栄養士養成機関として認可された学科です。本学科で学び、管理栄養士国家試験に合格して、卒業後は社会の幅広い分野でその資格を生かして活躍されることを期待しています。また、管理栄養士資格を取得したうえで大学院へ進学し、より高い研究能力を身につけ、企業や研究所の研究員あるいは大学や短期大学の教員など、高い専門性を要求される分野でも指導的役割を担って、大いに活躍されることを期待しています。

氏名	横川 光司
	YOKOGAWA Koji
所属	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系
職名	教授
学位	博士(理学) (1992 京都大学)
専門分野	代数幾何学, ホモトピー数学
URL	http://www.math.ocha.ac.jp/yokogawa/
E-mail	yokogawa.koji@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

代数幾何学
非可換ホッジ理論
モジュライ

Algebraic Geometry
Noncommutative Hodge Theory
Moduli

主要業績

研究内容 / Research Pursuits

非可換ホッジ理論は非可換群を係数とするコホモロジーに対するホッジ理論の拡張である。一次のコホモロジーはヒッグス束のモジュライスタックであり、その上のホッジ構造を調べることは大変重要である。これまで高次のコホモロジーは定義さえすることが困難であったが、高次カテゴリーの導入によりそれが可能となった。この枠組みで非可換ホッジ理論の展開することが研究内容である。また、高次カテゴリーの導入は従来の層の概念をさらに広げた高次のスタックの導入も可能にしている。これは集合論を基礎として築かれた現在の数学自体を拡張したホモトピー数学の可能性を示唆している。ホモトピー数学ではこれまで無視されて来た情報を高次カテゴリーにより表現し、取り出すことを可能にすると思われる。現在は、このホモトピー数学の基礎を固めることが主な研究課題となっている。

Noncommutative Hodge theory is an extension of the Hodge theory for cohomology theory with non-abelian groups as its coefficients. Its first cohomology are moduli stacks of Higgs bundles. It is very important to study Hodge structures on them. Though it was difficult to define higher cohomology, higher category theory enables the definition. My research purpose is to develop non-commutative Hodge theory in this framework. Moreover, higher category theory enables us for introduction of higher stacks which extends the notion of sheaves. This means a possibility of homotopical mathematics that enlarges mathematics build up on the set theory. Homotopical mathematics seems well for getting and representing any information that we have been neglecting via higher categorical structures.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

主として代数学に関係する講義を担当している。4年の数学講究では整数論や可換環論、代数幾何学、暗号理論などを教えている。大学院では整数論、代数幾何学、複素幾何学、ホモトピー論などに関する講義、修論指導を行っている。

My lectures concerns mainly on algebra. In the seminar for 4th grader students, it has been used textbooks concerning on number theory, commutative algebra, algebraic geometry and cryptgraphical theory. For students in master course, my lectures are usually concerns on number theory, algerraic geometry, complex geometry and homotopy theory.

■ 研究計画

高次の圏論を利用して、未知の不変量を構成する. 正標数のモジュライ問題や整数論と関わる方面でこれまでになかったものを構成したい.

■ メッセージ

数学は実用的なだけでなく、大変美しく神秘的な魅力に満ちています。物理的な法則ばかりでなく、経済現象や生命、心の問題に至るまで突き詰めて考えれば、その中には数学の美しい法則が隠れていることが少なくありません。そればかりでなく数学的な美しさが多くの法則に影響しています。私は数学的な美しさこそが宇宙の神秘を解き明かす鍵だと考えて研究しています。このような美しさを体験するには高校までの数学では不十分です。是非、大学で数学の真の美しさに触れてみてください。

氏名	吉田 恵子 YOSHIDA Keiko
所属	学生支援センター 学生相談室
職名	講師
学位	修士(家政学)
専門分野	学生相談・心理教育的支援・キャリアカウンセリング・ワークショップ型介入・MBTI
URL	
E-mail	yoshida.keiko@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

学生相談	student counseling
心理教育的支援のありかた	student counseling
キャリアカウンセリング	career counseling
ワークショップ型介入	work shop
MBTI	Myers-Briggs Type indicator

主要業績

学会発表、吉田恵子、指導教員との関係に悩む学生への実践報告(2)―国際規格の性格検査 MBTIを活用して―、日本学生相談学会第29回大会 立教大学

研究内容 / Research Pursuits

教育の一環としての学生支援、学生相談を考えている。

■ 教育内容 / Educational Pursuits

4月にCMI(Cornell Medical Index)健康調査を新入生に実施し、希望者に結果のフィードバックを行い、こころと身体に関する啓蒙・予防的働きかけを行った。学部生、院生などにインテーク面接を行い、多様化した学生たちへの個別ニーズにきめ細やかな対応をした。インテーク面接の結果、引き続き個人相談及びカウンセリングを実施し、保健管理センター、学内機関及び外部医療機関にリファーしたケースのフォローアップも行った。問題別対応の仕方を示したリーフレットを作成し配布して、メンタルヘルス全般に対する意識向上を目指した。さらに心理検査を用いた自己理解、他者理解を深めるワークショップ、インプロなど自己表現力や対人スキルを高めるワークショップ、国際規格の性格検査を用いた進路選択を考える手がかりにするためのキャリア支援ワークショップ、ヨガなどの健康増進的、予防的支援ワークショップを企画・実施し、アンケート調査を行った。新たに学生の面接対策に役立つボイス・トレーニングも実施した。

■ 研究計画

個別相談の充実及び健康増進的支援をさらに発展させることを目指す。特に以下の領域における援助の充実をはかる。

■ メッセージ

お茶大には、皆さんが充実した学生生活をおくることができるようにサポートする機関の一つに学生相談室があります。学生生活、進路、ご自分のことで、問題や悩み、心配事があれば、気軽にご相談ください。また、いろいろなグループワークも企画しております。たとえば、「自分の強みを知りたい」「自分にはどんな能力や関心があるのか詳しく知りたい」「自分の性格について理解したい」などのテーマのワークショップです。昼休みや授業に支障のない時間帯に行っておりますので、どうぞ気軽に参加してください。特にお勧めはキャリアカウンセリングにおける自己分析ツールとして、現在、欧米諸国で最も信頼されている性格検査であるMBTIを用いたワークショップです。さらに自分らしさや元気を引き出してくれる「インプロ」や心と身体のバランスを取るのに役立つヨガ体験などの健康増進のためのワークショップも是非体験してみてください。学生相談室では、皆さんにお会いできるのを楽しみにしております。

氏名	米田 俊彦 YONEDA Toshihiko
所属 職名	人間文化創成科学研究科人間科学系 教授
学位	教育学博士(1989 東京大学)
専門分野	日本教育史(教育制度・政策史)
URL	
E-mail	yoneda.toshihiko@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

戦後日本教育史

History of Education of Postwar in Japan

主要業績

米田俊彦「近代日本の教育法令の体系と構造」

研究内容 / Research Pursuits

日本の戦後教育史を研究しています。これまで長野県の高齢学校を事例にしてきましたが、『神奈川県教育史(戦後編)』の編集の仕事を依頼されましたので、これからしばらくは神奈川県を事例にした研究を行う予定です。

I am studying the history of education after WW II of Japan. Until now, I had studied the case of Nagano Prefecture. Because I was requested to edit "History of Kanagawa Prefecture (after WW II)", I intend to study the case of this prefecture.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

学部・大学院のいずれにおいても教育史、教育制度論などの授業を担当しています。専攻科目のほかに教職課程の授業も行っています。担当した卒業論文の題目は「公立学校という枠組みの中でのコミュニティ・スクールのあり方」「幼稚園教員養成の歴史」「母親に対するまなざしの変容―「教育ママ」関連記事の分析から―」「養護教諭が行う性教育」(2009年)、「学習意欲を育てる授業」「日本統治下台湾における教育経験」「戦後初期小学校社会科教科書に関する研究」「手塚岸衛の学級自治会に関する一考察」、修士論文の題目は「戦前日本における幼稚園・保育所の普及と地域差の実態―石川県を事例として―」(2009年)、アカデミック・エリート形成と思想に関する一考察「1930年代東京府における伊勢参宮旅行」「1960～70年代における戦後版良妻賢母教育の展開」(2010年)でした。

I am teaching subjects about the history of education or the system of education in the faculty and the graduate school. I teach subjects of teacher-training course, too. I led students who wrote graduation theses “Teaching to culture the motivation of learning”, “Education in Taiwan”, “The Textbook of Social Studies of Primary School in Postwar”, “Self-government Class by TEZUKA. Kishie ” (in 2010), “The History of Private Primary School”, “Independent Learning in Terakoya”, master’s theses “The Academic Elite and their Thought”, “the School Excursion to Ise Shinto Shrine in the 1930’s”, “The Good Wife and Wise Mother in the 1960’s-1970’s (in.2010) and doctor’s theses “The Study of Discussion on Reform of Education of Arithmetic in Modern Japan”, The Historical Study on Balance of Occupation and Home Before WWⅡ of Japan”, The Policy on Promotion of Home Education and the Process of its Disruption in

■ 研究計画

■ メッセージ

教育史は、古いことを覚える学問ではなく、過去の経緯の中に、現代と将来の教育を考えるポイントを見いだす研究です。経緯や流れの中に本質が潜んでいることは意外にたくさんあります。

氏名	頼住 光子 YORIZUMI Mitsuko
所属 職名	人間文化創成科学研究科文化科学系 教授
学位	博士(文学)(1994 東京大学)
専門分野	日本倫理思想史、仏教思想、比較思想、宗教哲学
URL	
E-mail	yorizumi.mitsuko@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

仏教思想

道元

親鸞

日本倫理思想史

日本の大乘仏教

Buddhist Thought

Dogen

Shinran

History of Japanese Ethical Thought

Japanese Mahayana Buddhism

主要業績

「道元と時間論」『実存思想論集18 思想としての仏教』実存思想協会編 理想社 2011年6月25日 pp.31-5

68.『道元の世界 大乘仏教の真髄を読み解く』(単著)NHK出版 2011年10月30日 284頁

“The Three-World Dimension in Japanese Mahayana Buddhism—Ethical Aspects and the Language of Dogen” Wallner, Hashi(Hg.) “Globalisierung des Denkens in Ost und West” Verlag Traugott BautzGmbH, pp.22-33, 2011, Germany

「道元と西洋哲学 —「エアアイグニス」と性起の間」『大法輪2月号』大法輪閣 2012年2月1日 pp.80-83

A Study on a Buddhist Idea of Consumption of Food Charles University in Prague, Faculty of Arts, Institute of East Asian Study, International conference “Consumption and consumerism in Japanese Culture” 2011/11/14,15. Prague, Czech Republic, Language: English

研究内容 / Research Pursuits

頼住光子の2011年度の研究内容は、以下の4領域からなり、その研究成果の一部については、学術雑誌、学術講演、研究会口頭発表等において発表された。①日本仏教の思想的・研究 道元や親鸞などの、仏教思想家の著作を厳密にテキストクリティークし、その思想構造を探究し、日本仏教の独自性と普遍的意義とを追及する。②日本近代思想に関する研究 和辻哲郎など日本近代思想についての再検討。とくに「超越」「自己」「非還元主義」などをてがかりとして、日本近代思想のもつ意義を解明。③比較思想学、比較宗教学による研究 日本の思想や宗教を考える上で、比較の手法を使い、他のアジアの思想(中国、インド)、ヨーロッパ思想との比較対照において、日本の思想や宗教の特徴を解明。④道徳教育、宗教教育に関する理論的研究 日本人の道徳性や宗教性を解明し、それらに適合する道徳教育や宗教教育を行うための理論的基盤を明示。

Mitsuko Yorizumi's study in 2011 consists of following four spheres. ①A Study of the thought of Japanese Buddhism A Study of Dogen and Shinran and so on. ②A Study of Japanese Modern Philosophy A Study of Teturo Watsuji and Ryosen Tsunashima and so on. ③A Comparative Study of Japanese and Western or Asia Thought and Religion A Comparative Study of Japanese and Western Mysticism and so on. ④A Study of Japanese Moral Education Especially a Study of Japanese Religious Education in Public Education.

教育内容 / Educational Pursuits

①学部、大学院(博士課程、修士課程)における講義とゼミを行い、日本倫理思想史、宗教哲学、比較思想学について、入門、基礎、応用的教育を行った。②学部、大学院(博士課程、修士課程)の学生の、日本倫理思想史、宗教哲学、比較思想学について、論文指導を行った。特に、博士論文執筆中の学生、学会誌投稿論文執筆中の学生に対しては、メールなどを使って、懇切丁寧な指導を行い、内容的なアドバイスや、論文としての体裁を整えるための添削を行った。③大学院副専攻の運営に尽力するなど、各種関連事業に携わった。また、その一環として開催された外国人研究者と大学院生とのジョイントゼミ(日本学コンソーシアム、日本文化部会)を企画開催し、その場で発表する学生の指導を行った。④大学院教育の実質化のために、博士課程学生に、ゼミ等で指導を行い、また論文指導を丁寧に行うだけでなく、TA、RAとして各種の学術的活動を行えるよう指導した。

Mitsuko Yorizumi's education in 2010 consists of following four spheres. ①Seminar and Lecture of Japanese Philosophy and Buddhism for Undergraduates and graduates. ②Guidance of theses and papers for Undergraduates and Graduates. ③Guidance of Undergraduates' Publication. ④Guidance of various academic acts for Graduates and Undergraduates.

研究計画

将来の研究計画としては、東洋の哲学とりわけ仏教思想の現代的意義を探究する予定である。特に、現在の中心的研究対象である道元にしても親鸞にしても、従来の研究は、宗門の護教的研究が主流を占めており、そのような中で、文献学的な正当性と思想史的背景を踏まえた思想研究を行い、東洋の哲学の普遍的意義を探究したいと思う。そのために、現在、個人として行っている研究と平行して、現在進行中の比較思想的見地からの国際的プロジェクトを推進したと考えている。

メッセージ

私どものゼミにおいては、日本の(場合によっては、アジアやヨーロッパも含めて)古今の思想的な文献を正確に読むことをまず訓練します。それを通じて、人間とは何か、また自己とは何かという問題を、深く広く考えて行きたいと考えております。特に、現在の私のゼミにおいて中心的に探究しているのは、仏教哲学など、東洋の思想伝統の中に、普遍的なものでありつつ、西洋近代の要素還元主義的な発想からは看過されがちであった関係主義的発想、非実体化的発想をさぐり、それをてがかりとして、「自己」「超越」などの概念を再検討することです。それによって、従来、無自覚のうちに固定的なものとして捉えられがちであった「自己」概念を解体し、諸関係の結節点として捉えるという非要素還元主義的「自己」観念を明らかにするとともに、さらに、神として実体化された「超越」(いわゆる西洋的超越概念)に対して、それ自身のうちにすべてを成り立たせる「場」としての超越概念を、東洋の思想、宗教のうちに捉えたいと考えております。

氏名	和田 英信
	WADA Hidenobu
所属	人間文化創成科学研究科文化科学系
職名	准教授
学位	文学修士(1987)
専門分野	中国文学
URL	
E-mail	wada.hidenobu@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

中国文学
古典詩
宋代詩学
文選

Chinese literature
Classic of Poetry
Song poetics
Wenxuan(a literary anthology)

主要業績

論文「蘇軾の詠画詩——元祐年間を中心に」(『お茶の水女子大学中国文学会報』30、63-77頁)

研究内容 / Research Pursuits

「模擬」という営みに関心を持っている。「まねる」と「創る」という一見逆説的な関係のなかに、中国の古典文学の特質が見出されるのではないかという目論見を抱いている。

■ 教育内容 / Educational Pursuits

学部では、古典文学史の授業において、一般学生向けに中国古典文学の概要を講義する一方、中国文学専攻の学生に対しては、古典テキストの音読と暗誦による読解訓練を行っている。

■ 研究計画

宋代以降、先行テキストを踏まえての新たなテキスト創出の試みは、唐代以前と異なる様相を見せている。この現象の記述と背景の考察を進めたい。同時にまた、数年来、他大学の研究者と共同で行っている『文選』（梁代に編纂された中国の代表的なアンソロジー）の研究の成果を近年中に発表したいと考えている。

■ メッセージ

世界で最も豊穡な中国古典文学の魅力をできるだけ多くの皆さんと分かち合いたいと願っています。

氏名	渡部 亜矢子
	WATANABE Ayako
所属	人間文化創成科学研究科自然・応用科学系
職名	助教
学位	博士(理学) (2004 お茶の水女子大学)
専門分野	計算物理、原子・分子
URL	
E-mail	watanabe.ayako@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

原子・分子
イオン・原子衝突問題
可視化

atom-molecular
ion-atom collision problem
visualization

主要業績

研究内容 / Research Pursuits

水素原子に7価塩素イオンを衝突させたときの、1電子捕獲現象について理論的に調べた。分子軌道展開による緊密結合法を用い、量子論として取り扱った。系の主量子数 $n=5, 6$ を考慮にいれ、衝突エネルギーが $10^{-4} \text{ eV/u} \sim 1 \text{ keV/u}$ の範囲に着目した。電子捕獲断面積および反応速度定数を求めた。

An investigation of charge transfer in collision of ground-state Cl^{7+} with H has been conducted, based on a fully quantum-mechanical molecular-orbital close coupling approach. The charge-transfer process with $n=5$ and 6 is taken into account for collision energies between 10^{-4} eV/u and 1 keV/u . Electron capture cross sections and state selective rate coefficients are calculated.

■ 教育内容 / Educational Pursuits

情報基盤センターで運用している全学向け教育用計算機の保守を担当。

■ 研究計画

イオン・原子衝突問題は、その応用分野として核融合研究、放射線医療などがあり、種々の系でのデータが求められている。Ni, Feなどの重原子、Cなどは、その系の複雑さゆえ衝突断面積等のデータが少ないため、これらを含む多くの系のデータベース作成を目指す。また、衝突時における各粒子の振る舞いについては、詳細な解析がされていないことから、可視化手法を用いることにより、衝突時間依存性などを動的過程に着目した研究を行う。

■ メッセージ

お茶大は少人数クラスがモットーの大学です。先生方との距離がとっても近い、アットホームな環境があります。自分の興味もてるものを見つけ、それを探求することに、みんなが手を貸してくれますよ。また、お手本とすべきたくさん卒業生(もちろん女性の先輩)がいます。将来の姿を思い描くときに、きっと参考になります。とっても貴重な4年間をお茶大でいっしょに過ごしましょう。